

旧竜丘村の小字

—伊那谷南部の小字 1—

竜丘史学会

発刊にあたって

旧竜丘村全図	
旧竜丘村小字図	8
旧竜丘村小字台帳	25
旧竜丘村小字表	35
旧竜丘村小字の由来	53
索引	164
竜丘史学会会員名簿	170

発刊にあたって

小字地名は、ある土地の一筆または一定のエリアを表す土地の名前であり、その土地のさまざまな事象や歴史を物語る貴重な資料である。

かつては、土地台帳に地番と共に字名が記入されていて、いろいろな書類や郵便物の住所表示は〇〇村大字〇〇字〇〇と記入した。また、昔は多くの家々に屋号があつて、氏名よりも屋号で呼び合うことが日常的であつた。その屋号の多くは屋敷の所在する字名から名づけられたものが多い。

しかし、今の世の中ではこの小字名を使う機会が極めて少なく、忘れられつつあり、消滅の危機にさらされている。

竜丘地区では、過去昭和30年代・50年代に先輩諸氏により地名の研究が行われ、駄科地区や長野原地区の同好会等では小字名表・地図が作成されているが、地名の由来までの研究は手付かずであつた。

竜丘史学会では、当史学会副会長今村理則氏が竜丘地区の小字名の研究成果をまとめておられたので、今村氏を講師とし会員全体で平成23年2月から小字名の学習会を6回にわたって開催し、地区内の小字名の意味・由来やその所在地の勉強を重ねた。

その結果、当会の学習成果を後世に引き継ぐことが大切と考え冊子を作成することとし、平成24年夏から編集委員会を開催、本冊子発刊の運びとなったものである。

旧竜丘村は、国土調査が他町村に先駆け昭和30年代初め試行的に行われたため旧史料が少ないこと、各区の飛び地が相互に点在していたこと、構造改善事業等による地番の統廃合・筆界の変化等があり、現在の地図に小字筆界を正確にプロットすることが難しく大変苦勞している。したがって、小字図には若干不正確な部分があるとは思われるがご容赦いただきたい。

小字名の意味・由来については、いろいろの説を提示しているので今後の研究・学習の材料として活用され、新たな解説を頂ければ幸いである。

人々が共有する名前として生まれた小字名が、地域に末長く引き継がれ地域の絆に資することを願うものである。

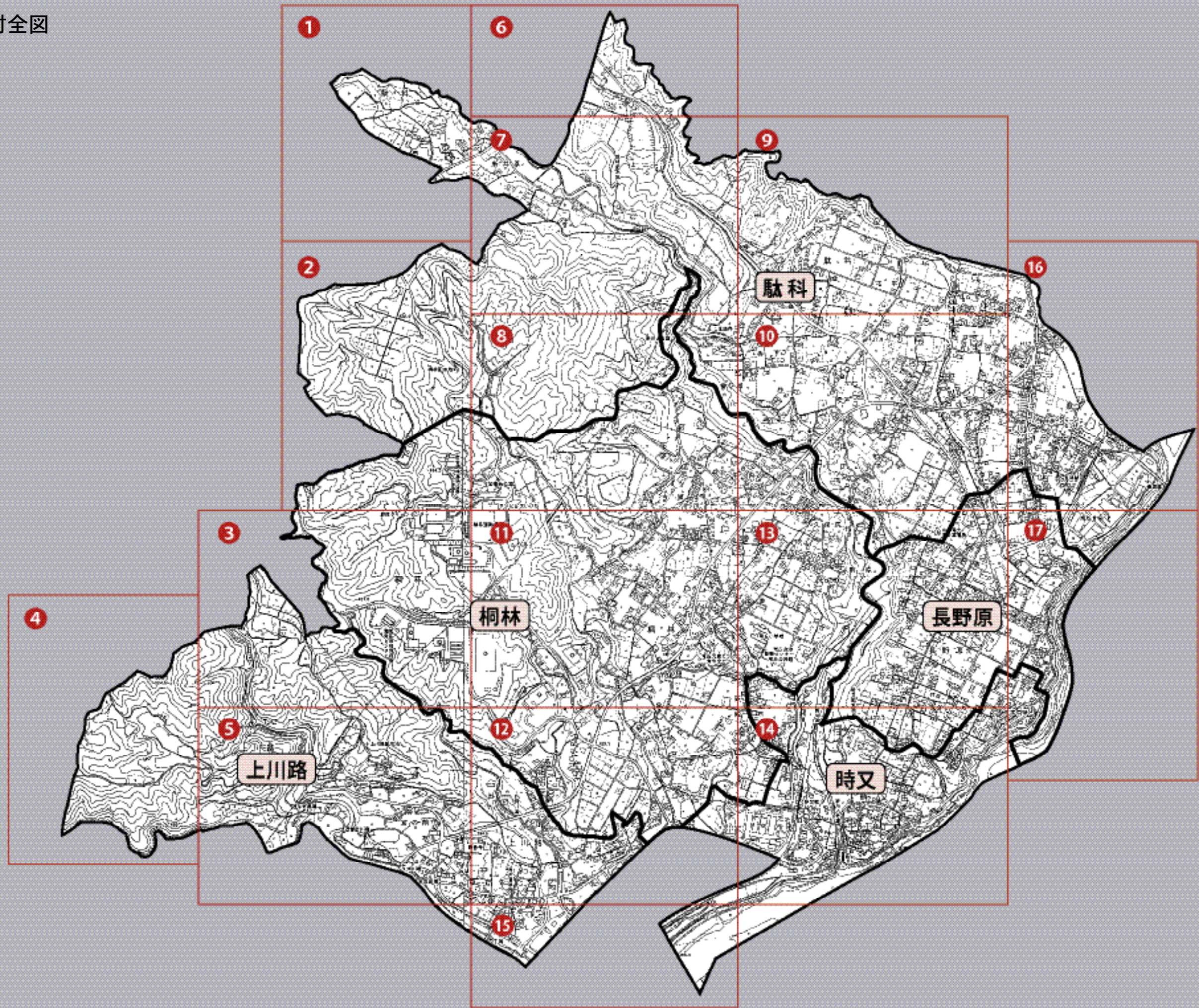
なお、本冊子の副題「伊那谷南部の小字1」は各市町村の研究成果が続いて発刊されることを期待して、その第1号として付したものである。

ムトス飯田の助成を受けていることを申し添え、編集に献身ご努力いただいた今村氏はじめ会員各位のご協力に感謝申し上げ御礼といたします。

平成25年1月

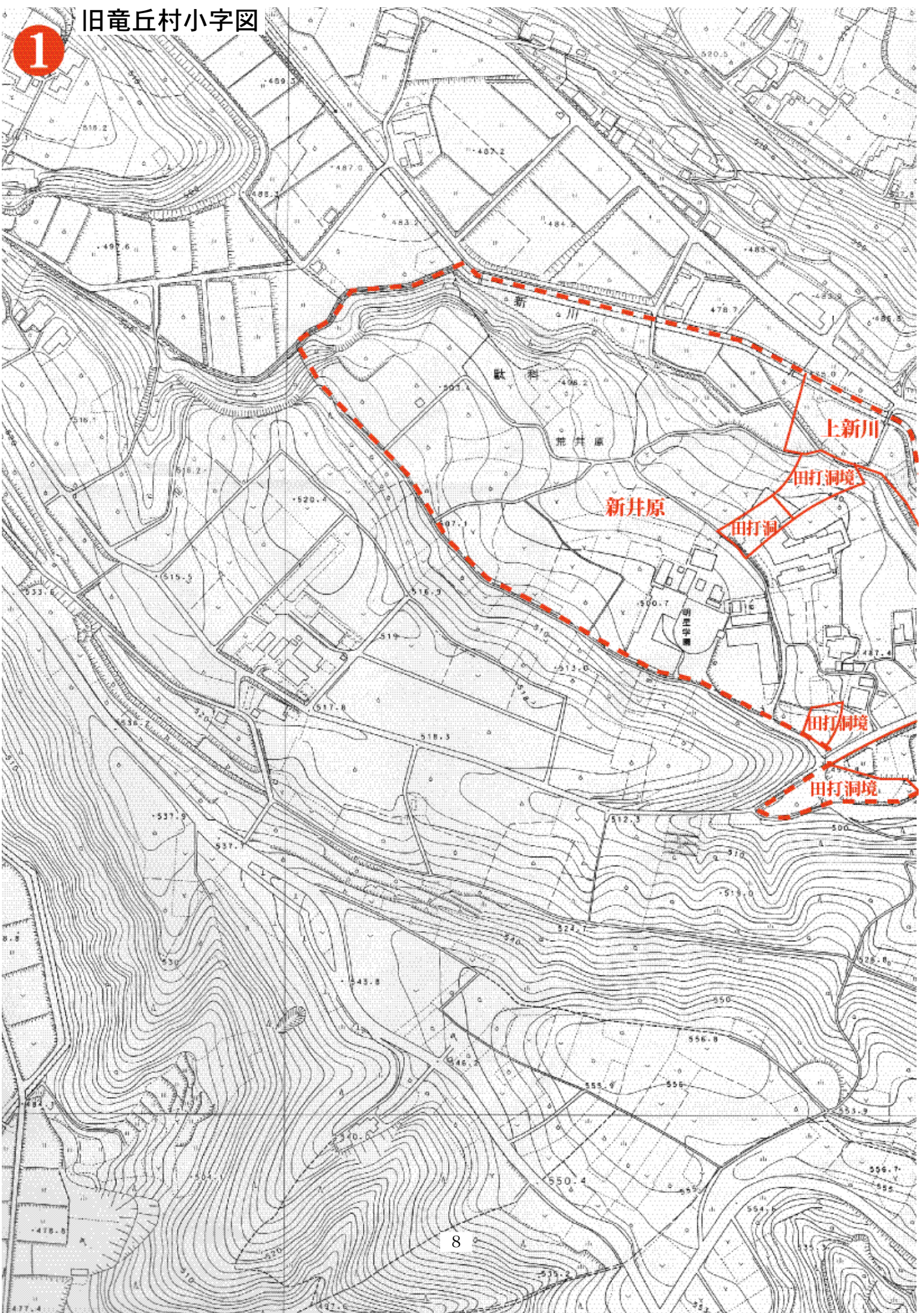
竜丘史学会 会長 下平隆司

旧竜丘村全図

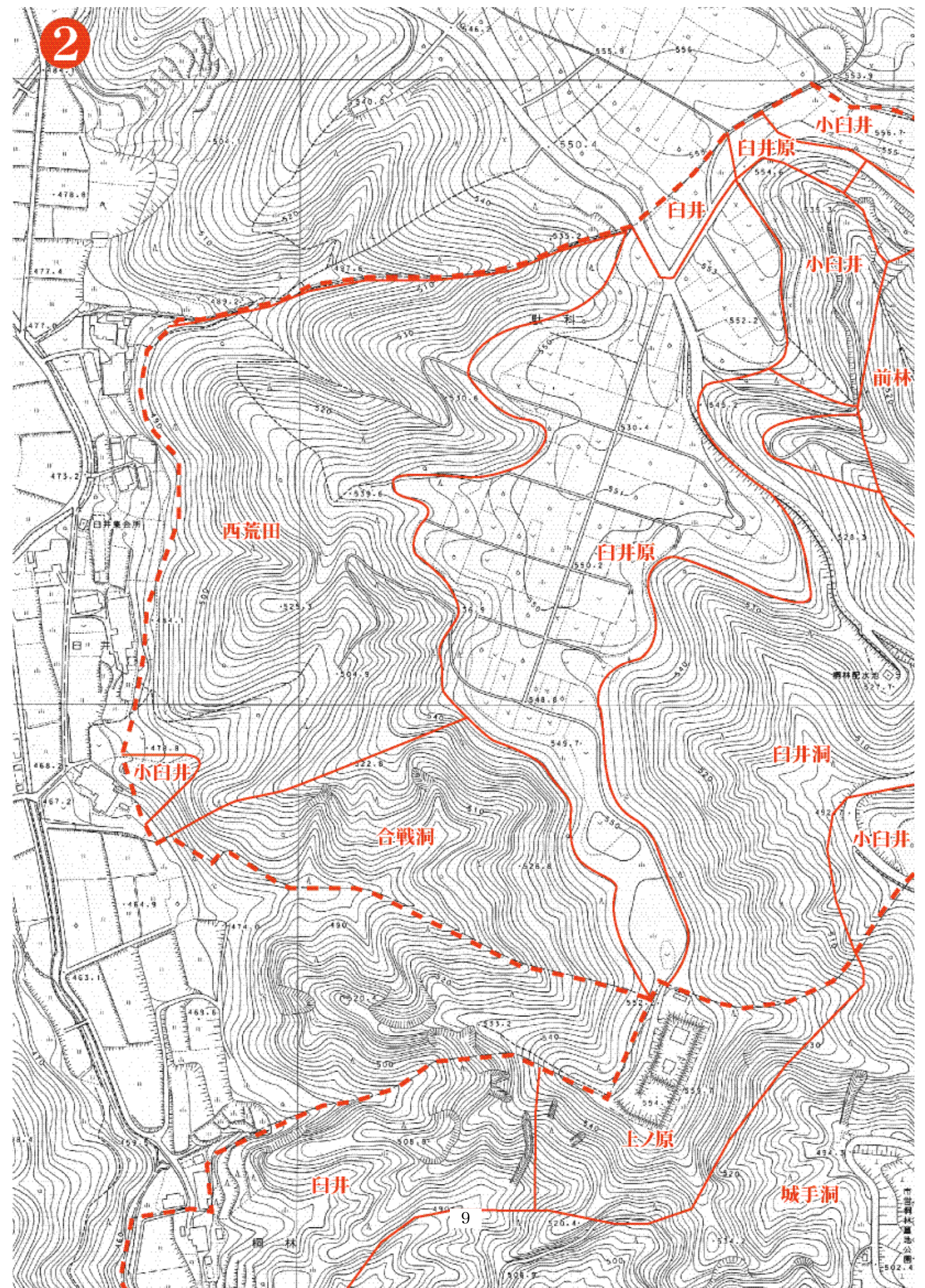


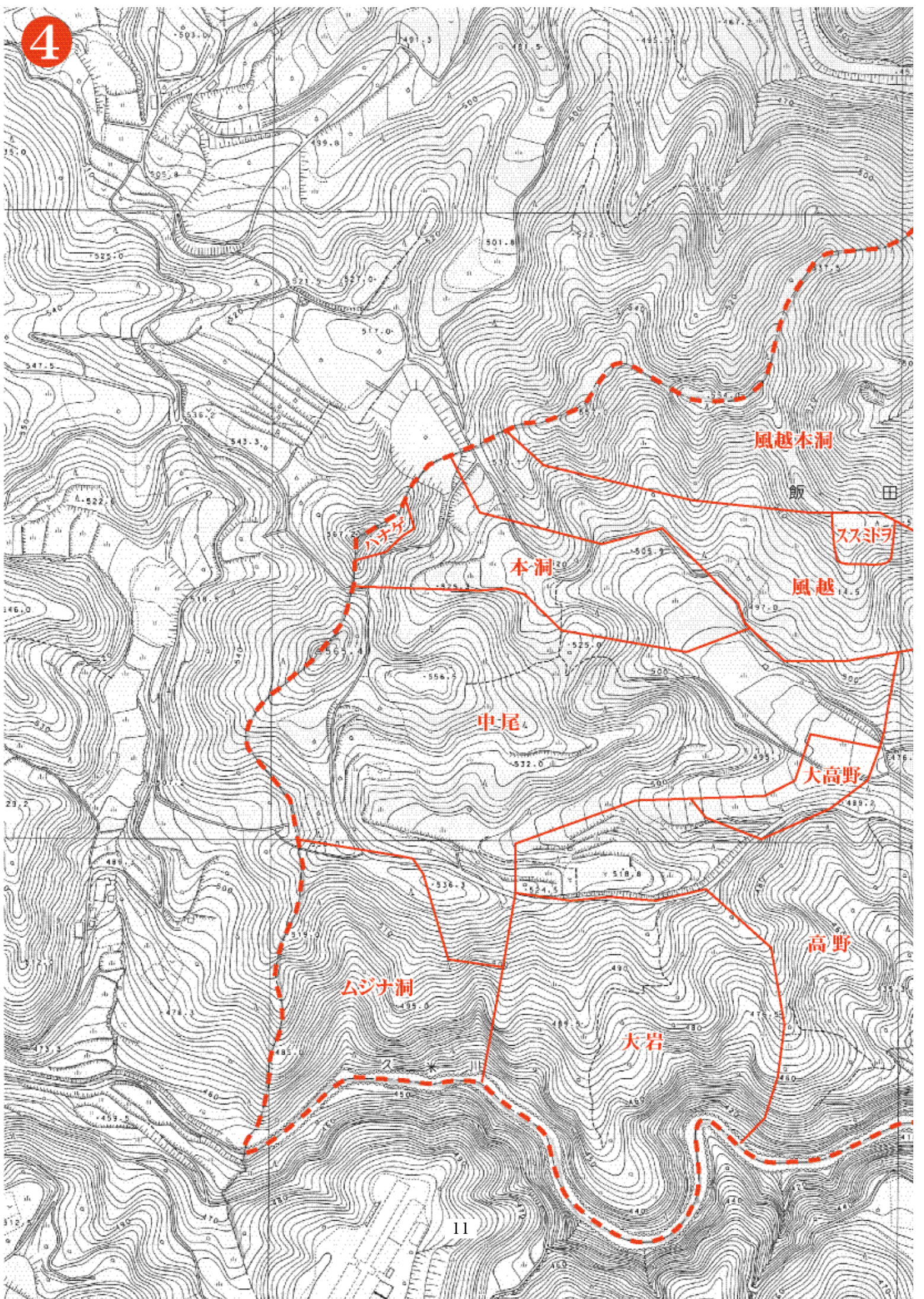
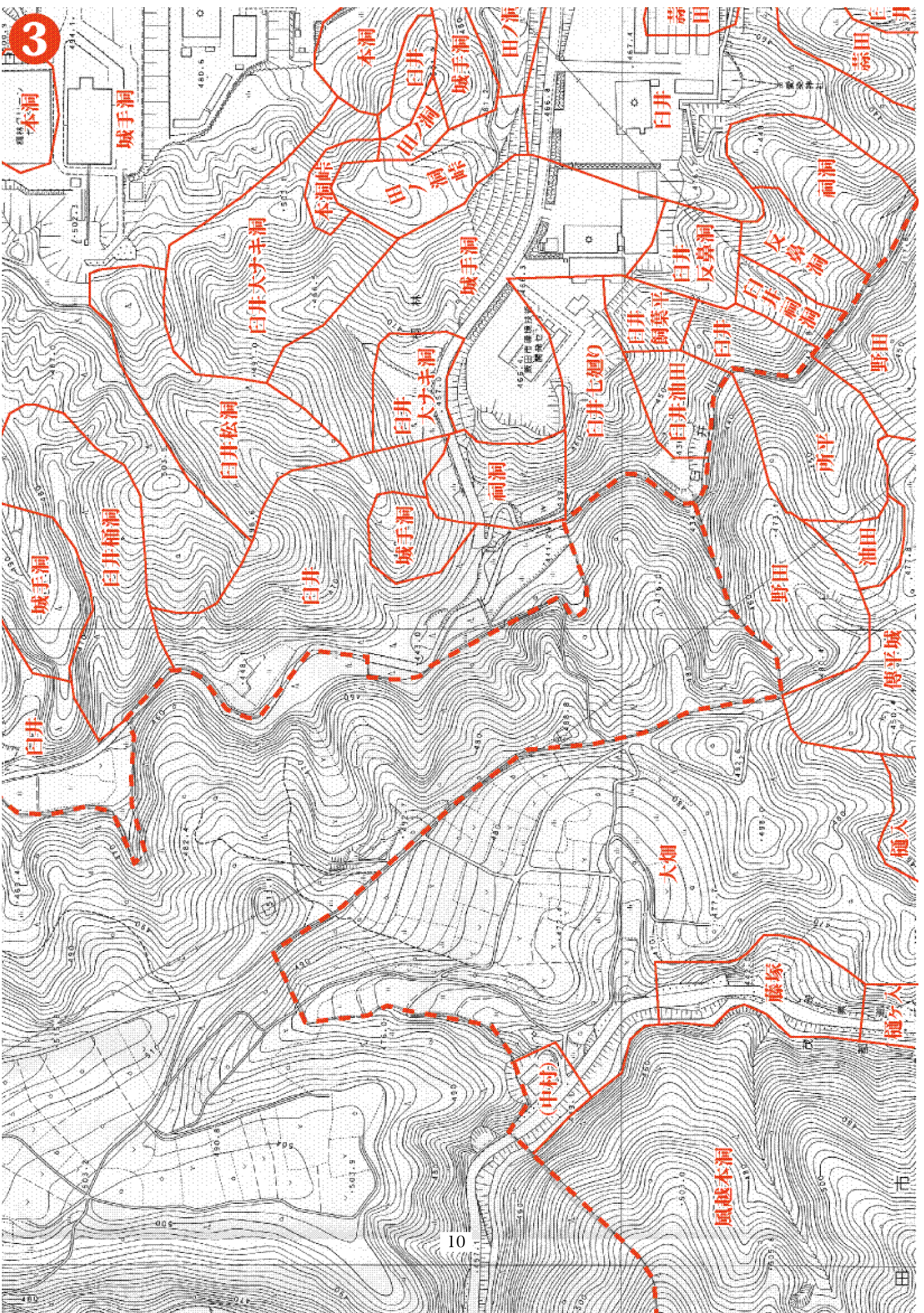
1

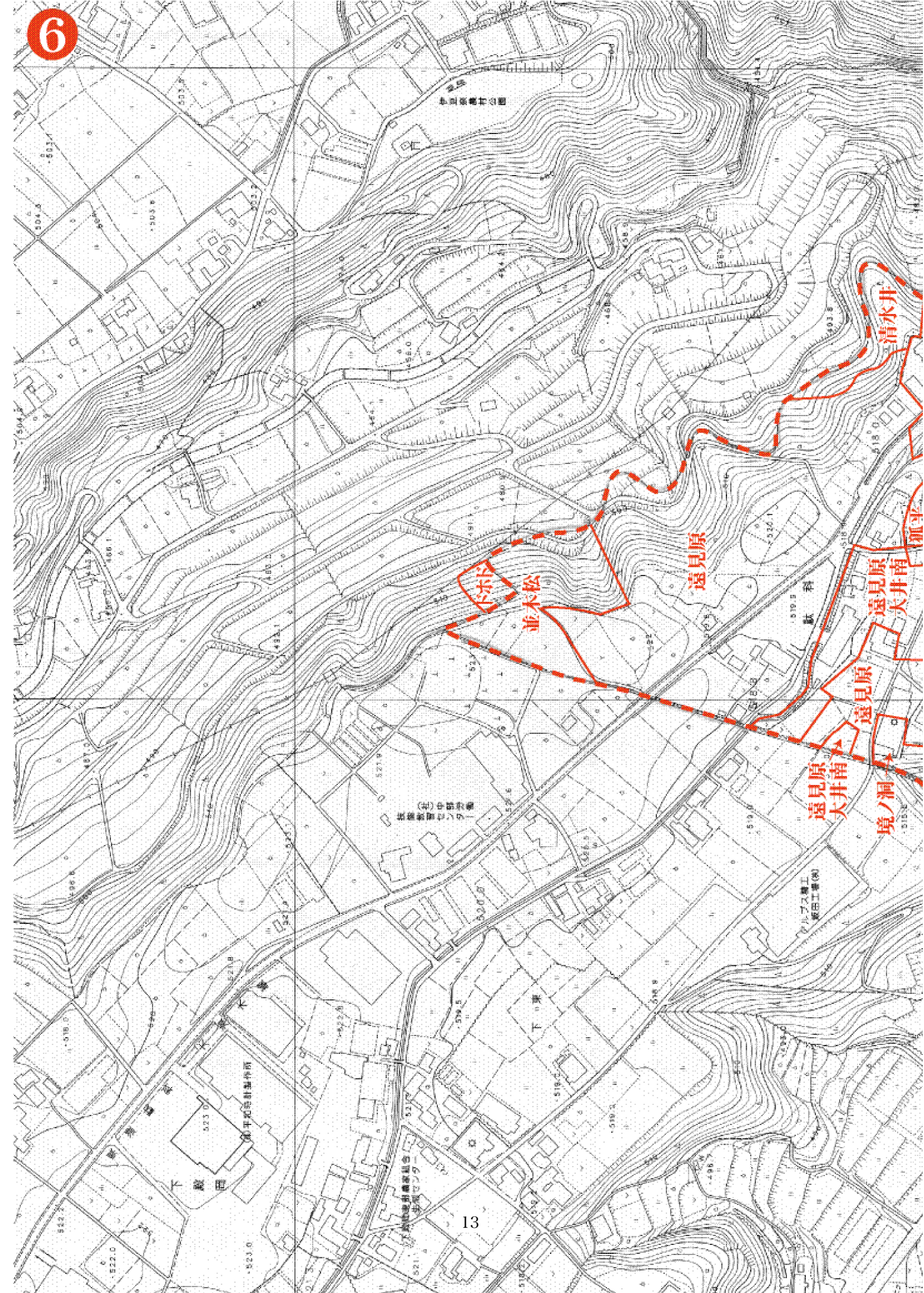
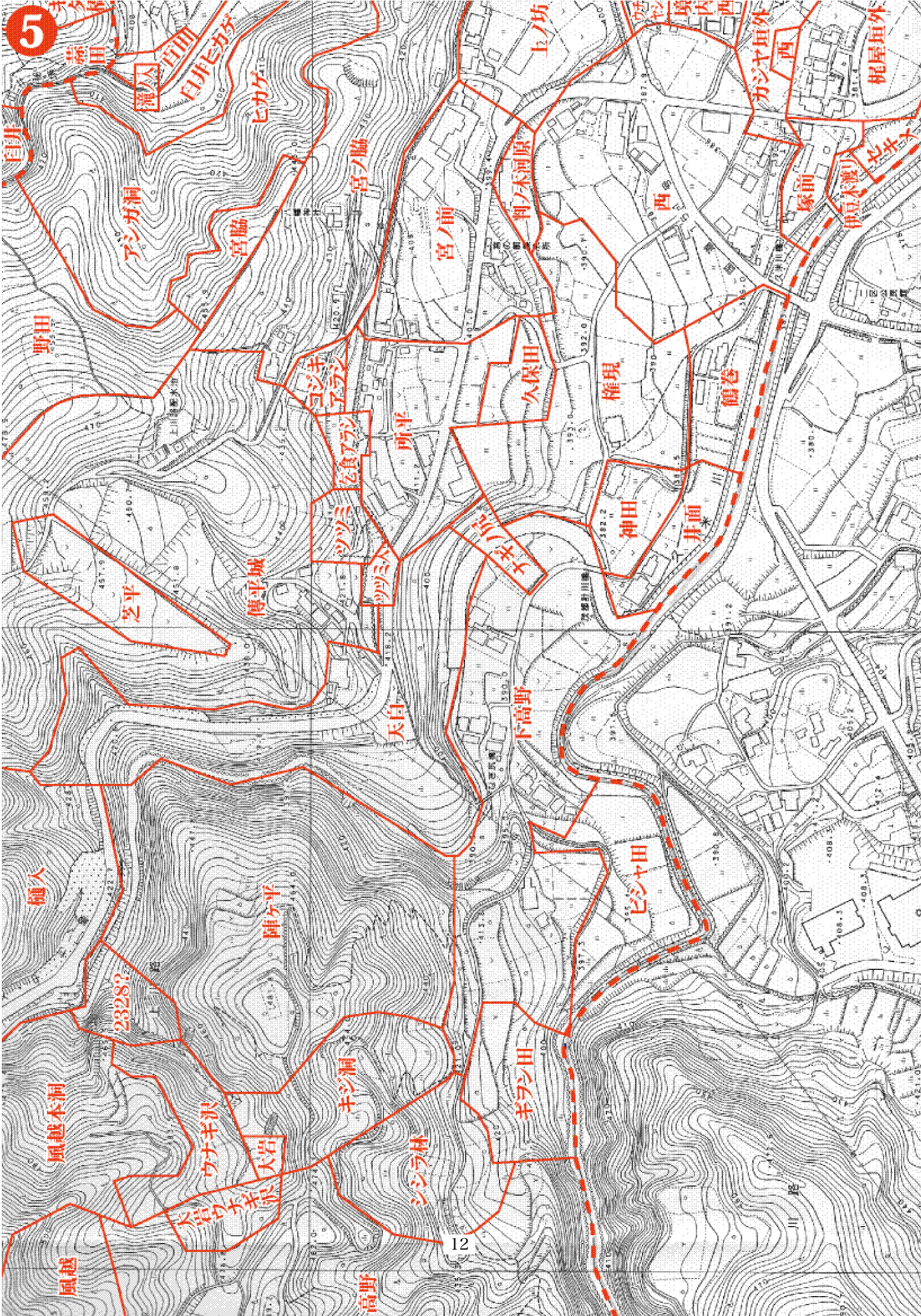
旧竜丘村小字図

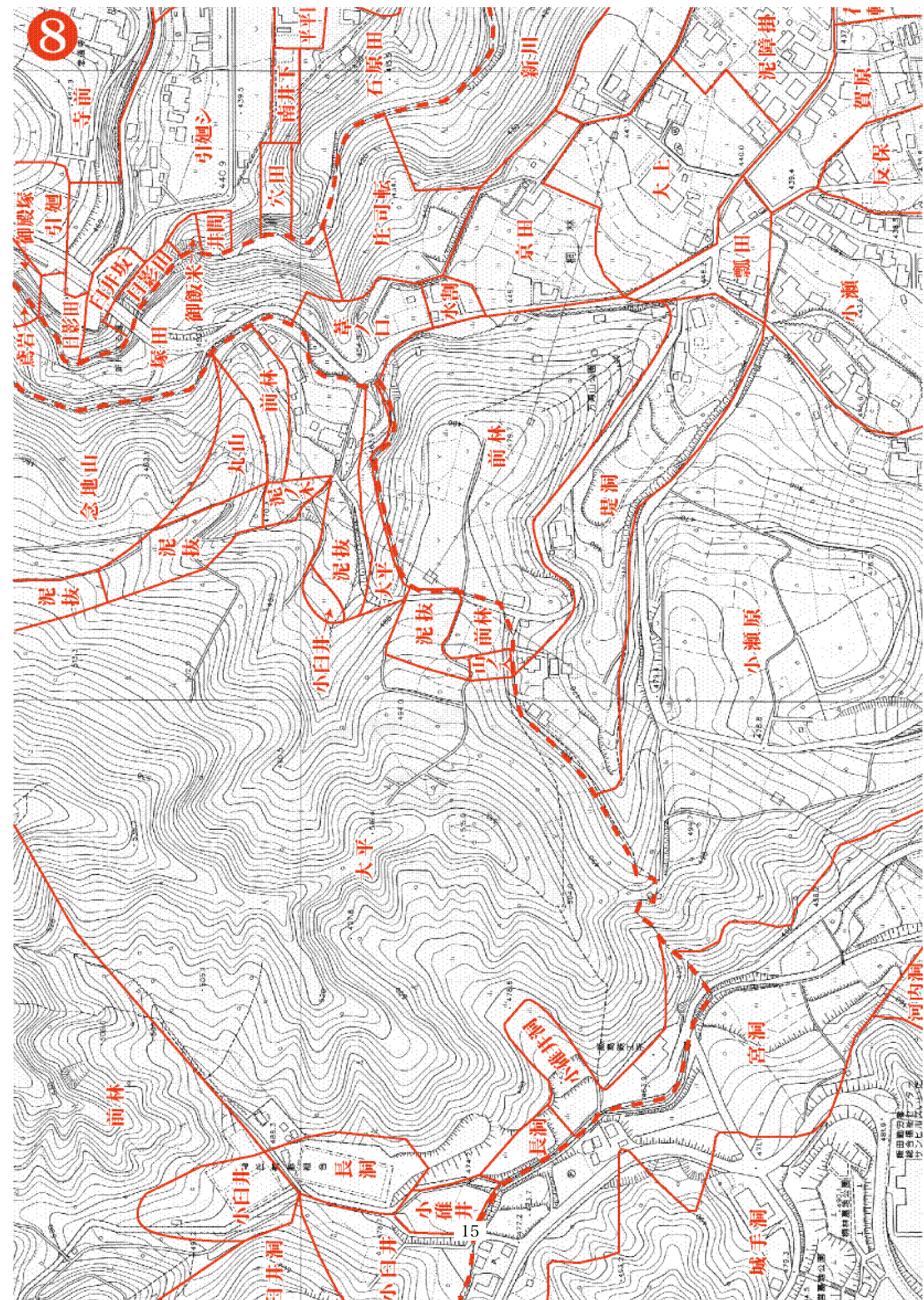
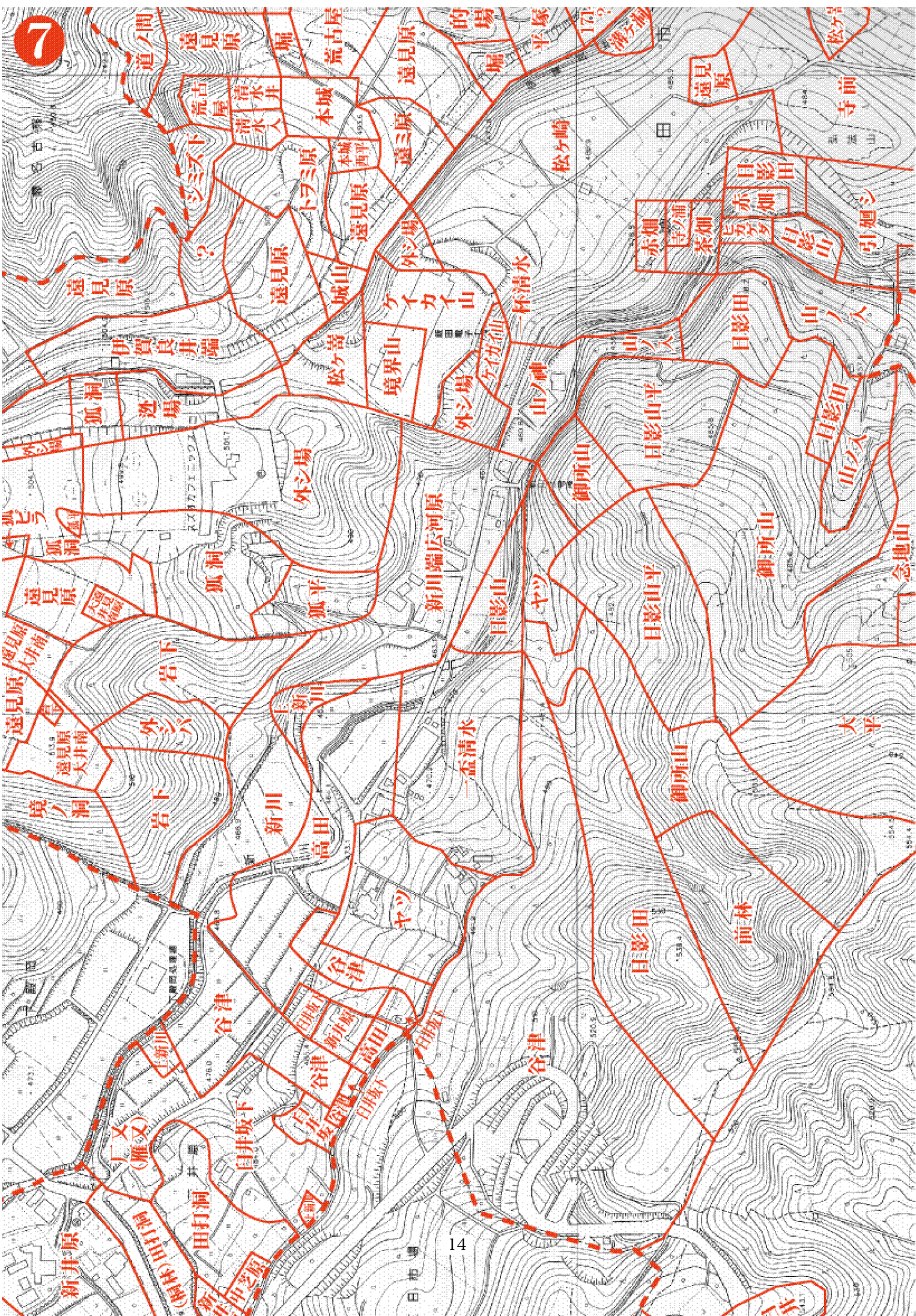


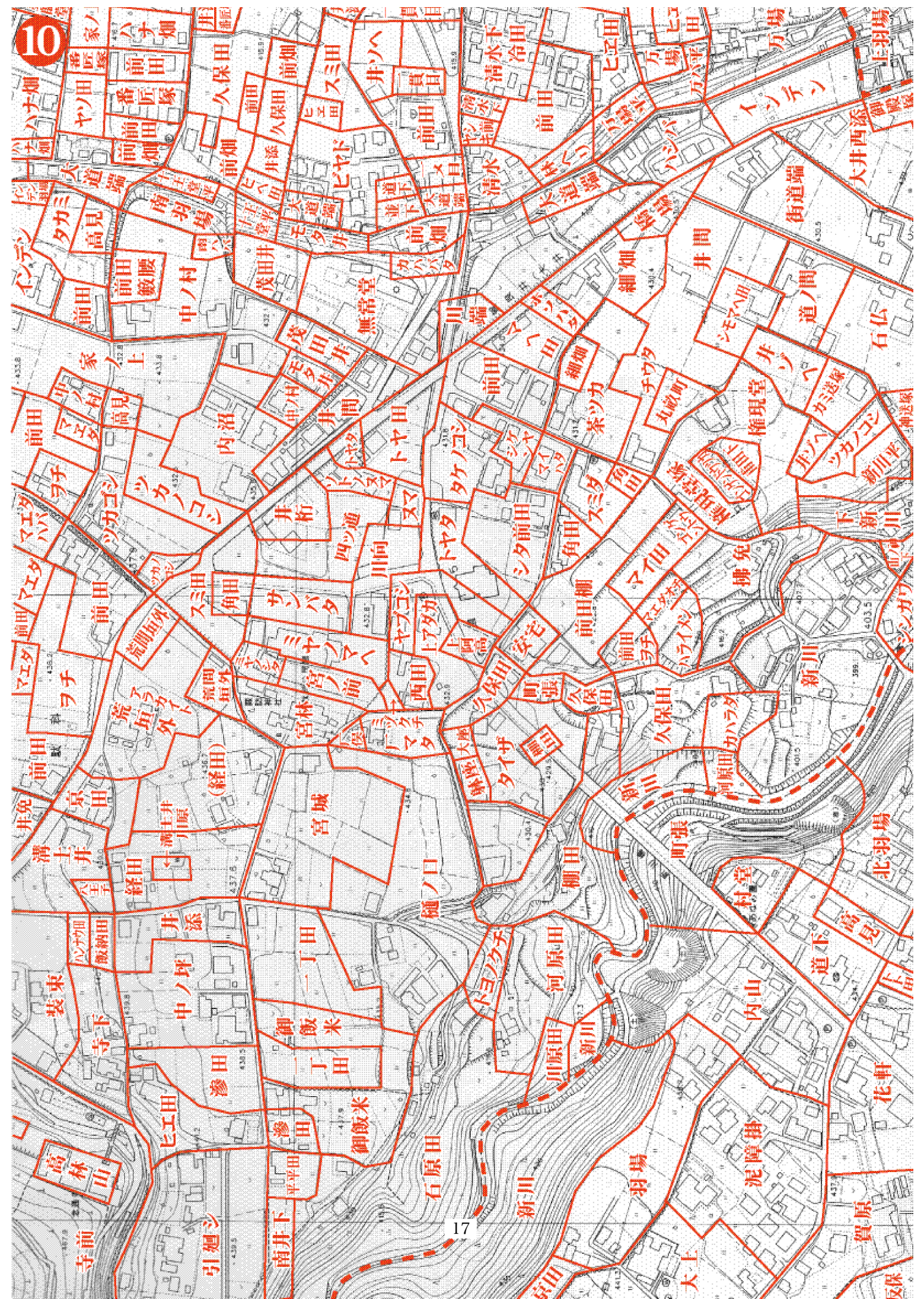
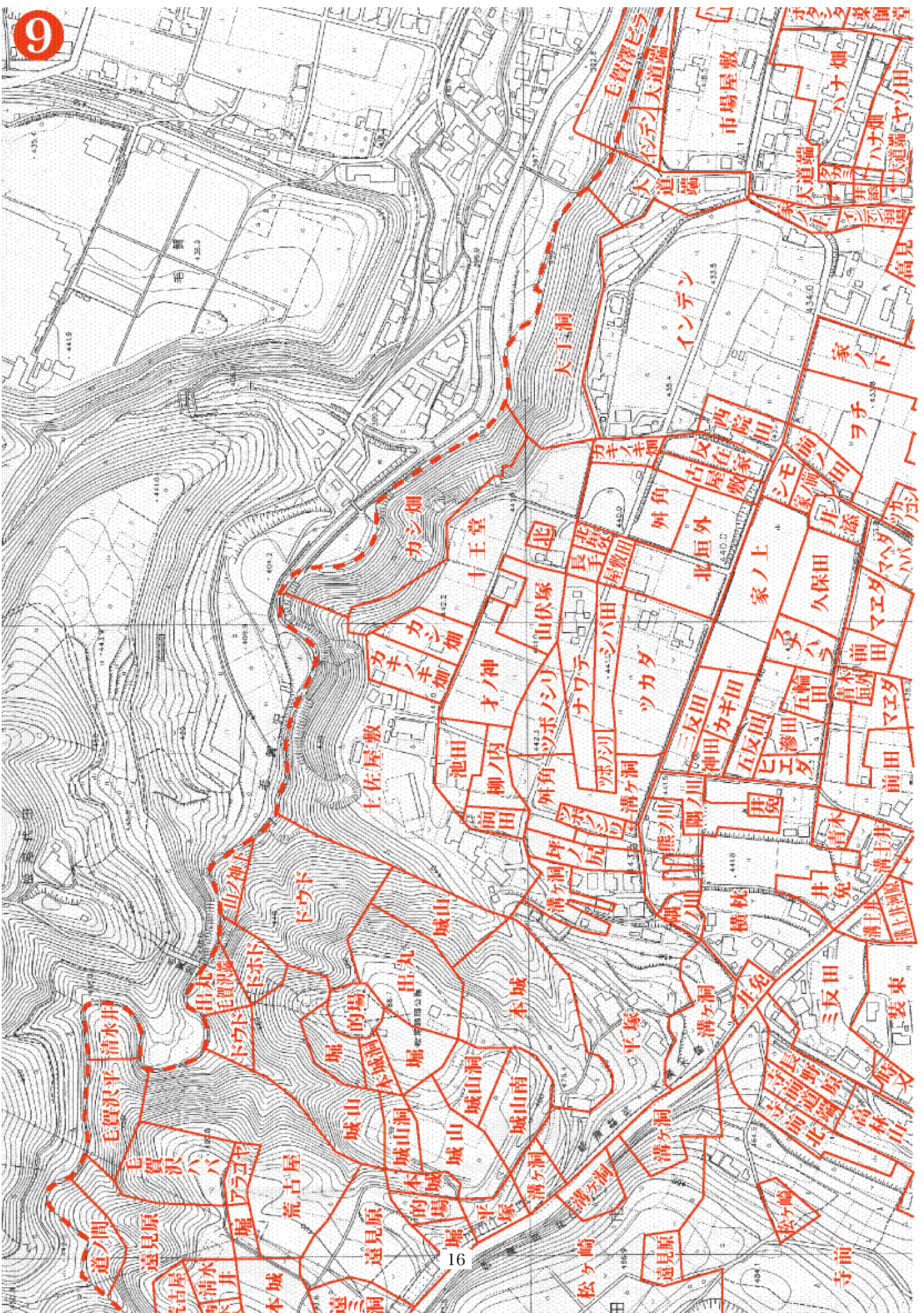
2

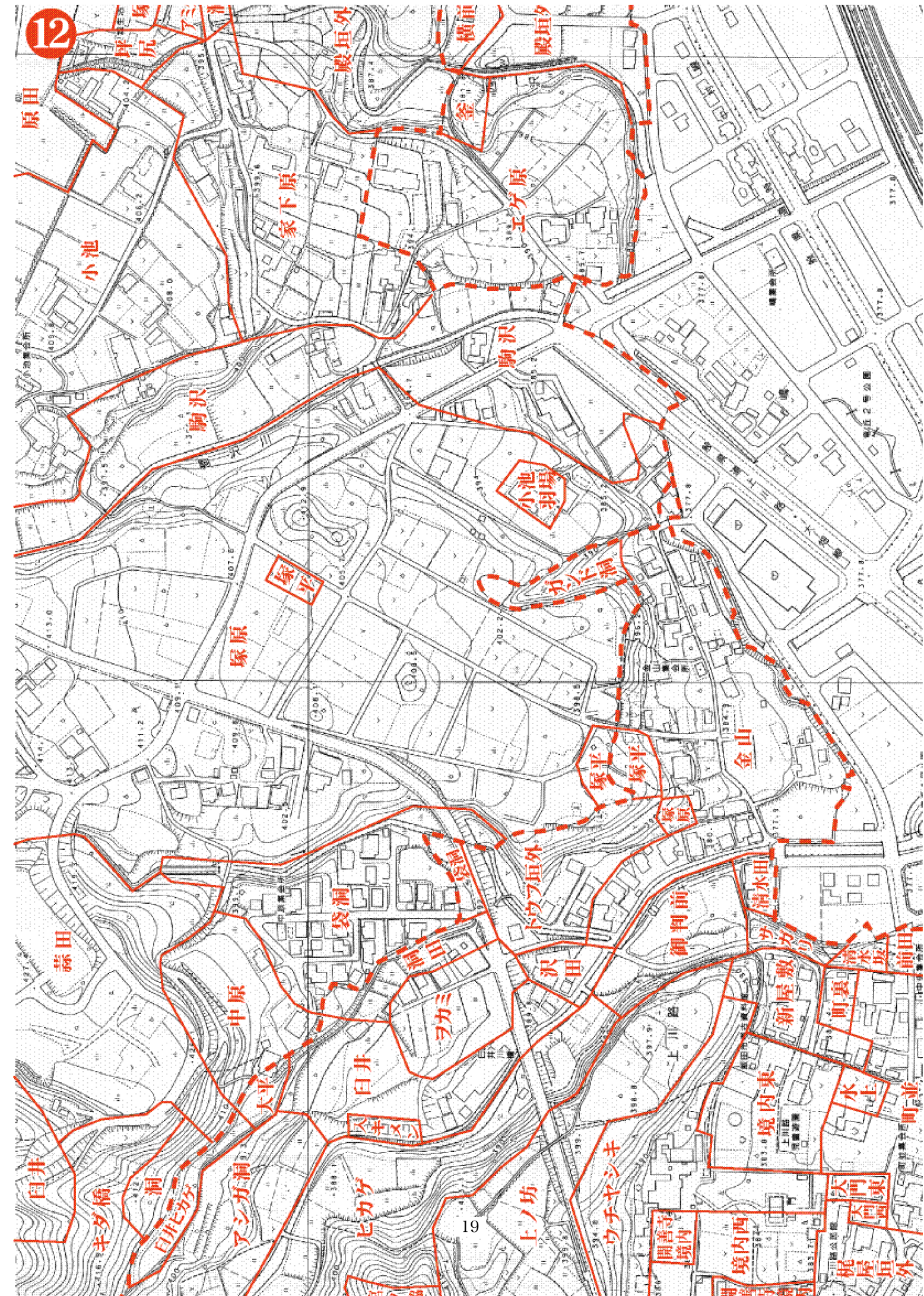
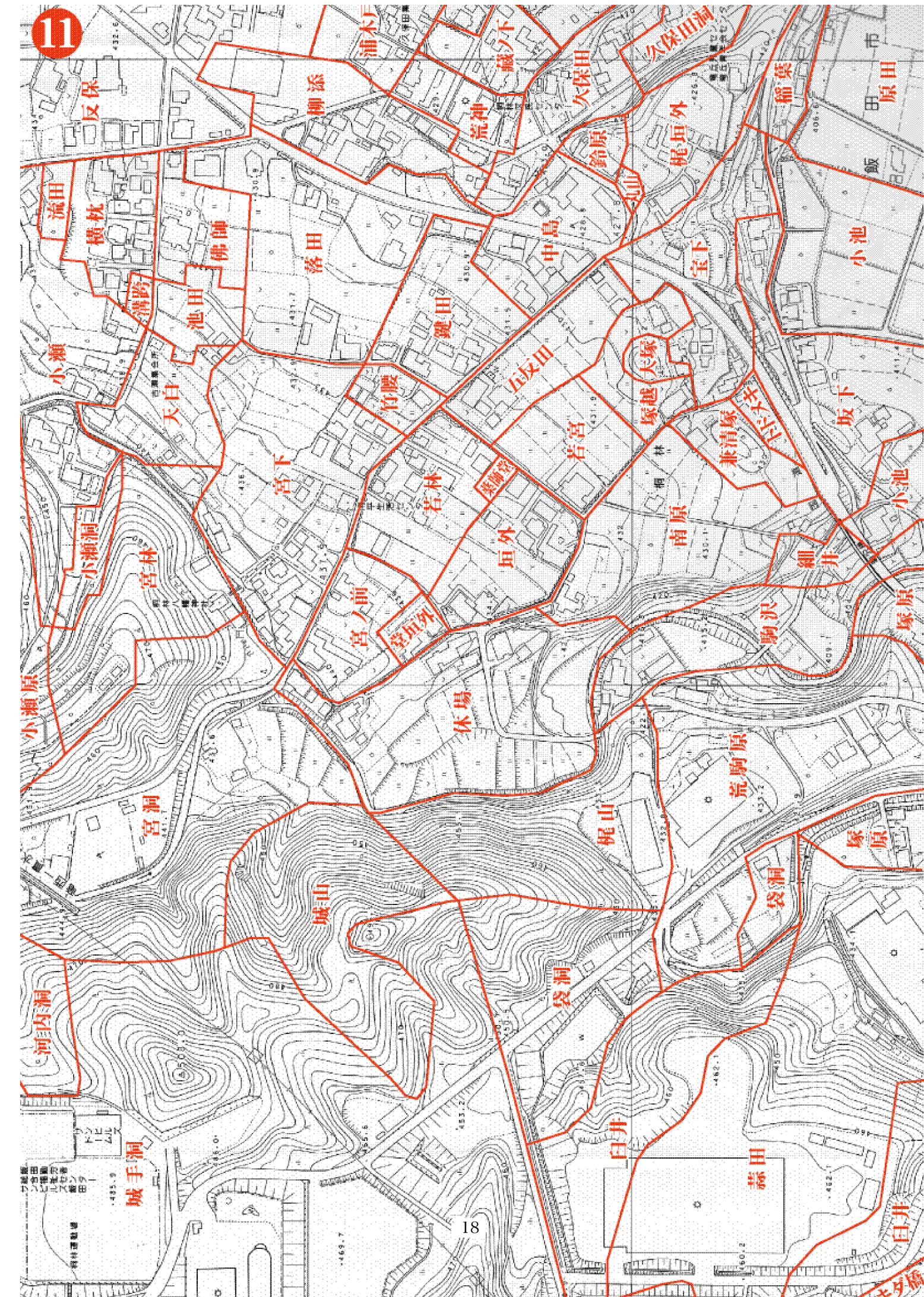


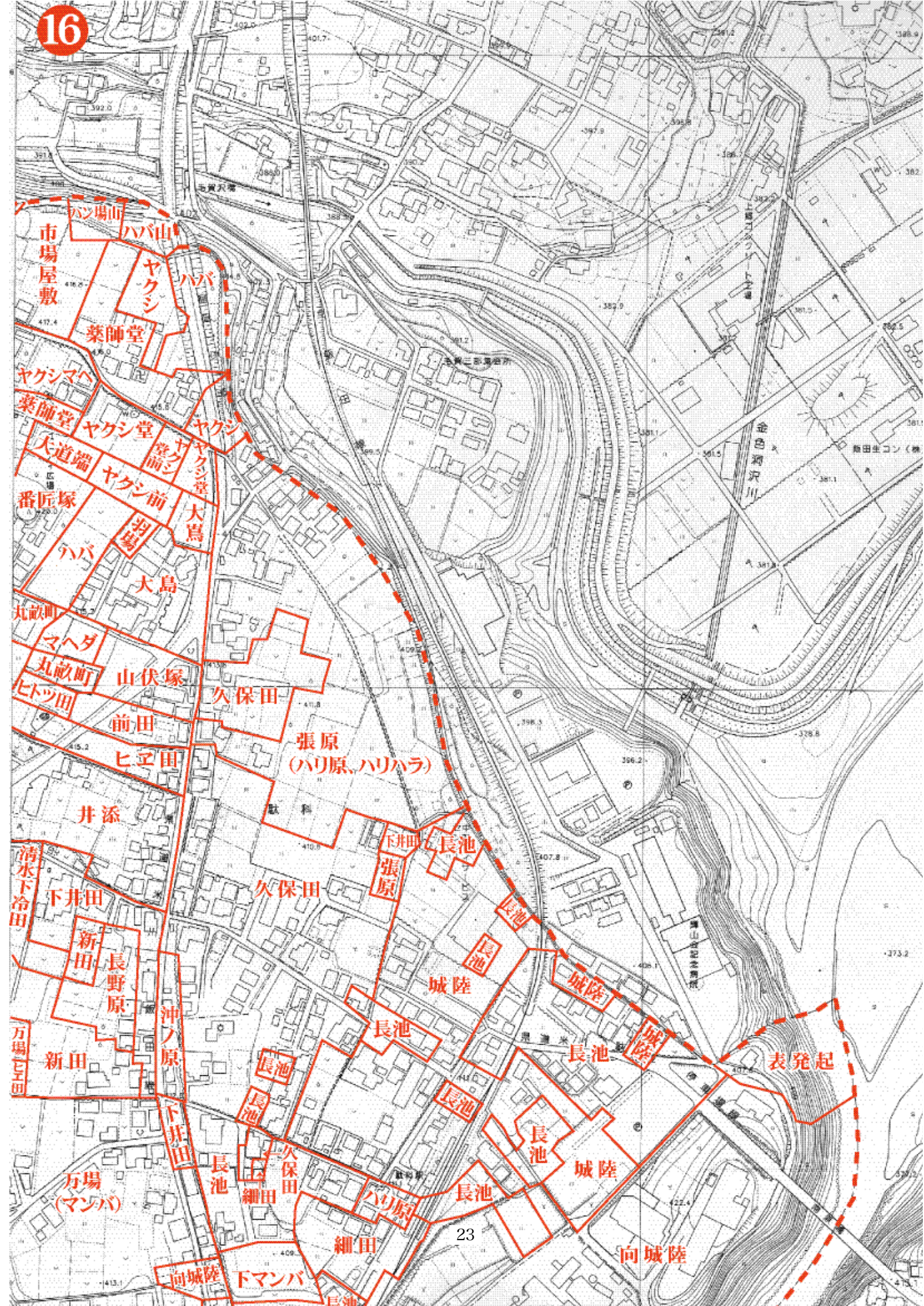
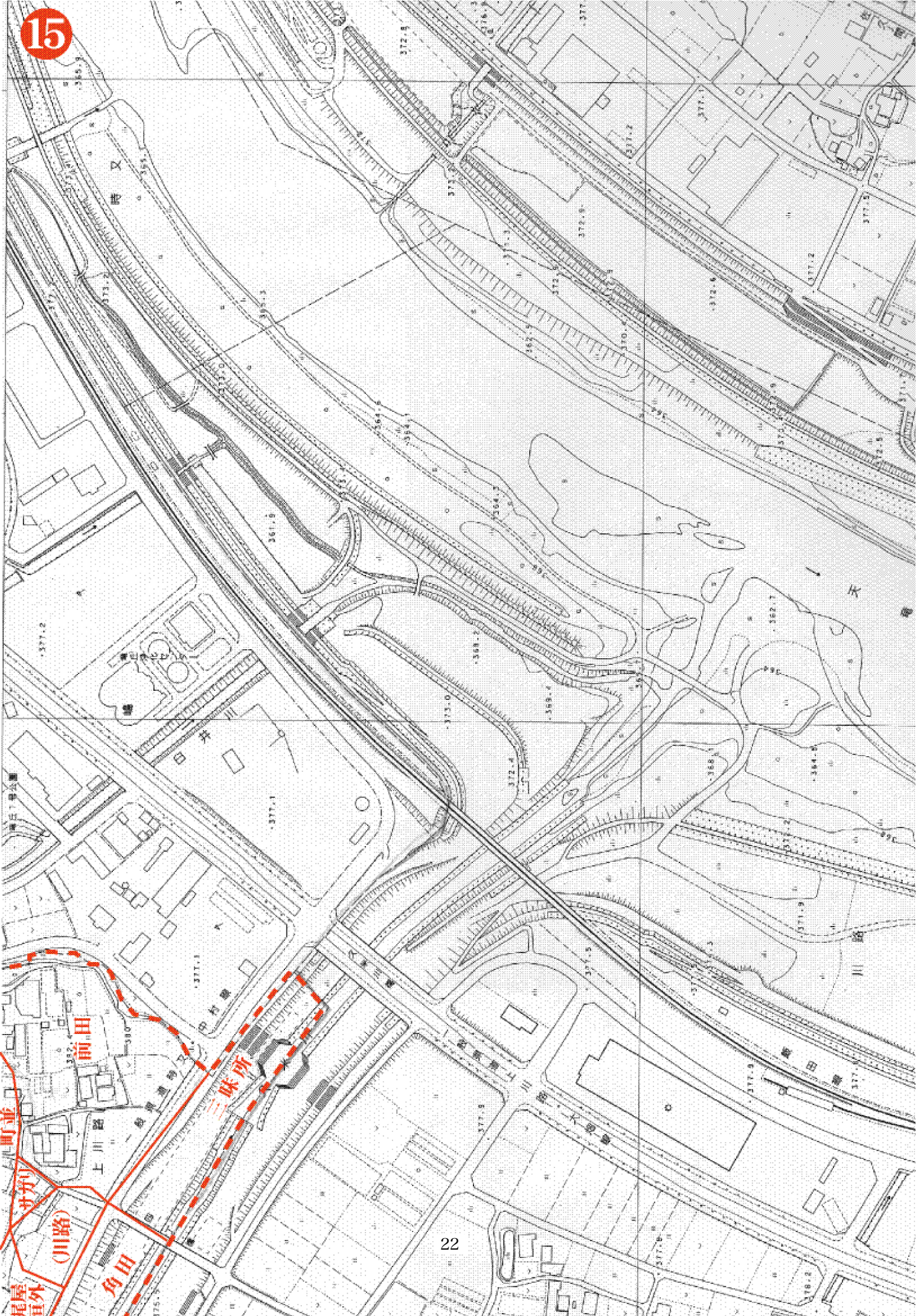












尾屋
目外
町並
市外
(川路)
角田

22

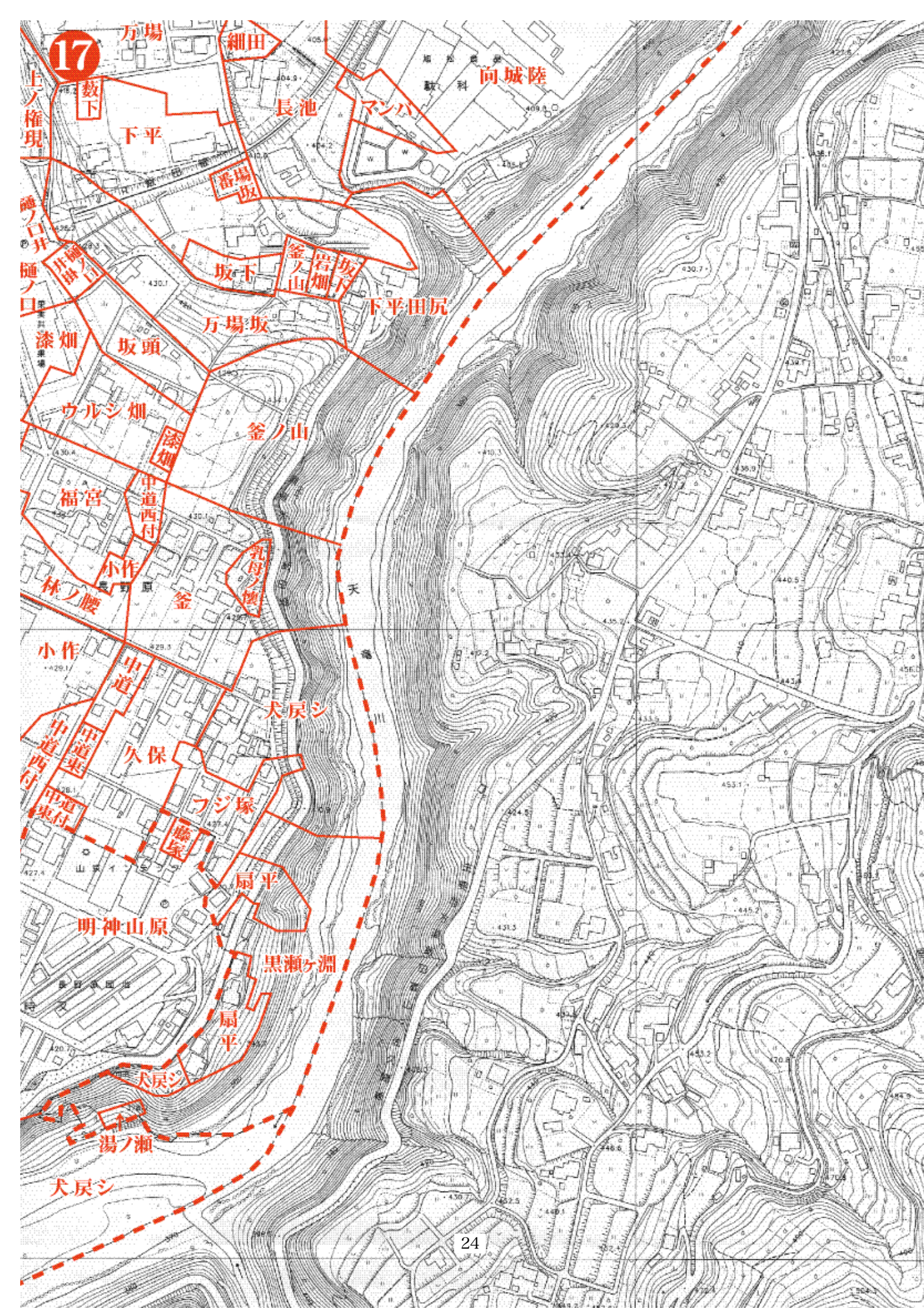
23

向城陸
下マンバ
細田
向城陸

旧竜丘村小字台帳

【時又】

番地	字名	番地	字名	番地	字名	番地	字名
1-21	経田	182-184	発起	497-507	畑中	778-896	嶋
22	西原	185-198	向新田	508	大扶垣外	897-900	なぎ
23	新川	199	三味所	509-511	大東	901-902	高田井
24	二ツ塚	200-226	五万土	512-513	松本屋敷	903-904	一ツ田
25-28	新屋敷	227-274	中平	514-516	高野平	905-907	麿陶洞
29-30	二ツ塚	275	ミタラシ	517	舟渡	907-2	麿陶
31	祢宜屋	276-279	八王子	518	川端	908-913	麿陶洞
32	下羽場	280-282	八王子脇	519-525	高野平	914-917	六月免
33-34	下井面	283-322	中平	526-528	火打坂	918-941	右近田
35	猿楽	323-329	観音平	529	清房	942-950	大座
36-38	鍵田	330	十社脇	530	岩本	951-957	なぎ
39-40	猿楽	331-333	十社	531-535	清房	958-981	大座
41-45	小作	334	十社脇	536-537	火打坂	982-985	西澤
46-47	福宮	335-336	観音平	538-544	持田	986-1001	大座
48-62	釜	337-356	中平	545	川端	1002-1003	横前
63-71	犬戻シ	357-359	五万洞	546	持田	1004-1005	大座
72-79	久保	360-379	五万土	547-555	川端	1006-1015	横前
80-84	中道	380-385	中平	556-560	持田	1016-1018	西澤
85	中道西	386-388	法寿房	561	新川	1019-1061	殿垣外
86-88	中道東	389-390	東	562	持田	1062-1070	安城垣外
89-90	中道西付	391-402	法寿房	563-584	新川	1071-1074	西新川
91	中道東付	403	東	585-597	増口	1075-1083	安城垣外
92-94	中道西付	404-418	法寿房	598	みたらし	1084-1097	前の原
95-96	中道東角	419-420	十社脇	599-600	丸釣根	1098-1183	安城垣外
97-100	久保	421-426	東	601-606	洪神	1184	洞
101-109	藤塚	427-434	法寿房	607-609	増口	1185	塚
110-114	黒瀬ヶ淵	435	発起	610	洪神	1186-1190	久保田洞
115	犬戻シ	436-449	法寿房	611-624	地慶子	1191-1200	坊主新田
116-120	扇平	450-455	観音下	625-633	新川	1201-1219	権現
121	湯ノ瀬	456-466イ	発起	634-635	西林	1220-1221	袋洞
122	三本松	466-ロ	川端	636-638	東新川平	1222-1247	小池
123-130	明神山原	467-468	舟渡	639-642	新川	1248	家下原
131-140	扇平	469-470	松本屋敷	643-648	西林	1249-1250	エゲ原
141-145	原	471-472	大東	649	釣巻	1251-1260	西澤
146-151	藤塚	473	大隅	650-651	上新川	1261-1271	エゲ原
152-155	原	474	大東	652-654	釣巻	1272-1285	西澤
156-172	平	475-476	観音平	655-677	上新川	1286-1320	エゲ原
173	草木林	477-479	畑中	677-2	下新川	1320-□	家下原
174-177	うど	480	カミヤ	678-697	上新川	1321-1323	西澤
178	膳棚	481-484	畑中	697-4	下新川	1324-1328	駒澤
179	発起	485-489	荒神	698-718	上新川	1329	新川
180-181	向新田	490-496	岩本	719-777	新川		



【長野原】

番地	字名	番地	字名	番地	字名	番地	字名
1	マンバ	165	前田	289-291	井添	509-511	稲荷前
2-8	新田畑	166-172	西井	292-293	ネギヤ井	514	前田
9-11	元寺下	173	大井田	294-296	下羽場	515	稲荷腰
12-20	田中前田	174-176	大井西	297-307	祢宜屋井	516	ウラ
21-33	長池	177	井添	308-313	祢宜屋	517	樋ノ口井掛り
34-40	向城陸	178	井端	314-317	下羽場	518	樋ノ口井
41-42	上ハバ	179-180	井下	318-333	五万堂	519	水口
43-49	万場	181-182	井端	334	下井田	520	三角田
50	権現堂	183-184	大井西	335-336	下井西	521-523	トヨノ口井掛り
51	井間	185	水口	337-339	五万堂	524	トヨノ口
52-56	権現堂	186	墓東	340-343	大道端	525-526	樋口
57-60	寺下	187	西原	344	大井端	527-532	漆畑
61-62	新川端	188	家南	345-347	下井端	533-540	坂頭
63-67	上羽場	189	苗代	348-349	藪腰	541	樋ノ口掛り
68	大井西	190	ウラ	350	大道端	542	樋ノ口井
69-71	権現堂	191-194	西原	351-369	宮前	543-545	坂頭
72-84	御殿塚	195	鶴牧	370-381	猿樂	546-547	樋ノ口
85-87	大井端	196	ツルマキ	382	金山	548	大井添
88-89	御殿塚	197-202	鶴牧	383	猿樂	549	前田
90	塚田	203	ツルマキ	384-389	坊主田	550-562	上ノ橋場
91	塚	204	鶴牧	390	尾池	563-566	上羽場
92	御殿塚	205-210	ツルマキ	391-396	鍵田	567	大道端
93	大井端	211-216	西原	397-403	猿樂	568-570	上羽場
94	大道端	217	鶴牧	404-416	小作	571-598	万場
95-96	御殿塚	218-221	西原	417-418	田瀬	599-601	下平
97	大井端	222	山添	419-424	藤樹井	602	藪下
98	御殿塚	223-231	西原	425-427	蔵ノ平	603-613	下平
99	森田	232-234	新屋敷	428-430	大井添	614-630	長池
100-103	御殿塚	235-237	二ツ塚	431-434	札場井	631-634	下平
104-105	権現堂	238-240	新川	435	下ノ田	635-639	下平田尻
106	御殿塚	241-246	二ツ塚	436	前田	640-641	坂下
107-108	中井田西	247-248	二ツ塚	437-439	札場	642	岩畑
109-112	中井田	249	二ツ塚井	440	東ノ田	643	釜ノ山
113	前畑	250-254	西原	441-442	中ノ田	644-646	下平
114	家南	255-257	二ツ塚井	443-458	小作	647-650	坂下
115	大道端	258	前田	459-465	福宮	651-664	下平
116	大井添	259	大井端	466-472	林ノ腰	665-680	釜ノ山
117	大井端	260-261	新屋敷井添	473-477	福宮	681	鬼岩ヨリ犬戻シ
118	中井田	262	ウラ	478	沖	682	釜ノ山天竜端
119	前畑	263-268	大井端	479-493	福宮	683-691	釜
120-128	前畑	269	新屋敷井	494-495	樋ノ口	692	乳母の懐
129	西羽場	270-271	新屋敷	496	いなり際	693-696	犬戻し
130-131	藪腰	272-277	二ツ塚	497	福宮	697-700	久保
132-139	西羽場	278	祢宜屋	498-504	オキ井	701	フジ塚
140-145	水落	279	二ツ塚	505	長田	702	犬戻し
146-164	西羽場	280-288	新屋敷	506-508	札場	703-707	黒瀬ヶ淵

708	犬戻シヨリ鶴戸	751-754	扇平	808-816	下羽場	838-840	下羽場
709-715	扇平	755-758	原	817-830	鶴戸	841-849	五万洞
716-718	湯之瀬	759-762	藤塚	831-833	向新田	850-853	中平
719-721	三本松	763-766	平	834-835	下羽場		元寺下
722-730	鶴戸	767-798	原	836	五万洞		
731-750	明神山原	799-807	草木林	837	鶴戸		

【駄科】

番地	字名	番地	字名	番地	字名	番地	字名
1	ヤクシ	133	長手	217-223	平塚	315	五輪田
2	ヤクシハバ	134	山伏塚	224-225	溝ヶ洞	316-317	滲田
3-4	ヤクシ	135-136	北	226-228	平塚	318	五反田
5-6	薬師堂	137-143	十王堂	229-246	溝ヶ洞	319	ヒエダ
7-12	ハバ	144-146	山伏塚	247-249	井免	320	青木垣外
13-14	ヤクシ	147-148	ナワ手	250-259	横枕	321	マエダ
15-18	薬師堂	149-150	オノ神	260-266	井免	322-326	前田
19-25	市場屋敷	151	十王堂	267-268	青木	327-328	マエダ
26	毛賀澤ビラ	152	カシ畑	269	前田	329-330	前田
27	ハン場山	153	十王堂	270-276	横枕	331	マエダ
28-29	ハバ山	154-155	カシ畑	277	井ノ間	332-333	前田
30-45	市場屋敷	156	袈裟畑	278	横枕	334	マエダ
46	大道端	157-158	オノ神	279	隅ノ川	335	マヘダハバ
47-48	毛賀澤ビラ	159-161	ツボノシ	280	横枕	336-338	前田
49-51	大道端	162	舛角	281	隅ノ川	339-340	ツカノコシ
52	大道端大丁洞	163	タナ田	282	井免	341-343	ツカゴシ
53-54	大道端	164-166	舛角	283	横枕	344-345	ツカノコシ
55-71	インデン	167	柳ノ内	284-285	井枕	346-349	ツカゴシ
72	大丁洞	168-169	池田	286	横枕	350	ツカノコシ
73-74	インデン	170-180	土佐屋敷	287	井免	351-356	内沼
75	大丁洞	181	前田	288	隅ノ川	357-358	ツカノコシ
76-96	インデン	182	池田	289-290	井免	359	前田
97-99	西院田	183	柳ノ内	291	熊ノ川	360	ナカノムラ
100-101	反在家	184	舛角	292	井免	361	マエダ
102	袈裟畑	185	ツボノシ	293-294	熊ノ川	362	ヲチ
103-104	十王堂	186	溝ヶ洞	295	隅ノ川	363	ヲチマエダ
105	カシ畑	187-188	坪ノ尻	296	五反田	364	ヲチツカコシ
106-107	十王堂	189-190	手塚	297	神田	365	ヲチ前田
108-109	カシ畑	191-193	溝ヶ洞	298	カギ田	366	ヲチツカノコシ
110-116	十王堂	194	タナ田	299	五反田	367-373	ヲチ
117	北垣外	195-199	土佐屋敷	300-304	家ノ上	374-375	イエノシタ
118-120	舛角	200	溝ヶ洞	305	シモ	376-377	家ノ下
121	古屋敷	201	タナ田	306	イノウエ	378-382	インデン
122-128	北垣外	202	溝ヶ洞	307	家ノ前	383-384	インデン
129	ツカダ	203	平塚	308-309	前田	385	インデン羽場
130	三バ田	204	溝ヶ洞	310	井添	386	インデン
131	ツカ北	205-212	手塚	311-313	久保田	387-388	前畑
132	屋敷田	213-216	溝ヶ洞	314	スナハラ	389-391	高見

392-393	タカミ	506	マンパヒラ	595	ヒエ田	676	家ノ上
394-400	高見	507	万場	596-598	前田	677	番匠塚
401	羽場	508-509	マンバ	599	山伏塚	678-679	ハナ畑
402-403	前田藪腰	510	万場	600	マヘ田	680	前田
404-406	内沼	511	坂下ヒエ田	601	前田	681	番匠塚
407-410	中ノ村	512	万場	602	丸畝町	682	前田
411	モ田井	513-514	ヒエ田	603	ヒトツ田	683	ハナ畑
412-419	井間	515-521	新田	604	ヒエダ	684	家ノ上
420-421	茂田井	522	下井田	605	井ソヘ	685-690	番匠塚
422	マイ畑	523	沖ノ原	606	井添	691	薬師堂
423	マエバタ	524	下井田	607-609	藪腰	692	バンジャウカ
424-433	中ノ村	525	新田	610	井添	693-694	ヒエ田
434	南羽場	526-528	下井田	611	番匠塚	695	ヤクシ堂
435-436	十王平	529-530	井添	612	久保田	696-699	薬師堂
437	南羽場	531-533	清水下冷田	613	ヒエダ	700	ボタ下
438	大道端	534-535	新田	614-617	久保田	701-706	ボタシタ
439-440	南羽場	536-537	ヒエ田	618	前田	707	ヤクシマ
441	南ハバ	538	林ヘリ	619	久保田	708	バンジャウカ
442	十王堂	539	前田	620	井添	709-710	ヤクシ堂
443-445	茂田井	540-543	清水下冷田	621	ヒエ田	711	ヤクシ堂前
446-448	モタ井	544-545	清水下	622	前畑	712	ヤクシ前
449-450	ビヤド	546	ヤシキ前	623	ヒヘ田	713	羽場
451-454	モタ井平	547-549	前田	624	大道端	714	番匠塚
455	大道端	550-556	清水	625-629	十王堂平	715-716	ハバ
456	前畑	557	前田	630-631	前畑	717-718	大島
457	無常堂	558	大道端	632-633	久保田	719-720	大島
458	前畑	559	前田	634-635	大道端	721-723	大島
459	カハバタ	560	大道下	636	前畑	724	大島
460-463	モタ井	561	ビヤド	637-639	ハナ畑	725	ハリ原
464-465	茂田井	562	道下	640	大道端	725	ハリハラ
466-470	モタ井	563-565	大道端	641	高見	726	ハバ
471	モタ井平	566-567	大道下	642-645	ハナ畑	727	大島
472	カハバタ	568-569	ヒエ田	646	井添	728	ヤクシ堂下
473-475	川端	570-572	ビヤド	647	ハナ畑	729	ハバ
476	無常堂	573-574	道下	648	大道端	730	ヤクシ堂
477-489	無常堂	574	道下前山	649-650	タカミ	731	ハリ原
490	前畑	575	一メ目	651-652	市場屋敷	732-736	張原
491	大道端	576	井添	653	家ノ上	737	ハリハラ
492	無常堂	577-578	前田	654	大道端	738-739	ハリ原
492	ムショウトウ	579	ビヤド	655	市場屋敷	740-741	張原
493-496	大道端	580	ヒエ田	656-657	ハナ畑	742	ハリハラ
497-498	無常堂	581-583	スミ田	658-659	市場屋敷	743-744	張原
499	ハシハ	584	一貫目	660-669	ハナ畑	745	下ハリ原
500	橋場	585	前田	670	ヤソ田	746-750	張原
501-502	ハシハ	586-589	井添	671	ハナ畑	751	ハリハラ
503	万場平	590	一貫目	672	ヤソ田	752-753	張原
504-505	万バ平	591-594	井添	673-675	ハナ畑	754-755	ハリ原

756-757	張原	847	向城陸	1075-1076	原	1180-1182	新川平
758	クボタ	848-849	長池	1077-1087	街道端	1183-1185	権現堂
759	ハリ原	850	細田	1088	原	1185	ゴシガウカ
760	久保田	851-852	細畑	1089-1092	街道端	1186-1188	権現堂塚
761-763	張原	853	長池	1093-1095	橋場	1189	権現堂
763	ハリハラ	854-858	細畑	1096-1097	井間	1190-1192	拂免
764	張原	859	ハリ原	1098	原	1193	新川
765	ハリハラ	860-865	長池	1099-1103	道ノ間	1194	シンガワ
766	ハリ原	866-869	城陸	1104-1106	石佛	1195-1201	新川
767	ハリハラ	870-871	ジャウロク	1107-1110	神送塚	1202-1203	シンガワ
767	張原	872-875	城陸	1110	カミクリツカ	1204-1211	新川
768	ハリ原	876-879	長池	1111-1113	神送塚	1212-1218	拂免
768	ハリハラ	880-882	城陸	1114-1117	下新川	1219-1228	下新川
769-770	張原	883-888	長池	1118-1120	山ノ神下	1229	ゲンチャウギ
771	ハリ原	889-892	城陸	1121-1124	山神下	1230-1231	拂免
772-777	久保田	893-894	長池	1125	茶畑	1232	マイハタ
778	ハリハラ	895-901	城陸	1126	茶ハタ	1232	前畑
779-780	張原	902	長池	1127	茶畑	1233	前田ヲチ
781	ハリ原	903-907	城陸	1128	山ノ神下	1233	マダヲチ
782-783	張原	908	下井田	1129	山神下	1234	ハライソ
784	ハリ原	909	城陸	1130-1131	山神	1235	ゴシガントウ
785	クボ田	910-916	長池	1132-1133	下新川	1236-1237	マイ田
786-788	クボタ	917	表発起	1134-1135	新川平	1238-1239	前田棚
789-793	久保田	918-919	長池	1136	ツカノコシ	1240	安宅
794-795	張原	920	城陸	1137-1141	井ゾヘ	1241	水口
796	久保田	921-924	長池	1142	前田	1242	前田棚
797	下井田	925	ナガイケ	1143	シモマヘダ	1243-1245	角田
798-799	張原	926-930	長池	1144	権現堂	1246-1248	スミダ
800-812	久保田	931-938	城陸	1145	チウタ	1249	マイハタ
813	城陸	939-942	長池	1146-1147	シモマヘダ	1250	シケンヤ
814-824	久保田	943-945	城陸	1148	シモマヘダ	1251	ヤシキ
825-826	長池	946	長池	1149-1151	平垣	1252	マイハタ
827	コッチ城陸	947	城陸	1152-1155	細畑	1253-1257	タケノコ
828	久保田	948-951	長池	1156	茶ツカ	1258	シケンヤ
829	細畑	952-953	向城陸	1157	ホソハタ	1259	前田
830-831	久保田	954-956	表発起	1158	前田	1260-1261	タケノコ
832	ナガイケ	957	向城陸	1159	マヘ田	1262-1263	トヤ田
833	仲原	958-959	表発起	1160-1162	大井バタ	1264	大井々桁
834-837	下井田	960-1029	向城陸	1163	茶ツカ	1265	トヤ田
838	マンバ	1030-1031	万場	1164	細畑	1266-1267	トヤタ
839	ナガイケ	1032-1036	向城陸	1165	茶ツカ	1268-1269	トノマ
840	長池	1037-1038	城陸	1166-1168	チウタ	1270-1272	井桁
841	下マンバ	1039-1040	向城陸	1169	丸畝町	1273	井添
842	ナガ池	1041-1057	万場	1170-1173	権現堂	1274-1275	井ゾヘ
843-844	シモマンバ	1058-1059	塚ノ越	1174	甫田下	1276	トノマ
845	マンバ	1060-1073	原	1175-1178	権現堂	1277-1279	四ッ通
846	万場	1073-1074	街道端	1179	ツカノコシ	1280	ヌマ

1281-1283	川向	1400	川原田	1582	ハンナウ田	1728	清水井
1284-1289	サンパタ	1401-1413	河原田	1583-1587	装束	1729	堀
1290-1291	スミ田	1414	川原田	1588-1593	三反田	1730	清水井
1292-1293	スミダ	1415-1419	河原田	1594-1599	装束	1731-1732	アラゴヤ
1294-1295	角田	1420-1427	石原田	1600	ハンナン田	1733	毛賀沢ハ
1296	アヲカイト	1428	トヨノクチ	1601-1613	寺下	1734-1735	毛賀沢平
1297	アヲカイト	1429-1433	樋ノ口	1614-1619	引廻	1736	清水井
1298-1299	荒間垣外	1434	トヨノクチ	1620	平々田	1737-1738	毛賀沢平
1300	ミヤノシタ	1435-1439	樋ノ口	1621-1623	南井下	1739-1741	清水井
1301	ミヤノマヘ	1440	厂マタ	1624-1628	引廻	1742	遠見原
1302	宮ノ前	1441-1442	厂僕	1629	穴田	1743	清水井
1303	ミヤノマヘ	1443	ガリマタ	1630	井間	1744	遠見原
1304-1305	宮ノ前	1444-1445	宮前	1631	引廻	1745	清水井
1306	ミヤノマヘ	1446-1447	宮城	1632-1633	白井坂	1746-1747	遠見原
1307	ミヅクチ	1448	宮林	1634-1655	引廻	1748	清水井
1308	西田	1449	宮ノ前	1656-1662	寺前	1749-1750	遠見原
1309	ヤフコシ	1450-1460	荒垣外	1663	高林山	1751-1754	並木松
1310	ヤブコシ	1461	アヲカイト	1664-1673	寺前	1755	ドホド
1311-1312	トヤ田	1462	荒垣外	1674-1679	寺前北	1756-1758	城山
1313-1314	下前田	1463-1464	京田	1680-1681	寺前道端	1759	本城
1315-1316	シタ前田	1465-1466	溝土井河原	1682-1684	溝ヶ洞坂下	1760	本城洞
1317	大畝學	1467-1469	溝土井	1685-1690	寺前北	1761	城山
1318	トヤ田	1470-1472	溝土井河原	1691-1693	平塚	1762	本城洞
1319-1321	上阿高	1473	八王子	1694-1695	城山	1763-1764	遠見原
1322	上アダカ	1474-1482	経田	1696	洞々	1765-1766	出丸
1323	前田	1483	溝土井河原	1697	堀	1767	本城
1324	上アダカ	1484-1488	経田	1698-1699	本城	1768	本城洞
1325	クボタ	1489-1495	宮城	1700	的場	1769	本城
1326-1328	久保田	1496	樋ノ口	1701	本城	1770-1771	城山洞
1329-1331	町張	1497-1499	宮城	1702	出丸毛賀澤端	1772-1775	城山
1332-1341	久保田	1500-1503	一丁田	1703-1705	ドウド	1776-1777	荒古屋
1342-1345	カハラダ	1504-1506	樋ノ口	1706-1707	出丸	1778-1780	的場
1346-1349	新川	1507-1512	一丁田	1708	城山	1781-1782	堀
1350-1351	川原田	1513-1517	御飯米	1709-1710	平塚	1783	溝ヶ洞
1352-1360	久保田	1518-1519	樋ノ口	1711	本城南ハ	1784	遠見原
1361-1363	棚田	1520-1522	御飯米	1712	本城西平	1785-1786	的場
1364-1369	タイザ	1523-1526	一丁田	1713	平塚	1787-1792	遠見原
1370	体座	1527-1535	御飯米	1714	溝ヶ洞	1793	北ノ堀
1371	躰座	1536	滲田	1715	的場	1794-1800	荒古屋
1372-1377	タイザ	1537-1549	ヒヘ田	1716-1718	遠見原	1801	アラゴヤ
1378-1382	棚田	1550-1560	中ノ坪	1719-1721	荒古屋	1802-1803	荒古屋
1383イ	タナダ	1561-1562	中ノツボ	1722	的場	1804	清水下
1383ロ-1385	タナ田	1563-1567	中ノ坪	1723	本城	1805-1806	シミツ下
1386-1391	樋ノ口	1568-1571	井添	1724	城山南	1807-1811	清水井
1392-1394	棚田	1572-1574	中ノ坪	1725	城山洞	1812-1816	シミツイ
1395-1397	樋ノ口	1575-1580	井添	1726	遠ミ原	1817	清水入
1398-1399	河原田	1581	飯納田	1727	清水入	1818	トラミ原

1819	遠見原	1956-1957	ケイ山	2125-2133	上新川	2345-2346	新井原(二)
1820	清水井	1958	外シ場	2134-2140	新井原	2347	新井原谷津
1821-1833	遠見原	1959	山ノ神	2141	アライ原	2348	新井原(二)
1834-1837	遠見原(二)	1960	外シ場	2142	新井原	2349	白井原坂下
1838	遠見原大井北	1961	狐洞	2143	荒井原	2350-2351	白井坂下
1839	遠見原	1962-1968	外シ場	2144	アライ原	2352-2366	高田
1840	遠見原大井北	1969	境界山	2145-2158	新井原	2367	新井原(二)
1841-1859	遠見原(二)	1970-1974	松ヶ崎	2159	荒井原	2368-2373	上新川
1860-1862	遠見原大井南	1975	境界山	2160	新井原	2374-2380	一盃清水
1863	遠見原(二)	1976	一杯清水	2161	アライ原	2381-2390	高田
1864	遠見原大井南	1977	外シ場	2162	荒井原	2391	白井坂下
1865	遠見原(二)	1978	外シバ	2163-2169	新井原	2392	高田
1866-1868	境ノ洞	1979-2008	松ヶ崎	2170	アライ原	2393	谷津
1869	遠見原大井南	2009-2010	溝ヶ洞	2171-2177	新井原	2394	高田
1870-1878	遠見原(二)	2011-2012	寺前	2178-2179	アライ原	2395-2400	谷津
1879-1880	遠見原大井南	2013-2014	溝ヶ洞	2180-2191	新井原	2401-2409	一盃清水
1881-1884	境ノ洞	2015-2019	寺前	2192	アライ原	2410	ヤツ
1885	遠見原大井南	2020-2022	日影田	2193-2212	新井原	2411-2413	一盃清水
1886	岩下	2023-2031	寺前	2213	大ナギ	2414-2425	ヤツ
1887	外シバ	2032	引廻	2214-2259	新井原	2426-2429	山ノ入
1888	岩下	2033-2036	松ヶ崎	2260	田打洞	2430	ヒカゲダ
1889	遠見原(二)	2037	一杯清水	2261-2262	田打洞境	2431	日影田
1890	境ノ洞	2038-2041	松ヶ崎	2263-2269	新井原(二)	2432	茶畑
1891	岩下	2042	寺ノ浦	2270-2271	碓井坂下	2433	引廻
1892-1893	狐洞	2043	松ヶ崎	2272-2278	新井原(二)	2434	日影田
1894-1898	遠見原(二)	2044	山ノ入	2279-2280	厂又	2435	引廻
1899	遠見原(三)	2045-2052	赤畑	2281	新井原(二)	2436-2438	日影田
1900-1902	遠見原大井南	2053-2059	一杯清水	2282	厂又	2439	日影山平
1903	遠見原(三)	2060	山ノ神	2283-2284	上新川	2440	日影田
1904-1918	遠見原大井南	2061	山ノ神ノ上	2285-2292	厂又	2441-2442	日影山
1919-1920	遠見原(三)	2062-2063	山ノ神	2293-2302	田打洞	2443	日影田
1921-1925	遠見原(二)	2064	一杯清水	2303	中芝原	2444	御所山
1926	狐平	2065-2068	山ノ神	2304-2311	田打洞	2445-2446	念地山
1927-1932	狐洞	2069-2095	新川端廣河原	2312	ガリマタ	2447-2448	前林
1933-1934	遠見原(三)	2096-2102	新川端廣川原	2313-2314	田打洞	2449	念地山
1935	狐洞	2103	キツネラ	2315-2324	厂又	2450	御所山
1936-1937	伊賀良井端	2104	キツネ洞	2325	白井坂下	2451	念地山
1938	伊賀良井バタ	2105-2108	狐洞	2326-2327	白井坂	2452	日影山平
1939	狐平	2109	新川端廣川原	2328-2329	白井坂下	2453-2458	山ノ入
1940-1945	狐洞	2110	ヒロ川原	2330-2331	谷津	2459	御所山
1946-1947	狐平	2111	イワシタ	2332-2333	白井坂下	2460	日影山
1948	狐ヒラ	2112-2113	ヤマノ入	2334	谷津	2461	引廻
1949	辻場	2114-2115	上新川	2335-2336	白井坂下	2462-2463	日影田
1950	外シ場	2116-2117	イワシタ	2337-2341	谷津	2464-2471	御所山
1951-1952	一盃清水	2118-2119	荒井原	2342	界ノ洞	2472	白井
1953-1954	ハツシバ	2120-2123	新井原	2343	白井坂下	2473-2476	小白井
1955	境界山	2124	アラ井原	2344	高田	2477	山ノ入

2478	西荒田	2530-2531	下新川	2623	下平	2668	山ノ入
2479	合戦洞	2532-2533	新川(二)	2624	万バ坂	2669-2671	前林
2480	白井原	2534-2539	ゲンチャウギ	2625-2637	万場坂	2672	泥ノ木
2481-2482	西荒田	2540	大井西添	2638-2641	釜ノ山	2673	泥抜
2483	小白井	2541-2544	御殿塚	2642-2645	久保	2674	前林
2484	白井洞	2545-2555	権現堂	2646	藤塚	2675-2682	泥抜
2485-2486	前林	2556	猿樂	2647	二本松	2683-2689	前林
2487	大平	2557-2564	小作	2648-2652	明神山原	2690	碓井山/神
2488-2489	前林	2565	福宮	2653	扇平	2691	白井山=神
2490-2492	大平	2566	林腰	2654-2655	ヒラ	2692	碓井山/神
2493	泥抜	2567-2571	ウルシ畑	2656	ハラ	2693-2695	前林
2494-2495	丸山	2572-2573	漆畑	2657	沖ノ原	2696-2698	前橋
2496-2499	小白井	2574-2580	ウルシ畑	2658-2659	原	2699-2700	小白井
2500	日影田	2581	漆畑	2660	ハラ	2701	小碓井洞
2501	山ノ入	2582-2593	坂頭	2661	ゴマドウ	2702-2703	小白井洞
2502	引廻	2594	上羽場	2662	鶴戸	2704-2705	長洞
2503-2508	新川端	2595	万場平	2663	ゴマドウ	2706-2709	小白井
2509-2511	新川(二)	2596-2618	万場	2664	向新田		
2512-2515	アナダ	2619-2621	下平	2665-2666	ゴマドウ		
2516-2529	新川(二)	2622	藪下	2667	安城垣外		

【桐林】

番地	字名	番地	字名	番地	字名	番地	字名
1-25	下原	452-479	坊主新田	689-691	橋場	988-1014	内山
26-35	唐沢	480-560	前ノ原	692-716	久保尻	1015-1038	花軒
36-45	下原	561-563	長溝谷	717-723	長溝谷	1039-1060	溝添
46-136	殿垣外	564	前ノ原	724-726	長センギ	1061-1102	反保
137	安城垣外	565-567	長溝谷	727-728	長溝谷	1103-1120	賀原
138	殿垣外	568-571	前ノ原	729-783	久保尻	1121-1150	泥障掛
139-157	安城垣外	572-579	尾畑	784-794	新川	1151-1171	羽場
158-168	洞	580	前ノ原	795-801	東垣外	1172-1215	大上
169-173	坪尻	581-597	尾畑	802-815	久保在家	1216-1240	京田
174-177	阿弥陀	598-609	下新川	816-845	久保尻	1241-1254	新川
178-184	塚	610-612	二反田	846-865	高見	1255-1272	羽場
185-220	原田	612-613	鶴巻	866-881	幸神	1273-1279	駄科
221-233	稲葉	614-622	二反田	882-883	才ノ神	1280-1284	寺下
234-238	原田	623	西羽場	884-893	北村	1285	フジナへ
239-263	久保田洞	624-626	二反田	894-912	北羽場	1286-1296	穴田
264-278	久保田	627-628	西羽場	913-930	田中	1297-1304	羽場
279-283	蔵ノ下	629	二反田	931-942	公文所	1305-1312	フジナへ
284-298	浦木戸	630-639	橋場	943-948	田中	1313-1320	新川
299-315	中屋	640-676	鶴巻	949-953	ト々田	1321-1337	庄司轉
316-319	蔵ノ下	677	久保尻	954-960	道下	1338-1342	葦ノ口
320-364	庵ノ塚	678	橋場	961-968	町張	1343-1350	水割
365-396	中屋畑	678-680	新川橋	969-972	新川	1351-1364	泥抜
397-412	中屋前	681-687	橋場	973-983	町張	1365-1371	井間井
413-451	前ノ原	688	久保尻	984-987	村堂	1372-1391	塚田

1391-□	鳶岩	1926-1941	垣外	2364-2370	白井大ヱ洞	2718-2768	荒駒原
1392	塚田	1942	薬師堂	2371	本洞峠	2769-2910	塚原
1393-1406	上新川	1943-1951	若林	2372-2376	田ノ洞	2911	塚平
1407-1427	田打洞	1952-1970	鍵田	2377-2378	田ノ洞峠	2912-3062	塚原
1428	水割	1971-1984	中島	2379-2382	白井七廻り	3063-3073	駒沢
1429-1431	瓢田	1985	寶下	2383	白井油田	3074-3104	小池
1432-1467	堤洞	1986-1999	五反田	2384-2385	白井七廻り	3105-3125	駒沢
1468-1555	小瀬原	2000-2010	若宮	2386-2396	白井	3126-3134	細井
1556-1596	小瀬	2011-2014	塚越	2397-2399	白井飼葉平	3135-3139	坂下
1597-1599	流田	2015-2022	宝下	2400-2409	白井反鼻洞	3140-3146	宝下
1600-1614	横枕	2023-2031	大塚	2410-2412	白井祠洞	3147-3173	坂下
1615-1620	溝跨	2032	塚越	2413	反鼻洞	3174-3178	寶下
1621-1684	小瀬	2033-2040	南原	2414-2416	祠洞	3179	坂下
1685-1687	小瀬洞	2041-2044	兼清塚	2417	ホコラ洞	3180-3184	宝下
1688-1690	宮林	2045-2049	トヰメキ	2418-2419	祠洞	3185-3194	梶垣外
1691-1698	小瀬洞	2050-2051	兼清塚	2420-2428	蒜田	3195-3201	丸山
1699-1702	宮林	2052-2053	細井	2429-2433	キダ橋	3202	梶垣外
1703-1719	天白	2053-2	兼清塚	2434-2460	蒜田	3203-3206	鈴原
1720-1728	池田	2054	細井	2461-2462	キダ橋	3207-3215	梶垣外
1729-1735	佛師	2055-2057	南原	2463-2472	蒜田	3216-3275	小池
1736-1748	柳添	2058	兼清塚	2473-2509	中原	3276-3289	小池羽場
1749-1751	浦木戸	2059-2086	南原	2510-2516	袋洞	3290-3325	小池
1752-1760	柳添	2087	南原	2517-2579	蒜田	3326-3337	小池羽場
1761-1766	荒神	2087	休場	2580-2590	袋洞	3337-1	塚原
1767-1774	久保田	2088-2139	休場	2591-2601	田ノ洞	3338-3346	小池羽場
1775	荒神	2140-2142	宮ノ前	2602-2624	本洞	3347-3369	駒澤
1776-1796	柳添	2143	宮林	2625-2626	中山	3370-3414	塚原
1797-1833	落田	2144-2253	宮洞	2627	本洞	3415-3433	駒沢
1834-1838	佛師	2254-2259	城手洞	2628-2646	城山	3434-3471	家下原
1839-1843	池田	2260-2267	宮洞	2647-2654	袋洞	3472	西沢
1844-1846	天白	2268	羽場	2655	梶山	3473-3476	家下原
1847-1869	宮下	2269-2274	宮洞	2656-2660	荒駒原	3477-3487	西澤
1870-1874	竹腰	2275-2288	上ノ原	2661-2662	梶山	3488-3489	家下原
1875-1904	宮下	2289-2326	白井	2663	荒駒原	3490	中原
1905-1916	宮ノ前	2327-2329	白井桶洞	2664-2688	荒駒原	3491-3496	家下原
1917-1920	堂垣外	2330-2349	白井	2688	袋洞	3497-3503	駒澤
1921	垣外	2350-2351	白井松洞	2689-2708	荒駒原	3504-3505	塚原
1922-1925	宮ノ前	2352-2363	白井	2709-2717	駒沢		

【上川路】

番地	字名	番地	字名	番地	字名	番地	字名
1-2	金山	331-334	判ノ木河原	649-661	中尾	989-990	町並
3-5	ガン洞	335-351	宮ノ前	662-672	大高野	991	大門西
6-59	金山	352-2	宮ノ前	673-676	高野	992	開善寺境内
60-72	塚平	352	所平	677-679	中尾	993-997	境内西
73 ^ハ	金山	353-360	宮ノ前	680	ムジナ洞	998-999	開善寺境内
73-75	ト腐垣外	361	権現	681-720	大岩	1000-1001	ウヤキ
76-77	塚原	362-365	コジキヲシ	721-728	シシラ林	1002-1006	境内東
77 ^ロ	金山	366-372	宮ノ脇	729-744	高野	1007	大門東
78-85	金山	373-374	宮脇	745-753	シシラ林	1008-1018	町並
86-97	豆腐垣外	375-382	野田	754-756	ギヲン田	1019-1020	水上
98-104	沢田	383-398	傳平城	756 ^ロ	高野	1021-1030	新屋敷
105-109	白井	399-402	乞食ヲシ	757-761	ギヲン田	1031	町裏
110-112	入キメン	403-419	権現	762	下高野	1032	清水坂
113-130	ヲカミ	420-422	久保田	763-765	キジ洞	1033-1051	町並
131-137	洞田	423-434	所平	766	陣ヶ平	1052-1083	前田
138-139	袋洞	435-447	権現	767-769 ^イ	下高野	1084-1095	サガリ
140-141	中原	448-452	天白	769 ^ロ	ギヲン田	1096-1110	町並
142	大平	453	所平	770 ^ロ	ギヲン田	1111-1121	梶屋垣外
143-153	白井	454-455	ツ、ミ	770	下高野	1122-1129	セキメ
154-157	大平	456-468	ツ、ミ入	771-787	下高野	1130	藤ノ木
158-164	白井	469-472	ツ、ミ	788-810	ビシヤ田	1131-1135	井下
165-167	大平	473-489	天白	811-843	下高野	1136-1147	藤ノ木
168-188	白井	490	芝平	844-846	ナギノ尻	1148-1157	河原田
189-196	百田	491	油田	847-852	神田	1158-1172	角田
197 ^イ	百田	492-493	芝平	853-860	井面	1173-1175	河原田
197	瀧ノ入	494-503/1	樋入	861-871	鶴巻	1176-1195	三味所
198-200	瀧ノ入	503-507	藤塚	872	西	1196-1202	清水田
201	白井	508-588	大畑	872 ^ロ	塚前	1203-1211	金山
202	アシガ洞	589	風越本洞	873-892	西	1212-1220	中新田
203-206	白井ヒガ	590-591	ス、ミドロ	893-894	鶴巻	1221-1224	古川
207-209	ヒカゲ	592-600	ウナギ沢	895-903	所平	1225-1227	金山
210-212	白井ヒガ	601	大岩ウギ沢	903 ^ロ	神田	1228-1245	古川
213-235	ヒカゲ	602-608	ウナギ沢	904-921	権現	1246-1252	駒澤
236-247	御判前	609-611	高野	922-947	西	1253-1254	水神
248-250	清水田	612-624	風越	948-955	ガヤ垣外	1255-1256	矢川原
251-252	サガリ	625	ハナゲ	956-959	塚前	1257	久米川端
253-254	新屋敷	626-637	本洞	960	セキメ		
255-322	上ノ坊	638-643	高野	961-969	伊豆木渡り		
323-330	宮ノ前	644-648	本洞	970-988	梶屋垣外		

旧竜丘村小字表

1. 「平成十八年度竜丘史学会 竜丘村小字台帳」(竜丘村史編纂委員会原稿用紙使用)を基に作成。
2. 駄科地区については、「明治22年駄科小字表」(『鈴岡公園 今昔ものがたり』平成3年駄科公民館)による。
3. 読みは、主に「滝澤主税編 明治初期長野縣町村字地名年鑑 昭和62年」による。

部落	字名	読み	番地	小字図	由来(頁)
時又	経田	きょうでん	1-21	⑩	109
時又	西原	にしはら	22	⑩	71
時又	新川	しんかわ	23,561,563-584,625-633,639-642,719-777,1329	⑩ ⑪	54
時又	二ツ塚	ふたつづか	24,29-30	⑩	72
時又	新屋敷	しんやしき	25-28	⑩	72
時又	祢宜屋	ねぎや	31	⑩	72
時又	下羽場	しもはば	32	⑩	82
時又	下井面	しもいめん	33-34	⑩	73
時又	猿楽	ざるがく	35,39-40	⑩	73
時又	鍵田	かぎた	36-38	⑩	74
時又	小作	こざく	41-45	⑩ ⑪	75
時又	福宮	ふくみや	46-47	⑩ ⑪	76
時又	釜	かま	48-62	⑩	56
時又	犬戻シ	いぬもどし	63-71,115	⑩	80
時又	久保	くぼ	72-79,97-100	⑩	80
時又	中道	なかみち	80-84	⑩	82
時又	中道西	なかみちにし	85		
時又	中道東	なかみちひがし	86-88	⑩	82
時又	中道西付	なかみちにしつけ	89-90,92-94	⑩	82
時又	中道東付	なかみちひがしつけ	91?	⑩	82
時又	中道東角	なかみちひがしかど	95-96		
時又	藤塚	ふじつか	101-109,146-151	⑩	64
時又	黒瀬ヶ淵	くろせがふち	110-114	⑩	81
時又	扇平	おうぎひら	116-120,131-140	⑩	63
時又	湯ノ瀬	ゆのせ	121	⑩	81
時又	三本松	さんぼんまつ	122		
時又	明神山原	みさんばら	123-130	⑩	63
時又	原	はら	141-145	⑩	64
時又	平	ひら	152-155	⑩	64
時又	草木林	くさぎばやし	173	⑩	81
時又	うど	うど	174-177	⑩	57
時又	膳棚	ぜんだな	178	⑩	57
時又	発起	ほっき	179,182-184,435,456-466	⑩	57
時又	向新田	むかいしんでん	180-181,185-198	⑩	63
時又	三味所	さんまえしょ	199	⑩	64
時又	五万土	ごまんど	200-226,360-379	⑩	63
時又	中平	なかだいら	227-274,283-322,337-356,380-385	⑩	60
時又	みたらし	みたらし	275,598	⑩	59
時又	八王子	はちおうじ	276-279	⑩	59
時又	八王子脇	はちおうじわき	280-282	⑩	59
時又	観音平	かんのんだいら	323-329,335-336,475-476	⑩	62

時又	十社脇	じっしゃわき	330,334,419-420	●	63
時又	十社	じっしゃ	331-333	●	63
時又	五万洞	ごまんどう	357-359		
時又	法寿房	ほうじゅぼう	386-389,400-402,404-418,427-434,436-449	●	62
時又	東	ひがし	390,403,421-426	●	62
時又	観音下	かんのんした	450-455	●	62
時又	川端	かわばた	466-4,518,545,547-555	●	60
時又	舟渡	ふなと	467-468,517	●	61
時又	松本屋敷	まつもとやしき	469-470,512-513	●	62
時又	大東	だいとう	471-472,474,509-511	●	60
時又	大隅	おおすみ	473		
時又	畑中	はたなか	477-479,481-484,497-507	●	60
時又	カミヤ	かみや	480	●	62
時又	荒神	こうじん	485-489	●	59
時又	岩本	いわもと	490-496,530	●	59
時又	大扶垣外	だいぶがいと	508	●	61
時又	高野平	こうやだいら	514-516,519	●	61
時又	火打坂	ひうちざか	526-528,536-537	●	61
時又	清房	せいぼう	529,531-535	●	60
時又	持田	もちだ	538-544,546,556-560,562	●	60
時又	増口	ませくち	585-597,607-609	●	57
時又	丸釣根	まるつりね	599-600	●	58
時又	渋神	しぶがみ	601-606,610	●	58
時又	地慶子	じけいじ	611-624	●	58
時又	西林	にしばやし	634-635,643-648		
時又	東新川平	ひがししんかわひら	636-638		
時又	釣巻	つりまき	649,652-654		
時又	上新川	かみしんかわ	650-651,655-677,678-697,698-718	● ●	54
時又	下新川	しもしんかわ	677-2,697-4	●	54
時又	嶋	しま	778-896	●	53
時又	なぎ	なぎ	897-900,951-957	●	56
時又	高田井	たかだい	901-902		
時又	一ツ田	ひとつだ	903-904	●	56
時又	麴陶洞	うとうぼら	905-907,908-913	●	56
時又	麴陶	うとう	907-2	●	56
時又	六月免	ろくがつめん	914-917	●	57
時又	右近田	うこんだ	918-941	●	55
時又	大座	たいざ	942-950,958-981,986-1001,1004-1005	●	55
時又	西澤	にしざわ	982-985,1016-1018,1251-1260,1272-1285,1321-1323	●	
時又	横前	よこまえ	1002-1003,1006-1015	●	55
時又	殿垣外	とのがいと	1019-1061	● ●	54
時又	安城垣外	あんじょうがいと	1062-1070,1075-1083,1098-1183	● ●	55
時又	西新川	にししんかわ	1071-1074		
時又	前ノ原	まえのはら	1084-1097	●	53
時又	洞	ほら	1184	●	120
時又	塚	つか	1185	●	121
時又	久保田洞	くぼたぼら	1186-1190	●	122
時又	坊主新田	ぼうずしんでん	1191-1200	●	122
時又	権現	ごんげん	1201-1219		
時又	袋洞	ふくろぼら	1220-1221	●	141

時又	小池	こいけ	1222-1247	●	143
時又	家下原	えげはら	1248,1320-□	●	145
時又	エゲ原	えげはら	1249-1250,1261-1271,1286-1320	●	145
時又	駒澤	こまざわ	1324-1328	●	142
長野原	マンバ	まんば	1	●	65
長野原	新田畑	しんでんばた	2-8		
長野原	元寺下	もとてらした			66
長野原	田中前田	たなかまえだ	12-20		66
長野原	長池	ながいけ	21-33	●	66
長野原	向城陸	むこうじょうろく	34-40	●	66
長野原	上ハバ	かみはば	41-42		
長野原	万場	まんば	43-49,571-598	●	65
長野原	権現堂	ごんげんどう	50,52-56,69-71,104-105	●	67
長野原	井間	いのあい	51		
長野原	寺下	てらした	57-60	●	67
長野原	新川端	しんがわばた	61-62		
長野原	上羽場	かみはば	63-67,563-566,568-570	●	65
長野原	大井西	おおいにし	68,174-176,183-184		
長野原	御殿塚	ごてんづか	72-84,88-89,92,95-96,98,100-103,106	●	67
長野原	大井端	おおいばた	85-87,93,97,117,259,263-268,344	●	68
長野原	塚田	つかだ	90	●	67
長野原	塚	つか	91	●	67
長野原	大道端	だいどうばた	94,115,567	●	68
長野原	森田	もりた	99	●	68
長野原	中井田西	なかいだにし	107-108	●	68
長野原	前畑	まえはた	113,119,120-128	●	69
長野原	家南	いえみなみ	114,188	●	69
長野原	大井添	おおいぞい	116,428-430,548	●	69
長野原	中井田	なかいだ	118	●	68
長野原	西羽場	にしはば	129,132-139,146-164	●	69
長野原	藪腰	やぶこし	130-131,348-349	●	70
長野原	水落	みずおち	140-145	●	70
長野原	前田	まえだ	165,258	●	76
長野原	西井	にしい	166-172	●	70
長野原	大井田	おおいだ	173	●	69
長野原	井添	いぞい	177,289-291	●	69
長野原	井端	いばた	178,181-182		69
長野原	井下	いした	179-180		70
長野原	水口	みずくち	185	●	70
長野原	墓東	はかひがし	186	●	70
長野原	西原	にしはら	187,191-194,210-216,218-221,223-231,250-254	●	71
長野原	苗代	なわしろ	189	●	71
長野原	ウラ	うら	190,262,516	●	71
長野原	鶴牧・ツルマキ	つるまき	195-216,217	●	71
長野原	山添	やまぞい	222	●	72
長野原	新屋敷	しんやしき	232-234,247-248,270-271,280-288	●	72
長野原	二ツ塚	ふたつづか	235-237,241-246,272-277,279	●	72
長野原	新川	しんがわ	238-240	●	54
長野原	二ツ塚井	ふたつづかい	249,255-257	●	72
長野原	新屋敷井添	しんやしきいぞえ	260-261		

長野原	新屋敷井	しんやしきい	269	●	72
長野原	祢宜屋・衾ヤ	ねぎや	278,308-313	●	72
長野原	ネギヤ井	ねぎやい	292-293	●	72
長野原	下羽場	しもはば	294-296,314-317	●	69
長野原	祢宜屋井	ねぎやい	297-307	●	72
長野原	五万堂	ごまんどう	318-333,337-339	●	73
長野原	下井田	しもいだ	334		
長野原	下井西(面)	しもいにし(めん)	335-336	●	73
長野原	大道端	だいどうばた	340-343,350	●	84
長野原	下井端	したいはた	345-347	●	73
長野原	宮前	みやまえ	351-369	●	73
長野原	猿樂	ざるがく	370-381,383,397-403	●	73
長野原	金山	かねやま	382	●	74
長野原	坊主田	ぼうずだ	384-389	●	74
長野原	尾池	おち	390	●	74
長野原	鍵田	かぎだ	391-396	●	74
長野原	小作	こさく	404-416,443-458	●	75
長野原	田瀬	たぜ	417-418	●	75
長野原	藤樹井	ふじきい	419-424	●	75
長野原	蔵ノ平	くらのだいら	425-427	●	75
長野原	札幌井	ふだばい	431-434	●	75
長野原	下ノ田	しものた	435		
長野原	前田	まえだ	436,514,549	●	76
長野原	札幌	ふだば	437-439,506-508	●	75
長野原	東ノ田	ひがしのた	440	●	76
長野原	中ノ田	なかのた	441-442	●	76
長野原	福宮	ふくみや	459-465,473-477,479-493,497	●	76
長野原	林ノ腰	はやしのこし	466-472	●	77
長野原	沖	おき	478	●	76
長野原	樋ノ口	とよのくち	494-495,546-547	●	77
長野原	いなり際	いなりぎわ	496	●	77
長野原	オキ井	おきい	498-504	●	76
長野原	長田	ながた	505	●	77
長野原	稲荷前	いなりまえ	509-511	●	77
長野原	いなり	いなり	512	●	77
長野原	稲荷腰	いなりごし	513,515	●	77
長野原	樋ノ口掛り	とよのくちかかり	517,541	●●	77
長野原	樋ノ口井	とよのくちい	518,542	●	77
長野原	水口	みずくち	519	●	77
長野原	三角田	さんかくだ	520	●	77
長野原	トヨノ口井掛り	とよのくちいがかり	521	●	77
長野原	トヨノ口井	とよのくちい	522-523	●	77
長野原	トヨノ口	とよのくち	524-526	●	77
長野原	漆畑	うるしばた	527-532	●	78
長野原	坂頭	さかがしら	533-540,543-545	●	78
長野原	上ノ橋場	かみのはしば	550-562	●	78
長野原	下平	しただいら	599-601,603-613,631-634, 644-646,651-664	●	78
長野原	簗下	やぶした	602	●	79
長野原	長池	ながいけ	614-630	●	66

長野原	下平田尻	したたいらたじり	635-639	●	79
長野原	坂下	さかした	641,647-650	●	79
長野原	岩畑	いわばた	642	●	79
長野原	釜ノ山	かまのやま	643,665-680	●	79
長野原	鬼岩 ³ 犬尻 ³ 迄	おにいわよりいぬもどしまで	681		
長野原	釜ノ山天竜端	かまのやまてんりゅうばた	682		
長野原	釜	かま	683-691	●	80
長野原	乳母ノ懐	うばのふところ	692	●	80
長野原	犬尻し	いぬもどし	693-696,702	●	80
長野原	久保	くぼ	697-700	●	80
長野原	フジ塚	ふじつか	701	●	80
長野原	黒瀬ヶ淵	くろせがふち	703-707	●	81
長野原	犬尻 ³ 河 ³ 鶴戸 ³ 迄	いぬもどしよりうどまで	708		
長野原	扇平	おうぎだいら	709-715,751-754	●	63
長野原	湯之瀬	ゆのせ	716-718	●	81
長野原	三本松	さんぼんまつ	719-721		
長野原	鶴戸	うど	722-730,817-830,837	●	57
長野原	明神山原	みさやまはら	731-750	●●	63
長野原	原	はら	755-758,767-798	●	81
長野原	藤塚	ふじつか	759-762	●	64
長野原	平	ひら	763-766	●	64
長野原	草木林	くさきばやし	799-807	●	81
長野原	下羽場	しもはば	808-816,834-835,838-840	●	82
長野原	向新田	むかいしんでん	831-833	●	63
長野原	五万洞	ごまんどう	841-849	●	73
長野原	中平	なかだいら	850-853	●	60
駄科	ヤクシ	やくし	1,3-4,13-14	●	83
駄科	ハバ	はば	7-12,715-716,726,729	●	83
駄科	ヤクシハバ	やくしはば	2		
駄科	薬師堂	やくしどう	15-18,691,697-699	●	83
駄科	市場屋敷	いちばやしき	19-25,30-45,651-652,655,658-659	●●	83
駄科	毛賀澤ビラ	けがさわびら	26,47-48	●	84
駄科	ハン場山	はんばやま	27	●	83
駄科	ハバ山	はばやま	28-29	●	83
駄科	大道端	だいどうばた	46,49-51,53-54,438,455,491,493-496,558, 563-565,624,634-635,640,648,654	●	84
駄科	大丁洞	おおちょうぼら	72,75	●●	90
駄科	大道端大丁洞		52		
駄科	インデン	いんでん	55-71,73-74,76-96,378-382,384,386	●	84 30
駄科	西院田	にしいんでん	97-99	●	84
駄科	反在家	たんざいけ	100-101	●	85
駄科	峠ノ畑	かきのきばた	102,156,	●	85
駄科	十王堂	じゅうおうどう	103-104,106-107,110-116,137-143,151,153,442	●	85
駄科	カシ畑	かしばた	105,108-109,152,154-155,	●	85
駄科	北垣外	きたがいと	117,122-128	●	86
駄科	舛角	ますかど	118-120,162,165-166,184	●	86
駄科	古屋敷	ふるやしき	156	●	86
駄科	ツカダ	つかだ	129	●	87
駄科	三巴田	さんばた	130		87
駄科	ツカ北	つかきた	131		87

駄科	屋敷田	やしきだ	132	●	87
駄科	長手	ながて	133	●	
駄科	山伏塚	やまぶしづか	134,144-146,599	●	88
駄科	北	きた	135-136	●	88
駄科	ナワ手	なわて	147-148	●	88
駄科	才ノ神	さいのかみ	149-150,157-158,	●	88
駄科	舛角タナ田	たなだ	198		
駄科	柳ノ内	やなぎのうち	167,183	●	89
駄科	池田	いけだ	168-169,182	●	86
駄科	土佐屋敷	とさやしき	170-180,194-199	●	89
駄科	前田	まえだ	181,269,308-309,322-326,329-330,332-333,359,539,547-548,557,559,577-578,585,596-598,601,618,680,682,1142,1158,1259,1323	● ●	89
駄科	マエダ	まえだ	321,327-328,331,334,361	●	89
駄科	マヘダハバ	まえだはば	335	●	93
駄科	マヘダ	まえだ	600-1159	●	89
駄科	マイ田	まいだ	1236-1237	●	89
駄科	シモマヘダ	しもまえだ	1146-1147	●	
駄科	下前田	しもまえだ	1313-1314		
駄科	シタ前田	したまえだ	1315-1316	●	
駄科	溝ヶ洞	みぞがほら	186,191-193,200,202,204,213-216,224-225,229-246,1714,1783,2009-2010,2013-2014	●	90
駄科	タナ田	たなだ	201		87
駄科	ツボノシ	つぼのしり	159-161,185	●	90
駄科	坪ノ尻	つぼのしり	187-188,	●	90
駄科	手塚	てづか	189-190,205-212		
駄科	平塚	ひらつか	203,217-223,226-228	●	91
駄科	青木垣外	あおきがいと	320	●	95
駄科	井免	いめん	247-249,260-266,282,287,289-290,292	●	91
駄科	横枕	よこまくら	250-259,270-276,278,280,283,286	●	91
駄科	青木	あおき	267-268	●	95
駄科	井枕	いまくら	284-285		
駄科	ツカノコシ	つかのこし	339-340,344-345,350,357-358	●	91
駄科	ツカゴシ	つかごし	341-343,346-349	●	91
駄科	イエノシタ	いえのした	374-375		
駄科	内沼	うちぬま	351-356,404-406	●	92
駄科	ナカムラ	なかのむら	360		
駄科	ヲチ	おち	362,367-373	●	92
駄科	ヲチマエダ	おちまえだ	363		
駄科	ヲチツカコシ	おちつかこし	364		
駄科	ヲチツカノコシ	おちつかのこし	366		
駄科	ヲチ前田	おちまえだ	365		
駄科	家ノ下	いえのした	376-377	●	91
駄科	インデン羽場	いんでんはば	383-385	●	92
駄科	前畑	まえばた	387-388,490,636	●	92
駄科	高見	たかみ	389-391,394-400,641	●	93
駄科	タカミ	たかみ	392-393,649-650	●	93
駄科	羽場	はば	401,713	●	83
駄科	上羽場	うえはば	2594	●	65
駄科	マイハタ	まいはた	1232,1249,1252	●	92

駄科	前田藪腰	まえだやぶのこし	402-403	●	93
駄科	中ノ村	なかのむら	407-410,424-433	●	92
駄科	モ田井	もたい	411		93
駄科	井ノ間	いのま	277		
駄科	茂田井	もたい	420-421,443-445,464-465	●	93
駄科	マイ畑	まいはた	422		
駄科	マエバタ	まえばた	423		
駄科	南羽場	みなみはば	434,437,439-440	●	93
駄科	十王平	じゅうおうだいら	435-436		
駄科	南ハバ	みなみはば	441		
駄科	モタ井	もたい	446-448,460-463,466-470	●	93
駄科	ビヤド	びやど	449-450,561,570-572,579	●	94
駄科	モタ井平	もたいだいら	451-453,471		
駄科	無常堂	むじょうどう	488,492,497-498	●	94
駄科	カハバタ	かわばた	459,472	●	94
駄科	川端	かわばた	473-475	●	94
駄科	ムショウドウ	むしょうどう	492		94
駄科	ハシハ	はしば	499,501-502	●	94
駄科	橋場	はしば	500	●	94
駄科	万場平	まんばひら	503,2595	●	94
駄科	万バ平	まんばひら	504-505	●	94
駄科	マンバヒラ	まんばひら	506		
駄科	万場	まんば	510,512,846,1030-1031,1041,1057,2596-2618	●	65
駄科	マンバ	まんば	508-509	●	94
駄科	新田	しんでん	515-521,525,534-535	●	94
駄科	ヒエ田	ひえだ	513-514,536-537,568-569,580,595,621,693-694	●	95
駄科	井間	いのま	412-419,1096-1097,1630	●	93
駄科	熊ノ川	くまのかわ	291,293-294	●	95
駄科	隅ノ川	くまのかわ	279,281,288,275	●	95
駄科	五反田	ごたんだ	296,299,318	●	95
駄科	神田	かみだ	297	●	95
駄科	カギ田	かぎだ	298	●	96
駄科	家ノ上	いえのうえ	300-304,653,676,684	●	91
駄科	シモ	しも	305	●	96
駄科	イノエ	いえのうえ	306		
駄科	前畑	まえばた	458,622,630-631,1232		
駄科	家ノ前	いえのまえ	307	●	
駄科	井添	いぞえ	310,529-530,576,586-589,591-594,606,610,620,646,1273,1568-1571,1575-1580	● ●	96
駄科	久保田	くぼた	311-313,612-,614-617,619,632-633,760,772-777,789-793,796,800-812,814-824,828,830-831,1326-1328,1332-1341,1352-1360	● ●	96
駄科	スナハラ	すなほら	314	●	96
駄科	五輪田	ごりんだ	315	●	96
駄科	滲田	しみだ	316-317,1536,1544-1549	●	97
駄科	ヒエダ	ひえだ	319-320,604,613		
駄科	下井田	しもいだ	522,524,526-528,797,834-837,908	●	97
駄科	沖ノ原	おきのほら	523	●	97
駄科	清水下冷田	しみずしたひえだ	531-533,540-543	● ●	95
駄科	林ヘリ	はやしへり	538	●	97

駄科	清水下	しみずした	544-545	●	114
駄科	ヤシキ前	やしきまえ	546	●	98
駄科	清水	しみず	550-556	●	97
駄科	大道下	おおみちした	560,566-567		
駄科	道下	みちした	562,573-574	●	98
駄科	並下	なみした	562	●	98
駄科	道下前山	みちしたまえやま	574		
駄科	一メ目	いっかんめ	575	●	98
駄科	スミ田	すみだ	581-583,1290-1291	●	98
駄科	一貫目	いっかんめ	584,590	●	98
駄科	丸畝町	まるせまち	602,1169	●	98
駄科	ヒトツ田	ひとつだ	603	●	98
駄科	井ソヘ	いそえ	605	●	96
駄科	藪腰	やぶこし	607-609		98
駄科	番匠塚	ばんしょうづか	611,677,681,685-690,714	●	98
駄科	ヒヘ田	ひえだ	623,1537-1549	●	95
駄科	十王堂平	じゅうおうどうひら	625-629	●	85
駄科	ハナ畑	はなばた	637-639,642-645,647,656-657,660-669,671,673-675,678-679,683	●●	100
駄科	ヤソ田	やそだ	670-672	●	100
駄科	バンジヤツカ	ばんじょうつか	692,708		
駄科	ヤクシ堂	やくしどう	695,709-710,730	●	83
駄科	ボタ下	ぼたした	700		
駄科	ボタシタ	ぼたした	701-706	●	100
駄科	ヤクシハ	やくしまえ	707	●	83
駄科	ヤクシ堂前	やくしどうまえ	711	●	83
駄科	ヤクシ前	やくしまえ	712	●	83
駄科	大島	おおしま	717-718,721-723	●	100
駄科	大島	おおしま	719-720,724,727	●	100
駄科	大シマ	おおしま	724		
駄科	ハリ原	はりはら	725,731,738-739,754-755,759,766,768,771,784,859	●	100
駄科	ハリハラ	はりはら	725,737,742,751,763,765,767,768,778	●	100
駄科	ヤクシ堂下	やくしどうした	728		
駄科	下ハリ原	しもはりした	745,781		
駄科	クボタ	くぼた	786-788,1325		
駄科	張原	はりはら	761-763,764,767,769-770,779-780,783,785,794,799	●	100
駄科	クボ田	くぼた	785		
駄科	城陸	じょうろく	813,866,869,872-875,880-882,889-892,895-901,903-908,909,920,931-938,943-945,947,1037-1038	●	101
駄科	長池	ながいけ	825-826,840,848-849,853,860-865,876,879,883-888,893-894,902,910-916,918,921-924	●	101
駄科	コツ城陸	こつちじょうろく	927	●	101
駄科	細畑	ほそばた	851-852,854-858,1152-1155,1164	●	104
駄科	ナガイケ	ながいけ	832,839,925		
駄科	仲原	なかはら	833		
駄科	マンバ	まんば	838,845	●	94
駄科	下マンバ	しもまんば	841	●	65 94
駄科	ナガ池	ながいけ	842		
駄科	向城陸	むこうじょうろく	847,952-953,957,960-1029	●	101
駄科	細田	ほそだ	850	●	101

駄科	長池	ながいけ	926-930,939-942,946,948-951	●	101
駄科	ジャウロク	じょうろく	870-871		
駄科	表発起	おもてほつき	917,954-956,958-959	●	101
駄科	塚ノ越	つかのこし	1058		
駄科	ツカノコシ	つかのこし	1136,1179	●●	91
駄科	原	はら	1060-1073,1075-1076,1088,1098	●	101
駄科	街道端	かいどうばた	1073-1074,1077-1078,1089-1092	●	102
駄科	橋場	はしば	1093-1095	●	94
駄科	道ノ間	みちのま	1099-1103	●	102
駄科	石佛	いしほとけ	1104-1106	●	102
駄科	神送塚	かみおくりづか	1107-1109,1110-1113	●●	102
駄科	カミクリツカ	かみおくりつか	1109		
駄科	カミ送塚	かみおくりづか	1110-1113	●	102
駄科	下新川	しもんかわ	1114-1117,1132-1133,1220-1228,2530-2531	●	103
駄科	山ノ神下	やまのかみした	1118-1120,1128	●●	103
駄科	茶畑	ちゃはた	1125,1127,2432	●	118
駄科	茶ハタ	ちゃはた	1126	●	118
駄科	山神下	やまのかみした	1121-1124,1129	●	103
駄科	山神	やまのかみ	1130-1131		
駄科	新川平	しんかわひら	1134-1135,1180-1182	●	103
駄科	井ゾヘ	いぞえ	1137-1141,1274-1275	●	96
駄科	権現堂	ごんげんどう	1170-1173,1175-1178,1183-1185,1189,2545-2555	●	103
駄科	チウタ	ちうた	1166-1168	●	103
駄科	平垣	ひらがき	1149-1151		
駄科	茶ツカ	ちゃつか	1156,1163,1165	●	104
駄科	ホソハタ	ほそはた	1157	●	104
駄科	大井バタ	おおいばた	1160-1162		
駄科	甫田下	ほとした	1174	●	104
駄科	ゴンゲンダウツカ	ごんげんどうづか	1185	●	103
駄科	権現堂塚	ごんげんどうづか	1186-1188	●	103
駄科	拂免	はらいめん	1190-1192,1212-1218,1230-1231	●	104
駄科	新川	しんかわ	1193,1195-1201,1204-1211,1219,1221-1225,1346-1349	●	54
駄科	シンガワ	しんがわ	1194,1202-1203		
駄科	ゲンチャウナギ	げんちょうなぎ	1229,2534-2539	●	120
駄科	前田ヲチ	まえだおち	1233	●	105
駄科	マイダヲチ	まえだおち	1233	●	105
駄科	ハラメン	はらいめん	1234	●	104
駄科	ゴンゲンドウ	ごんげんどう	1235	●	103
駄科	前田棚	まえだだな	1238-1239,1242	●	105
駄科	安宅	あたか	1240	●	105
駄科	水口	みずくち	1241	●	77
駄科	角田	すみだ	1243-1245,1294-1295	●	105
駄科	スミダ	すみだ	1246-1248,1292-1293	●	105
駄科	シケンヤ	しけんや	1250,1258	●	106
駄科	ヤシキ	やしき	1251		
駄科	タケノコシ	たけのこし	1253-1257,1260-1261	●	106
駄科	トヤ田	とやた	1262-1263,1265,1318	●	106
駄科	大井々術	おおいいげた	1264		
駄科	トヤタ	とやた	1266	●	106

駄科	ヲノマ	そとのぬま	1268-1269,1276	⑩	106
駄科	井桁	いげた	1270-1272	⑩	107
駄科	四ツ通	よつどおり	1277-1279	⑩	107
駄科	ヌマ	ぬま	1280	⑩	106
駄科	川向	かわむこう	1281-1283	⑩	107
駄科	サンバタ	さんばた	1284-1289	⑩	107
駄科	アライ	あらい	1296	⑩	108
駄科	荒間垣外	あらまがいと	1298-1299	⑩	108
駄科	ミヤノク	みやのした	1300	⑩	108
駄科	ミヤノハ	みやのまえ	1301,1303,1306	⑩	108
駄科	宮ノ前	みやのまえ	1302,1304-1305	⑩	108
駄科	タナダ	たなだ	1383イ		
駄科	タナ田	たなだ	1383㍑-1385		
駄科	樋ノ口	とよのくち	1386-1391,1395-1397,1429-1433,1435-1439,1496,1504-1506,1518-1519	⑩	108
駄科	河原田	かわはらだ	1398-1399,1401-1413,1415-1419	⑩	109
駄科	川原田	かわはらだ	1350-1351,1400,1414	⑩	109
駄科	石原田	いしはらだ	1420-1427	⑩	109
駄科	トノク	とよのくち	1428,1434	⑩	108
駄科	厂マタ	かりまた	1440	⑩	109
駄科	厂俣	かりまた	1441-1442	⑩	109
駄科	ガリマタ	がりまた	1443		
駄科	宮城	みやしろ	1446-1447,1489-1495,1497-1499	⑩	108
駄科	宮林	みやばやし	1448	⑩	108
駄科	荒垣外	あらがいと	1450-1460,1462	⑩	108
駄科	アライ	あらがいと	1461	⑩	108
駄科	京田	きょうでん	1463-1464	⑩	109
駄科	溝土井河原	みぞどいかわら	1465-1466,1470-1472,1483	⑨	109
駄科	溝土井	みぞどい	1467-1469	⑨ ⑩	109
駄科	八王子	はちおうじ	1473	⑩	110
駄科	経田	きょうでん	1474-1482,1484-1488	⑩	109
駄科	ミヅクチ	みずくち	1307	⑩	77
駄科	西田	にしだ	1308	⑩	110
駄科	ヤフコシ	やふこし	1309		
駄科	ヤブコシ	やぶこし	1310	⑩	99
駄科	大畝學	おおせまち	1317		
駄科	上阿高	かみあだか	1319-1321	⑩	105
駄科	上アダカ	かみあだか	1322,1324	⑩	105
駄科	町張	まちはり	1329-1331	⑩	105
駄科	カハラダ	かわらだ	1342-1345	⑩	109
駄科	棚田	たなだ	1361-1363,1378-1382,1392-1394	⑩	108
駄科	タイザ	たいざ	1364-1369,1372-1378	⑩	110
駄科	大座	たいざ	1370	⑩	110
駄科	躰座	たいざ	1371	⑩	110
駄科	一丁田	いっちょうた	1500-1503,1507-1511,1523-1526	⑩	110
駄科	御飯米	ごはんまい	1513-1517,1520-1522,1527-1533	⑩	110
駄科	中ノ坪	なかのつぼ	1550-1560,1563-1567,1572-1574	⑩	111
駄科	中ノツボ	なかのつぼ	1561		
駄科	ナカツボ	なかのつぼ	1652		
駄科	飯納田	はんのうだ	1581	⑩	111

駄科	ハナ田	はんのうだ	1582	⑩	111
駄科	装束	しょうぞく	1583-1587,1594-1599	⑩ ⑨	111
駄科	三反田	さんたんだ	1588-1593	⑨	111
駄科	ハナ田	はんたんだ	1600	⑨	111
駄科	寺下	てらした	1601-1613	⑩	112
駄科	引廻シ	ひんまわし	1614-1619,1624-1628,1631,1634-1655,2433	⑩	112
駄科	平平田	ひらひらだ	1620	⑩	112
駄科	南井下	みなみいした	1621-1623	⑩	
駄科	穴田	あなだ	1629	⑧	112
駄科	白井坂	うすいざか	1632-1633	⑧	112
駄科	寺前	てらまえ	2011-2012,2015-2019,2023-2031	⑧ ⑩	112
駄科	高林山	こうりんざん	1663	⑩	113
駄科	寺前北	てらまえきた	1674-1679,1685-1690	⑨	112
駄科	寺前道端	てらまえみちばた	1680-1681	⑨	
駄科	溝ノ洞坂下	みぞがほらさかした	1682-1684		90
駄科	平塚	ひらつか	1691-1693,1709-1710,1713	⑨	91
駄科	城山	じょうやま	1694-1695,1708,1756-1758,1761,1773-1775	⑨	113
駄科	洞々	どうどう	1696		
駄科	堀	ほり	1697,1729	⑦ ⑨	113
駄科	本城	ほんじょう	1698-1699,1701,1723,1759,1767,1769	⑦ ⑨	113
駄科	的場	まとば	1700,1715,1722,1778-1780,1785-1786	⑦ ⑨	113
駄科	出丸毛賀澤端	でまるけがさわばた	1702	⑨	113
駄科	ドウド	どうど	1703-1705	⑨	113
駄科	出丸	でまる	1706-1707,1765-1766	⑨	113
駄科	本城南ハ	ほんじょうみなみは	1710		
駄科	本城西平	ほんじょうにしひら	1712	⑦	113
駄科	遠見原	とんぼら	1716-1718,1742,1744,1746-1747,1749,1763-1764,1784,1787-1791,1819,1821-1833	⑦ ⑥	113
駄科	荒古屋	あらごや	1719-1721,1776-1777,1794-1800,1802-1803	⑨ ⑦	114
駄科	城山南	じょうやまみなみ	1724	⑨	113
駄科	城山洞	じょうやまほら	1725,1770-1771	⑨	
駄科	遠ミ原	とんぼら	1726	⑦	113
駄科	清水入	しみずいり	1727	⑦	114
駄科	清水井	しみずい	1728,1730,1736,1739-1741,1743,1745,1748,1807-1811,1820	⑨ ⑦	114
駄科	アラゴヤ	あらごや	1731-1732,1801	⑨	114
駄科	毛賀沢ハ	けがさわはば	1733	⑨	93
駄科	毛賀沢平	けがさわひら	1734-1735,1737-1738	⑨	84
駄科	並木松	なみきまつ	1751-1754	⑥	
駄科	ドホド	どほど	1755	⑨ ⑥	113
駄科	本城洞	ほんじょうぼら	1760,1762,1768	⑨	
駄科	北ノ堀	きたのほり	1793		
駄科	清水下	しみずした	1804	⑦	114
駄科	シミヅ下	しみずした	1805-1806	⑦	114
駄科	シミヅイ	しみずい	1812-1816		
駄科	遠見原	とんぼら	1834-1837,1841-1859,1863,1865,1870-1878,1889,1894-1898,1921-1925	⑦ ⑥	113
駄科	遠見原大井北	とんぼらおおいきた	1838,1840		
駄科	遠見原大井南	とんぼらおおいきた	1813,1816,1860-1862,1879-1880,1885,1900-1902,1904-1918	⑥ ⑦	113
駄科	境ノ洞	さかいのほら	1866-1868,1881-1884,1890	⑥ ⑦	114

駄科	遠見原大井洞	とんぼらおおいぼら	1869			113
駄科	岩下	いわした	1886,1888-1889	⑦		114
駄科	外シバ	そとしば	1887,1978	⑦		115
駄科	狐洞	きつねぼら	1892-1893,1927-1932,1935,1940-1945,1961,2105-2108	⑦		115
駄科	遠見原	とんぼら	1899,1903,1919,1933-1934	⑦	⑥	113
駄科	狐ヒラ	きつねひら	1948	⑦		115
駄科	伊賀良井端	いがらいばた	1936-1937	⑦		
駄科	伊賀良井バク	いがらいばた	1938			
駄科	狐平	きつねひら	1926,1939,1946-1947	①	⑦	115
駄科	逸場	はずしば	1949	⑦		115
駄科	外シ場	はずしば	1950,1958,1960,1962-1963,1967-1968,1977	⑦		115
駄科	一盃清水	いっぱいしみず	1951-1952,2374-2380,2401-2409,2411-2413	⑦		115
駄科	ハツシバ	はずしば	1953-1954			
駄科	境界山	けいかいざん	1955,1969,1975	⑦		115
駄科	ケイ山	けいかいざん	1956-1957	⑦		115
駄科	山ノ神	やまのかみ	1959,2060,2062-2063,2065-2068	⑦		103
駄科	松ヶ嵯	まつがさき	1970-1974,1979-2001	⑦		115
駄科	一杯清水	いっぱいしみず	1976,2037,2053-2059,2064	⑦		115
駄科	松ヶ崎	まつがさき	2004-2008,2033-2036,2043	⑦		115
駄科	日影田	ひかげだ	2020-2022,2431,2434,2436-2438,2440,2443,2462-2463,2500	⑦		116
駄科	引廻	ひんまし	2032,2433,2435,2461,2502	⑦		112
駄科	寺ノ浦	てらのうら	2042	⑦		112
駄科	山ノ入	やまのいり	2044,2426-2429,2453-2458,2477,2668	⑦		116
駄科	赤畑	あかはた	2046-2052	⑦		116
駄科	山ノ神ノ上	やまのかみのうえ	2061			
駄科	新川端廣河原	しんかわばたひろがわら	2069-2095	⑦		
駄科	新川端廣川原	しんかわばたひろがわら	2096-2102,2109			
駄科	キツネラ	きつねぼら	2103			
駄科	キツネ洞	きつねぼら	2104			
駄科	ヒロ川原	ひろかわら	2110			
駄科	イワシタ	いわした	2111,2116-2117			
駄科	ヤマノ入	やまのいり	2112-2113			
駄科	上新川	かみしんかわ	2149-2115,2125-2133,2283-2284,2368-2373	⑦	①	54
駄科	荒井原	あらいぼら	2118-2119,2143,2159,2162			
駄科	新井原	あらいぼら	2120-2123,2134-2140,2142,2145-2158,2160,2163-2169,2171-2177,2180-2191,2193-2212,2214-2259	⑦	①	116
駄科	アラ井原	あらいぼら	2124			
駄科	アライ原	あらいぼら	2141,2144,2161,2170,2178-2179,2192			
駄科	大ナギ	おおなぎ	2213			
駄科	田打洞	たうちぼら	2260,2293-2302,2304-2311,2313-2314	①		116
駄科	田打洞境	たうちぼらさかい	2261-2262	①		116
駄科	新井原	あらいぼら	2263-2269,2272-2278,2281,2345-2346,2348,2367	①		116
駄科	碓井坂下	うすいさかした	2270-2271	⑦		112
駄科	厂又	かりまた	2279-2280,2285-2292,2315-2324	⑦		109
駄科	ガリマタ	がりまた	2312			
駄科	新川	しんかわ	2509-2511,2516-2529,2532-2533	⑦		54

駄科	中芝原	なかしばはら	2303	⑦		118
駄科	白井坂	うすいざか	2326-2327	⑦		112
駄科	白井坂下	うすいさかした	2325,2328-2329,2332-2333,2335-2336,2343,2350,2350-2351,2391	⑦		112
駄科	谷津	やつ	2330-2331,2334,2337-2341,2393,2395-2400	⑦		117
駄科	境ノ洞	さかいのほら	2342	⑦		114
駄科	高田	たかだ	2344,2352-2366,2381-2390,2392,2394	⑦		117
駄科	新井原谷津	あらいぼらやつ	2347			
駄科	白井原坂下	うすいぼらさかした	2349			112
駄科	ヤツ	やつ	2410,2414-2425	⑦		117
駄科	ヒカゲダ	ひかげだ	2430	⑦		116
駄科	日影山平	ひかげやまひら	2439,2452	⑦		116
駄科	日影山	ひかげやま	2441-2442,2460	⑦		116
駄科	御所山	ごしょやま	2444,2450,2459,2464-2471	⑦		117
駄科	念地山	ねんじやま	2445-2446,2449,2451	⑦	⑧	118
駄科	前林	まえばやし	2447-2448,2485-2486,2489,2669-2671,2674,2683-2689,2693-2695	⑦	⑧	118
駄科	白井	うすい	2472	②	③	112
駄科	小白井	こうすい	2473-2476,2483,2496	⑦	⑧	112
駄科	西荒田	にしあらだ	2478,2481	②		119
駄科	合戦洞	がっせんほら	2479	②		119
駄科	白井原	うすいぼら	2480	②		112
駄科	白井洞	うすいぼら	2484	②		112
駄科	大平	おおひら	2487,2490-2492	⑧		119
駄科	泥拔	どろぬぎ	2493,2673,2675-2682	⑧		119
駄科	丸山	まるやま	2494-2495	⑧		119
駄科	新川端	しんかわばた	2503-2508			
駄科	アナダ	あなだ	2512-2515			
駄科	大井西添	おおいにしぞい	2540	⑩		69
駄科	御殿塚	ごてんづか	2541-2544	⑩	⑩	67
駄科	猿樂	ざるがく	2556	⑩		73
駄科	小作	こさく	2557-2564	⑩		75
駄科	福宮	ふくのみや	2565	⑩	⑩	76
駄科	林腰	はやしごし	2566			
駄科	ウルシ畑	うるしばた	2567-2571,2574-2580	⑩		78
駄科	漆畑	うるしばた	2572-2573,2581	⑩		78
駄科	坂頭	さかがしら	2582-2593	⑩		78
駄科	下平	ただいら	2619-2621	⑩		78
駄科	藪下	やぶした	2622	⑩		79
駄科	万バ坂	まんばさか	2624			
駄科	万場坂	まんばさか	2625-2637	⑩		65
駄科	釜ノ山	かまのやま	2638-2641	⑩		79
駄科	久保	くぼ	2642-2645	⑩		80
駄科	藤塚	ふじづか	2646	⑩		64
駄科	二本松	さんぼんまつ	2647			
駄科	明神山原	みさやまはら	2648-2652	⑩		63
駄科	扇平	おうぎひら	2653	⑩		63
駄科	ヒラ	ひら	2654-2655			
駄科	ハラ	はら	2656-2660			
駄科	原	はら	2658-2659	⑩		81

駄科	ゴマドウ	ごまどう	2661,2663,2665-2666				
駄科	鷓戸	うど	2662	㊦		57	
駄科	向新田	むこうしんでん	2664	㊦		63	
駄科	安城垣外	あんじょがいと	2667	㊦		55	
駄科	泥ノ木	どろのき	2672	㊦		119	
駄科	碓井山ノ神	うすいやまのかみ	2690,2692				
駄科	白井山ノ神	うすいやまのかみ	2691				
駄科	前橋	まえばし	2696-2698				
駄科	小白井	こうすい	2699-2700,2706-2709	㊦		112	
駄科	小碓井洞	こうすいぼら	2701	㊦		112	
駄科	小白井洞	こうすいぼら	2702-2703			112	
駄科	長洞	ながぼら	2704-2705	㊦		145	
駄科	下原	しもはら	1-25,36-45	㊦		145	
桐林	唐沢	からさわ	26-35				
桐林	殿垣外	とのがいと	46-136,138	㊦		54	
桐林	安城垣外	あんじょうがいと	137,139-157	㊦	㊦	55	
桐林	洞	ほら	158-168	㊦		120	
桐林	坪尻	つぼじり	169-173	㊦		121	
桐林	阿弥陀	あみだ	174-177	㊦		121	
桐林	塚	つか	178-184	㊦		121	
桐林	原田	はらだ	185-220,234-238	㊦	㊦	121	
桐林	稲葉	いなば	221-233	㊦		122	
桐林	久保田洞	くぼたぼら	239-263	㊦		122	
桐林	久保田	くぼた	264-278,1767-1774	㊦		122	
桐林	蔵ノ下	くらのした	279-283,316-319	㊦		122	
桐林	浦木戸	うらぎど	284-298,1749-1751	㊦		122	
桐林	中屋	なかや	299-315	㊦		123	
桐林	庵ノ塚	あんのつか	320-364	㊦		123	
桐林	中屋畑	なかやばた	365-394	㊦		123	
桐林	中屋前	なかやまえ	395-410	㊦		123	
桐林	前ノ原	まえのはら	441-451,480-560,564,568-571,580	㊦		123	
桐林	坊主新田	ぼうずしんでん	452-479	㊦		123	
桐林	長溝谷	ちょうせんなぎ	561-563,565-567,717-723,727-728	㊦		124	
桐林	尾畑	おぼた	572-579,581-597	㊦		124	
桐林	下新川	しもしんがわ	598-609	㊦		124	
桐林	二反田	にたんだ	610-612,624-626,629	㊦			
桐林	鶴巻	つるまき	612-5,640-676	㊦		124	
桐林	西羽場	にしはば	623,627-628	㊦		69	
桐林	橋場	はしば	630-639,678,681-687,689-691	㊦		94	
桐林	久保尻	くぼじり	677,688,692-716,729-783,816-845	㊦		125	
桐林	新川橋	しんがわばし	678-イ-680	㊦			
桐林	長セナギ	ちょうせんなぎ	724-726	㊦		124	
桐林	新川	しんがわ	784-794,969-972,1241-1254,1313-1320	㊦		54	
桐林	東垣外	ひがしがいと	795-801	㊦			
桐林	久保在家	くぼざいけ	802-815	㊦		125	
桐林	高見	たかみ	846-865	㊦		126	
桐林	幸神	こうじん?	866-881	㊦		125	
桐林	才ノ神	さいのかみ	882-883	㊦		88	
桐林	北村	きたむら	884-893	㊦		126	
桐林	北羽場	きたはば	895-911?	㊦			

桐林	田中	たなか	913-930,943-948	㊦		126	
桐林	公文所	くもんじょ	931-942	㊦		126	
桐林	ト々田	ととだ	949-953	㊦		127	
桐林	道下	みちした	954-960	㊦		127	
桐林	町張	まちはり	961-968,973-983	㊦		127	
桐林	村堂	むらどう	984-987	㊦		127	
桐林	内山	うちやま	988-1014	㊦		128	
桐林	花軒	はなのき	1015-1038	㊦		128	
桐林	溝添	みぞぞえ	1039-1060	㊦		128	
桐林	反保	たんぼ	1061-1102	㊦		128	
桐林	賀原	かばら	1103-1120	㊦		129	
桐林	泥障掛	あおりかけ	1121-1150	㊦		129	
桐林	羽場	はば	1151-1171,1255-1272,1297-1304, 2268-1	㊦		83	
桐林	大上	おおかみ	1172-1215	㊦		129	
桐林	京田	きょうでん	1216-1240	㊦		129	
桐林	駄科	だしな	1273-1279			144	
桐林	寺下	てらした	1280-1284	㊦			
桐林	フジナハ	ふじなえ	1285,1305-1312				
桐林	穴田	あなだ	1286-1296	㊦		112	
桐林	庄司轉	しょうじころび	1321-1337	㊦		130	
桐林	葦ノ口	あしのぐち	1338-1342	㊦		130	
桐林	水割	みずわり	1343-1350,1428	㊦		130	
桐林	泥拔	どろのき	1351-1364	㊦		119	
桐林	井間井	いまい	1365-1371				
桐林	塚田	つかだ	1372-1391,1392	㊦		130	
桐林	鳶岩	とんびいわ	1391-㊦	㊦		144	
桐林	上新川	かみしんかわ	1393-1406	㊦		54	
桐林	田打洞	たうちぼら	1407-1427	㊦		116	
桐林	瓢田	ふくべだ	1429-1431	㊦		131	
桐林	堤洞	つつんぼら	1432-1467	㊦		131	
桐林	小瀬原	こせはら	1468-1555	㊦		131	
桐林	小瀬	こせ	1556-1596,1621-1684	㊦		131	
桐林	流田	ながれだ	1597-1599	㊦		131	145
桐林	横枕	よこまくら	1600-1614	㊦		132	
桐林	溝跨	みぞわたり	1615-1620	㊦		134	
桐林	小瀬洞	こせぼら	1685-1687,1691-1698	㊦		131	
桐林	宮林	みやばやし	1688-1690,1699-1702,2143	㊦		132	
桐林	天白	てんぱく	1703-1719,1844-1846	㊦		132	
桐林	池田	いけだ	1720-1728,1839-1843	㊦		132	
桐林	佛師	ぶっし	1729-1735,1834-1838	㊦		133	
桐林	柳添	やなぎぞえ	1736-1748,1752-1760,1776-1796	㊦		133	
桐林	荒神	こうじん	1761-1766,1775	㊦		133	
桐林	落田	おちだ	1797-1833	㊦		134	
桐林	宮下	みやした	1847-1869,1875-1904	㊦		134	
桐林	竹腰	たけごし	1870-1874	㊦		133	
桐林	宮ノ前	みやのまえ	1905-1916,1922-1925,2140-2142	㊦		134	
桐林	堂垣外	どうがいと	1917-1920	㊦		134	
桐林	垣外	かいと	1921,1926-1941	㊦		134	
桐林	薬師堂	やくしどう	1942	㊦		135	
桐林	若林	わかばやし	1943-1951	㊦		135	

桐林	鍵田	かぎだ	1952-1970	①	135
桐林	中島	なかじま	1971-1984	①	135
桐林	寶下	ほうげ	19853175		
桐林	五反田	ごたんだ	1986-1999	①	136
桐林	若宮	わかみや	2000-2010	①	136
桐林	塚越	つかごし	2011-2014,2032	①	136
桐林	宝下	ほうげ	2015-2022,3140-3146	①	136
桐林	大塚	おおつか	2023-2031	①	137
桐林	南原	みなみはら	2033-2040,2055-2057,2059-2086,2087	①	137
桐林	兼清塚	けんせいづか	2041-2044,2050-2051,2053-2,2058	①	137
桐林	トメメキ	とどめぎ	2045-2049	①	137
桐林	細井	ほそい	2052-2053,2054	①	137
桐林	休場	やすんば	2087,2088-2139	①	137
桐林	宮洞	みやほら		①	138
桐林	河内洞	かわちぼら	2210-2215	①	138
桐林	城手洞	じょうてぼら	2254-2356,2259	①	138
桐林	上ノ原	うえのはら	2275-2288	②	139
桐林	白井	うすい		② ①	139
桐林	桶洞	おけぼら	2327-2329	③	139
桐林	松洞	まつぼら	2350-2351	③	139
桐林	大ナギ洞	おおなぎぼら	2364-2370	③	139
桐林	本洞峠	ほんぼらとうげ	2371	③	
桐林	田ノ洞	たのほら	2372-2376	③	
桐林	田ノ洞峠	たのほらとうげ	2377-2378	③	
桐林	白井七廻り	うすいななまわり	2379-2382,2384-2385	③	141
桐林	白井油田	うすいあぶらでん	2383	③	140
桐林	飼葉平	かいばだいら	2397-2399	③	
桐林	白井反鼻洞	うすいまむしほら	2400-2409	③	140
桐林	白井祠洞	うすいほこらほら	2410-2412	③	140
桐林	反鼻洞	まむしほら	2413	③	140
桐林	祠洞	ほこらほら	2414-2416,2418-2419	③	140
桐林	ホコラ洞	ほこらほら	2417		
桐林	蒜田	びるた	2420-2428,2434-2460,2463-2472, 2517-2579	① ②	141
桐林	キダ橋	きだばし	2429-2433,2461-2462	②	141
桐林	中原	なかはら	2473-2509	②	141
桐林	袋洞	ふくろぼら	2510-2516,2580-2590,2647-2654,2688	②	141
桐林	田ノ洞	たのほら	2591-2601		
桐林	本洞	ほんぼら	2602-2624,2627	①	155
桐林	中山	なかやま	2625-2626		
桐林	城山	じょうやま	2628	①	142
桐林	梶山	かじやま	2655,2661-2662	①	142
桐林	荒駒原	あらんばら	2656-2660,2663,2664-2688,2718-2768	①	142
桐林	駒沢	こまざわ	2709-2717,3063-3073,3105-3125	①	142
桐林	塚原	つかばら	2769-2910,2912-3062	①	121 143
桐林	塚平	つかだいら	2911	②	143
桐林	小池	こいけ	3074-3104,3216-3275	①	143
桐林	細井	ほそい	3126-3134	①	143
桐林	坂下	さかした	3135-3139,3147-3172	①	143
桐林	梶垣外	かじがいと	3185-3194,3202,3207-3215	①	144
桐林	丸山	まるやま	3195-3201	①	144

桐林	鈴原	すずはら	3203-3206	①	144
桐林	小池羽場	こいけはば	3276-3277	②	144
上川路	金山	かなやま	1-2,6-59,73- \square ,77- \square ,79-85,1203-1211,1225-1227	②	146
上川路	駒澤	こまざわ	1246-1252	②	142
上川路	ガンド洞	がんどぼら	3-5	②	146
上川路	塚平	つかだいら	60-72	②	146
上川路	トリ腐垣外	とうふがいと	73,74-75	②	146
上川路	塚原	つかばら	77-3,76-77	②	
上川路	豆腐垣外	とうふがいと	86-97	②	146
上川路	沢田	さわだ	98-104	②	148
上川路	白井	うすい	105-109,143-153,158-164,201	②	147
上川路	入キメン	いりきめん	110-112	②	147
上川路	ヲカミ	おかみ	113-130	②	147
上川路	洞田	ほらだ	131-137	②	148
上川路	袋洞	ふくろぼら	138-139	②	148
上川路	中原	なかはら	140-141	②	148
上川路	大平	おおひら	142,154-157,165-167	②	148
上川路	百田	ひゃくだ	189-196,197-1	②	148
上川路	瀧ノ入	たきのいり	197,198-200	②	149
上川路	アシガ洞	あしがぼら	202	② ⑤	149
上川路	白井ヒカ	うすいひかげ	203-206,210-212	②	149
上川路	ヒカゲ	ひかげ	207-209,213-235	②	149
上川路	御判前	ごほんまい	236-247	②	149
上川路	清水田	しみずた	248-250,1196-1202	②	150
上川路	サガリ	さがり	251-252,1084-1095	② ⑤	150
上川路	新屋敷	しんやしき	253-254,1021-1030	②	150
上川路	上ノ坊	かみのぼう	255-322	②	150
上川路	宮ノ前	みやのまえ	323-330,335-351,352-2,353-360	②	151
上川路	判ノ木河原	はんのきがわら	331-334	②	151
上川路	権現	ごんげん	361,403-419,435-447	②	151
上川路	所平	しょだいら	352,423-434,895-903,909-921	②	151
上川路	コジキアらし	こじきあらし	362-365	②	152
上川路	宮ノ脇	みやのわき	366-372	②	152
上川路	宮脇	みやわき	373-374	②	152
上川路	野田	のだ	375-382	② ③	152
上川路	傳平城	でんべいじょう	383-398	②	153
上川路	乞食アらし	こじきあらし	399-402	②	152
上川路	久保田	くぼた	420-422	②	152
上川路	天白	てんぱく	448-452,473-489	②	153
上川路	ツ、ミ	つつみ	454-455,469-472	②	153
上川路	ツ、ミ入	つつみいり	456-468	②	153
上川路	芝平	しばひら	490,492-493	②	153
上川路	油田	あぶらでん	491	③	154
上川路	樋入	とよいり	492-501	②	154
上川路	樋ケ入	とよがいり	502	②	154
上川路	藤塚	ふじつか	503-507	③	154
上川路	大畑	おおはた	508-588	③	155
上川路	風越本洞	かぎこしほんぼら	589	①	155
上川路	ス、ミドヲ	すすどお	590-591		156
上川路	ウナギ沢	うなぎさわ	592-600,602-608	②	155

上川路	大岩ヶ沢	おおいわうなぎさわ	601	⑤	155
上川路	高野	こうや	609-611,673-676,729-744,756-㊦	①	156
上川路	風越	かごこし	612-624	①	155
上川路	ハナゲ	はなげ	625	①	156
上川路	本洞	ほんほら	626-637	①	155
上川路	中尾	なかお	649-661,677-679	①	157
上川路	大高野	おおこうや	662-672	①	157
上川路	ムジナ洞	むじなぼら	680	①	157
上川路	大岩	おおいわ	681-720	①	157
上川路	シシラ林	ししらばやし	721-728,745-753	⑤	157
上川路	ギラン田	ぎおんでん	754-756,657-761,769,770-㊦	⑤	158
上川路	下高野	しもこうや	762,767-769,770,771-787,811-843	⑤	156
上川路	キジ洞	きじぼら	763-765,766-2,766-㊦	⑤	158
上川路	陣ヶ平	じんがひら	766,766-3	⑤	158
上川路	ビシヤ田	びしやでん	788-810	⑤	158
上川路	ナギノ尻	なぎのしり	844-846	⑤	159
上川路	神田	じんでん	847-852,903-㊦	⑤	159
上川路	井面	いめん	853-860	⑤	159
上川路	鶴巻	つるまき	861-871,893-894	⑤	159
上川路	西	にし	872,873-892,922-947	⑤	160
上川路	塚前	つかまい	956-957,872-㊦	⑤	160
上川路	か'ヤ垣外	かじやがいと	948-955	⑤	160
上川路	越前	こしまい	958-999		
上川路	セキメ	せきめ	960,1122-1129	⑤	161
上川路	伊豆木渡り	いずきわたり	961-969	⑤	161
上川路	梶屋垣外	かじやがいと	970-988,1111-1121	⑤ ㊦	160
上川路	町並	まちなみ	989-990,1008-1018,1033-1051,1096-1110	㊦	160
上川路	大門西	だいもんにし	991	㊦	160
上川路	開善寺境内	かいぜんじけいだい	992,998-999	㊦	161
上川路	境内西	けいだいにし	993-997	㊦	161
上川路	ウヤキ	うちやしき	1000-1001	㊦	161
上川路	境内東	けいだいひがし	1002-1006	㊦	161
上川路	大門東	だいもんひがし	1007	㊦	160
上川路	水上	みずかみ	1020	㊦	162
上川路	町裏	まちうら	1031	㊦	162
上川路	清水坂	しみずがさ	1032	㊦	162
上川路	前田	まえだ	1052-1083	⑤	162
上川路	藤ノ木	ふじのき	1130,1136-1147		
上川路	井下	いした	1131-1135		
上川路	河原田	かわらだ	1148-1157,1173-1175		
上川路	角田	すみた	1158-1172	⑤	163
上川路	三味所	さみしょ	1176-1195	⑤	163
上川路	中新田	なかしんでん	1212-1220		

[註]

1. 「平成十八年度竜丘史学会 竜丘村小字台帳」(竜丘村史編纂委員会原稿用紙使用)を元にして作成した。
2. ふりがなは 滝澤主税編『明治初期 長野縣町村字地名大鑑』(昭和62年)に従った。

旧竜丘村小字の由来

『竜丘村小字台帳』『竜丘小字図』をもとにして、小字の意味や由来を考えてみた。

《時又地区》

【時又】

竜丘には駄科・長野原を除けば、完成された小字地図はない。まず、その地図作成から始めなければならない。これは大変で手に余るのではないか、ということで躊躇していた。

しかし、地籍番号さえわかっておれば、あとはブルーマップを利用すれば可能ではないか、という助言をいただいて、重い腰をあげることにした。

だが、竜丘地区の地積図を基本にしたものではない。間違いがあるだろうことは承知の上で作った大まかな小字地図である。この大ざっぱな地図を基本にして、時又の小字について考えていきたい。

なお、明治二二年頃の土地台帳には時又の飛び地があちこちにあり、掌握が難しかったので、長野原地区の小字図を参考にさせていただいた。

また、現在は時又区に含まれている嶋地区の小字については、ここでは取り上げない。

最初に、大字か中字である「時又」という地名について触れておきたい。

地名語源辞典によれば、トキは動詞トク(解)の連用形で、「バラバラにほどける」ことを意味しており、崩壊地形や浸食地形をいう。マタは「二股状に分かれた谷の分岐点」である。従って、トキマタとは、「崩れ落ちそうな崖のある川の分岐点」を表すことになる。

正保三年(1646)までは、時又で天竜川は二股に分かれており、後で触れるように、段丘の

先端は崖になっていた。

このことは『丘の語部たち』にも北沢小太郎さんが書いておられる。

【前ノ原】

マエノハラ。

マエノハラ小字は桐林にもあって、この方が広い。桐林のマエノハラは小学校や公民館のある段丘の東の端に南北に広がっていて、時又のマエノハラは桐林の段丘上にあるマエノハラにつながる急斜面上にある。

マエ(前)というのは何かの前方ということになるが、それは何か。語源辞典をみると、とくに神社・仏閣の前の方だという。マエノハラ小字の近くにある神社仏閣を探してみると、マエノハラ小字のすぐ西隣にアンノツカ(庵ノ塚)という小字がある。この「アンノツカの前の所」ということになりそうだ。

ただ問題は、このアンノツカの正体である。現在は専養寺となっているが、明治十五年からは専養庵と呼ばれたことがある、こじんまりとした寺院である。この専養寺はかつては、アンノツカ小字の中にあっただという(庵主さん)。

この専養寺は寛保四年(1744)には薬師堂となっており、桐林から遷座されたという。薬師如来も一緒である。薬師如来は東面すると思われるので、専養寺は東を向いていたと思われる。アンノツカの庵が専養寺とかかわっておれば、東を正面としたに違いないので、マエノハラがアンノツカの東側にあるのは、肯ける。

公文所も考えられないことはないが、マエノハラはクモンジョ(公文所)小字の裏側となるので正しくはないだろうし、コウジン小字も近くに二カ所あるが、マエノハラの広さを考える

と、取り上げにくい。

国土地理院の2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、「前之原」の一カ所があるだけで、不思議なことに意外と少ない。

【新川】

シंगाワ。この小字は屋号にもなっている。当てられた漢字をみると、「新しい川」となりそうだが、新川は新しい川ではない。長さが6.6kmと毛賀沢より長い、古い川である。

では、シンとは何か。語源辞典によれば、①イシ（石）の略で「石が多い」ことを意味する。というのと、②シモ（下）の意で、「下の方」であるとする。この二つが本来の意味に近いと思われる。

ここで、イシとするには、新川が特別に石が多いとは思われない。毛賀沢と同じ高鳥屋山系から流れ出て同じような勾配で流れている川である。それにイシカワ→シンカワの変化は、あまり一般的ではないような気がする。

ここでは、シモカワ→シンカワの撥音便様の変化を採りたい。カミカワに相当するのは、天竜川を基準にすれば、上流に当たる毛賀沢である。毛賀沢に対するシモカワがシンカワに変化したものと考えたい。

【上新川・下新川】

カミシंगाワ。これは文字通りに考えてもいい。時又の区域内で、「新川の上流部にある土地」のことをいう。カミシंगाワ小字は、時又の最北端にある。

シモシंगाワ。

この小字は、カミシंगाワより上流にある。だから「新川の下流側の土地」をいうのではない。

シモは動詞シモル（滲）の語幹で「湿地」の意（語源辞典）。従って、シモシंगाワとは「新川沿岸の湿地」をいう。

【殿垣外】

トノガイト。

桐林の殿垣外と繋がっており、帝通のある台地の北側の一段上の台地上にある、広い小字である。

カイトは川路の場合は全てが屋敷跡と考えてよかったが、この時又と桐林のトノガイトは面積が広いので、このことを少し考えた方がいいのかもしれない。始めに殿垣外という小さな小字があって、殿垣外は瑞祥地名でもあったので、周辺の土地もトノガイトに名称を変更していったのではないか、ということも考えられる。しかし、カイトそのものの意味をもう少し拡大した方がいいのではないか。即ち、カイトとは「そこに住んでいた居住者の所有地」としたい。

では、トノガイトとは何か。考えられるのは二つ。

①トノはタナ（柵）が転訛したものとすると、トノとは「柵状の地。段丘」（地名語源辞典）である。トノガイトは、「柵状の段丘上にある、住居跡を含む地域」ということになる。トノとカイトのつながり具合が気になるが、一つの仮説ではある。現地も、北側が高い緩い傾斜地になっている。

②トノ（殿）は「中世以降、主君、主人をさしいう」（国語大辞典）とする考え。殿は小笠原家の家臣か、それとも地侍か。証となるものは何もない。

このトノは桐林にある、小字「公文所」との関わりがあるのかどうか気になるが、はっきりしない。ただ近くに、後で触れるヨコマエ、ウコンダなどの小字があり、これらと関連があるとすれば、②の仮説が有利となる。

トノガイトは難解地名で、①と②のどちらが正しいか、結論を出せないでいる。一般受けし

やすい付会地名になりそうな名前なので注意したい。

国土地理院の2.5万分の1には、中・大字として、10件が記載されている。

【安城垣外】

アンジョガイトと呼んでいる。これも難解地名の一つ。これについても考え方を二つ挙げておきたい。

①アンジョを固有名詞ととれば、「アンジョさんの住居跡とその所有地」、ということになる。トノガイトとアンジョガイトは小字が接触しており、互いに広い面積をもつ小字で、ややトノガイトの方が広い。ほぼ同時代であれば、アンジョさんは殿垣外のトノの家臣であった可能性がある。

②アンジョをアンショ（安処）とか、アンジョ（晏如）とすれば、「安んじていること、あるいは、そういう場所」（国語大辞典）ということになる。あるいは、元々、②の瑞祥名で普通名詞であったものが、固有名詞に転化したとも考えられる。

アンジョガイトまたは「安城垣外」は全国地図には1件の記載もない。となると、固有名詞である可能性が濃くなる。

【横前】

ヨコマエである。トノガイトの南側に細長く東西に延びる小字である。

ヨコは「南北の方向に対して東西の方向をいう」（地名語源辞典）らしい。マエは、とくに神社、仏閣の前方を意味することもあるようなので（先の語源辞典）、ヨコマエとは、トノガイトの前方に東西に細長く広がる所。ということになるだろうか。このことは、トノガイト＝主君の屋敷跡説を裏付ける。

国土地理院の全国地図には、中・大字として

5件の「横前」が記載されている。

【右近田】

ウコンダ。この小字は、現在のJR飯田線の時又駅周辺に南北方向にやや細長く延びている。

右近というのは令外の近衛府に属する官職であるが、この場合は「宮仕えした者の呼び名として用いられている」（語源辞典）と考えたい。

ウコンダというのは、「かつて宮仕えしたことがある者が所有している田」ということになる。

宮仕えをしたことがある者というのは、このウコンダ小字に接している、上の段丘の殿垣外の殿ではないかと思われる。今のところ、地名以外にこのことを証明できるものはないが、この段階での結論としてはこれ以外にはないのではないだろうか。

全国地図の2.5万分の1地図には、ウコンダも右近田も記載はない。中・大字にはこの地名は無いということになる。

【大座】

タイザである。ダイザではない。

これも難解地名である。

国土地理院の全国地図には「間人」という字を宛てたタイザが二カ所あるだけ。

京都府竹野郡丹後町の地名で、和名抄の竹野郷間人郷の地に関わらせたり、聖徳太子の母である穴穂部間人媛と関連させることもあるようだが、ここでは採らない。

時又以外では駄科の諏訪神社の南側にもタイザ小字はある。「大座」「タイザ」「躰座」の字を宛てている。お宮の近くにあるのが気になるが、時又のタイザは殿垣外と関わりがあるのだろうか。

思い切って仮説を提示しておきたい。

①タイは田居で、田んぼのあるところ。ザ（座）は猿楽・田楽などの演者や囃子方などの集団を意味する。タイザとは「芸能集団が田をつくり

ながら居住していた場所」となる。タイとザの繋がりが不自然だが、駄科のタイザも含めると、ありうる解釈である。

②タイは山腹の平坦な所を意味する（地名の語源）。ザ(座)を「貴人や神仏の御座所」（語源辞典）とすると、タイザは「段丘などの平坦な場所で、貴人や神仏がおわした所」ということになる。

あるいは、この他に、真実が隠されている可能性もあるが、今のところ不明と言わざるを得ない。

【釜】

カマである。西沢川右岸にある。

カマとは「えぐったような崖地」（語源辞典）で、今でも池がある。かつては用水池の役割を果たしていたのかもしれない。

国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、14件も載っている。宛字は「嘉万」というおめでたいのが一つ、後はすべてが「釜」となっていて、「鎌」を宛てる場所は一つもないというのも面白い。

カマ小字は長野原にもある。

【なぎ】

時又のナギは二カ所で、いずれも帝通の崖。かつて天竜川の西流によってつくられた浸食・崩壊地形である。

ナギは、動詞ナグ（雑）の連用形が名詞化したもので、崖を意味する。今でも日常に使われている。

2.5万分の1の地図には8カ所にナギの記載があるが、宛てられている漢字は、「名木」3カ所、「奈木」「諾」「那岐」「なぎ」「那木」となっている。

【一ツ田】

ヒトツダ。

現在の竜丘郵便局の周辺にある。

田んぼが一枚あるだけの小字ということだろ

うか。傾斜があれば、二枚にしないと地ならしが大変になるのだが、一枚だけで済むというのは、平坦であることが条件になる。あるいは、そんなに広い所ではないので、「田んぼ一枚がやつの土地」ということも考えられる。

可能性は低いですが、次のようなこともありうる。ヒツ（漬）がヒトツに変化したのではないかとすると、ヒトツダは「水が漬かりやすい沼田」ということになるが、どうだろうか。

ヒトツダは全国の2.5万分の1地図にはそれぞれ一つも載っていない。

【礮陶】

ウトウ小字は、竜丘郵便局から時又駅に向かう道路の北側にある。

ウトウ＝ウト＝ウドで、「雨水によって山野の掘れてくぼんだ所」、あるいは「谷、また狭い谷」（いずれも方言辞典）をいう。ナギとどう違うのか。ウトウはウツ（空）が変化したものだと、一般的にはいわれている。だから、削られて凹んでいたり、狭い谷になっているところが、崩れているだけのナギとは異なっているようだ。

国土地理院の2.5万分の1には、ウトウが12件、ウド13件、ウトが31件と非常に多い。宛てられている漢字は、ウトウが「兎洞」「烏頭」（2）、「有洞」「宇東」「謡」「歌生」「善知鳥」（2）、「宇藤」「うとう」。

ウドが、「鷓土」（2）、「宇土」（7）、「宇戸」（2）、「宇渡」ウド。ウトは「宇都」（19）、「宇土」（5）、「宇戸」（5）、「うど」「宇登」となっていて、変化に富んでいる。宇都が多いのは瑞祥地名であるためと思われる。南信地方でも松本平へ入る善知鳥峠はよく知られている。

【礮陶洞】

ウトウボラである。この小字はウトウ小字の北西方向に広がっている。時又駅の東側にある

段丘とそれに続く崖となっている。

ホラは、長野県飯田では、ほら穴や岩窟のことをいうとある（語源辞典）が、山などの崩れたところもホラと呼んでいる。ここのウトウボラのホラは後者の意味であろう。ウトウボラとは、「掘れて凹んだ崩壊地」を意味していると思われる。

因みに、ウトウ・ウト・ウドが56カ所もの記載があるのに、なぜかウトウボラは一つもない。

【鷓戸】

ウドである。大井が天竜川に流れ落ちる、その左岸にある。天竜川から明神山原のある段丘までを含む広い範囲の小字である。

ウドについては、ウトウやウトと一緒に論じているので、ここでは省略したいが、時又は崩壊・浸食地名が多いところであることがわかる。

ウに鷓（つぐみ）の字を宛てているのは珍しいが、この字はウとは読めないようだ。

【膳棚】

ゼンダナ。

ゼンダナ小字は県道米川・飯田線を南から進むとき天竜橋を右に見て、ゴマンド坂の三叉路を右に道なりに県道を進むと、左に大きく曲がる場所がある。そのカーブにさしかかる所の右手下、天竜川までの崖にある。

面倒な地名ではない。地名語源辞典には「階段傾斜地」とある。膳棚とはもともと「台所にとりつけてある、膳や椀などの食器類をのせておく棚。食器棚」（国語大辞典）である。これが小字になっているのだから、「食器棚のようになっている傾斜地」ということになる。

因みに国土地理院の2.5万分の1地図にはゼンダナは1件の記載もない

【発起】

ホッキ。どこにでもある地名ではないかと思っていたのだが、国土地理院の地図には全国の

どこにも載っていないし、国語大辞典にも無いので驚く。それだけ竜丘のホッキは身近に存在していたのであろうか。

地名語源辞典を見ると、ホッキは長野県下伊那郡の方言として扱われており、「溪谷沿いの急傾斜面に通路が開かれた所」の意味だとある。全くその通りである。ホキともいわれていると書いてある。

【六月免】

ロクガツメン。全国地図にはない。

メン（免）とは、「荘園制で、干害・風害などの事情によって、その年の年貢・課役を免除または減免すること。またその田地」（国語大辞典）を意味する。

ロクガツメン小字のある場所は、JR飯田線時又駅の北東に当たり、現在、沖田石材店の工場の敷地となっている。

六月免小字は、旧暦の六月になると、梅雨前線豪雨で新川が荒れて、年貢が減免されることが多かったのであろう。

【増口】

マセクチ。

マセ（馬柵・馬塞・籬）は、国語大辞典によれば、放牧場などで馬が外へ出ないように横木を渡して作った垣で、長野県や静岡県では放牧場の入口の横木のことをいうらしい。クチは出入口だから、マセクチは放牧場の出入口、ということになる。

マセクチ小字のある場所は、新川に沿って細長く伸びた地域である。放牧場の出入口に川が流れているという図は描きにくい。

ということで、放牧場出入口説は魅力があるが、ここでは別の仮説を提示しておきたい。

マセは、マ（間）セ（狭）で、「狭い谷」を意味する（語源辞典）。時又のマセクチ小字がある所は

新川の狭窄部が始まる所で、その広い流域から狭い峽に入る場所に当たる。現地を見て、マセクチ峽谷口説を採ることにした。この付近の新川左岸に牧場があったということが明らかになれば、むろんマセクチ牧場入口説が有力になる。

マセグチ・マシグチ地名は、全国地図によれば、中・大字として、6カ所。「馬瀬口」(4カ所)「馬背口」「柵口」「増口」の字が宛てられている。

【地慶子】

ジケイジ。

長石寺がある中平地籍の西側にある。少し離れてはいるが、長石寺関係の地名である。

宝暦二年(1752)の長石寺縁起によれば、当時の十二ヶ寺の坊舎の中の一つに「慈敬寺」があり、慈敬寺→地慶子と転化したもので、ジケイジはこの坊舎があったところの小字であろうと思われる。慈しみ敬うことを目標に建立された寺の意であろうか。

2.5万分の1の全国地図には、ジケイジまたは地慶子という地名は1件の記載もない。

【洪神】

シブカミ。

難解地名と思われる。国土地理院の全国地図にも記載がないということは、それだけ特異な地名なのかもしれない。

シブカミ小字は、「地慶子」小字と並んでいて、その南側に当たる。

三つほどの仮説が考えられる。

①渋紙→渋神に転じたか。時又もまた紙漉きが盛んな地域であった。ここで漉かれた紙に柿の渋を塗って乾かし渋紙も作られていたのではないか。渋紙は防寒・雨よけの衣類として利用したり、敷物や包装にも使われていたようだ。この付近は柿が多かったと地元ではいう。

②小字の位置から考えて、長石寺関係の地名で

ある可能性が高い。とすれば、シブ(四武)・カミ(神)と考えることはできないだろうか。四部は天の四方に配置された武者のことである。四方の神は一般的にはシジン(四神)であるが、これをシブシンといったこともあるのではないだろうか。しかし、四神(シジン)という語はあっても、四部神という語が辞書の中に見つからないことが気になる。四神は平安時代以降、真言密教にも取り入れられている。長石密寺ともいわれている長石寺の中で、四神の一つである青龍にも関連する竜神信仰が、雨乞い観音として生きていたのではないだろうか。

③ソブ→シブ(渋)で、カミ(神)は「神聖な地。神社。神社領」(語源辞典)である。シブカミとは「ソブの出る神聖な場所」であるとする。神聖な場所の中心は、長石寺か八王子神社であろう。

【丸釣根】

マルツリネという。

マルツルネ小字は八王子神社境内にもかかっており、台地の先端部分にある。

マルは形状が丸いこと。マルには、別に、動詞マルグ(転)から崩崖や斜面を意味する場合もあるが、ここでは採らない。ツリネはツルネ(蔓畝)から転化したもので、「蔓のように長く連なった小高いところ」(国語大辞典)。新潟県・長野県・山梨県・静岡県磐田郡などの方言として扱われている。

現地のマルツリネ小字をみると、確かに尾根の先端は丸くなっているが、尾根そのものが長くはないことが気になる。マルツリネと名付けられた時には、この小字はもっと周辺に広がっていたということも考えられるが。

川路にもヤセツルネがあり、この地域にはツルネ・ツリネ地名は多いと思われる。しかし2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、ツ

ルネ(鶴根)が2カ所にあるだけ。小字には多いが中字や大字には少ないのだろう。

【八王子】

ハチオウジ。

八王子神社が鎮座する小字である。

日本書紀によれば、八王子は、天照大神が素戔鳴尊と誓約(うけい)した時に出現したといわれる五男女神のことという。この時又の八王子神社の祭神は、明治三年の時点では、八柱皇子命になっている。これは日本書紀に従っているので問題はないように思われる。

しかし、竜丘村誌によれば、八王子神社は、文政四年(1821)には、八王子稲荷社と呼ばれていた。そういえば、川路のハチオウジ小字には、稲荷神社が鎮座していた。少なくとも下川路・時又では八王子は稲荷神社と深い関係があるということになる。民俗関係の文献をみると、八王子には稲荷神の眷属神である八大王子・八人童子・八大王子を祀るところもあるという。川路も時又も元来は稲荷神の眷属神であった。それが幕末に現在の姿になったのだろう。

国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、ハチオウジ地名が13件記載されている。

【八王子脇】

ハチオウジワキ。

八王子小字の隣に位置する。現在、八王子神社境内にある。

文字通り、「八王子小字の隣にある小字」の意味で、問題はない。

国土地理院の全国地図には、1件の記載もないのは、ワキであるために存在感が薄いからだろうか。

【みたらし】

ミタラシ。

一般的には「御手洗」の文字が宛てられてい

る。国土地理院の2.5万分の1地図にも、3件記載があるが、すべてが「御手洗」となっているし、ミタライの6件もすべて、「御手洗」の字が使われている。時又だけ「みたらし」というのはどういうことであろうか。庶民でも読めるように漢字を避けたのか。

ミタラシ小字は八王子小字と新川の間にある。御手洗とは、「神仏を拜む前に、参拝者が手を清め口をすすぐための場所」(国語大辞典)である。

【荒神】

コウジン。

どこの村にもある小字である。2.5万分の1地図に載っている、中・大字のコウジン地名は全国で、10件ある。時又のコウジン小字は、清水坂(仁王坂)の両側にまたがっている。

コウジン小字に荒神様が祀られていたが、道路拡幅のために移転した。八王子神社境内に、今村・下田両氏の氏神様があり、そこに並んで荒神の石碑がある。この荒神様は明治十六年に建立されたもので、果たして、コウジン小字の由来となっているのかどうかは不明である。

荒神には、内荒神(三宝荒神)と外荒神があって、後者は屋敷神や同族神として祀られているという。八王子社境内にある荒神は、同族神として祀られている。こうして、荒神は祟りやすい荒ぶる性格とともに祭祀社を庇護する強い力をもつ神とされていて、地域共同でまつられることが多いようだ。

【岩本】

イワモト。

旧竜丘支所(ふれあいセンター)の西側にある小字。

宝暦二年(1752)の長石寺縁起に記載されている十二僧坊の一つに「岩本坊」がある。なお、十二僧坊となっているが、正確には一つの寺院

と十二の坊である。縁起と同じ時期のものと思われる図面によると、この坊の所在地がイワモト小字と重なっている。

イワ（岩）は石の多いところで、モト（本）は地面のこと。イワモトは「石の多いところ」であったと思われる。

国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、32ヵ所が載っている。川路にもイワモト小字があり、小字としては多いものと思われる。

【清房】

セイボウ。屋号にもなっている。

セイボウ小字は段丘崖の麓にある。

宝暦二年（1752）の長石寺縁起には十二僧坊の一つとして載っているが、そこでは「清井坊」となっている。この坊の敷地には水がきれいな井戸があったのであろう。これがセイボウに変化したものと思われる

国土地理院の全国地図に、中・大字として、セイボウは「勢亡」の字を宛てた1ヵ所、セイ地名は7ヵ所ある。

【畑中】

ハタナカ。

旧竜丘支所のある小字。

これも長石寺縁起にある十二僧坊の一つである「畠中坊」の畠中が「畑中」に転化したものであろう。

もともと畑があったところと思われる。

全国地図にはハタナカ地名は17件で、うち16件は「畑中」の字を使っている。

【大東】

ダイトウである。

屋号にもなっていて、長石寺のすぐ下の段丘面にある小字。

「大東」は日本の雅称だから瑞祥地名である。長石寺縁起の十二僧坊の一つである「大坊」が

転化したもの。縁起には「大坊一いま石垣の下これなり」とあるので、ダイトウ小字と一致する。

縁起の十二僧坊の中でも大坊は筆頭に書かれており、「大きな坊」であったに違いない。それをおめでたい大東に変えたのではないだろうか。

国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、ダイトウが17件、ダイボウが21件の記載がある。

【持田】

モチダ。

新川が天竜川に合流する付近で、新川左岸と天竜川右岸の間の低湿地にあった。「六十五年前の時又」（『伊那』昭和三十年七月号）によれば、モチダには四町歩ばかりの田んぼがあって、明治二十三年頃には蛙がやかましく鳴いていたという。

モチダは「宮持田」の上略で、宮の所有地をいう（語源辞典）。神仏習合が当たり前であった時代だから、宮とは、神社や寺を意味しており、時又の持田は長石寺の田んぼだったに違いない。

全国の大・中字には、モチダ地名が23ヵ所もある。

【川端】

カワバタ。

カワバタは文字通り、「川のほとり」と理解して間違いはない。はっきりと意味のとれる小字名で、問題はない。

カワバタ小字は、新川が天竜川に合流する、その左岸と天竜川の左岸の二ヵ所にある。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、カワバタ地名記載地は69ヵ所にも及ぶ。

【中平】

ナカダイラ。

時又の小字の中では、最も広い面積をもち、その中に長石寺も含まれている。

語源辞典によれば、ナカ（中）は「神社や寺の境内」で、ダイラ（平）は「山頂または中腹の平らな所」をいう。つまり、ナカダイラとは「山中の平らな場所で、神社や寺のある神聖なところ」ということになる。時又の中平小字で神聖なところというのは、長石寺の境内を意味する。

全国の地図には、ナカダイラ地名は、中・大字として、44件もある。

【火打坂】

ヒウチザカである。

ヒウチザカ小字は、県道時又・中村線から旧竜丘支所に登る急峻な坂道の南側にある。

はじめはよくわからなくて、夜は火打石で灯した提灯がなければ登れない坂かなと思ったりした。

しかし、意外に簡単であった。「建築で、土台・梁などの二つの材木が直交するとき、その直角の歪みを少なくするためにとりつけた斜材」（国語大辞典）であることがわかったのである。つまり、火打＝比打で、その斜材のように急な坂道であることを意味している。

しかし、2.5万分の1の全国地図にはヒウチザカ（火打坂）は1ヵ所も載っていない。

【高野平】

コウヤダイラ。

コウヤ小字は上川路にもある。

時又のコウヤダイラ小字は、県道時又・中村線が天竜橋からの道と交差する直前の北側の斜面にある。

コウヤ（高野）には三つの意味がある。

①古くは、「周囲の平地より高い平野」とか「高原」の意味であった。

②中世末から近世の初めにかけて、開墾した場所が高野と呼ばれた。これは東北地方に多いら

しい。

③和歌山県の高野山のこと。

コウヤダイラのコウヤは、①や②は該当しないので、③の高野山に関連すると思われる。東密の長石寺の十二坊の中に、「高野坊」があり、これが「高野平」に変わったものと思われる。

ダイラは「山の中腹から麓のあたり」（語源辞典）を指す。コウヤダイラは「真言密教にかかわる場所で傾斜地になっている所」を意味するか。

【舟渡】

フナト。

フナト小字は、元为天竜橋のすぐ上流側にある。舟の渡し場で、今田側に渡るときには、今田側に常駐している渡し船を呼んだものと思われる。今田にもフナト小字がある。

正保二年（1645）の信州伊奈郡之絵図にも、葛島・伊久間に続いて時侯の渡しを描かれている。この時点ですでにフナト小字は存在していたと思われる。

国土地理院の2.5万分の1地図にも、中・大字として、フナト地名が54ヵ所、フナドが22ヵ所、記載されている。

【大扶垣外】

ダイブガイトという。

この小字は、「大東」小字と同じ段丘面の東端にある。

ダイブ←タイフ（太夫）で、ダイブガイトは「太夫が住んでいた屋敷跡」ということになるが、太夫とは何か。

①本来、大夫は五位の別称。五位は貴族の最下級であったが、後に神主や祢宜など神職の呼称にもなったという。だから、神社の祢宜が住んでいたのではないかと、ということも考えられる。しかし、ダイブガイト小字の周りは僧坊があったところで、ここに八王子神社の神職がいた、

ということは考えにくい。とはいっても、神仏習合の時代だから、僧侶をタイフと呼ばなかったとはいえないかもしれない。

②鎌倉時代の末頃に、大和猿楽座の棟梁が従五位下の位を得て大夫と称してから、芸能の世界でも大夫が棟梁の地位を示す称となったらしい(国史大辞典)。とすれば、猿楽一座の棟梁が住んでいた屋敷跡とも考えられる。長石寺文書の十二僧坊を図面化した文書には、このダイブガイトの近くに、「楽殿」という地名があることも傍証になるのではないだろうか。

全国地図に記載されているタイフ地名は1件だけ、ダイブは6件ある。

【松本屋敷】

マツモトヤシキである。

この小字は、県道米川・飯田線とダイブガイトに挟まれている。

長石寺文書によれば、ここに松本坊があった。松本坊があったところだから、松本屋敷になった、ということである。しかし、その松本さんというのがはっきりしない。長石寺の中でも重要な地位にあった人として、今のところはいえそうもない。

2.5万分の1の全国地図には、松本屋敷も松本坊も載っていないが、マツモトは66件も記載されている。列島には松が多いということか。

【観音下・観音平】

カンノンシタ・カンノンダイラ。

カンノンシタ小字は2カ所、いずれも現在の長石寺境内の下の段にある。

聖観音菩薩を本尊とする長石寺の下の段だから、カンノンシタである。

カンノンダイラ小字には長石寺がある。カンノンダイラとは「観音様のおわす平地」を意味する。

【東】

ヒガシという。屋号にもなっている。

ヒガシ小字は、長石寺の東方に、2カ所ある。ヒガシに関わりそうな僧坊が、宝暦二年(1752)の長石寺縁起の十二カ寺の坊舎にはないので、おそらく、「長石寺の東の方にある土地」の意味であろう。

国土地理院の全国地図には、ヒガシ地名が196カ所も記載されている。

【カミヤ】

カミヤ小字は、清水坂(仁王坂)を登り切った辻の南東の隅に位置する。

カミヤ(紙屋)と思われる。紙を漉いて売るところ。あるいは、紙の間屋である。時又はもともと、紙漉や紙問屋の多いところだった。

国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、43カ所のカミヤがある。そのカミヤに宛てられている漢字は、「神谷」(16)、「紙屋」(13)、「神屋」(4)、「上谷」(5)、「上屋」(2)、「上相」、「紙谷」、「かみや」、となっていて、神谷が最も多いのは瑞祥地名であるためと思われる。

【法寿坊】

ハウジュボウである。

この小字は長石寺と大井川との間に、2カ所ある。

宝暦二年(1752)の長石寺縁起にある十二ヶ寺の坊舎のなかに、宝持坊がある。法寿←宝持←宝珠と転化したものと思われる。かつては宝珠坊が存在し、長石寺の坊舎の一つであったと思われる。火焰の燃え上がる宝珠の玉である仏教用語の宝珠が僧坊の名前につけられていたに違いない。

国土地理院の全国地図には、ハウジュ地名が、3件記載されている。宛てられている漢字は、「宝珠」(2)、「法寿」、となっている。

【向新傳】

ムコウシンデン。

この小字は、大井川の北側の段丘上にある。ムコウシンデンとは、「向こう側に新しく開かれた田んぼ」ということになる。

「向こう」に対する「こちら」というのはどこか。それはモチダ(持田)小字のことではないだろうか。明治の中頃、持田小字付近では蛙がやかましく鳴いていたという。持田小字付近は、当時の時又の水田地帯であったと思われる。モチダから見て、「大井川の向こうの新しく開墾された田んぼ」がムコウシンデンであると、考えたい。新傳=新田である。

全国地図にも、中・大字として、ムコウシンデン(向新田)が3件記載されていて驚いた。新田開発についての関心が高かったせいであろうか。

【明神山原】

ミサンバラという。長野原団地の南側にある。この小字は長野原にもある。

いずれも駄科の諏訪神社の御射山祭を執り行った場所であると思われる。諏訪神社と御射山祭の場所は離れて存在する。

川路の諏訪神社は八区にあるが、御射山原は三区にある。総本社の下諏訪町の諏訪大社下社の御射山祭は霧ヶ峰で行われたし、諏訪市の諏訪大社上社の御射山は原村にあった。

御射山原=明神山原で、明神とは諏訪明神のこと。ミサンバラ←ミサヤマハラと転訛している。

全国に分布している諏訪神社であるが、2.5万分の1地図に記載されているミサンバラはもちろんのこと、ミサヤマハラも明神山原や御射山原も1カ所もないのは、どうしたことだろうか。諏訪神社が拡散していった時期に、御射山祭はすでに衰退してしまっていたのであろうか。

【十社】

ジッシャ。

ジッシャ小字は、現在の長石寺境内の北側にある住宅地である。

十社権現を祀っていたところで、その十社権現は、三六災害後に八王子神社内に遷座していて、現在は長石寺境内にはない。

十社権現では、伊邪那岐命と伊勢度会氏の祖先とされている天嗣杵命→天鈴杵命→天御雲命→天牟良雲命→天波与命→天日別命(別名、天日鷲命)の系統の七神に、中臣・藤原氏の祖先神である、興台産霊(こことむすび)命・許登能麻知姫(ことのまちひめ)命の二神を加えた十神を祀る。

国土地理院の地図には、「十社権現」も「十社」も無い。

【十社脇】

ジッシャワキ。

文字通り、「十社権現を祀る小字の隣にあるところ」を意味する。

十社脇は、現在、長石寺境内にある。

【五万土】

ゴマンドである。

大井川に沿った右岸にある細長い小字である。ゴマンド(五万土)←護摩堂(ゴマドウ)が転化した小字。大井川左岸に沿った道路をゴマンド坂と呼んでおり、近くにはゴマンドウ(五万堂)小字もある。

長石寺は真言密教の祈祷寺で、護摩修行が行われた護摩堂があった場所と思われる。

なお、全国地図には「護摩堂」地名が1カ所あるだけで、ゴマンドウ地名もゴマンド地名も無い。

【扇平】

オウギヒラ。

オウギヒラ小字は、長野原の「湯ノ瀬」小字や「黒瀬ヶ淵」小字付近に集中して、時又区と長野原区にそれぞれ3カ所ずつ分布している。

オウギ（扇）は小字の形とか地形が扇形になっているために名付けられていると思われるが、現在では境界変更等で扇形をなしていない小字も含まれているのではないだろうか。

ヒラ（平）には相容れないように思える二通りの意味がある。傾斜地や斜面と平地や台地である。一方は平らで他方は傾いている土地を表す。

湯ノ瀬や黒瀬ヶ淵の近くにあるオウギヒラのヒラは前者の傾斜地を意味し、長野原団地にあるオウギヒラのヒラは平地をいう。傾斜地のオウギヒラと平地のオウギヒラがある、ということになりそうだ。

なお、長野原区にある3カ所のオウギヒラはすべて傾斜地にある。

国土地理院の2.5万分の1地図にはオウギヒラ地名が1件、オウギダイラ地名が2件、記載されている。

【藤塚】

フジツカ。

長野原区との境界にあり、長野原側にもフジツカ小字がある。

フジツカ（藤塚）とは、「近世、富士信仰に基づいて造られた富士山型の小塚にちなむ地名」（語源辞典）であるという。川路にも、フジツカは二カ所にあり、塚があつたり、小塚そのものは無くても伝承が生きていたりする。

しかし、時又と長野原のフジツカには円墳があつたが均されてしまったという。

ただ、近くの長野原金山社に安永九年（1780）建立の富士塔の石碑がある。

【原】

ハラ。

ありふれた地名で、国土地理院の2.5万分の1地図にも、中・大字として、450件の記載がある。宛てられている文字は、「原」（447）、「はら」（3）。なお、同じ地図で、「原」地名は519件と多く、ハラと読むのが447件、ハルが71件、ハイが1件となっている。

ハラ小字がある所は、現在、長野原団地市営住宅のあるところと、「扇平」小字を挟んだ南側の、2カ所になっている。

ハラの意味となると、当たり前のようであり、焦点はしぼりにくいですが、語源辞典によれば、①ハラ（開）で、開墾地を意味するか。②未墾の入会草刈地なのか。のどちらかと思われる。竜丘村誌をみると、草刈地に他の地区のものが入り込んでいて、鎌を取り上げられたという例がいくつも示されている。

ハラ小字は、開墾地と入会草刈地が混じっていたと考えたいが、どうであろうか。

【平】

ヒラである。

長野原団地市営住宅の南側半分がヒラ小字に含まれている。

前にも触れたように、ヒラには二つの意味がある。一つは、古事記にあるヨモツヒラサカのヒラで、「崖とか傾斜地」を意味し、もう一つはタヒラに通じる語で、「台地とか平地」をいうらしい（語源辞典）。

時又のヒラを現場の状況で見ると、後者の「平らな場所」を意味すると思われる。

2.5万分の1地図にはヒラが44件、「平」が172件も載っている。「平」はタイラと読むものが115件と最も多くなっている。

【三昧所】

サンマエシヨである。

上川路にも「三昧所」小字があるが、サミシ

ヨと呼んでおり、川路では同じ「三昧所」をサンマシヨという。いずれも意味する内容に変わりはない。

サンマイ（三昧）とは仏語で、もともとは「雑念を離れて心を一つの対象に集中し、散乱しない状態をいう」（国語大辞典）という意味である。

それがこの地方では、火葬場とか墓地という意味に変化しているが、方言辞典に下伊那郡の方言として「家畜の死体を捨てる所」が挙げられている。時又のサンマエシヨは、斃獣畜埋葬所であつたという記録もあるので、墓地の近くには、家畜を埋める場所もあつたものと思われる（伊藤祐哉『伊那』1956）。

日葡辞書によれば、サンマイは「墓所。墓地または共同墓地」となっているので、中世末には、現在とほぼ同じ意味に使われていたと思われる。

時又のサンマエシヨ小字は大井川左岸にあつて天竜川河口に近い場所にある。

なお、国土地理院の2.5万分の1地図には、「三昧所」も、サンマシヨもサンマエシヨもサミシヨも載ってはいない。瑞祥地名に変えるようにという、お上の指示を忠実に実行したためであろうか。

《長野原地区》

【マンバ・万場・万場坂・下マンバ】

『長野原小字地図』によれば、駄科の地域にある、長野原の飛び地では、マンバまたは万場小字は4カ所に散在している。また、長野原地域内には、万場・万場坂・万場下の小字が4カ所ある。

これらの小字の多くは、低位段丘面Ⅱとその上の段面になる低位段丘面Ⅰとの間の崖や傾斜地から低位段丘面Ⅱの緩い傾斜地に広がっている。

マンバ・バンバ・ママ・ハバ・ババ・マブは、一様に、崩崖を意味している。マ←ハとハ←マという変化は、ごく普通の音韻変化であるという。ハバについては、後ほど触れるが、ハバ→バンバ→マンバという変化の道筋がみえるように思えるがどうであろうか。

長野原のマンバ（万場）は、崖を含めた急な傾斜地からゆるい傾斜地までを意味していると思われる。

国土地理院の2.5万分の1地図にはマンバ地名は17カ所に及ぶ。意外に多いのは、語呂がいいためだろうか。

【上羽場】

カミハバ。

『長野原小字地図』によれば、カミハバ小字も、駄科にある長野原の飛び地で、上下の段丘間の傾斜地にある。

カミハバとは、「崖の上の方」ということになるが、ニシハバ小字もあるので、「北の方の崖地」かもしれない。

ハバは濃尾地方以東に多い崖地名である（語源辞典）という。

ハバがどうして崖地名なのか。難しいが、考えられることは二つ。

①語源辞典によれば、動詞ハバケル（幅）と関係があるのではないかと、いう。これが正しいとすれば、語幹ハバケからケが脱落した、ということになる。「はだけの。取り散らかす」という意味で、崖が崩れて、草木ともども表層が崩れて、地面がはだかになったり、乱雑になったりすることであろうか。

②下伊那郡や岐阜県の南東部にはハバエルという方言がある。「暑さのためなどで葉がしおれる」という意味である。葉がしおれた状態を崖崩れに重ねることはできないだろうか。動詞ハバエ

ルの語幹ハバエからエが脱落したとみる。

全国地図には、カミハバ地名は1ヵ所だが、ハバ地名は40ヵ所になる。マンバよりも広がりがある。

【元寺下】

モトテラシタ。

『長野原小字地図』によれば、駄科にある長野原の飛び地。モトテラシタ小字は国道151号線の駄科信号機の南にあるキラヤ付近に2ヵ所とその道路の反対側に1ヵ所にある。

モトテラとは、どこのお寺であろうか。シタというのだから、この小字より高いところにあったはずで、それは現在の小字の南～西ということになる。

近くに現在も薬師堂があるが、シタとはいえない位置にあり、北の方にあるので、モトテラは薬師寺ではない。

とすると、念通寺ではないだろうか。村誌によれば、寛文十年（1670）に現在地に移ったが、それまでは、「母夕井」にあり禅宗のお寺であったという。母夕井は現在の「茂田井」であろう。読みが同じなので間違いはない。モタイ小字はモトテラシタ小字の南西側にあるので、方向も一致する。

【田中前田】

タナカマエダ。

『長野原小字地図』によれば、この小字は国道151号線駄科信号機のすぐ南側の三角形の土地に該当する。

タナカマエダとは、「水田地帯にあるお堂の前の田んぼ」ということだろうか。お堂とは駄科の薬師堂を指すと思われる。

【長池】

ナガイケ。

この小字は駄科の長野原飛び地に、4ヵ所分

散している。かつては、この4ヵ所を含めた大きな池があつて、細長いのでナガイケと呼んでいたと思われる。

イケは窪地に湧水がたまつたもので、規模の大小にかかわらず、また自然なものか人工によるかを問わず湖沼を示す地名である（語源辞典）。

現在ナガイケ小字の中をJR東海の飯田線が通っており、昭和二年（1927）に駄科駅まで開通したときに、工事のために、地形が変えられていると思われる。

ナガイケ地名は、2.5万分の1の全国地図には43ヵ所が記載されている。

【向城陸】

ムコウジョウロク。

長野原の飛び地にもムコウジョウロクはあるが、駄科には、ムコウジョウロク（向城陸）、ジョウロク（城陸）、コッチジョウロク（コッチ城陸）がある。長池の西側にコッチ城陸があり、長池の中や東側に「城陸」があつて、そのさらに東側の高い丘が「向城陸」になっている。

ムコウはコッチの反対側ということになるので、わかりやすい。しかし、ジョウロクは難解地名である。ジョウロクをどう解釈したらいいのか。

ジョウロクとは、仏像の標準的な高さといわれている一丈六尺（4.85m）のことであると、各種の辞典類には記載されている。この付近に、寺院やお堂があれば問題はないが、そういう気配はないと思われるので、この丈六の高さに関わる何か、ということになる。

一つ考えられることは、長池の中や周辺に丈六に相当するような岩が出ていて、それを仏像に見立てて、ジョウロクとしたのではないだろうか。

かつて念通寺も茂田井小字にあったという。

そこから長池を見下ろしたときに、こうした想定も可能ではないだろうか。

2.5万分の1の全国地図には、ジョウロク地名は6件、城陸地名が1件記載されている。そのほとんどが、寺院に関わっているようだ。

【権現堂】

ゴンゲンドウ。

これも駄科にある長野原の飛び地である。駄科の神送り塚の北北西100mほどのところに、駄科のゴンゲンドウヅカ（権現堂塚）を包むようにして広がっている。

権現は、仏や菩薩が仮に神の姿で現れたもので、強い靈験を発揮するものと考えられていたらしい。秋葉権現、金比羅権現、熊野権現、白山権現等がある。明治の神仏分離令で神霊も弱まったと考えられる。

文政五年（1822）の駄科村宮社の表には、権現堂小字に熊野権現小社が載っている。社殿もあつて五人の氏子によって祀られていたらしい（村誌）。熊野権現は、現在権現堂塚の後円部頂にある小祠となって残っている。

なお、2.5万分の1の全国地図には、ゴンゲンドウ（権現堂）地名が21ヵ所、挙げられている。

【寺下】

テラシタ。

この小字は念通寺東側の段丘下にある。文字通り「念通寺の下」である。

これも駄科にある長野原の飛び地となっているが、はっきりしない所もある。

ありふれた地名で、国土地理院の全国地図にもテラシタ地名が26ヵ所、寺下地名も31ヵ所が記載されている。

【御殿塚】

ゴテンヅカ。

この小字は、駄科にある長野原飛び地の他に

それにつながる長野原地区内にもあり、平坦地で、かなり面積は広い。

かつて、ここにゴテンヅカ（御殿塚）という円墳があつたが、現在は均されて畑となっているので、その痕跡はないという。

ゴテンとは何か。ゴテン（御殿）は、「身分の高い人の邸宅を敬つていう語」か、「社殿。やしろ」である、と国語大辞典にはある。

ほかにもありそうに思えるが、今のところ、この二つのどちらかということになる。村誌では、少なくとも江戸の文政年間（1822）に、お宮があつたという記録はない。江戸時代より前に小笠原家の旗本が住んでいたのかどうか、はっきりはしない。

国土地理院全国地図には、ゴテンヅカ地名は1件の記載もない。

【塚田】

ツカダ。

周辺をゴテンヅカ小字に囲まれているが、ツカダ小字の中にツカ（塚）小字がある。

ツカダは普通に考えれば、「古墳のある田んぼ」ということになる。その小字は田んぼになっていて、その中かあるいはその近くに古墳があるということである。

しかし、タ（田）には、水田のほかに向・場所・部分・位置などを示す接尾語という例もある（語源辞典）。となると、ツカダとは、「古墳のある所」という意味になる。

国土地理院の2.5万分の1地図には、ツカダ地名が22件、「塚田」地名も22件の記載がある。

【塚】

ツカ。

先述のように、ツカダ小字にすっぽりと包まれている。

ツカ小字には、おそらく円墳があつたと思わ

れるが、村誌には長野原のツカ古墳については記載がない。周辺に広い面積を占めるゴテンヅカ小字の中心となる古墳が、ツカ小字にあったのか、それともツカ小字の古墳はゴテンヅカの古墳とは別なのかどうかははっきりとはしていない。

なお、全国地図にはツカ地名は3ヵ所しかない。

【大井端】

オオイバタ。

長野原のオオイバタ小字は5ヵ所。いずれも大井である伊賀良井に添って位置している。

長野原に大井が引かれたのは、新田開発が盛んであった17世紀中頃と思われるが（村誌）、大井関係の地名が生まれたのは、この時期以降とうことになる。

国土地理院の2.5万分の1地図には、オオイ地名が63ヵ所もあるが、オオイバタ地名の記載はない。

【森田】

モリタ。

モリタ小字は三方をゴテンヅカ（御殿塚）小字に囲まれている田んぼである。

モリ（森）は、「土地の小高い所で、塚や神を祀ってあるところ」（語源辞典）という。タ（田）は、同じ語源辞典によると、場所を示す接尾語であるという。

モリタの意味は、①「塚があった所」か、②「塚があったが、いまは田んぼになっているところ」、のどちらかと思われる。

全国地図ではモリタ地名は15ヵ所。

【大道端】

ダイドウバタ。

この小字は、伊賀良井に添った道路の西側の3ヵ所に分散している。

長野原地区では、ほぼダイドウ（大道）に沿って伊賀良井を引いたので、現在は、伊賀良井と大道はお互いが添うように通っている。

ダイドウバタは「大道のかたわら」の意。それでは大道とは何か。大道はオオミチとも呼んでいる。

国土地理院の2.5万分の1地図には、ダイドウバタ地名が1ヵ所、大道端地名が1ヵ所あるが、ダイドウ地名は37ヵ所、オオミチ地名は14ヵ所もある。

ダイドウは時代別国語大辞典（室町）によれば、「天下の公道。幹線道路。おほみち」とある。ダイドウとあれば、東山道であると必ずしも決めつけることはできないようであるが、長野原の幹線道路といえば、何らかの形で東山道に関わる道路ではなかったかと考えてもいいと思うがどうであろうか。

ダイドウ（大道）については、上川路のイズキワタリ（伊豆木渡）で久米川を渡り、御猿堂古墳・馬背塚古墳・金山二子塚・二子塚付近を経て、時又のマセグチ（増口）に達する。マセグチで新川を渡り、長野原の伊賀良井に沿った直線状の幹線道路につながるルートが見えてくる。しかし、ここでは、控えめに仮説の仮説ぐらいにしておきたい。

なお、マセグチ小字とともに東山道に関わるのではないかとされているシミズ小字（黒坂周平『東山道の実証的研究』）も上川路地区にあるが、馬背塚古墳とはなれているので、やや不安はある。

【中井田・中井田西】

ナカイダ・ナカイダニシ・ナカイダ。

これらの小字は、伊賀良井（大井）の西側に集まっている。「街道端」小字から井水を取り入れている。

ナカイ（中井）とは、オオイ（大井）に対するナカなのか、もっと下流にあるシモイ（下井）に対するナカなのか、迷うところであるが、中井は大井に対して中くらいの水量の井水を意味している、と考えたい。下流の下井に対する命名というのは、大井から離れていることもあって、少し考えにくいように思える。

ダ（田）は、単に田んぼを表すか、それとも、場所を示す接尾語とみるか。どちらとも決めかねる。

なお、ナカイには、「川（井水）に囲まれた地」という意味もあり、魅力もあるが、こうした状況は近くのどこにでもあるので、取り上げないことにした。

国土地理院の全国地図には、ナカイ地名は77件もあるが、ナカイダ地名は2件となっている。

【前畑】

マエハタ。

この小字は北北西―南南東の方向に長くなっており、北の方角80mほどのところにゴンゲンドウ（権現堂）小字があり、北北東100mぐらいの所にはゴテンヅカ（御殿塚）小字がある。

マエハタのマエは、何のマエ（前）なのか。ということになると、それは、神社・仏閣か貴人の屋敷とするのが、無難と思われる。ここでは、権現堂かあるいは御殿塚のいわれとなった御殿か、ということになるが、どちらとも決めがたい。

それにしても、ゴテンヅカ小字は駄科と長野原の境界付近の広い範囲に分布しており、この範囲のすべてが御殿塚由来の御殿だったとすると、この御殿は歴大な土地を占めていたことになる。

全国地図にはマエハタ地名は17ヵ所。

【家南】

イエミナミ。

この小字も、間にナカイダ小字を挟んではいるが、ゴテンヅカ小字群の南側に位置する。もう一つ、700mほど南にも小さなイエミナミ小字がある。

イエのミナミになる、その家はやはり由緒のある家でなければならないだろう。

国土地理院の2.5万分の1地図をみると、不思議なことに、イエミナミ地名も家南地名も1ヵ所の記載も無い。一般的にはイエミナミという表現はしないのかもしれない。ミナミバタとかミナミダという言い方になるのであろうか。

ということになると、ここでいうイエとは御殿塚の「御殿」ということになるが、この御殿については、今のところ何も知られていない。

さらに小さなイエミナミ小字が南にあるが、かつてはここまで広がっていたか。

【大井添・大井西・大井田・井添・井端】

オオイゾイ・オオイニシ・オオイダ・イゾイ・イバタ。

これらの小字は、オオイすなわち伊賀良井に接して位置する。

オオイニシは伊賀良井の西側にあり、オオイダは「伊賀良井に接する田んぼ」である。イゾイとイバタは同じことを意味している。

伊賀良井は南に流れ下るのであるが、イゾイ小字で東に寄り、ゴマンドウ小字で、さらに東に折れて、時又区に入り、最後に天竜川に落ちる。

国土地理院の全国地図には、オオイゾイや大井添の地名は無いが、オオイは63ヵ所、大井は55ヵ所の記載がある。

【西羽場・下羽場】

ニシハバ・シモハバ。ニシハバは屋号でもある。

ニシハバ小字は、長野原の西部で新川へ下る崖地にあり、シモハバ小字は2ヵ所。一つは伊賀良井が東に寄る付近に、もう一つは、時又境

のゴマンドウ（五万洞）小字の東隣にあり、いずれも緩い傾斜面にある。

ニシハバは「長野原の西部にある崖地」を表す。シモハバは、「緩い傾斜の低い方にある傾斜地」を意味する。

ハバについては、既にカミハバ（上ハバ）で説明済み。

【藪腰】

ヤブコシ。

長野原のヤブコシ小字は、2カ所にある。一つは、ナカイダ（中井田）小字とイエミナミ（家南）小字の間にあり、二つ目は、シモイバタ（下井端）小字とサルガク（猿楽）小字の間にある。

いずれも平坦地で、傾斜地とはなっていない。ヤブコシとは何か、よくわからない。難解地名の一つ。付会気味であるが、仮説を一つ挙げておきたい。

ヤブコシ（藪越）とは、国語大辞典には、「藪の間にはさんで物事をする」とある。「物事をする」とは、この場合、藪神を祀ることを意味する。

ヤブだけで藪神を意味する場合もあること。したがって、藪そのものを祀ることもあるということ。また、祭場を壊すと疾病などの激しい祟りがある、というので、放置して藪のままにしているのではないかと、ということ。などを勘案しての結論である。

だから、周りが耕作地になっているのに、ヤブコシだけは手をつけなくて、藪神を祀っていたのではないだろうか。

国土地理院の2.5万分の1全国地図には、ヤブコシ地名も、藪腰地名も、1件の記載も無い。

【水落】

ミズオチ。

ミズオチ小字は長野原に2カ所ある。ゲンチヨウナギ小字とニシハバ小字に囲まれた急傾斜

地に一つ、もう一つはそれより南の方にあつて、ニシハラ小字と新川とにはさまれた左岸にある。ミズオチ（水落）とは、文字通り、「用水の排水口」をいう。2カ所とも伊賀良井の末端で、新川に落としている。

国土地理院の全国地図には、ミズオチ地名6カ所、水落地名は8カ所に載っている。

【西井】

ニシイ。

ニシイ小字は、伊賀良井の西方にある。

これも、文字通りで、「大井である伊賀良井の西側に分流した井水」を意味する。

【井下】

イシタ。

イシタ小字は、イバタ・ミズクチ・ニシハラの四つの小字に囲まれている。

大井の伊賀良井から一小字離れており、イシタとは、「大井から分かれた井水の下流になる所」の意と思われる。

【水口】

ミズクチ。

ミズクチ小字は、2カ所にある。一つはJA竜丘支所の北側、もう一つはもう少し下流のトウジュイ小字の対岸にある。

ミズクチとは、これも文字通り、「伊賀良井から水を入れる口」を意味する。

国土地理院の2.5分の1全国地図には、ミズクチ地名は6カ所だが、水口地名は37カ所もある。水口の文字が宛てられているのは、ミズクチの他に、ミナクチ・ミグチ・ミノクチ・ミヨグチ・ミツクチなどの地名となっている。

【墓東】

ハカヒガシ。

この小字は、長野原の段丘から新川に向かう急傾斜地から50mほど東に位置している。

ハカヒガシは、「ハカの東側にある所」の意であるが、ハカとは何か。全国地図をみても、ハカとか墓という地名はゼロである。地名には付けにくい言葉ではある。ただ、古墳を表すのに使うことはあるかもしれないが、地名には適切な語とはいえない。

墓地か古墳があるのだろうか。現場へ行ってみて驚いたのは、ハカヒガシの西側に墓地があったことである。採用しにくいと思われた地名がここでは生きていた。しかし、この墓地は古墳の跡であるとういので、納得することができた。

ハカについては、ハガ（剥）の転化したものではないか、という説がある。動詞ハガル（剥）の語幹が清音化した語である、とみる。つまり、ハカ←ハガで、ハカは崖や崩壊地を意味する。面白いので、ここに紹介しておきたい。

【西原】

ニシハラ。

この小字は3カ所に分布。一つは、長野原の段丘と新川の間の急傾斜地で広い小字であるが、二つ目は、ハカヒガシ小字の北側で小さく、三つ目もニシイ小字の南側にあつて、これも小さい。かつては、この小さな二つの小字まで含めた範囲がニシハラという地名になっていたのかもしれない。

ニシ（西）は、ダイドウ（大道）から見ての西方か、あるいは、伊賀良井からみての西ということになろうか。

国土地理院の全国地図には、ニシハラ地名が105カ所、西原地名は167カ所と、非常に多い。瑞祥地名といってもいいほどの数である。

【苗代】

ナワシロ。

この小字は周辺に田んぼのある平坦地にある。全国地図には、ナワシロ地名が4件、苗代地

名が3件と、思ったより少ないのは、苗代をつくる田んぼが固定してなかったということだろうか。

ナワシロは、文字通り「苗代をつくる田」を示す。長野原のナワシロ小字では一定期間継続的にこの田んぼでイネの苗が育てられていたことを意味している。

【ウラ】

ウラ小字は、長野原では3カ所にある。

ニシイ小字の南側とシンヤシキ小字の東側にある。

ウラにはいろいろな意味がある。例えば、先端・川の上流・下・内部・東・北など。そのためか、国土地理院の2.5万分の1全国地図には、ウラ地名が51カ所記載されている。

では、長野原のウラにはどんな意味を秘めているのだろうか。これが案外と難しい。先に挙げた意味の中には適当なものはない。

考えられることは一つ、「家の背後の部分」つまり、家の裏ということである。

その家は誰の家か、というと、貴人でも役人でもない、一般の住民としか考えられない。こうした個人的な事情が地名となるのかどうか、という疑問は残る。

【ツルマキ・鶴牧】

いずれもツルマキ。

ツルマキ小字は、二種類の宛字を用いているが、ほぼ1カ所にまとまっている。長野原段丘の一部を含み、大部分は新川との間の急斜面にある。地図でみると等高線の褶曲の著しい部分に当たる。

ツルマキとは、蔓（つる）植物が他物に巻き付いた状態をいうが、長野原のツルマキ小字は、「蔓（ツル）のように等高線の幅が細く、他の植物などに巻き付いたように褶曲している所」を

意味する。上川路にもツルマキ地名はあるが、長野原のツルマキとは、意味が異なるのではないかと思っている。

鶴（ツル）を宛てるのは、瑞祥名であるからで、鶴の首のように曲がっているという解釈もあるが、ここでは採らない。

また東京世田谷の中世にあった弦巻郷は、つる草の茂っていた土地である、という説も賛同はできない。どこでも蔓草は茂るものであるから。

国土地理院の全国地図には、ツルマキ地名が21件ある。地形地名から考えると、当然の数字かもしれない。

【山添】

ヤマゾイ。

この小字は、長野原段丘の西の端で新川に下る急傾斜地に接している。

ヤマゾイとは何か。広辞苑には「山にそうこと。またその場所」とある。ゾイ（添）ははつきりしているが、ヤマ（山）はどのような意味なのか。

一般的には、平地より高く隆起した地塊なので、高いところがなければならぬのであるが、ヤマゾイ小字付近は平坦地と下向きの急傾斜地しかない。そこで方言大辞典をみると、長野県上伊那郡・静岡県・愛知県などでは、山林や林をヤマと呼んでいる。そういえば、子どもの頃、山林へ入ることを「ヤマへ行く」とっていた。

ヤマゾイとは、「山林に添ったところ」を意味する。

国土地理院の全国地図には、ヤマゾイ地名は1件しかないが、山添地名は11件ある。

【新屋敷・新屋敷井】

シンヤシキ・シンヤシキイ。

シンヤシキ小字は、伊賀良井を境にして金山神社と反対側の西側に位置する、広大な小字で

ある。もう1ヵ所、シンヤシキ小字があるが、これは、さらに西方の新川添いであって、面積は小さい。

シンヤシキには、二つの意味がある。一つは新築の屋敷で、もう一つは新たに開墾した屋敷地である。この広い長野原のシンヤシキだから、当然、後者を意味することになる。

新たに屋敷も造り、田畑を開墾している。この切り開いた田畑の面積が広大であったのだろうと思う。新川添いのシンヤシキは、ここに屋敷が造られるような状況ではないので、段丘上の新しい屋敷の住人が、新川端まで開墾したのであろう。

シンヤシキイ小字はシンヤシキ小字に囲まれている。新たに開墾した田んぼに入れる井水の水路になっている所。

【二ツ塚・二ツ塚井】

フタツヅカ・フタツヅカイ。

二ツ塚古墳は、シンヤシキ小字にあり、そのすぐ西側の段丘上と新川へ落ちる急斜面がフタツヅカ小字となっている。

フタツヅカは、「近くに二ツ塚古墳のある所」を示す。

フタツヅカイ小字は、フタツヅカ小字の北東に80mほど離れた所にあり、伊賀良井につながっている。伊賀良井の水を二ツ塚井へ取り込んで、下流にあるフタツヅカ小字まで流しているものと思われる。

国土地理院の全国地図には、フタツヅカ地名が5ヵ所に、「二ツ塚」地名は2ヵ所に記載されている。

【祢宜屋・ネギヤ・祢宜屋井・ネギヤ井】

ネギヤ・ネギヤイ。

これらの小字は、長野原地区の南西端で伊賀良井の西側にある。

ネギは、動詞「祢（勞）グ」の連用形が名詞化したもの。神職で神主に次ぐ位であったが、後には神職一般をさすようになっている。ヤ（屋・家）は、人の住むために造った建築物。

したがって、ネギヤとは、「神職の住居」ということになる。ネギヤ小字一帯には、神職の住居が散在していたのだろう。これらの神職の多くは、八王子神社に属していたと思われる。

ネギヤイは伊賀良井に添っており、ネギヤ小字の上流側である北側に位置している。ネギヤに水を供給していたのであろう。

【五万堂・五万洞】

ゴマンドウ。

時又地区には、五万土の字を宛てているゴマンド小字もある。

二つのゴマンドウ小字はいずれも、時又境に接している。

ゴマンドウはゴマドウ（護摩堂）の転訛したもの。護摩堂とは、真言密教の寺院で、修法の一つである、護摩をたいて祈祷を行う仏堂のことをいう。真言密教の寺院とは、ここでは長石寺をさす。

護摩とは、本尊（長石寺では聖観世音菩薩）の前に護摩壇を設け、護摩木をたいて真言を唱え、施主の祈願達成を願うもの。祈願するのは、息災・繁栄・安寧等を願う現世利益。今でも多くの参詣客を迎えている寺院もあるほどで、最盛期の長石寺の賑わいも想像できる。

ゴマンドウは護摩堂があったところか、付近に護摩堂があった所を意味していると思われる。

【下井端・下井面】

シモイバタ・シモイメン。

シモイバタ小字は長野原段丘の南部で伊賀良井と金山神社の間にあり、シモイメン小字はそれより南の方の下流側にある。

シモイバタ（下井端）は「伊賀良井の下流部分から取水している井水のほとり」を意味している。

「下井面」は、「下井西」や「下井免」との混乱があったが、その位置から判断して、シモイメン（下井面または下井免）が正しいだろうと結論した。

シモイメンとは、「下井の井水の維持管理の費用に当てるための田畑」を意味する。

上川路にもイメン（井面）小字があるが、国土地理院の全国地図には、シモイメン地名は勿論のこと、イメン地名も記載がない。竜丘地区には、他地区よりも多くの井水が張りめぐらされていることを物語っているのかもしれない。

【宮前】

ミヤマエ。

この小字は、金山神社の南側を覆う広い面積を持つ。

文字通り、ミヤマエ（宮前）で、旧長野原村村社の金山神社の前面にあることを示す。

「宮前」「宮ノ前」小字は竜丘にも多いが、2.5万分の1全国地図をみると、ミヤマエ地名だけで101ヵ所、宮前地名は104ヵ所の記載があって、非常に多いことがわかる。

【猿楽】

サルガク。

この小字は、金山神社を包むようにして北側に広がる。大きな小字である。

猿楽は平安時代に宮廷で生まれた芸能であるが、後に民間に移り、中世には寺社に所属する職業芸能人が、祭礼などに滑稽な技や曲芸を演じたという。

また、南北朝の内乱期に、惣村の寄合の場となった鎮守の森では、猿楽能が演じられ、猿楽田を用意する村もあったらしい（上田正昭『倭

国から日本国へ』)。

長野原の金山神社でも、祭礼や村の寄合では、猿楽が演じられたと思われる。

その猿楽を演じるのは職業芸人であったに違いないが、これらの職業芸人たちがサルガク小字に住居を構えていたとすれば、金山神社だけでなく、近くの寺社を巡回して猿楽を奉納していたはずで、それがなければ生きていけなかったかもしれない。それだけでも十分ではなかったかもしれない。そこで田畑を耕しながら生活するということがあったかもしれない。これでサルガク小字が広い面積をもっている理由を説明できるような気もする。しかし、具体的な証拠はない。

以上の推理が正しいとすれば、サルガクとは、「猿楽芸能集団が居住していたところ」ということになる。

国土地理院の全国地図には、サルガク地名が4カ所、猿楽地名も4カ所、載っているにすぎない。

【金山】

カネヤマ。

カネヤマ小字に金山神社が鎮座する。文政五年(1822)には金山大荒神はサルガクヅカ(猿楽塚)小字にあると記録されているが、(村誌)現在、サルガクヅカ小字も猿楽塚という円墳もない。

祭神は金山彦命。春の例祭には、近隣の鍛冶職の人たちが参拝にみえたという。

国土地理院の全国地図に記載されるカネヤマ地名は34件、金山地名だと118件に達する。

【坊主田】

ボウズダ。

この小字は伊賀良井とサルガク小字に挟まれている。

ボウズといえば、この地方では蔑称ではない

かと思いがちであるが、広辞苑には「寺の主である僧。住職」とあり、さげすむような意味は見当たらない。

ボウズダ(坊主田)とは、「寺領地である田んぼ」のことを指すが、この長野原のボウズダを所有する寺院は、念通寺か長石寺であるが、どちらかは明らかではない。

ボウズダは全国地図の地名には1件もないが、ボウズタ(坊主田)が1件あるだけで、意外と少ない。

【尾池】

オチ。

オチ小字は、伊賀良井に沿っておりボウズダ小字とカギダ小字に囲まれている。

オチは何を表しているのか。周辺の小字の配置から考えると、二通りの解釈をすることができる。

その一つは、オチ(沓池)で、「低い土地に水がたまってできた池。ためいけ」(国語大辞典)のこと。もう一つは、ヲ(小)・イチ(市)と考える、オチとは、「小さな市」を意味するというもの。

近くには高札場を意味するフダバ(札場)小字もあり、小さな市もありうる場所である。しかし現地へ行ってみると、ちいさな池があった。周辺より少し低い土地になっているので、前者のオチ(沓池)であることがわかる。

国土地理院の2.5万分の1地図には、オチ地名は10カ所、尾池地名は1カ所でそれもオイケと呼んでいる。オチ(尾池)の組み合わせは1カ所もない。

【鍵田】

カギダ。

カギダ小字は、伊賀良井に沿っており、トウジュイ小字とボウズダ小字の間にある。屋号にもある。

カギダとは何か。それは、「鍵状に屈曲した田んぼ」(語源辞典)を意味する。カギタ小字の形状がまさに鍵の形になっている。

面白いことに、カギダ小字の中に、長方形のカギ小字がはめ込まれている。

全国地図には、意外なことにカギダ地名も「鍵田」地名も無い。一枚の田んぼが中字や大字となることはないということか。それに、出世地名にするほどの瑞祥地名ではないということであろうか。

【小作】

コサク。

コサク小字は、サルガク(猿楽)小字の北側に位置する。

コサク(小作)といえば、地主から土地を借りて借地料を払いながら耕作をしている田畑、ということになるが、ここでは、コサク(古作)で、「古くから耕作をしている田畑」のことと解したい。自分で小作をしている土地を、「小作」と名付けることは、まずは考えられないからである。

全国地図にはコサク地名が7件あるが、いずれも古作を意味していると思われる。

【田瀬】

タゼ。

タゼ小字は、トウジュイ小字・フダバイ小字・コサク小字に囲まれた小さな小字である。

タセ(田瀬)地名は、岩手県遠野の近くや中津川市など4カ所にある。意味はタゼニから転化したとすれば、「臨時税に備えた田畑」の意となるが、全く不明。

【藤樹井】

フジキイ。

トウジュイとふりがなをしてある資料もあるが、地元では、フジキイと呼んでいる。

フジキイ小字は、伊賀良井沿いで、クラノタ

イラ(蔵ノ平)小字とカギダ(鍵田)小字の間にある。

フジキイは伊賀良井から分流する井水の名前である。フジキ(藤木)とは、マメ科の落葉高木で15mほどの高さになる、フジ(藤)とは別属の樹木。本州福島県以西、四国の湿気のある山中に稀に生える、という。葉はフジ(藤)に似て、夏に白い花をつける。

分流井水のほとりに大きな藤木がそびえていたのであろう。

国土地理院の全国地図には、フジキ地名が21カ所に記載されている。漢字はいずれも「藤木」で、これだけ中・大字名になっていることは、それだけ藤木が珍重されていた、ということかもしれない。

【蔵ノ平】

クラノタイラ。

この小字は、伊賀良井・大道に接しており。フジキイ(藤樹井)小字の北側に位置している。

クラ(蔵・倉)は、穀物などを火災・水湿・盗難などから守り、保管・貯蔵する倉庫のことをいう(広辞苑)。

地元でもいうように、クラノタイラとは、「年貢米などを保管していた倉があった平坦地」のことをいうのであろう。

全国地図の中にはクラノタイラ地名は3カ所に記載されている。宛てられている漢字は、いずれも「倉平」となっている。

【札場・札場井】

フダバ。屋号にもなっている小字である。

フダバ小字は、2カ所に分かれている。いずれも伊賀良井・大道に接している。

一つは、イナリ(稲荷)小字群の南側にあり、もう一つは、それよりも南のマエダ(前田)小字の北側になる。かつては二つのフダバ(札場)

小字に挟まれた地域も、フダバだったのかもしれない。少し広すぎるようにも思えるが。

フダバ（札場）地名は、全国の中・大字の中に18ヵ所、「札場」地名は、20ヵ所もある。

フダバ（札場）とは、「江戸時代、人通りの多い辻や橋のたもとなどにあつた、種々の布告や禁令の制札を立てておく場所」（国語大辞典）である。長野原のフダバも同様であろう。

フダバイ（札場井）は、文字通りフダバ小字から伊賀良井を分けて取水している井水のこと。フダバ（札場）のすぐ南、下流側にある。札場井はさらに南東方向に流れてコサク（小作）小字に抜けている。

【前田・東ノ田・中ノ田】

マエダ・ヒガシノタ・ナカノタ。

これらの小字のおおまかな位置は、前田が伊賀良井に最も近く、前田に続く東ノ田と中ノ田と後で触れる沖ノ田は、今のべた順に東の方へと伊賀良井から離れて並んでいる。マエダ小字は多く、西の方にも、南西の方向にもある。

タ（田）は必ずしも田んぼを意味しない。方向や場所を表す接尾語ト（処）の転訛と見る方が、現地の状況に合っていることが多い。ここでは、「タ（田）」は「耕作地」としておきたい。

マエ・ヒガシ・ナカ・オキの方向の基準はフダバ（札場）小字か伊賀良井であるが、どちらとも決めがたいが、マエが札場で、他は伊賀良井か。

【沖・オキ井・沖ノ田・沖ノ原】

オキ・オキイ・オキノタ・オキノハラ。

これらの小字は、伊賀良井からオキイ・オキ・オキノタの順に、東側にほぼ並んでいる。オキノハラだけは離れていて、オキノタの南、150mの位置にある。

伊賀良井からオキ（沖）に灌漑用水を運ぶ井水がオキイ（沖井）で、その水はさらにオキノ

タ（沖ノ田）まで運ばれていたのであろう。

オキとは、「奥」を表しているが、長野県では「田畑の広い所」を意味することが多いという（語源辞典）。

長野原のオキは何を意味しているのだろうか。オキは伊賀良井から100mほど離れているので「奥」を意味しており、そのオキに用水を運ぶ伊賀良井の分流をオキイとした。オキノタは「奥にある耕作地」、オキノハラは「奥にある開墾地か、あるいは草刈り地」をそれぞれ意味しているものと思われる。

国土地理院の全国地図には、オキ地名は95件、「沖」地名は90件と、多い。オキノハラは4件、オキノタも1件あるが、オキイ地名は無い。

【福宮】

フクミヤ。

フクミヤ小字は、イナリギワ小字とオキ小字に挟まれている。

文政五年（1822）の長野原神社一覧には、小字「並塚」に福宮という小祠があると書かれている。この並塚というのは、現在のフクミヤ小字とほぼ重なっており、二つの円墳が並んでいたので、「並塚」と呼んだらしい。

一つの円墳頂に福宮の小祠が祀られていたのではないだろうか。

福宮というのがはっきりはしないが、多分、福神を祀るお宮で、福神とは、「財物にめぐまれるしあわせを授ける神。ふくのかみ」（広辞苑）のことらしい。さらにややこしくなるが、福神は、民俗的稲荷神の一つだという。山の神・田の神・水神・祖霊神・農耕神や蚕神などのおなかまでである。

フクミヤ小字の近くには稲荷神社があつたらしいので、ここでつながる。

国土地理院の全国地図にも、1ヵ所だけ、フ

クミヤ（福宮）地名がある。

【林ノ腰】

ハヤシノコシ。

フクミヤ小字の南側に位置する、広い小字である。

ハヤシノコシとは、わかりきったような意味だが、意外と明瞭ではない。ハヤシは樹木の生えている所、とせざるをえない。コシは動詞コス（越）の連用形の名詞化で、越えてハヤシに達するような場所、つまり、「樹木の生えているところの付近」ということになる。

うやむやな感じがするが、今のところはこれしかないような気がする。

全国地図にはハヤシノコシ地名は一つもない。

【樋ノ口・樋ノ口掛り・樋ノ口井・トヨノ口井掛り】

トヨノクチ・トヨノクチカカリ・トヨノクチイ。

これらの小字は、大道と伊賀良井の交差する付近にある。

トヨノクチは水を分けて流す、その取り入れ口のことをいう。トヨはトイの方言。カカリは入口のことだから、トヨノグチカカリ・トヨノクチイガカリはトヨノグチと同じ内容をいい直している。トヨノクチイは、トヨノクチを固有名詞としてとらえていて、トヨノクチから取り入れている井水のことをいう。

【いなり・いなり際・稲荷前・稲荷腰】

イナリ・イナリギワ・イナリマエ・イナリゴシ。

これらの小字のうち、イナリゴシ・イナリ・イナリギワ小字は、現在のJA竜丘支所の敷地内にあり、ダイドウ（或いは伊賀良井）から、東に並んでいる。ダイドウ（大道）からイナリゴシ（稲荷腰）を抜けてイナリ（稲荷）に達する。その奥にイナリギワ（稲荷際）がある、と説明することができる。イナリマエ小字は東西に並んだイナリ関連小字の南側（伊賀良井の下流側）

にあり、これも、稲荷神社の前にあるために名付けられたものである。

稲荷神はもともと穀霊神であつたが、生業守護神となり、さらに人々の諸願を成就する神となつて信仰を集めていったらしい。

現在、JA敷地内に稲荷神社も村誌にいうところの、羽場小字にあつたという稲荷大明神社も同じと思われるが、金山神社境内に移されている。

国土地理院の2.5万分の1地図には、イナリ地名が43ヵ所と比較的多いのは当然であるが、イナリマエ地名も9ヵ所、イナリゴシ地名も1ヶ所あるのは意外であつた。

【長田】

ナカタとある、ナガタではないのか。

ナカタ小字は、伊賀良井に接し、上のフダバ小字の南側にあつて、東西に長くなっている。

ナガタであれば、「細長い形をした田んぼ」ということになる。ナカタであるとする、「中心となる田んぼ」になるが、フダバ小字が近くにあるので、これもありうる。それでも、ナガタが正解であろうと思っているがどうであろうか。

国土地理院の全国地図には、ナガタ地名が108ヵ所、ナカタ地名は35ヵ所、「長田」地名は73ヵ所となっている。

【水口】

ミズクチ。

ミズクチ小字は2ヵ所、長野原地籍の伊賀良井上流と中流にある。文字通り、「伊賀良井からの分流の取り入れ口」を意味する。単なるミズグチだが、何か意味があるのだろうか。

国土地理院の全国地図には、ミズグチ地名は8件であるが、「水口」地名は37件になる。

【三角田】

サンカクダ。

この小字は、ダイドウ（大道）と伊賀良井が交差するところにある、小さな小字である。ちょうど三角形になっているので、その形状から、サンカクと名付けたのであろう。タ（田）には、「田んぼ」の意味と、接尾語タ（処）を表している場合がある。この場合は、面積からみて、後者か。

全国地図には、サンカクダ（三角田）地名が1ヵ所あるだけ。

【漆畑】

ウルシバタ。

この小字は、果実共同選果場からその東側に及ぶ広い地域にある。

江戸時代に漆樹は、桑・楮・茶と共に四木といわれ、重要植物として、諸国で栽培されたという（国史大辞典）。

ウルシは漆樹で、漆器類をつくる漆液を採取した。これは山野に自生するヤマウルシとは異なる。ホンウルシという。

ウルシバタ（漆畑）とは、「このウルシを栽培していた畑」である。現在、鷲流峡にあるウルシはこれらが逸出したものと思われる。

【坂頭】

サカガシラ。

この小字は、段丘の縁にあり、バンバザカ小字とウルシバタ小字に挟まれている。

サカ（坂）は、一般的には、「傾斜して勾配のある道路」のことをいうのであるが、このサカガシラ小字は平面的な広がりがあるので、道路のことではない。

国語大辞典によれば、サカ（坂）は、「一方は高く一方は低く傾斜して勾配のある所」で、カシラ（頭）は、「物の最も上の部分」である。

つまり、サカガシラとは、「傾斜地の最も上の部分で、平坦地か傾斜が緩んだ部分」ということになろう。これは、現地の地形とも矛盾して

いない。

サカガシラ（坂頭）という地名は、一般的で各地に散在しているのではないかと思われるが、全国地図には1ヵ所もない。

【上ノ橋場】

カミノハシバ。

この小字は、伊賀良井に接して、東側に下がる斜面上にある。

この地名を見たときには、即座に、伊賀良井の長野原では上流にある、伊賀良井に架かる橋のあるところではないか、と思った。しかし、少し考えてみると、疑問は出てくる。伊賀良井に架かる橋が、地名になり得るだろうか、ということ。

また、カミが伊賀良井の上流というのはどうなのか、ということ等。

カミノハシバ小字のすぐ北側には、カミハバがある。このカミ（上）と同じだから、やはり「傾斜地の最も高い所」であろう。

ハシバ（橋場）のハシは橋梁ではなくて、ハシ（階）で、きぎはしのこと。もともとは、庭から屋上に上がる通路として設ける階段のことをいうが、ここでは、階段状の斜面をハシと表現していると思われる。

すなわち、カミノハシバとは、「最も高いところにある、階段状の斜面」を意味している。

なお、2.5万分の1の全国地図には、ハシバは38ヵ所もある。長野原のハシバと意味するところは異なって、「橋のあるところ」である場合の方が多と思われるが。

【下平】

シタダイラ。

JR飯田線のトンネルの北側を抜けたあたりに、シタダイラ小字はある。この小字は、天竜川の崖縁まで広がっている。

長野原の下の段丘で比較的平らな場所だから、シタダイラ（下平）で、ウエダイラ（上平）に対するシタダイラであろう。

【藪下】

ヤブシタ。

シタダイラ小字にはまり込んでいる、長方形の小さな小字である。

ヤブは、低木や竹などが生い茂っているところをいう。この場合は、ヤブシタ小字の西側にある一段高い段丘面に達する手前の急斜面をさすものと思われる。

シタ（下）には、湿地をいう場合もあるが、ここのヤブシタは、単に「下の方」でも通じる。

ヤブシタ（藪下）とは、オオヤブ（大藪）の下方にあるところを意味するものと思われる。

意外なことに、全国地図には、ヤブシタ地名も「藪下」地名も全く記載がない。

【下平田尻】

シタダイラタジリ。

この小字は、シタダイラ小字と天竜川峡谷との間にある。

シタダイラはシタダイラ小字のこと、タジリは耕作地の後方をいう。つまり、シタダイラタジリ（下平田尻）とは、「シタダイラ小字に続く土地で、耕作地の後方にあたる場所だが、耕作できない峡谷までを含む」ことをいう。

2.5万分の1の全国地図には、タジリ地名が85件、「田尻」地名も85件と多い。それだけ大切な土地であったということであろうか。

【坂下】

サカシタ。

サカシタ小字は2ヵ所に分かれているが、面積の大きな方は、バンバザカ（万場坂）小字の急傾斜地を挟んで、サカガシラ（坂頭）小字と対称的に、急傾斜地の下の段丘上にある。すな

わち、「頭」と「下」が対称的な位置になる。

面積の小さなサカシタ小字は、いまのサカシタ小字から50mほど東側にある。

二つのサカシタ小字の間の部分も、かつては二つのサカシタ小字と一体となっていたものと思われる。

国土地理院の全国地図では、サカガシラ地名は無かったが、サカシタ地名は83件、「坂下」地名は90件と多いのは、サカシタ（坂下）地名がありふれた地名であるからであろう。

【岩畑】

イワバタ。

イワバタ小字は、二つのサカシタ小字に挟まれている、急傾斜地の下の緩やかな傾斜地にある。

イワ（岩）には、石の大きなもの、という一般的な意味の他に、「大きさが石と土との間のもの。砂利の類」という意味もある（国語大辞典）。

従って、イワバタ（岩畑）とは、「小石が混じっている畑」の意と解したい。

2.5万分の1の全国地図には、意外にも、イワバタ地名はゼロで、「岩畑（イワハタ）」地名が1ヵ所あるだけ。

【釜ノ山】

カマノヤマ。

この小字は、長野原段丘の東端にあたり、天竜川峡谷の崖に接している。

カマ（釜）といのは、飯をたいたり湯を沸かしたりする金属製の用具で、鍋よりも深い。

カマノヤマ（釜ノ山）というのは、この「釜を伏せたような形をした山」ということになる。2,500分の1の地図には、その通りの丸い山が描かれている。山の高さは4m余となっている。現地にはそれほど高い山は見当たらない。山も平されてしまっているようだ。

全国地図にはカマヤマ（釜山）地名が1ヵ所あるだけ。

【釜】

カマ。

カマ小字は、カマノヤマ（釜ノ山）小字の南側にあり、東端はウバガフトコロ小字を抱えた天竜川峡谷の断崖になっている。

このカマは何を意味しているのか、結論を出すのが難しいが、仮説を三つ挙げておきたい。

①北側のカマノヤマとの関わりで、カマとしたということも考えられるが、必然性が薄い。

②製陶用のカマ（竈）があった可能性もある。天竜川の崖の上に位置しているので、南東の強い風も利用できることから、地形的には有利な竈場となる。しかし、それらしい遺物が出土したということはまだ聞いていない。

③語源辞典によれば、動詞カム（囓）には、水が岩や砂を激しくえぐる、という意味があり、カム（囓）・マ（間）→カマ（釜）と転化したもので、カマとは、「えぐられたような崖地」を意味する、という。現地をみると、カマ小字は、2ヵ所で天竜川に大きくえぐられている。一つはカマノヤマ小字との境、もう一つはウバガフトコロ小字のあるところ。

ここでは、第三のカマ=えぐられた崖説を支持しておきたい。

全国地図には、カマ地名は14ヵ所に記載されている。

【乳母ヶ懐】

ウバガフトコロ。

この小字は、天竜川峡谷の鷲流峡の断崖の上にあり、カマ小字に囲まれている。

全国地図にも4ヵ所で記載されており、全国的にもよく知られた地名の一つである。

ウバガフトコロとは、国語大辞典によれば、

うばに抱かれていることから、冬の寒い日などでは、風のこない暖かい場所、特に山ふところの日だまりの地をいう。

気になることが一つ。国語大辞典には、ウバガフトコロのような土地は、製陶に適している、とある。長野原のウバガフトコロはどうであったのか。

【犬戻シ】

イヌモドシ。

この小字は、長野原地籍では3ヵ所にあるが、いずれも鷲流峡の断崖かその上にある。

国語辞典では、「犬戻り」（広辞苑）になっていたり、「犬返し」（国語大辞典）であったりするが、意味はほとんど同じで、「犬も進むことができないほどの、けわしい山路」（広辞苑）となっている。

イヌモドシのモドシは動詞「戻す」の連用形が名詞化したもので、イヌモドシとは、「犬を戻すような険しい断崖の道」ということになる。

国土地理院の全国地図には、イヌモドリ（犬戻り）地名は2ヵ所にあるが、イヌモドシとイヌガエシは1ヵ所もない。他動詞でではなくて、自動詞が採られているということが面白い。

【久保】

クボ。

長野原のクボ小字は北はカマ小字に、西はナカミチ関係小字に、東はイヌモドシ・フジツカ小字に接していて、長野原の南端に位置する。

クボ（久保）は、周囲より低く凹んだ所であるはずであるが、住宅が密集しており、恐らく住宅建設時には平されていると思われるので、まだ窪地であることを確認できていない。

全国地図には、クボ地名は265件もある。

【フジ塚】

フジツカ。

この小字は、長野原地籍の最南部にあり、クボ小字と鷲流峡谷の間に位置する。

フジツカは近世の富士信仰遺跡で富士信仰の講中により造営された富士山の形を模した塚である。

だから、このフジツカ小字にも、小丘があってもいいのであるが、平地になっていて住宅が建てられている。富士山に見立てた小丘が、はじめから無かったのか、それとも後に削られて平されたのかは、はっきりしない。

富士信仰とその結社である富士講が盛んであったのは、江戸時代の文化・文政期（1804—30）以降。

長野原の金山神社境内には、富士塔の石碑がある。この石碑が、フジツカ小字にあったものなのか、あるいは、フジツカ小字の藤塚をならした時に、新たに金山神社境内に建てたものなのか。この辺ははっきりしていない。

全国地図でも、フジツカ地名が載っているのは8ヵ所と、意外に少ない。

【黒瀬ヶ淵】

クロセガフチ。

この小字は、天竜川峡谷である鷲流峡の右岸にあり、北側のイヌモドシ小字と南の時又境までの長い地籍となっている。

黒瀬ヶ淵は、いくつかの伝説の舞台となっているところで、底しれぬ不気味さを湛えた天竜川の淵である。

クロには、山の斜面などの意味もあるが、ここではクロ（黒）で色が黒みを帯びている、ということ。セ（瀬）は、浅瀬のことも早瀬のことも意味しているが、広く川の流れも表しているというので、この場合は単に川の流れを示していると解したい。フチ（淵）は、水が淀んで深いところ。

以上をつなげると、クロセガフチとは、「黒みを帯びた流れの淀んでいる、深い所」ということになる。クロセガフチ小字の全体がこうした流れになっているということではなく、一部に不気味な黒みを帯びた淵があるということであろう。

なお、2.5万分の1の全国地図に、クロセ（黒瀬）地名は60ヵ所もあるのに、クロセガフチとなると、ゼロというのも、当然なのかもしれない。

【草木林】

クサキバヤシ。

この小字は2ヵ所にある。大きい方の小字は、西側はミヤマエ小字に、東側は時又境に接している。面積の小さなクサキバヤシ小字は、北側のハラ小字に囲まれている。二つの小字は、以前は一つになっていたものと思われる。

クサキバヤシとは、「草と木の生えている林」であるが、あるいは、「草と木が生えている原野」としてもいいと思われる。いずれにしても、未墾の地で柴山として利用されていたのではないだろうか。

2.5万分の1の全国地図には、クサキ地名が5件、「草木」地名は20件となっているが、「草木」の読みはクサキの他にクサギが多い。

【湯之瀬】

ユノセ。

この小字はクロセガフチ小字の中にある。対岸では鮎ヶ沢が合流している場所である。かつて湯ノ瀬温泉のあった所。

ユノセ（湯之瀬）とは、「温泉の湧き出る川」あるいは、「川に近い温泉施設のあるところ」の意か。

国土地理院の全国地図には、ユノセ地名が2ヵ所記載されている。

【原】

ハラ。

ハラ小字は、時又との境にあり、クサキバヤシ小字の北側になる。

ハラ地名は2.5万分の1の全国地図にも450ヵ所が載っており、非常に多い地名の一つである。「原」地名となると、ハルもふくまれるので、519ヵ所という膨大な数になる。ハラ（原）は、ありふれた地名といえよう。

ハラ（原）は、クサキバヤシ（草木林）と同じように、未墾の入会草刈り地で、柴山として利用されていたと思われる。

【下羽場】

シモハバ。

この小字は、長野原地区の南東隅にある。

北の駄科との境に、カミハバ（上羽場）小字があり、西の桐林との境には、ニシハバ（西羽場）があるので、これらのハバと対応するように、シモハバと名付けられたのではないだろうか。

ハバについては既に触れているので、ここでは省きたい。

シモハバとは、「下の方にある傾斜地」を意味するか。

【中道・中道西付・中道東・中道東付】

ナカミチ・ナカミチニシツキ・ナカミチヒガシ・ナカミチヒガシツキ。

これらの小字は、ハヤシノコシ（林ノ腰）小字とクボ（久保）小字の間にある。

これらの小字は時又の飛び地となっていて、わかりにくい小字であった。

ナカミチ（中道）とは何か。ナカミチ（中道）は、長野原の中央を南北に走るダイドウ（大道）に対応していると思われる。中道は「三本のうち中間の通り」（語源辞典）と考えたいが、もう一本の中道よりも東側にあると思われる道は、ホッキ（発起）を通る、旧国道151号線しか、該当する道はないが、ナカミチ小字が成立した

ときに、既にホッキの道はあったのだろうか。

ホッキに県道を通すことが決まったのが明治十五年で、開通が明治二七年となっている。だから、三本目の道を、ホッキを通る県道とするには無理があるかもしれない。

しかし、ホッキを通る、人がやっと通れるほどの道はあったのではないか、と思えるがどうであろうか。これが、三本目の道ということになる。

中道西付は中道の西側にある土地、中道東と中道東付は同じで、中道の東側にある土地を、それぞれ意味している。

国土地理院の2.5万分の1地図には、ナカミチ地名が39ヵ所、「中道」地名は40ヵ所と多い。

【長野原】

ナガノハラ。

小字ではなくて、近世の旧村名である。

長野原とは何を意味しているのだろうか。仮説は二つ。

一つは、「長く延びた形をした、草などが生えている広い平地」。もう一つは、あるいは、ナガ（長）は動詞ナガル（流）の語幹で、水が流れるほどの傾斜地を意味する場合もあるので、長野原とは、「緩い傾斜地の草などが生えている、広くて緩い傾斜地」を意味する。このどちらか。

なお、2.5万分の1の全国地図には、「時又」を含めた4件が記載されている。

【長野原の小字について】

飛び地が交錯してわかりにくい地域であるが、地元の長野原歴史研究会で作成した小字地図を使わせていただいた。数ヵ所で原図とことなっているところもあるが、お許しいただきたい。

《駄科地区》

【駄科】

ダシナ。

大字である。駄科区には難しい地名が多そうだとみていたが、冒頭から難解地名になっている。しかし避けては進めないで、主として語源辞典によって、いくつか仮説を挙げておきたい。

ダ（出、田、駄、多）←タで、①タ（田）はト（処）が転訛したもので、水田だけではなく畑の意味もあり、「耕作地」を表す。②接頭語で、単に語調をととのえるもの。③タ（多）で、「たくさん」の意味。

シナ（科、品）は①シナ（階）で、「段丘」を意味する。②動詞シナフ（撓）の語幹で「たわんだ土地」を示す。北東に下る斜面がナガイケ小字付近の低地に達してから、再びジョウロクに向けて上る。これが撓みになっていると見ることもできる。

ダとシナを組み合わせると、六通りの仮説ができる。これらの中で、頷けそうなのはどれだろうか。三つほどに絞ってみたい。一、「耕作地が段丘になっているところ」。二、「段丘の多いところ」。三、「小さな盆地状にたわんだところ」。どうであろうか。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、ダシナ地名は全国地図の「時又」で1件の記載があるだけ。普遍的な地名ではないと言えるかもしれない。

【ヤクシ・ヤクシ前・ヤクシマヘ・薬師堂・ヤクシ堂・ヤクシ堂前】

ヤクシ・ヤクシマエ・ヤクシドウ・ヤクシドウマエ。

これらの小字は、国道151号線の西側で、駄科区の北部に集まっている。複数の箇所にもわたる小字もあるので、煩雑を極める。土地所有の関係で、細かく分ける必要があったと思われるが、ヤクシの名称は好字として引く手あまた、であったのだろう。

これらの小字の中心部分に、駄科薬師堂がある。天文十一年（1542）に旧飯田領内に十二薬師を祀ったが、駄科の薬師堂はその四番目にあたるといふ。小字の命名は、このとき以降ということになる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、ヤクシ地名は15件、載っており、全て「薬師」の字を宛てている。さらに、ヤクシドウ地名は49件にのぼる。一般的な地名といえよう。

【ハバ・ハバ山・ハン場山・羽場】

ハバ・ハバヤマ・ハンバヤマ。

これらの小字は、駄科区の北東の隅にある。毛賀沢の谷の上になる。

ハバ小字は各地にある。崖や急な傾斜地をいう。ハバヤマは「崖のある山」である。

ハンバ←ハバと撥音便変化をしたもので、ハバと同じ。ハマ、ハブ、ババとつながる。ハンバ山＝ハバ山、とみていい。

いずれも毛賀沢が削ってできた崖に関わった小字地名である。

【市場屋敷】

イチバヤシキ。

この小字も、駄科区の北端にあり、一部は毛賀沢に面している。また、ダイドウバタ小字にも接している。

かつての有力者の屋敷跡で、そこで、あるいはその近くで、市が開かれていたこともある場所だろうと思われる。

国土地理院の2.5万分の1地図には、イチバヤ

シキ地名は、当然というべきか、1件の記載もない。

【毛賀澤ピラ】

ケガサワピラ。

この小字は毛賀沢右岸の谷の急な斜面にある。

毛賀澤のケガとは何を意味するのか。語源辞典によりながら、二つの説を挙げておく。

①ケガは怪我のケガで、体に傷がつくことから、地名になると、「引っかかれたような傷のある所」で崩壊地形があることを表している。

②ケガ←キガと転訛したもので、キ（城）・ガ（処）で「城があったところ」を意味する（語源辞典）。城とは、もちろん、鈴岡城と松尾城のことをいう。

ピラ←ヒラで濁音化したもの。これも語源辞典によれば、「崖や傾斜地」のことをいうらしい。アイヌ語でピラは崖を意味しているが、このアイヌ語と祖語を同じくする可能性が高い、という。

毛賀澤ピラとは、「毛賀澤に面している急な傾斜地」としておく。

国土地理院の全国地図には、中・大字の中に、ピラ地名は2件しかないが、ヒラ地名は44件と多い。

【大道端】

ダイドウバタ。

この小字は、7ヵ所ほどある。

ダイドウ（大道）のつく小字をたどってみると、長野原の中央道から、大井が大きく曲がる所で駄科の旧道に入り、そのまま毛賀沢へ下っている。途中でシミズ小字もあり、大道即東山道ではないといわれている（黒坂周平氏）が、これが東山道の一つのルートではないかと勝手に想像している。シミズ（清水）は大道を行き来する旅人達の渴きを癒してくれる、という意味

で、大道を考える上で、注目したい地名である。

ダイドウバタ（大道端）とは、「大きな道に添った所」の意であろう。

なお、国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、ダイドウ地名が25件、「大道」地名は37件と多い。オオミチと呼んでいる所もかなりある。

【インデン・西院田】

インデン・ニシインデン。

インデン小字は4ヵ所にある。3ヵ所は駄科の中の段丘の北端に、もう一つは伊賀良井左岸の長野原との境にある。ニシインデン小字は、中段にあるインデン小字のすぐ西側になるので、頭にニシが付いている。

インデンは、院田・印田・陰田などの字が宛てられているが、オンデン（隠田）と同じで、「中世、近世に国家や領主に隠して租税を納めない田地」（広辞苑）を意味する。

インデンについては、口碑が残っている。戦国時代に、関氏を滅ぼして力をつけてきた下條の下條氏と駄科の小笠原氏は勢力争いをしており、この地の平和の願っていた開善寺・文永寺の和尚の仲立ちで、両氏は縁を結ぶことができた。しかし、下條氏の台頭を怖れていた小笠原信嶺は、婿の下條頼安を招いておいて闇討ちして殺害した。後になって、駄科の木下源三郎氏が下條頼安の法要塔を建てたが、その戒名が「鷲山院殿額安詠月日照大居士」だったので、インデン（院殿）としたという（木下広司さん）。

この口碑は地名については、分かり易いが、付会であると考えた方がいい。

ニシインデン（西院田）は「西にある隠し田」を意味する。

中・大字にするには狭すぎるのであろうか。国土地理院の2.5万分の1地図には、インデン地

名は1ヵ所が載っているだけである。

【反在家】

タンザイケ。

タンザイケ小字の周辺には、他に、ニシインデン・キタガイト・シモなどの小字に囲まれている。

語源辞典では、タン（反）は、タナ（棚）の転じたもので、「台地」をいうものとしているが、むしろ、タン←ダン（壇）と、清音化した、と考えた方がいいのではないだろうか。ダン（壇）は「他よりいちだんと高くなっている場所」（国語大辞典）である。

現地で見ると、緩い傾斜地になっていて、東隣のニシインデンもその東側より少し高くなっているが、タンザイケ小字もニシインデン小字よりも少し高くなっていることがわかる。

ザイケ（在家）は、寺域・寺領内に住む耕作者のことをいうので、ここの駄科のザイケ（在家）は、「十王堂の敷地内に住んでいた耕作者」ということになる。

以上からタンザイケ（反在家）とは、「東側よりは一段高い所にあつて、十王堂の敷地内に住んでいた耕作者の居住地」としておきたい。

国土地理院の2.5万分の1地図には、「反在家」地名は勿論のこと、タンザイケ地名も1件の記載もない。

【カキノキ畑】

カキノキバタ。

この小字は、駄科の上の段丘の北端に近く、毛賀沢右岸の急傾斜地から25mほどの所にある。

カキノキバタの解釈は二つ。

①文字通り、「柿の木が植えられていた畑」であるとする。周辺とくらべて柿の木が目立つというのはどうなのか、地名にするほどのことなの

か、という引っ掛かりはある。

②カキ（欠）・ノキ（除）と、類語を重ねているが、崖などの崩壊地形を表す（語源辞典）というもの。カキノキバタとは「毛賀沢崩壊地の崖に近い畑」ということになる。この解釈の方が受け入れやすいように思えるがどうだろうか。

全国地図の中・大字には、カキノキ地名は32ヵ所が記載されている。

【十王堂・十王堂平】

ジュウオウドウ・ジュウオウドウダイラ。

ジュウオウドウ小字は、駄科には多い。

ジュウオウドウダイラ小字は、旧道（大道）添いにある。

十王信仰は平安末期に末法思想や冥界思想と共に広く浸透。地藏十王経が作られ、閻魔の本地仏は地藏菩薩であるとされ、地獄からの救済を閻魔に願うようになった。閻魔の画像や彫刻がみられるのは鎌倉時代からで、中に閻魔や十王・奪衣婆を配した堂を、十王堂といい、墓地や村境、寺の入口に建っていることが多い（民俗大辞典）。

十王堂は転々と移動していたために、駄科の各地に地名として残ったのではないかと思われる。現在は薬師堂に十王は祀られている。

この十王堂は“駄科の惣堂”として使われていた可能性もある。

2.5万分の1の全国地図には、ジュウオウドウ地名は、6ヵ所にある。「十王堂」の漢字を宛てているのは4ヵ所。

【カシ畑】

カシバタ。

この小字は、4ヵ所とも駄科の上の段丘の北端、毛賀沢右岸の急斜面とその段丘端にある。

カシバタとは、柏・樺が生えていた畑であるという理解もないわけではないが、それがどうし

た、という感じで地名にはなりにくい。

カシは動詞カシグ（傾）の語幹で、谷壁などの勾配の急な傾斜地（語源辞典）とみたい。ハタには、ハ（端）・タ（処）で、縁の意味もある。合わせて、カシバタ（カシ畑）とは、「毛賀沢の浸食地形である右岸の急傾斜地で、その縁も含めた場所」という意味になるのではないだろうか。

2.5万分の1全国地図には、カシバタ地名もカシハタ地名も記載が無い。

【北垣外】

キタガイト。

この小字の南側には、マエダ小字がある。北側のヤマブシヅカ小字との間に挟まれている。この小字は屋号にもなっている。

キタガイト（北垣外）とは何を意味するのか。意外と難しい。三つの解釈を挙げておきたい。

①キタガイト（北垣外）を文字通りに解釈すれば、「何かの北の方にある屋敷跡」ということになるが、この「何か」は最近発掘された御堂跡をいうのであろうか。

②キタ←キダと濁音化したもので、キダハシ（階段）を意味する。とすると、キタガイト（北垣外）は、「周囲が階段状になっている屋敷跡」というのはどうだろうか。

全国地図には、中・大字として、キタガイト地名が10ヵ所、「北垣外」地名が6ヵ所、載っている。

【池田】

イケダ。

イケダ小字は、駄科の上の段丘上にある。2ヵ所あり、一つはトサヤシキ小字の南側に、もう一つは段丘の北端で、毛賀沢の浸食崖の近くにある。

イケダ（池田）とは、「わき出る泉を利用した田んぼ」のことで、灌漑用溜め池を伴っていな

いものが多いという（語源辞典）。

駄科のイケダは、水持ちのいい土地で雨などの自然水を溜めて灌漑用水として使っている。

2.5万分の1の全国地図には、イケダ地名は96件もある。中・大字である。普遍的な地名といえよう。(89頁の「池田」参照)

【枅角】

マスカド。

この小字は、鈴岡城址の東側に2ヵ所ある。

マスカドとは城址にあるマサガタ（枅形）のことであろうか。

マサガタは、「城門を前後二重に設け、その間の四角な平地の周囲に石垣を造り、出陣のとき軍勢が集まる所。また、ここで表の門を打ち破ってはいった敵を攻撃する」（国語大辞典）ところである。

二ヶ所にマスカドがあるということは、鈴岡城は二重に防備を固めていたのであろうか。

全国的には、2.5万分の1地図を見ると、マスカド地名も「枅角」地名も1ヵ所もないが、マサガタ地名は7ヵ所に中・大字として記載されている。

【古屋敷】

フルヤシキ。

この小字はキタガイト・ジュウオウドウ・マスカドの小字に囲まれている。北垣外や十王堂があるので、建造物があった地域であろう。

フルヤシキ（古屋敷）とは、「以前に屋敷があったところ」である。誰の屋敷だったのか、一般の農民ではないだろう。兵農分離策で、離農して駄科を去って行った者だった可能性もある。

こうした古屋敷は各地にあるらしく、2.5万分の1の全国地図には、中・大字の中に、フルヤシキ地名が67ヵ所、「古屋敷」地名が71ヵ所と多い。

【ツカダ】

この小字は、道路とキタガイト小字に囲まれている、小さな小字である。

ツカは古墳のこと。村誌には円墳のようにも書いてあるが、今は跡形もない。ダは「田」か「処」であるが、どちらとも言えない。

ツカダとは、「円墳のあった所」または、「円墳があった水田」である。

なお、国土地理院の全国地図には、22ヵ所のツカダ地名が載っている。

【ツカ北】

ツカキタ。

この小字の周辺には、ヤマブシヅカ・キタ・キタガイト・マスカドなどの小字がある。

ツカキタのツカとは、近くにある山伏塚ではない。古墳ではないからである。

ツカは南南西65mほどの所にあった、塚田古墳である。

ツカキタとは、「塚田古墳の北の方にある土地」ということを意味する。

ツカキタ小字は、あまり意味のある小字とは思えないのであるが、全国地図でも、ツカキタという中・大字は、一つも載っていない。

【三バ田】

ミツバタ。

この小字は、十王堂・横枕・マエダ・北垣外などの小字に囲まれた、長方形の小字である。現在は水田になっている。

ミツバタとは何か。これが難しい。解釈案を出さないでは先に進めないのが、怪しげではあるが、仮説を提示しておきたい。

ミツバタ（三バ田）←ミズハダ、と転訛したもので、ハダは静岡県では水田を指すところもある（語源辞典）ので、ミズハダは、「湿地で水分の多い田んぼ」を意味している。

あるいは、ハタには、二毛作田の意もあるので、この小字名が発生した当時、ミツバタで二毛作が行われていたとすれば、「湿地ではあるが二毛作が行われた田んぼ」ということになるが、これは無理げみか。

国土地理院の2.5万分の1地図には、ミツバタという中・大字は無い。

【屋敷田】

ヤシキダ。

この小字は、マスカドとキタ小字に挟まれた、小さな小字である。

ヤシキダ小字は、土佐屋敷や市場屋敷は勿論のこと、北垣外や古屋敷にくらべても狭い。この小さな小字の中に、誰かの屋敷があったとは考えられないが、この小字が屋敷の一部であった可能性はある。

ヤシキダ（屋敷田）とは、「どなたかの屋敷があった所」あるいは、「どなたかの屋敷の跡地に作られた田んぼ」である。

全国地図の中・大字に、ヤシキダ地名は5件の記載がある。

【タナ田】

タナダ。

この小字は、駄科の上の段丘の北端にあり、毛賀沢右岸の浸食崖に接している。

棚田とは、「急な傾斜地を耕して階段状に作った田」（広辞苑）であるが、この駄科のタナダ（タナ田）は、浸食崖があまりにも急峻に過ぎるので、棚田を作るのは難しい。この小字の付近は東側に緩く傾斜しており、この緩傾斜地に棚田が出来ていたのであろう。今は構造改善事業で、棚田とは言えないような面積の広い田んぼになっている

2.5万分の1全国地図には、中・大字として、タナダ地名が11ヵ所あり、いずれも「棚田」の

字を宛てられている。

【山伏塚】

ヤマブシヅカ。

この小字は、3ヵ所にある。北平上段の段丘の北端に、少しずつ離れて散在している。この他に、下平の新旧国道の駄科交差点に、1ヵ所ある。

山伏塚というのは、山伏を葬ったという伝説をもつ塚をいう。その中で、山伏が刑死したとか不慮の災難で死んだとするものは、いずれも死後に祟るといわれており、その霊を慰撫すべく山伏塚が築かれた、とされている。御霊信仰である。

駄科の山伏塚は、盛り土は平されており、その痕跡もないようだが、伝説は残されているのだろうか。

国土地理院の全国地図には、「山伏塚」地名は、なぜか、1ヵ所もない。中・大字にするには、小さすぎるといことであろうか。

【北】

キタ。

キタ小字は、上段の段丘の北端にある。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字の中に、キタ地名が127ヵ所、「北」地名は108ヵ所も記載されている。それだけ一般的な地名であることはわかるが、この地名が簡単であるためであろう。

キタ（北）小字の近くに、ツカキタ（ツカ北）やキタガイト（北垣外）の小字があるのが、気になる。関連はあるだろうと思われる。

キタ（北）とは何を表しているのだろうか。三つ、仮説を挙げておきたい。

①「段丘の北の方にある土地」であるとする。こうなると、北垣外も「段丘の北の方にある屋敷跡」ということになるが、断定はできない。

②語源辞典によると、キタには「谷に沿った高い台地」という意味がある。毛賀沢の谷からは、25mしか離れていないのだが、毛賀沢に沿うほどの大きさは、このキタ小字にはない。

③キタ←キダと変化したもので、キダはキダハシのことで、「階段状になった段丘」ということになる。

【ナワ手】

ナワテ。

この小字は、駄科の上段の段丘上にある。現在は水田地帯になっている。ヨコマクラ・ジュウオウドウ・ヤマブシヅカ・マスカドなどの小字に囲まれている。

ナワテ（ナワ手）とは、一般的には古代条里制とかかわる地名といわれているが、ここでの解釈としては成立し難いように思われる。では、何を表しているのか。これも難解地名の一つ。考えられることを、二つ挙げておきたい。

①山陰地方では、「田と田の間の小道」のことをいうらしい。畔のことだが、どうも伊那谷周辺にはない言葉と思われるがどうであろうか。

②ナワテは「まっすぐな長い道」（広辞苑）であるという。城址にかかわる地名であるともいわれている。ここのナワテは「鈴岡城にまっすぐに向かう道路」を意味する可能性は高い。

全国地図には4件あり、全てが「縄手」。

【オノ神】

サイノカミ。

この小字は、段丘の上の段（北平）の東端にある。

サイノカミ（オノ神）は、塞神で、塞は岐神（クナド神またはフナド神）の信仰であって、疫癘邪霊等の入ってくるのを防ぐために祀ったもの（民俗学辞典）。

オノ神は道祖神でもあり、村境に祀られるこ

とが多いのだが、上の段丘の東端にあるだけで、中の段丘との境界に祀ったというのは、段丘崖を境界と見立てたものと思われる。境界とは、神聖な場所であると同時に危険に満ちた場所である。あるいは、かつて、中の段丘と上の段丘との境が集落の境になっていたこともあったかもしれない。

国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、サイノカミ地名が29ヵ所、載っているが、「オノ神」の漢字を宛ててあるのは、その中の1ヵ所だけ。

【柳ノ内】

ヤナギノウチ。

この小字はトサヤシキ小字に接してはいるが、周辺は主に、マスカド・ゴタンダ・ヨコマクラ・マエダの小字がある。

ヤナギノウチ（柳ノ内）が何を意味するのか。これも難解地名ではあるが、仮説を提示しておかねばならない。

①文字通りに解釈すれば、「周辺に植えられた柳の内側」ということになるが、柳の内側に何かがあるのか、周辺の柳にどんな意味があるのか、全くわからない。

②ヤナギとは、下伊那地方では「屋根」のことだという（長野県方言辞典）。となると、ヤナギノウチは「屋根の内」で、建物の中のことを表している、と考えることができる。この地に、土佐屋敷にかかわって、民俗信仰に関わるような建物があつたのかもしれない。

③ヤナギノウチ←柳内←流内、と転化したとする。「流内」は、「一位から八位までの位階を持ち、宮司の長官から四等官を構成する官人にあたる」（国語大辞典）という。官位の価値が下落していた時代だから、土佐屋敷関係者の中に該当者が住んでいたことも考えられる。

いずれの説も、しっくりはしない。

2.5万分の1の全国地図には、ヤナギノウチ地名が2ヵ所、「柳ノ内」地名が1ヵ所ある。駄科のヤナギノウチがでたらめな地名でないことがわかる。

【池田】

イケダ。

この小字は、2ヵ所にあるが、いずれもマスカド（枅角）小字に接している。

イケダ（池田）とは、「湧き出る泉の水で灌漑される田」（語源辞典）で、全国各地にある池田の多くが、灌漑用の溜め池を伴っていない田んぼだという。

ここ鈴岡城趾の麓は、みずはげが悪く、田んぼもやわくて、耕耘機が沈みがちで、使えないこともあるようだ、

（この項は重複してしまっているが、補足の意味で消さないでおきたい）

【土佐屋敷】

トサヤシキ。

この小字は、鈴岡城趾の麓にある上の段丘の北端に位置する。毛賀沢右岸の急峻な傾斜地の上である。屋号にもなっている。

文字通り、「土佐殿が居住していた屋敷跡」である。土佐殿も鈴岡城に関わる有力者であったに違いないが、はっきりした資料は、残っていないのではないだろうか。現地には、土佐屋敷関係者の墓地があるという。

全国地図には地名としてトサヤシキは一件の記載もない。

【前田・マヘダ】

マエダ。

「前田」・マエダ・マイダ小字は、非常に多い。数え落としもあるかもしれないが、18ヵ所になる。

マエダ（前田）とは、語源辞典によれば、「①豪族が屋敷前に持っている田。②神社仏閣の前の田」であるという。

北平（上の段丘）には3ヵ所に固まっている。いずれも豪族の持ち田で、一つは土佐屋敷の前、二つ目は北垣外の前にある一群で、三つ目は青木垣外の前の一群である。

南平にも3ヵ所ある。一つ目は権現堂の近くに、あとの二つは無常堂周辺にある。無常堂は、念通寺の現在地へ移転する前の跡地であろうか。さらに南平には1ヵ所、神送塚の近くに「前田」小字があるが、何のマエなのかがわからない。

マエダ地名は、全国地図の中・大字にも多く、139ヵ所もあり、「前田」の字を宛てた地名も154ヵ所にのぼる。

【溝ヶ洞・溝ヶ洞坂下】

ミゾガホラ・ミゾガホラサカシタ。

ミゾガホラ小字は、鈴岡城趾と念通寺丘陵の間を流れ下る伊賀良井（大井）に沿って両岸に2ヵ所ある。ミゾガホラサカシタ小字は、伊賀良井が駄科上段の平坦地に流れ出た所にある。

ミゾ（溝）は「人工の水路」をいう。ミゾガホラ（溝ヶ洞）とは、「人工の水路である伊賀良井が流れている谷」を意味し、ミゾガホラサカシタ（溝ヶ洞坂下）は「溝ヶ洞の傾斜地を下った下流の方」ということになる。

また、このミゾガホラは鈴岡城の堀につながっているともいう。

2.5万分の1の全国地図には、ミゾガホラ地名も、「溝ヶ洞」地名も、記載は無い。

【坪ノ尻・ツボノシリ】

ツボノシリ。

北平の上の段丘に、「坪ノ尻」・「ツボノ尻」・ツボノシリの3ヵ所がある。

桐林の「坪尻」小字は、壺状の地形の最も下

流部分とした。川路の「ツボの尻」は小字の形状が、マルタニシのことを伊那谷南部ではツボというが、このツボに似ているための命名とした。

駄科北平上段のツボノシリはどうであろうか。確かに1ヵ所はマルタニシのツボに小字の形が似ているが、他の2ヵ所は全く似ていない。同一地域にある小字だから、三つに共通した解釈でなければならない。

語源辞典等に適当な解釈がないので、私見を示してみたい。

この北平上段のツボノシリは、3ヵ所とも、段丘の端にある。ツボというのは、検地の時に用いる面積の単位で、検地で測量をしていった時に、面積などに端数が出るわけで、その端数となった場所をツボノシリと表現したのではないだろうか。

だから、この北平のツボノシリは、「検地で面積の端数が出た土地」としておきたいが、どうであろうか。

【大丁洞】

オオチョウボラ。

この小字は、中段の段丘北端にある、二つのインデン小字に囲まれた、毛賀沢右岸の急傾斜地にある。

オオチョウボラ（大丁洞）は何を表しているのか。難解地名の一つである。

オオ（大）は美称に使われる接頭語。チョウ←テフと転化したもので、オオチョウは「崖になっている所」を表す。

語源辞典によれば、テ（手）はタエ（絶）の転で、崩壊地形・浸食地形を意味し、フ（生）は特に地形名彙の語尾について「～になっている所」を表すという。

オオチョウボラは「崖になっている谷」を意

味するものと思われる。

しかし、ここには口碑が残っている。吉岡城の下條氏と鈴岡城の小笠原氏の争いを取めるために、開善寺と文永寺の和尚が間に立って、両氏の間に縁組みをした。しかし、鈴岡城の小笠原信嶺はこのオオチョウボラに兵を伏せ婿の下條頼安を招いて、殺害させたという。それで、この場所をオウジョウボラ（往生洞）と呼んだが、後にこれをオオチョウボラ（大丁洞）に改め、木下源三郎氏が「鷲山院殿額安詠月日照大居士」という供養塔を建てたらしい。

地名については付会めいた口碑であるが、事実である可能性も高い。

全国地図には、この地名は無い。

【平塚】

ヒラツカ。この小字は屋号にもなっている。

この小字は、鈴岡城趾の南東麓にあり、一方は伊賀良井に接している。

ここには、円墳が一基、辛うじて形を残している。

ヒラ（平）は、古事記のヨモツヒラサカのヒラと同じで、傾斜地を意味する。

ヒラツカ（平塚）とは、「傾斜地に築かれた円墳のあるところ」を表している。

なお、国土地理院の全国地図には、中・大字として、ヒラツカ地名が24ヵ所、「平塚」地名は26ヵ所が記載されている。

【井免】

イメン。

イメン小字は、北平の鈴岡城趾の麓に4ヵ所ある。二つは伊賀良井に接しており、あとの二つのイメン小字は、伊賀良井から北東方向に互いに離れて位置している。

イメン（井免）とは、「井水を維持管理するために免租されている土地」を示している。この

場合の井水とは、伊賀良井とその分流である井水まで含むものと思われる。

竜丘にはイメン（井免）小字は何ヵ所にもあるが、2.5万分の1の全国地図には、1件も記載が無いのはどうしてだろうか。

【横枕】

ヨコマクラ。

この小字は、北平の鈴岡城趾の南東の麓に4ヵ所、散在している。屋号にもある。

ヨコマクラ小字は、各地にある。全国の中・大字にも18ヵ所あり、「横枕」の字を宛てているところも17ヵ所ある。

ヨコマクラ（横枕）とは、語源辞典によれば、「地割りのさい、地形の都合上、区画内の一辺に沿って基準線に平行して横に長く残された土地」であるという。

検地の時のことと思われるが、北平上段の地割りにあたって、基準線はほぼ南北に設定されたらしく、残されたヨコマクラ小字は、いずれも南北に長くなっている。この点が、桐林のヨコマクラ（横枕）とは異なるかもしれない。

【ツカゴシ・ツカコシ】

ツカノコシ・ツカゴシ・ツカコシ。

これらの小字は、同じことを意味している。

これらの三つの小字は、1ヵ所に固まっていて、その中に、前方後円墳である塚越一号墳がある。

ツカノコシ（塚ノ越）とは、桐林のツカゴシ（塚越）と同じように、「塚のふもとで、塚の周辺」とするのがいいのではないだろうか。

全国地図には、中・大字として、ツカノコシは2件、載っている。

【家ノ下・家ノ上】

（イ）エノシタ・（イ）エノウエ。

シタ（下）とウエ（上）は互いに反対語とみ

て、続いて取り上げることにした。

イエノシタ小字は、北平の上段、タカミ・ヲチ・イメン・アオキ・クボタの小字に囲まれている。イエノウエ小字は3カ所。うち2カ所は、北平上段のイエノシタ小字よりも下の方にあり、もう1カ所は、下平で下の段丘にある。

イエ（家）とは何か。考えられることは二つ。①ウエ、シタの基準になるのは、有力者の居住地とする場合が多い。この場合の有力者の居住地はシモ小字にあった屋敷であると思われる。因みにイエノ（家野）地名は、中世豪族の手作り地を意味する（語源辞典）、という。

②イエ（家）←ウエ（上）と転化したもので、「高い所」を示す（語源辞典）。「高い所」とは「タカミ（高見）」小字としたい。北平上段のイエノシタとイエノウエはなんとか辻褃が合いそうだが、下平のイエノウエは、近くにバンショウヅカ小字があるが、これが「高い所」ということができるかどうか。

国土地理院の2.5万分の1地図には、イエノシタ・イエノウエ小字がそれぞれ4件ずつ記載されている。

【内沼】

ウチヌマ。

この小字は、北平の下の段丘にある。ツカノコシ・イエノウエ・ナカノムラ・イマの小字と伊賀良井に囲まれている。

ウチヌマもわかりにくい地名。

ウチ（内）←オチ（落）と転訛したもので、「傾斜地」を意味する。ヌマ（沼）は「湿地」だから、ウチヌマ（内沼）は、「傾斜地にある湿地」を表す（以上は語源辞典による）。

このウチヌマは、近くにあるタカミやナカノムラと一体的になっていて、要害の地であったのかもしれない。

2.5万分の1地図には、中・大字として、ウチヌマ地名が6カ所にある。

【中ノ村】

ナカノムラ。

この小字は、北平の下の段丘の東端にあつて、タカミ・ウチヌマ・イエノウエ小字につながっている。

これもわかりにくい地名である。

ナカ（中）は政治的・行政的・経済的中心地で、ムラ（村）には、「かつての中心地」（語源辞典）という意味もあるという。

ナカノムラ（中ノ村）とは、「いつの時代かわからないが、かつて駄科の中心であった所」と考えることはできないだろうか。タカミやウチヌマは傍証となるとも考えられるが、どうであろうか。

2.5万分の1の全国地図には、ナカノムラ地名は14カ所、載っている。

【ヲチ】

オチ小字は、伊賀良井の左岸の1カ所に散在する。うち1カ所は伊賀良井に接している。「低い部分に水が溜まって池になっているところ」をオチ（滄池）という（国語大辞典）。鈴岡丘陵の麓にあるヲチ小字も、このオチ（滄池）に由来するものと思われる。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、オチ地名が10カ所、載っている。越智・越知・遠地・大路・尾知・百千・落などの漢字が宛てられている。

【前畑・マイハタ】

マイバタ・マイハタはいずれも同じ意味で使われている。

これらの小字は、マエダ（前田）小字に混じるが、北平のマエダ小字群の中には無く、あるのは、南平のマエダ小字群と下平のマエダ小字

群の中である。

南平も下平も田んぼに混じって畑があつたために、マエダ小字もマエバタ小字も存在したと考えられる。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、「前畑」地名が21カ所、挙げられているが、読みは、マエハタ・マエバタ・マエバタケと多様である。

【高見・タカミ】

タカミ。

タカミ小字は、北平の下の段の東端に3カ所、北平の上の段丘で鈴岡丘陵の麓に1カ所ある。

タカミ（高見）とは、「高いところ」を意味する。高い所だけで小字の名前になるのだろうか。桐林にもタカミ（高見）小字があつて、「監視所」の役割も果たしていたのではないだろうか、という仮説を出しておいた。

このことは、駄科のタカミ小字にも、当てはまりそうだ。特に、北平の下の段丘では、ダイドウ（大道）の往来を確かめることができる位置にあり、さらに、タカミ小字の近くに、ナカノムラ・ウチヌマなどの中心的な施設を意味するような小字がある。

【(前田) 藪腰】

(マエダ) ヤブノコシ。

この小字は、ナカノムラ小字にほぼ囲まれている。

ヤブノコシは「ヤブ（藪）の付近」を意味する。ヤブとは、低木や竹などが茂っている所であるが、地名となっているにはそれなりの理由があるはず。

何かの理由で、人の手が付けられないで、藪として残っていたのかもしれない。理由は、恐らく藪神ではなかったか。藪神とは、藪が祭場になっていて、神格が低い雑神とされているが、

祭場が毀損されると、疫病など激しい祟りを発現するという。そのために、ずっと手が付けられないまま放置されていたのではないか、と考えることもできそうだ。

長野原にもヤブノコシ小字がある。

【茂田井】

モタイ。

北平の下段丘の伊賀良井側にある。

モタイとは何を意味しているのか。これも難しい地名の一つ。

モは接頭語で、モモ（百）の略とみると瑞祥名、あるいはマ（真）であり、タイはタヒラ（平）のタヒであるという（語源辞典）。

すなわち、モタイとは「真っ平らな平坦地」をいうのであろうか。

なお、駄科には茂田井という井水はないようだ。

全国地図にはモタイ地名は11件。

【井間】

イマ。

イマ（井間）小字は、伊賀良井に沿っており、他方をウチヌマ・ナカノムラ・モタイ・ムジョウドウの小字に接している。

イマ（井間）は文字通り、井水の間隙をいう。つまり「伊賀良井と丸山井に挟まれた場所」を意味する。

国土地理院の全国地図には、イマ地名が16カ所あるが、いずれも「今」の字を宛てている。「井間」地名は一つも無い。

【南羽場・マエダハバ・毛賀沢ハバ】

ハバは、今までも繰り返しているように、崩壊地や崖を意味する。

南ハバ・南羽場小字は、北平の下の段丘の東端にある急傾斜地にある。

マエダハバ小字は、北平の下の段丘上にある。

マエダ小字群の中であって、一方が高低差のある土手になっている。

毛賀沢ハバ小字は、鈴岡城の外曲輪（荒古屋）の北側の急斜面にある。

【ビヤド】

この小字は、下平のダイドウ（大道）に沿った所にあり、すぐ近くにはムジョウドウ（無常堂）小字がある。これは北平の下段の東端になる。ビヤド小字と「無常堂」小字とは、大道と段丘間の急傾斜地を挟んだ所に、対置している。

ビヤドとは何か。辞典類にも語源辞典にもない地名である。一つの仮説を提示しておきたい。

ビヤド←ヒヤドウ（火屋堂）と転訛したのではないだろうか。ヒヤ（火屋）とは、「火葬場」（広辞苑）で、ヒヤドウ（火屋堂）とは、「火葬場の近くであって、火葬者を供養するための仏堂」ではないだろうか。仏堂とは、仏像を安置する殿堂である。近くの急斜面上に「無常堂」小字のあることは傍証になりそうだ。

国土地理院の2.5万分の1地図には、ビヤド地名は、一つも無い。

【無常堂・ムショウドウ】

ムジョウドウである。ムショウドウ←ムジョウドウと転化したもの。

これらの小字は、北平下段の段丘東端に位置する。段丘の下段にあたる下平には、ビヤド小字がある。

無常堂とは、「火葬場」を意味する（国語大辞典）。死にかかっている病人を収容する所、という意味もあるが、ここでは採らない。

無常堂で火葬に付してから、下の段のビヤドで葬祭を行い供養したものと思われる。

国土地理院の2.5万分の1全国地図の中・大字には、「無常堂」地名は、なぜか記載がない。小字よりもっと広い字にするのに、死を忌み嫌う

傾向があったためであろうか。

【川端・カハバタ】

いずれもカワバタである。

「川端」小字は、伊賀良井に沿っており、カハバタは少し離れているが、双方とも、文字通り、「伊賀良井の縁あるいは傍」を表している。

全国地図には、カワバタ地名は69件と多い。宛てられている漢字は、「川畑」と「川端」がある。

【橋場・ハシバ】

ハシバ。

「橋場」小字は、伊賀良井の右岸にあり、ハシバ小字は伊賀良井左岸にある。

ハシバとは、いずれも、「橋が架けられている場所」を表しているのであろう。

全国地図には、ハシバ地名は38カ所、「橋場」地名は36カ所、載っている。

【万場・マンバ・万場平・下マンバ】

マンバ・マンバヒラ・シモマンバ。

これらの小字は、下平に8カ所あるが、二つのグループに分けることができる。すなわち、一つは「大道」添いの坂道、もう一つは長野原の「中道」につながる街道筋に集まっている。

長野原にもマンバ小字があり、そこでは傾斜地としてまとめてみたが、駄科のマンバ小字を見ながら、修正する必要があると思っている。

「大道」付近に集まっているマンバ（万場）とマンバヒラ（万場平）は、いずれも、「街道の坂道」を意味している。

「中道」付近に集まるマンバ・シモマンバは、「街道」を表しているが、1カ所、非常に広い面積をもつマンバ（万場）は「馬の調練場」であった可能性がある。

【新田】

シンデン。

この小字は、下平にあって、ヒエダ小字に囲まれている。

シンデン（新田）は、文字通り「新しく開墾した水田」を意味する。周辺にヒエダがあることから判断して、井水が通るようになってから開発した水田だったと思われる。

国土地理院の2.5万分の1地図をみると、中・大字として、シンデン地名は、572カ所という歴大な数字になっている。江戸時代の水田開発ブームと地名命名の時期が重なったの数と思われる。

【ヒエ田・ヒエ田・清水下冷田】

ヒエダ・シミズシタヒエダ。

ヒエダ系の小字は、6カ所、内5カ所は北平段丘の麓となる下平に、1カ所は、北平であるが、高低差のある土手下に位置している。

いずれも湧水のために水温が低く収量の少ない水田になっていたと思われる。

ヒエダ（冷田）とは、「水温の低い田んぼ」を意味する。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字の中に、34カ所のヒエダ地名が記載されている。

【青木・青木垣外】

アオキ・アオキガイト。

これらの小字は、北平の上の段丘上にある。アオキは屋号にもなっている。

アオキだけでは、何を意味するのか見当もつかないが、アオキガイトが近くにあるので、分かり易くなっている。

アオキガイト（青木垣外）は、「有力者であった青木氏の屋敷跡」を表している。アオキ（青木）は、「青木氏の所有地」であろう。

国土地理院の全国地図をみると、アオキ地名は、79カ所と多い。アオキが瑞祥地名となっているのかもしれない。

【隈ノ川・熊ノ川】

いずれもクマノカワである。

クマノカワ小字は3カ所にあるが、いずれも、北平上段の鈴岡丘陵の麓に位置する。

クマノカワとは何を意味するのか。二説を挙げておきたい。

①クマ（曲）だから、「井水などが曲がっている所」ではないか。しかし、2カ所のクマノカワはそうになっているが、1カ所は、長方形で、曲がったところはない。

②クマ（隈）で、奥まった所を表し、カワ（川）には湧水を意味することもある。クマノカワとは、「奥まったところに水が溜まっている池」ではどうであろうか。井水が通る前には、この水でイネを育てていたと思われる。

なお、2.5万分の1地図には、このクマノカワ地名は4カ所ある。

【五反田】

ゴタンダ。

この小字は、北平上段の鈴岡丘陵の麓にある。また、桐林区にもゴタンダ小字はある。

伊賀良井が来る前は湧水に頼っていた田んぼであろう。

面積が五反歩前後であったので、このような小字名が付けられたものと思われる。

国土地理院の全国地図には、ゴタンダ地名が65カ所と、中・大字は、かなりの数になっている。五にめでたい意味も含まれていたのかもしれない。

【神田】

カミダとなっている。シンデンかジンデンであろうと思われるが、何と呼んでいるか地元で確かめて見る必要がある。上川路区のジンデン小字では「神田」の字を宛てている。

この駄科の「神田」は、北平上段のトサヤシ

キ（土佐屋敷）小字の南側にある。

「神田」とは、一般には、「神社に所属して、その諸費用に当てるための水田」である。ここでは、神社といえば、諏訪神社であるが、他に該当するお宮があるのだろうか。

【カギ田】

カギダ。
トサヤシキ小字の南側にある。鈴岡丘陵の麓である。

カギダ小字は各地にあるが、いずれも小字の形が鍵状になっていることから名付けられたものである。

北平の、この小字も、また鍵の形をしている。そのために付けられた地名であろう。

【シモ】

シモ小字は、北平上段の緩やかな斜面を下りてくる道路の両側に、1ヵ所ずつある。現在は、1ヵ所は水田で、もう1ヵ所は畑になっている。シモは何を意味するのか。

シモは「北垣外」小字に対してのシモ（下）を意味する。キタナイト小字の家の分家に当たるといふ。これも有力者の居住地である。

シモ地名は全国的に多い。2.5万分の1地図には、100ヵ所もの記載があるが、「霜」の字を宛てたところはゼロ、「下」を宛てたのは86ヵ所、あとは「志茂」「下モ」「しも」となっている。

【井添・井ゾへ】

いずれもイゾエである。
イゾエ小字は、駄科に7ヵ所が散在している。イゾエ（井添）のイ（井）は伊賀良井だけではなく、伊賀良井から分流した井水も含まれている。だから、イゾエとは、「井水のあたり」ということになろうか。

国土地理院の2.5万分の1全国地図には、なぜか、イゾエ地名も「井添」地名も載っていない。

中・大字とするには小さすぎるといふことであろうか。

【久保田】

クボタ。
この小字は、駄科には4ヵ所ある。竜丘の各区にもあり、一般的な地名で、全国的にも、中・大字で81ヵ所と多い。「窪田」の字を宛てることも多い。

クボタ（久保田）は、文字通り、「凹んだ所にある田んぼ」といった意味である。4ヵ所の全てを確認したわけではないが、その通りの地形になっているはずである。

【スナハラ】

この小字は北平上段の中ほどにある。
スナハラは砂原だと思うが、であれば、砂地のところで、他のもっと粒の小さなところと区別して名付けたものと思われる。広辞苑によれば、砂は粒の径が2～0.06mmのものだといふ。それより小さい粒が泥である。

住宅地化が進んで外から土をいれているので、確かめることはできないが、泥が流されて砂が目立った土地だったのかもしれない。

国土地理院の2.5万分の1地図には、スナハラ地名は、中・大字であるが、25ヵ所に載っている。宛てられている漢字は、全て「砂原」となっている。

【五輪田】

ゴリンダ。
北平上段の中ほどにある。
一般に「五輪田」といえば、「五輪の塔のある耕作地」ということになるが、今はここに五輪塔はない。

現地には住宅が建てられているが、一部は畑となっている。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、

ゴリンダ地名も「五輪田」地名も載っていない。「五輪田」小字は多いはずだし、地名には向いていると思われるので、理由がわからないでいる。

【滲田】

ヒエダという。
この小字は、北平の上の段丘にある。
この小字のなかの居住地でない部分は、構造改善で、高い方から土砂を削って土地を盛ったが、それまでは、沼田であったという。

ヒエダ（滲田）はヒエダ（冷田）と同じように、水がにじみ出る田んぼで、「水温が低い水田」を意味する。

しかし、この小字はシミダではなかったかという疑問も残る。

【下井田】

シモイダ。
この小字は、下平の県道米川・飯田線に沿った西側にある。

シモイダ（下井田）とは、シモ（下）・イ（井）・ダ（処）で、文字通り、「伊賀良井から分かれて下の段丘に引かれている井水が流れている所」を意味するものと思われる。

2.5万分の1の全国地図には、シモイダ地名が、2ヵ所にある。

【沖ノ原】

オキノハラ。
この小字は、下平の県道米川・飯田線に沿った細長い形をしている。また、オキノハラ小字は、クボタ・シモイダ・ナガイケ小字に囲まれている。

駄科でオキノハラ（沖ノ原）は何を意味しているのか、難しい。

オキ（沖）は「段丘から離れた池または湿地帯の近く」を表し、ハラ（原）は「集落」を意味するか。オキノハラ（沖ノ原）とは、ここで

は「段丘斜面と反対側にある池の傍の集落」としておきたい。

国土地理院の全国地図では、オキノハラ地名は4件が記載されている。

【林ヘリ】

ハヤシヘリ。
この小字は、「大道」に沿っており、国道151号線との交差点のやや南にある。シミズ小字のすぐ南隣の細長い小字である。

ハヤシ（林）は、樹木の生えている所であるが、ハヤス（生）がキル（切）の忌み言葉になっており、動詞ハヤスの連用形が名詞になったもので、急傾斜地を意味する場合もある（語源辞典）といふ。

ハヤシヘリとは何か。二つの考え方を挙げておきたい。

①一般的な解釈で「樹木が茂っている所の縁にあたる場所」とする。

②「傾斜地の縁にあたる所」である。

なお、ハヤシヘリという中・大字名は、2.5万分の1の全国地図には一つも記載されていない。

【清水】

シミズ。
シミズ小字も、「大道」に沿っており、国道151号線とハヤシヘリ小字の間にある。

北平の段丘の麓になるので、清水が湧き出ていたところであろう。「大道」には、シミズ小字のある所が多い（黒坂周平氏）といふ。旅人達が喉の渇きを癒した場所であろうと思われる。上川路地区のシミズ小字も、同じような役割を果たしていたものと思われる。

国土地理院の2.5万分の1地図には、シミズという中・大字は、236ヵ所も挙げられている。「清水」地名は、281ヵ所に及ぶ。セイスイ、キヨミズ地名も「清水」の字を宛てている。

【道下】

ミチシタ。

この小字は、下平の「大道」沿いにある。間にナミシタ小字があるが、他の大道系小字と同じように、「大道」に沿った細長い小字になっている。

ミチシタ（道下）は「大道の低い方、下側にある場所」である。何らかの形で大道に関わっていたと思われるが、具体的にはわからない。

国土地理院の全国地図には、ミチシタ地名は、中・大字として、21件ある。「道下」地名は26件と少し多いが、ミチシモ、ドウゲ、トウゲ、ドウシタ、ミチカなどの地名にも宛てている。

【並下】

ナミシタ。

この小字も、「大道」系小字で、「大道」に沿って細長くなっている。国道151号線と交わる点の北になる。

ナミシタ（並下）とは、「緩傾斜地の低い方、下側のところ」を意味している。大道を挟んだ上側は、マエバタ（前畑）小字になっており、この付近は、耕作が可能な程度の緩傾斜地である。なお、ナミ←ナメ（滑）と転訛したもので、ナミを緩傾斜地とした（語源辞典）。

しかし、2.5万分の1全国地図には、ナミシタという地名は、1ヵ所も載っていない。

【ヤシキ前】

ヤシキマエ。

この小字は、国道151号線に沿った、その南側にあり、シミズ、シミズシタ小字の間にある。

ヤシキマエとは、「どなたかの屋敷のあった場所の前、それは多分、屋敷の東側になる」と思われる。その屋敷の所有者ははっきりしない。モタイ小字が西の方にあって、そこが念通寺旧地となっているので、その関係者か。

全国地図にはヤシキマエ地名は9件。

【一貫目・一メ目】

イッカンメ。

この小字は、下平の国道151号線に南原橋からの道が合流するY字路付近に、2ヵ所ある。マエダ小字を挟んで近くにあるのだが、面積は倍以上違っている。

カン（貫）は、もともと銭の単位であるが、中世以降、年貢米を銭に換算して表示するようになったらしい。だから、これらの地名が生まれるころは、土地面積の表示に用いられている。

同じ一貫目でも、広さは一定でない、といわれているが、この駄科の同じ一貫目小字の面積を比べても、随分と異なる。小字命名の時期が異なるためだろうと思われるが、あるいは後で削られたか。

なお、2.5万分の1全国地図の中・大字には、イッカンメ地名は載っていない。

【スミ田】

スミダ。

スミダ小字は、駄科集落センターの北にある。

スミダが何を意味しているのか、はっきりしない。スミ（角）で、「曲がり角になっている場所」をいうのだろうか。確かにスミダ小字の形をみると、イゾエ小字やヒエダ小字に削られていて、七角形になっている。このことをいうのだろうか。

現在は、水田と畑になっているので、夕は水田ではなくて、「耕作地」としておきたい。

スミダ（スミ田）とは、「多角形の形をした耕作地」と思われるが、どうであろうか。

国土地理院の全国地図には、スミダ地名が5ヵ所にある。

【丸畝町】

マルセマチ。

この小字は3ヵ所、下平の駄科交差点の西方に2ヵ所、南平の権現堂の北に1ヵ所ある。

マルセマチ（丸畝町）とは何を意味するのか、これもよくわからない地名の一つである。マルセ（丸畝）は、「背中のように丸くなっている所」を表すか。少し高くなっていたのかもしれない。

マチ（町）は、「区画した田地」のことか。マチ（待）で、「定まった日に人々が集まり、忌みごもりして夜明かしすること」と考えるのも面白いが、マルセとの繋がりが不自然になる。

多少、無理はあるが、マルセマチ（丸畝町）とは、「背中のように丸くなっている、区画された田地」としておきたい。

国土地理院の2.5万分の1地図には、マルセマチ地名も「丸畝町」地名も載っていない。

【ヒトツ田】

ヒトツダ。

この小字は、国道151号線に沿う。駄科交差点の南の方になる。

ヒトツダが何なのか、これも難しい地名である。考えられる解釈を二つ挙げておきたい。

①ヒトツダは「一つ田」で、「一枚の田んぼ」を意味する。周辺には水田が無くて、畑などになっている土地のことであろうか。やや不自然な感じがしないではないが、あり得ることと考えている。

②ヒトは、形容詞ヒトシ（均）の語幹で、凹凸がない状態を表す。ツはツ（津）で、泉など水のある所をいう。ヒトツダ（ヒトツ田）とは、「凹凸のない、池のある湿気た水田」と解釈する。

2.5万分の1全国地図には、ヒトツダ地名は1ヵ所、「一ツ坦」を宛てている。

【藪腰】

ヤブコシ。下平と南平に1ヵ所ずつ。

下平は「大道」と国道の間に、南平は諏訪神

社と国道の間にある。

北平には、マエダヤブノコシ（前田藪腰）があつて、すでにそこでヤブコシには触れている。

ヤブコシとは、「藪の付近」を表しているが、今はそうした藪の雰囲気はない。藪神との関係もはっきりしない。下平の場合、最近までは畑だった所だから、藪として残されていた可能性はある。

【番匠塚】

バンショウヅカ。

この小字は、4ヵ所に分散している。かつては、この小字のある一帯がバンショウヅカであったが、後に、マエバタ・イゾエ・ハナバタなどの小字が割り込んできたのではないかと思われる。

バンショウヅカ←バンジョウヅカと転訛したもので、番匠塚とは、「番匠があつた、または居た場所にある古墳」を意味する。

語源辞典によれば、バンジョウ（番匠）には、三つの意味があるが、どれも捨てがたい。

①バンショウ←バンショ（番所）で、見張り場所であったのではないか。その場所が古墳で、現在でも円墳上には何も無いが、かつて番所だったためだろうか。それにしても古墳を使うのは勇気がいる。

②中世には大工さんを番匠と呼んだ。大工さんが住んでいた場所を意味する。これは十分にあり得ることである。

③バンジョウ←バジョウメン（馬上免）で、中世、荘園の騎上検田を免れる土地のこと。寺田や神田が多いという。該当する寺田は、念通寺か薬師堂か。神田であれば、諏訪神社か。

国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、バンジョウ（番匠）地名は9ヵ所あるが、バンショウヅカ地名は無い。当然といえよう。

【ハナ田】

ハナバタ。

この小字は、下平の北端に近いところに2ヵ所ある。かつては繋がっていた可能性が高い。

ハナバタとは何であろうか。二説を挙げる。

①近くにはヤクシ小字群がある。神仏に供える花をつくっていた可能性はある。この小字の一部で。

②ハナ←ハナワ（埜）と転じた語で「台地」をいう（語源辞典）。毛賀沢峡谷からみた下平の台地である。以上から、ハナバタとは「台地上にある畑」を意味するか。

全国地図には、ハナバタ地名は1ヶ所だけ、中・大字として挙げられており、「花畑」の字が宛てられている。

【ヤソ田】

ヤソダ。

この小字は、ハナバタ小字に囲まれている。

ヤソダの意味も難しい。すぐに耶蘇（キリスト教を思い出すが、耶蘇という言葉を使い始めたのが明治以降だといわれているので、小字名にはなりにくかったと思われる。

ヤソの解釈について、二説を挙げておきたい。①ヤソはヤソ（野鼠）で、原野や森林に住む野ねずみの被害に苦しんだ名残かもしれない。②田の代掻きをする農具をヤソという（静岡榛原）。

どちらでもないかもしれない。

全国地図にはヤソダ地名は、無い。

【ボタシタ】

ボタシタ。

この小字は下平の北の方にある。イチバヤシキ小字の南側になる。

ボタというのは、下伊那地方では、「田畑の畔」を意味する（国語大辞典）。この付近は南の方に下がる緩傾斜地となっている。

ボタシタのボタは、この小字の北側にある畔を示すことになる。それから下の方、つまり南側がボタシタになる。

国土地理院の2.5万分の1地図の中・大字には、ボタ地名でも載っていない。この地方の方言であるためか。

【大島・大鳶】

オオシマ。

この小字は、2ヵ所にある。一つは、毛賀沢峡谷の右岸の急斜面。もう一つは新旧国道が交差する駄科交差点。

2ヵ所では同じオオシマでも意味が異なると思われるので、別々に扱いたい。

毛賀沢のオオシマは、語源辞典がいう「川の曲がり目付近にできる低地で作られている畑」ではないかと思われる。広い二段の氾濫原になっていて、下の段は荒地で上の段には、桑が植えられていたらしい。

もう一つの駄科交差点のオオシマは、これも語源辞典がいうように、「ある一区画をなした土地」であろうが、どういう意味の一区画であったのかは、わからない。

オオシマ地名は、河川や海岸に多くあるようで、2.5万分の1地図には、147ヵ所も記載されている。

【ハリ原・ハリハラ・張原】

ハリハラ・シモハリハラ。

これらの小字は、12ヵ所に散在している。ジョウロクーナガイケ系の小字群の北側に11ヵ所、南側に1ヵ所がある。現在のJ R 飯田線の西側になる。

ハリはハリ（墾）で、開墾することを意味する。ハラ（原）も、ハラ（開）で開墾地を表している。重複するが、ハリハラとは、「開墾地」を示す。それまでは柴山であったと思われるが、

開墾されたときに、この小字名が付けられたのであろう。

国土地理院の全国地図には、ハリハラの中・大字は4ヵ所と、意外に少ない。

【城陸・コッチ城陸・向城陸】

ジョウロク・コッチジョウロク・ムコウジョウロク。

これらの小字は、天竜川峡谷の鷲流峡の近くに、ナガイケ（長池）小字に混じって存在している。ジョウロクーナガイケ系小字群である。

ジョウロクは、超難解地名。長野原区の小字で、触れているので簡単にしておきたい。

ジョウロクは、念通寺の旧地または「中道」の街道から見た場合に、長池の中や長池の向こう側にあった一丈六尺（4.8m）前後の岩塊を仏像に見立てたのではなかったか、という仮説を立てておいた。今でも、これぐらいのことしかわからない。

コッチジョウロクは長池の中の丈六をいい、ムコウジョウロクは、長池の東側のをいうのではないかと考えている。

【長池】

ナガイケ。

この小字も、ジョウロクーナガイケ系小字群に属する。J R 飯田線の駄科駅付近の低地が、かつては大きな池になっていたのではないだろうか。現在のナガイケ小字は8ヵ所に分かれている。

【細田】

ホソダ。

ホソダ小字は、J R 飯田線の駄科駅のすぐ南側にある。

ホソダ（細田）は「細長い田んぼのある所」を表している。小字の形は、細長くはないが、小字内の田んぼは、高さの違いがあつて、水を

張るために、細長い形にしてあつたのであろう。

2.5万分の1地図の中・大字に35ヵ所が挙げられている。この数字は多いと思われるが、駄科のホソダのような事情が、案外と多かったのかもしれない。

【表発起】

オモテホッキ。

この小字は、鷲流峡の北端の急傾斜地で、南原橋の上流にある。

オモテには、外側の意味があつて、駄科の外側になっているが、川や道路に面したところも示す。

ホッキは、もともと、思い立って事を始めることを意味するが、下伊那では、ホッキ（歩危）として、「溪谷沿いの急傾斜面に通路の開かれた所」（語源辞典）を表している。

オモテホッキ（表発起）とは、「天竜川に面した急傾斜地に道路が開かれている所」を意味する。

伊那谷南部特有の地名だからか、国土地理院の2.5万分の1地図には、オモテホッキは勿論のこと、ホッキ地名も、載ってはいない。

【原】

ハラ。

ハラ小字は、伊賀良井左岸で「大道」の東側にある。

ハラ（原）は、平らで広い土地をいい、特に耕作しない平地をいう、と広辞苑にはあるが、一方、語源辞典は、ハラ（開）で開墾地をいう場合もある、としている。

この駄科のハラ（原）は「開墾地」とするのが無難と思われるが、厳密に「未開墾地」とするならば、地名が付けられた時期は、遅くとも伊賀良井開通前ということになる。

2.5万分の1全国地図の中・大字として挙げられているハラ地名は450ヵ所、「原」地名となる

と、ハルが入るので、519ヵ所にもものぼる。とにかく、すごい数である。

【街道端】

カイドウバタ。

「大道」系の小字の一つで、伊賀良井と「大道」を跨いだ位置にある。長野原では、屋号にもなっている。

街道とは、各都市間を結ぶ主要道路で江戸時代には江戸から各地に通じた五街道のほかに脇往還などがあったという（広辞苑）。

この駄科の「大道」は、江戸時代の五街道ではないが、脇往還並に重要視されていたと思われる。

カイドウバタ（街道端）とは、「大道に沿っている所」である。

全国地図には、カイドウ地名が2ヵ所、「街道」地名は3ヵ所と、比較的少ないように思えるが、どうであろうか。

【道ノ間】

ミチノマ。

この小字は、「大道」の西側に接している。これも「大道」系小字群に入る。

ミチノマ（道ノ間）は何を意味するのか。敢えて二説を挙げておきたい。

①「大道と枝道との間になっている場所」とする。一般的な解釈で、あまり矛盾はない。

②マ（間）←バ（場）と転じたもので、「大道が通っている所」を意味する。こちらの方が正解かもしれない。

全国地図には、ミチノマ地名は無い。

【石仏】

イシボトケ。

この小字は、南平神送塚の東側にある。

イシボトケとは、石を刻んで造った仏像のこと。イシボトケ小字内に小さな塚があつて、そ

の上に、若宮ともう一基、石碑があつたが、構造改善で、小字の東端の道ばたに移されている。

これも近々、道路拡幅で再び移されるという。

無名の石仏であつたために、「石仏」という小字名にしたのかもしれない。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、イシボトケ地名が19件、「石仏」地名は20ヵ所がある。

【神送塚・カミ送塚】

カミオクリヅカ。

これらの小字は4ヵ所にある。かつては、この4ヵ所は一体となっていたと思われるので、かなり広い面積になる。西隣にはゴンゲンドウ小字がある。

神送りとは何であろうか。

広辞苑や民俗大辞典によると、神送りには二種類の行事があるようだ。①旧暦九月晦日から十月一日にかけての夜、諸国の神々が出雲大社へ旅立つのを送る神事、②災いの神を追い払う神事。

駄科の神送りは、常識的には、後者の②である。下伊那のコトの神送りは、風の神を送る行事であるが、駄科ではどんな神様をこの崖の上から新川に向けて送り出したのであろうか。虫送りの影響もあるというが、一般には送り出す神は疫病神であつた。

しかし、前者の①の可能性もある。ここから、出雲へ出発する権現様を送ったかもしれない。その留守を守るのは、山の神だといわれている。ヤマノカミ小字もゴンゲンドウ小字も近くにはある。

なお、全国地図には、カミオクリ地名は1件もない。

【山神・山神下】

ヤマノカミ・ヤマノカミシタ。

ヤマノカミ系小字群は、南平と新井原の2ヵ所にある。

まずは南平のヤマノカミ小字群について。ヤマノカミは町村地名大鑑にはあるが、場所が特定できないでいる。ヤマノカミシタ小字は、2ヵ所、南平の段丘の下段、新川の近くにある。神送り神事との関わりも可能な位置である。

山の神は、神道では大山祇神とその娘、木花開耶姫を宛てているが、農村では祖先神であり、春に山を下って田の神となり、秋の収穫が済むと山に帰って、山の神となる。

新井原には、シンガワバタヒロガワラ小字を挟んで、2ヵ所にある。新川に近いヤマノカミ（山ノ神）小字には、新川三号橋左岸道路の北側崖壁に、小祠と石碑が並んでいる。これが山の神だという（加藤智氏談）。石碑が「蚕玉大神」（明治四十一年）と「天満宮」なので、小祠が山ノ神と思われる。

以前には、この山の神は、別のところにあつたが、そこは山の上でそこまでお参りに行くのが大変だったので、そこまで行かずに現在地で遙拝をするようになった。それだったらいっそのこと、ということで、この地に遷座したのだという。

山の神の旧跡地は、もう1ヵ所、新井原にあるヤマノカミ小字である可能性がある。それは、伊賀良井と新川の間丘陵でキツネ小字群に接している。

蚕玉様の明治四十一年が気になるが、遷座した年かもしれない。

ヤマノカミ地名は全国的にも多く、2.5万分の1地図には、中・大字として、70ヵ所が載っている。

【新川平】

シンガワヒラ。

この小字は、南平の段丘から新川へ下りる急傾斜地にある。シンガワ・シンガワバタ・ツカノコシ・ゴンゲンドウなどの小字に囲まれている。

ヒラ（平）は、古事記のヨモツヒラサカのヒラで、傾斜地をいう。

シンガワヒラ（新川平）とは、「新川の浸食した溪谷の急傾斜地」を意味し、また、そのような地形になっている。

【権現堂・ゴンゲンドウ・権現堂塚】

ゴンゲンドウ・ゴンゲンドウヅカ。

ゴンゲンドウは屋号にもなっている。

これらの小字は、前方後円墳である権現堂塚を取り囲むようにして位置している。南平の段丘と、一部、新川の急傾斜地を含む広い面積となっている。

村誌によれば、文政五年（1822）の記録であるが、「権現堂」小字に、一尺七寸×二尺六寸の社殿をもつ熊野権現が鎮座している。

現在、この熊野権現は権現堂塚の後円部に移されている。

国土地理院の2.5万分の1地図には、ゴンゲンドウ地名は21件、中・大字の中にある。宛てられている漢字は、もちろんのこと「権現堂」である。

【チウタ】

南平の段丘の低い方の平地のほぼ中央部にある。この平地の標高差は、約1.5mほど。

周辺には、スミダ・チャツカ・ホソバタ・カイドウバタ・シモマヘタ・マルセマチ・ゴンゲンドウなどの小字がある。

チウタとは何か。これも超難解地名である。三つほど、仮説を挙げておきたい。

①チウタ←チュウタ（中田）と変わったもので、チュウタ（中田）＝チュウデン（中田）とする。フクダ（福田）とフクデン（福田）が相互に転化するように、チュウタとチュウデンは同じこ

とを意味している。チュウデン（中田）は、検地などで、田地の等級分けをした、その上田と下田の間の等級である。このことから、チウタとは、「中位の等級である田地」ということになる。あるいは、ここが中田の基準となっていたのかもしれない。

②チ←ツ（津）で、水の溜まりやすい所をいう。ウタはムタと同じように、湿地をいう。チウタとは、「水はけが悪く水が溜まりやすい湿地」を意味する。

③チウ←チュウ（中）で、真ん中のことをいう。タ（田）は水田。あわせて、チウタとは、「この段丘のほぼ中央付近にある水田」となる。

とにかく難しい地名で、国土地理院の2.5万分の1地図には、載っていない。

【茶ツカ】

チャツカ。

チャツカ小字は、チウタ小字の北側にある。チャツカとは何か。

これもまた難解地名である。チャツカとは、「茶畑になっていた古墳の跡地」とも考えられるが、村誌には、古墳があったという記載はない。ただ、丸みをもった高みが、チャツカ小字内にはあるので、それを古墳跡と見間違えた、という可能性はある。

少し脱線してみたい。チャはお茶を点てるという意味があり、ツカは人工的に土を盛り上げたところ、という意味があるので、茶ツカの解釈としては、「お茶を点てた場所で、盛り土した所」とすることもできる。しかし、この解釈には無理があるので採ることはできない。

チャツカ地名も、国土地理院の2.5万分の1地図には全く記載がない。

【細畑・ホソハタ】

ホソバタ。

この小字は、伊賀良井右岸にある。周囲には、マヘダ・チャツカ・チウタ・カイドウバタ・ハシバの小字がある。

前に、下平のホソダ小字を扱った。そのときには、微傾斜地にある田んぼだから細長くせざるをえなかったので、「細田」がいくつかできた、というようなことを述べた。しかし、今回は畑だから、そうした説明では通用しない。

ホソは動詞ホソル（細）の語幹で、削られて細くなることを意味する。伊賀良井を通す時か、あるいは、地割りの時に伊賀良井があるために、削られて細くなってしまったこともあったのだろう。

ホソバタ（細畑）とは「削られて細くなった畑」としておく。現在は、大部分が水田になっている。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、ホソダ地名が35件、「細田」地名は38件に達する。

【甫田下】

ホタシタ。

この小字は、権現堂の前方後円墳の南東側に張り付いている。

ホタシタ（甫田下）とは、ホ（秀）・タ（処）で、「権現堂古墳の高い丘に対して下になる所」を意味するものと思われる。なお、この場合のシタ（下）は、「丘より低い」という意味の他に、「緩傾斜地の下の方」という意味も含まれているかもしれない。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、ホタ地名が5件あるが、主に「保田」の字を宛てている。

【払免・ハライメン】

ハライメン。

これらの小字は、南平の段丘から、新川に至る斜面上にある。

ここは、中世、領主に対して年貢を免除され

ていた土地ではないだろうか。メン（免・面）系の地名といってもいいかもしれない。

ハライメン（払免）とは、「耕土が流れやすい傾斜地であるために、年貢が免除されていた耕作地」としたい。

この小字名はおめでたい名前ではないためか、2.5万分の1の全国地図には、1件の記載も無い。

【前田ヲチ・マイダヲチ】

マエダオチ・マイダオチ。

マエダ=マイダで、この小字は、南平段丘が新川浸食地へ下っていく、その境界にある。北にはマイダ小字が、南にはハライメン小字がある。

マエダ（前田）は、何かの「前」にある耕作地をいうが、何とは、この場合はシケンヤ小字にあったと思われる屋敷か諏訪神社か、のどちらかではないかと思われるが、やはり前者か。

オチはオチ（落）で、「崖」や「傾斜地」を意味する。

合わせて、マエダオチ（前田オチ）とは、「マエダ小字の近くにある崖」と考えるが、どうであろうか。

【前田棚】

マエダダナ。

この小字は、南平段丘の南西端に近いところにある。

マエダダナとは何か。二つの考え方を挙げておきたい。①緩い斜面になっているので、「棚状の耕作地」になっている。②南西側が急傾斜地になっているので、マエダダナ全体を一枚の棚とみるか。

どちらとも言い難いが、国土地理院の全国地図にはタナ地名は6ヵ所が、中・大字として地図に記載されている。

【安宅・上阿高・上アダカ】

アタカ・カミアダカ。

これらの小字は、国道を挟んで、1ヵ所に集まっている。アダカは屋号にもなっている。

アタカ（アダカ）とは何か。ア（意味のない接頭語）・タカ（高）で、「平地の中の微高地」を意味する。

国土地理院の全国地図にある中・大字の中には、アタカ地名が2件、アダカ地名が5件、記載されている。

【町張】

マチハリ。

新川対岸の桐林地区にもマチハリはある。屋号にもなっている。

駄科のマチハリとは何を意味しているのであろうか。建物が集まっているわけではないし、人口密集地でもない。難しい地名である。語源辞典によりながら二説を挙げておく。

①マチは「市場が開かれたところ」で、ハリはハ（端）・リ（方向を示す接尾語）とすると、マチハリとは「市場が開かれた場所の隅の方に当たるところ」となるが、どうであろうか。お宮も近いし、川の渡河点があったかもしれない。

②袴の内股の部分をマチ（襠）という。ハリ←ホリ（堀）の長音化した語であるかもしれない。これだと、マチハリは「堀のようにやや低くなっているところ」をいうか。かくれ地のようになっていたかもしれない。下流側はクボタ小字があり、堀状の地形はつながっている。

【角田・スミダ】

スミダ。

南平には二つのスミダ小字群がある。一つは国道より南のスミダ小字群、もう一つは国道より北側の伊賀良井に接したスミダ小字群。いずれも、それぞれの群を一緒にすると、ほぼ三角形に近い形になる。

下平にも、「スミ田」小字があって、「多角形

をした耕作地」としておいた。南平のシミダはどうであろうか。

スマ＝スマ（隙間）で、方言大辞典には佐渡の方言として、「田や畑の隅の、三角形になったような所」を挙げている。南平のシミダ（角田）は、「土地の形が三角形のようになっていて、隅にあるような姿になっている耕作地」を意味すると考えていいように思える。

2.5万分の1の全国地図には、シミダ地名は5ヵ所、「角田」地名は11ヵ所。

【シケンヤ】

シケンヤ小字は、南平の国道と大井の近くにある。周辺には、タケノコシ・マエダ・マイハタなどの小字がある。

シケンヤは「四軒屋」と思われるが、多くの場合、新開墾地などで使われる地名（語源辞典）であるという。とすれば、このシケンヤ小字付近で、この地域で新たな開墾が始まったことになる。この地域、といっても範囲がどれくらいなのかはわからないが、シケンヤ小字はこの中心地だったのかもしれない。

シケンヤは屋号にもなっていて、四軒のシケンヤがある。

国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、シケンヤ地名が11ヵ所も載っている。

【タケノコシ】

タケノコシ小字は、国道に接しており、シケンヤ小字の北側になる。

タケノコシの字に始めて接したとき、タケは竹藪のことだろうと先走っていたが、調べてみると、タケは竹藪の意を含んではないことが、はっきりした。

それでは、タケとは何か。

この付近の開墾に手を着けたとも考えられる四軒屋が隣にある。このタケはタケ（嶽）で、

タケノコシ小字には御嶽山の石碑が祀られていたのではないだろうか。この石碑が諏訪神社に移されているかもしれない。そこには「嘉永七年」（1854）が刻まれている。辻褄は合うが飛躍しすぎているかも。

以上の推測が正しければ、タケノコシとは、「御嶽山を祀った場所の付近」ということになる。

因みに、2.5万分の1の全国地図には、タケノコシ地名は、2ヵ所にある。

【トヤ田・トヤタ】

トヤタ。

この小字は、国道と伊賀良井が交差する点の北西に3ヵ所ある。

トヤタとは何を意味するか。二つの考えを挙げておきたい。①ト（特に意味のない接頭語）・ヤタ（低湿地）で、「やや低い所にある湿地帯」。②トヤ（草刈場）・タ（水田）で、「柴山であったが水田になった所」。

全国地図には、1件の記載もない。

【ヌマ・ソトノヌマ】

ヌマ小字は、国道の北側で、伊賀良井と鈴岡公園入口交差点との間にある。ソトノヌマ小字は、ヌマ小字の北側にある。

ヌマは、ヌ（沼）・マ（間）で、「湿地」をいう。ソトノヌマは、伊賀良井の南西側にあり、「外側の湿地」を表しているが、対するウチヌマ（内沼）は伊賀良井の北東側にある。このウチ・ソトの関係についても、駄科北平の下の段丘にあるウチヌマ小字やナカノムラ小字付近をウチ（内）とする、一つの中心があったという傍証にはなる。そのウチというのは、鈴岡城のエリアをいうか。

ソトヌマは屋号にもなっている。

また、これらの小字に繋がっているトヤタ小字も、湿地帯にあり、トヤ・タではなくて、

ト・ヤタであることの傍証にもなっている。

国土地理院の全国地図の中・大字には、ヌマ地名は、22ヵ所が挙げられている。

【井桁】

イゲタ。

イゲタ小字は、イゾエ小字と伊賀良井の間にある。

井桁は、ものを組むときに井の字形にすることであるが、このままでは地名にはならない。

では、イゲタ（井桁）とは何か。

イ（井）は伊賀良井のこと。ケタ←カタ（傍または肩）は、傍または肩の部分で、イゲタ（井桁）は、「伊賀良井の傍にある土地」、または、「伊賀良井の肩の部分にあるところ」を意味する。

2.5万分の1の全国地図には、イゲタ地名は2件の記載があり、いずれも「井桁」の字を宛てている。

【四ツ通】

ヨツドオリ。

この小字は、諏訪神社と伊賀良井の中ほどにあり、ヌマ・イゾエ・サンバタ・カワムコウなどの小字に囲まれている。

ヨツドオリとは何を意味するのか。これも難解地名の一つ。考え方を二つ挙げておきたい。

①ヨツドオリ（四ツ通）は、文字通り四つの道がある所で、「四つ辻」を意味する。しかし、現在は、四つ辻であった痕跡は見えない。

②ヨは榎木のこと、ヨツトオリ（四ツ通）とは、「榎木が植えられていた道路」となる。榎木は、道祖神の守り樹とされている。北平の境に近いので、記録にはないが、オノ神か道祖神があったのかもしれない。

なお、全国地図には、ヨツドオリ地名は、1件も無い。

【川向】

カワムコウ。

この小字は、国道と伊賀良井と諏訪神社の間にある。

カワムコウ（川向）の川はどの川なのだろうか。近くにある大きな川といえば新川になるが、カワムコウという中心部は桐林になる。よそ村から地名の名付けをされるのはおかしい。それでは、もっと近くの伊賀良井はどうか。これだったら、中心地は北平下段のナカノムラやウチヌマのある中心地、すなわち鈴岡城側から名付けることができる。しかし、伊賀良井はカワといえるのかどうか。

語源辞典によれば、「古い時代とか、ある地方の日本人にとっては、“水のある所”が、すなわちカハでありキであったはず」だから、とにかく古い時代には、伊賀良井を川と見ていたこともあったのではないか。

従って、カワムコウ（川向）とは、「伊賀良井の向こう側の土地」となる。

全国地図にはカワムコウ地名が17件。

【サンバタ】

サンバタ。

この小字は、諏訪神社の東側で、ミヤノマエ小字とイゾエ小字に挟まれている。

気になるのは、北平にミツバタ（三バタ）小字があること。サンバタもミツバタではないのか、という疑問はあるが、一応別のものとして考えていきたい。

サンバタも、また難解地名である。迷いながら、二説を出しておきたい。

①サンバタ（散飯田）とする。散飯とは、食前に飯を少し取っておいて別に器に移し、鬼神・餓鬼などに供えるものである。この「散飯に供するための水田」とする。諏訪神社が近くにあ

るので、その関係の地名かもしれない。

②サンデン（散田）という地名はある。特定の耕作者に属さないで、領主直属の田地をいう。これに対して、サンバタ（散畑）があってもいいのではないか。「耕作者の逐電などで、領主直属になった畑」をいう。しかし、辞書類からは、「散畑」の語を見出しえないでいる。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、サンバタ地名が1ヵ所ある。「三畑」の字を宛てている。

【荒間垣外・アラカイト】

アラマガイト・アラカイト。

アラマガイトは字面の通りで「土石流等があつて荒れたことのある土地で、居住地にもなつていたところ」であろうか。マ（間）は接尾語的に「空間。場所」を表す（語源辞典）。アラカイトはアラマガイトが転じたものと思われる。

これらの小字は、伊賀良井右岸の1ヵ所にまとまっているが、五つの小字になっている。

アラマガイトとは、「アラマ氏の住んでいた屋敷跡」ともとれる。アラマ氏の人間像については、全く不明である。

国土地理院の全国地図の中・大字には、アラマガイト地名は無いが、アラマ地名は4ヵ所の記載がある。

【ミヤノシタ・宮ノ前・宮城・宮林】

ミヤノシタ・ミヤノマエ・ミヤシロ・ミヤバヤシ。これらの小字は、諏訪神社の周辺に固まっている。

これらの小字のうち、ミヤノシタ・ミヤノマエ・ミヤシロはいずれも屋号になっている。

文字通りの地名だから、ほとんど問題はない。ミヤノシタ（宮ノ下）小字は神社の敷地よりやや低地にある。ミヤノマエ（宮ノ前）小字は、神社の前方、すなわち南側にある。正確には、

神社の南東～南西方向になる。

多少の問題があるとすれば、ミヤシロ（宮城）小字で、ここに城郭があつたわけではない。ミヤシロ（宮城）←ミヤシロ（宮代）で、「諏訪神社所有の田地」を意味する。瑞祥地名に変えたか。

ミヤバヤシ（宮林）小字は、諏訪神社の境内の中心地であり、ハヤシは神の森の意味もあるようで、「諏訪神社が鎮座する神の森」としておきたい。

お宮関係の地名は全国的にも多い。国土地理院の全国地図にある中・大字は、ミヤノシタ地名が65件、ミヤノマエ地名になると94件、ミヤシロ地名は少なくなるが17件、ミヤバヤシ地名になると3件となる。

【棚田】

タナダ。

タナダ小字は、2ヵ所あるが、いずれも国道の南西側で、南平の段丘から新川に下りる斜面上にある。

タナダ（棚田）は、広辞苑にあるとおり、「急な傾斜地を耕して階段状に作った田」である。南平の「棚田」は「新川溪谷の傾斜地に段丘状に作られた水田」となる。急傾斜地になっているので、土手の部分が多いが、田んぼはできているようだ。国道の南東側にあるマエダダナ（前田棚）よりも勾配はかなりきつい。

国土地理院の2.5万分の1地図には、タナダ地名が11件と少ない感じがする。

【樋ノ口・トヨノクチ】

トヨノクチ。

この小字は、国道の北西側にあり、南平段丘の南西端に位置する。

トヨ（樋）←トイ（樋）で、水路をいう。クチ（口）は出入口のこと。

トヨノクチ（樋ノ口）とは、「中溝井から、さ

らに別れ出る井水の出口のあるところ」を意味する。そこには樋が掛けられている。中溝井から分流する井水の出口は、トヨノクチ小字内に2ヵ所ある。

トヨノクチは屋号にもなっている。

2.5万分の1の全国地図をみると、中・大字の中に、トヨノクチ地名は2件だが、トイノクチ地名は13件ある。

【河原田・川原田・カハラダ・石原田】

カワラダ・カワハラダ・イシハラダ。

これらの小字は、いずれも新川溪谷左岸の傾斜地にある。

カワラダもカワハラダ（河原田・川原田）も同じことを意味している。傾斜地ではあるが、平坦な所もあつて、そこには水田がある。だから、「新川にそつた傾斜地の中に平坦地もあつて水田になっている場所もある所」としておきたい。

イシハラダ（石原田）も同じように、新川溪谷の傾斜地にあるが、こちらには水田は今でもない。そこで、イシハラダ（石原田）とは、「新川に沿つた傾斜地の中に平坦地もあつて、耕作している畑もある所」である。

国土地理院の全国地図には、「川原田」地名が27ヵ所、「河原田」地名が7ヵ所、「石原田」地名は5ヵ所ある。

【厂俣・厂マタ・厂又】

カリマタ。

この小字は、諏訪神社の前に2ヵ所、新井原に2ヵ所ある。

雁股とは鍬の一種で、鍬の先端を二股にし、その内側に刃をつけたもので、飛ぶ鳥や走っている獣の足を射切るのに用いるという。

南平の厂俣（カリマタ）は何を意味しているのか。2ヵ所とも道路が三叉路になっていて、その形状が雁股の二股に似ていることから名付

けられたものと思われるが、どうであろうか。

新井原の厂又も、また同じように三叉路となっている。

なぜ駄科の三叉路の4ヵ所だけがカリマタになっているのか、わからない。

国土地理院の全国地図の中・大字には、カリマタ地名が12ヵ所ある。意外と多いのは、神事がらみのためかもしれない。

【京田・経田】

キョウデン。

二つのキョウデン小字は、諏訪神社の北西側に伊賀良井に接しながら、一つに繋がっていて、時又の飛び地となっている。

キョウデンとは、「寺院に寄進された田地」（語源辞典）である。、南平のキョウデンはいずれも念通寺に所属する田地であろう。

なお、キョウデンには、中世、領主の扶持を受けて領地の支配にあつていた者の居住地とか直営田の意味もあるが、ここでは取り上げない。

【溝土井・溝土井河原】

ミゾドイ・ミゾドイカワラ。

これらの小字は、南平の伊賀良井沿いの4ヵ所にある。

ミゾ（溝）は、地を細長く掘って水を流す所だから、ここでは伊賀良井のことをいう。ドイ（土井）は土を盛り上げて造つた土手のこと。ミゾドイ（溝土井）とは、「伊賀良井を通すために造つた土手のある所」、ミゾドイカワラ（溝土井河原）は、「伊賀良井沿いの平地で、井水を流すために造つた土手のある所」を意味する。

これらの地名は全国地図には無い。

【八王子】

ハチオウジ。

この小字は、南平の伊賀良井の近くにある。

ハチオウジ（八王子）は、素戔鳴尊の五男三女の神のこと。この中に、宇迦之御魂神（うかのみたまのかみ）がいて、川路の八王子神社には、この神が祀られているので、稲荷神社になっている。また、時又の八王子神社では、祭神が素戔鳴尊になっている。

さて、寺下のハチオウジ（八王子）小字には、素戔鳴尊か牛頭天王かお稲荷様にかかわる、何らかの痕跡は残っていないのだろうか。

なお、国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、ハチオウジ地名は13カ所にある。

【西田】

ニシダ。

ニシダ小字は、諏訪神社の前面に当たる、南側にある。

ニシダ（西田）とは、「西の方にある耕作地、あるいは西の方にある土地」を意味する。タ（田）だけではなく、タ（処）とみることもできるからである。

それでは、西の方とは、どこから見て西の方なのだろうか。新たな開墾者であったシケンヤも考えられないわけではないが、北西方向だから、少しずれている。やはり南平のナカノムラ（中ノ村）小字のある中心地であろう。ニシダ小字の近くには、カワムコウ（川向）小字もある。

国土地理院の全国地図には、ニシダ地名は27件、「西田」地名は33件と多い。

【御飯米】

ゴハンマイ。

この小字は、念通寺の南の方に、2カ所ある。南平段丘の南東端に当たる。

これもよくわからない地名の一つ。

上川路区にもゴハンマイ（御判前）小字があって、「開善寺の小番衆が住んでいた所の前面に当たる場所」（①）としたが、確かな解釈とはい

えない。

ここで、二つの解釈を付け加えておきたい。南平のゴハンマイ小字は、水田が中心になっているので。

②寺院の食堂（じきどう）は、僧が多いときには、寺院とは別棟になっていたという。ゴハンマイとは、「食堂の前の方の土地」をいう。この「前」の部分に、何か意味があると思われるが、わからない。

③ゴハンマイとは、「食堂で消費する米をつくる水田」ではないか。すっきりとはするが、マイ（米）が水田を意味することがあるのかどうか、はっきりしない。

【大座・躰座・タイザ】

タイザ。

タイザ地名は、諏訪神社の前方、南側に、3カ所ある。

時又区にも、トノガイト（殿垣外）小字の前方である南側に、タイザ（大座）があった。ここでは、次のような二通りの解釈を示したが、それは今でも変わらない。①「芸能集団が田をつくりながら居住していた場所」②「段丘などの平坦な場所で、貴人や神仏がおわした所」。

【一丁田】

イチチョウタ。

この小字は、2カ所、ともに寺平の南西端になり、ゴハンマイ（御飯米）小字と交互にならんでいる。

チョウ（丁）はチョウ（町）と同じで面積の単位、ほぼ1万㎡となる。イチチョウタ（一丁田）は、「一町歩の水田」ということになるが、2カ所を合わせても半分にも満たない。

全国地図に「一丁田」地名は10カ所。

【中ノ坪】

ナカノツボ。屋号にもなっている小字である。

この小字は、念通寺の南にある。北側にはテラシタ（寺下）小字、南には、イチチョウダ（一丁田）・ゴハンマイ（御飯米）小字があって、間に挟まれている。

ツボ（坪）は、方一町の区画のこと。だから、ナカノツボ（中ノ坪）とは、「念通寺関係の土地の真ん中にある一町歩ばかりの土地」ということになろうか。南隣のイチチョウタ（一丁田）の面積に近いので、実面積は半分以下であるが、一町歩とみなすことにした。

国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、ナカノツボ地名が5件、記載されている。

【飯納田・ハンノウ田・ハンナン田】

ハンノウタ・ハンナンダ。

これらの小字は、ハンノウダから転訛したものとみる。

これらの小字は、イゾエ・テラシタ・ハチオウジ・ショウゾクなどの小字に囲まれているが、ミゾドイ小字がすぐ上流側にある。

語源辞典によれば、ハンノウは「半納」の意で、「災害その他により年貢が半減され、これが恒久化した土地」のことではないか、という。

ハンノウタ小字が受けた災害というのは、強雨時の伊賀良井の決壊であったと思われる。その修復で伊賀良井の土手を補強した名残が、すぐ上流部にある、ミゾドイ小字かもしれない。

なお、2.5万分の1全国地図には、ハンノウタ・ハンノウダ・ハンノウのつく地名は一つもない。

【装束】

ショウゾク。

この小字は念通寺丘陵の麓にあり、テラシタ・テラマエ・サントング小字などに囲まれている。

ショウゾク（装束）とは、衣服や装身具、調度の類を完備して配置することや、衣冠、束帯、直衣などで装うことであるという（広辞苑）。このことが、駄科のこの地にどう関わっているというのだろうか。静岡県水窪では、仕事のいでたちを装束とっているが、それでもまだ解明には遠い。

語源辞典は、衣服の調整に従事した装束師の居住した所ではないかというが、この地で誰が何のために装束師を必要とするというのだろうか。一般的には、公家か武家ということになるが、小笠原氏の関係者だろうか。しかし、継続的に装束師を必要とするような催しが、果たしてここで行われたのだろうか。

この地で装束師が活動するとすれば、猿楽しかないかもしれない。長野原区には、金山神社の近くにサルガク（猿楽）小字があった。ここ南平の諏訪神社の前にも、猿楽が関わっていると思われるタイザ小字があり、時又区にもタイザ小字がある。

小字名と漢字がぴったりしていて、わかりきっているようで、難解な地名ではある。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、1カ所ショウゾク地名があって、「装束」の字を宛てている。

【三反田】

サントング。

この小字は、ショウゾク小字とミゾガホラサカシタ小字に挟まれている。

文字通り、「三反歩の面積がある水田」を意味する。

国土地理院の全国地図の中・大字にはサントング地名は7件の記載がある。

【寺下・寺前・寺前北・寺ノ浦】

テラシタ・テラマエ・テラマエキタ・テラノ

ウラ。これらの小字のうち、テラシタ・テラマエ小字は屋号にもなっている。

テラシタ小字は、念通寺の東側で念通寺丘陵の麓にある。テラマエ小字は、念通寺を取り囲む広い土地になっている。

テラシタ（寺下）は、「念通寺の麓の段丘」、テラノウラ（寺ノ浦）は「念通寺の裏側、北の方の土地」を、それぞれ意味する。

テラマエ（寺前）は、念通寺のことではなく、昔、松ヶ崎小字に寺院があったのでその寺院のマエ（前）を意味するともいわれている。

【引廻シ・引廻】

ヒキマワシ（ヒンマワシ）。屋号にもなっている小字である。

この小字は、念通寺丘陵のテラマエ小字を取り囲むようにしている。

ヒキマワシ（引廻シ）とは、能で使う道具で、前方と左右の三方をおおい囲む幕（国語大辞典）である、という。舞台は念通寺のあるテラマエ小字ということになるだろうか。とすれば、観客席は、ネンジヤマ（念地山）小字やマルヤマ（丸山）小字のある新川右岸という設定になる。

ショウゾク（装束）小字といい、このヒキマワシ（引廻シ）小字といい、猿楽系とも思える地名が多い。

一般に引廻しといえば、江戸時代に斬罪以上の重刑についていた刑で、処刑前に犯罪地や住居付近を引き廻したことをいうが、ここでは採らない。

さすがに、ヒキマワシ地名は、2.5万分の1の全国地図には無い。

【平平田】

ヒラヒラダ。

念通寺の南側、南平段丘の南西端に、このヒラヒラダ小字はあり、新川溪谷の左岸になる。

南よりの風が強く当たる場所に位置している。

あまり目にしない地名であるが、ヒラヒラとは、紙・布・旗など、軽くて薄いものが風にひるがえるさまをいう（広辞苑）。

ヒラヒラダ（平平田）とは、「南よりの風が強くあたる耕作地」とする。念通寺関係の旗物が音をたてて翻ることがあったり、風で稲架が倒されることがあったのだろう。これも難しい地名である。

国土地理院の2.5万分の1の地図には、中・大字の中に、ヒラヒラダ地名は見当たらない。

【穴田】

アナダ。

アナダ小字は、新川左岸の急傾斜地にある。ヒキマワシ小字とイシハラダ小字には含まれている。

アナ（穴）←ハナ（端）と転訛したもので、段丘端の急傾斜地をいう。タ（田）←タ（処）は場所を表す接尾語である。

アナダ（穴田）とは、「新川溪谷の崖地」を意味する。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、アナダ地名は8件あり、いずれも「穴田」の字を宛てている。

【臼井・臼井坂・臼井坂下・碓井坂下・臼井原坂下・臼井原・臼井洞・小白井・小白井洞・小碓井洞】

ウスイ・ウスイザカ・ウスイサカシタ・ウスイバラ・ウスイバラサカシタ・ウスイボラ・コウスイ・コウスイボラ。

これらのほとんどの小字名は臼井川の周辺にあり、文字通りの解釈のまま通る。コ（小）の付く地名群の多くは、駒沢川の上流部、臼井の谷の一つ北側の谷に集中している。以前に触れたように、ウスイは「浅い水流」のことで、このウスイ（臼井）からウスイ小字群が発生し

ているものと思われる。

【高林山】

コウリンザン。

この小字のある所に、念通寺の中心の本堂がある。「高林山」は念通寺の山号。寛文十年(1670)にモタイ（茂田井）小字から移ってきて、浄土宗となったが、それまでは禅宗の寺であったという。

【ドウド・ドホド】

ドウド。

この小字は、鈴岡城趾の北東端で3ヵ所、いずれも毛賀沢溪谷右岸の崩壊地にある。

ドウド（百々）←ドウドウ（百々）で、水音の高くとどろく所をいう。

トド、ドド、トドメキ、トドロキ、トドロ、トドロク、トドメなど、同じことを意味している。これらの小字は各地にあるが、桐林区には「トト田」があり、川路ではトドメに「留々女」の宛てている。

国土地理院の全国地図には、中・大字としてドウド地名は1ヵ所の記載がある

【堀】

ホリ。

この小字は、鈴岡城趾に3ヵ所ある。

一般に、ホリ（堀）といえば、城の周囲を掘って水をたたえた所ということになるが、鈴岡城の堀には水はなかったようだ。空堀である。

3ヵ所のホリ小字の内、2ヵ所が内堀で、1ヵ所は外堀と思われる。

国土地理院の2.5万分の1地図には、ホリ地名の中・大字が31件もある。

【本城・本城西平】

ホンジョウ・ホンジョウニシヒラ。

ホンジョウとは、「鈴岡城の中心部」をいうのであろうか。ホンジョウニシヒラとは、「鈴岡中心

部の西よりにあつて、傾斜地の間の平坦地」か。

【的場】

マトバ。

マトバ小字は本城と堀の間にある。

マトバ（的場）はいうまでもなく、的を懸けて弓を射る練習をする所である。

国土地理院の全国地図には、中・大字の中にマトバ地名が58件もあるのは驚きである。小字であれば不思議ではないが、瑞祥地名ということであろうか。

【出丸・出丸毛賀沢端】

デマル・デマルケガサワバタ。

デマル（出丸）は、本丸から張り出して築いた曲輪のこと。

出丸毛賀沢端とは何をいうのであろうか。出丸が毛賀沢端にまで伸びていたのか、それとも毛賀沢端という出丸があったのかどうか。

【城山・城山南】

ジョウヤマ・ジョウヤマミナミ。

ジョウヤマとは、「城塞のあった山」をいう（語源辞典）。鈴岡城が役割を終えた後で、この付近一帯がそう呼ばれていたのであろうか。しかし、その城山の中には、こまかな小字が残っていたのであろう。全ての土地に小字名が付けられたときに、細かな地名も息を吹き返したものと想像している。

【遠見原・遠ミ原・遠見原大井洞・遠見原大井南】

トンバラ、地元では、こう呼んでいる。

続いてトンバラオオイボラ・トンバラオオイミナミである。

しかし、地名大鑑や地名調査では、トオミハラになっている。ここでは、トンバラ←トオミハラと転訛したものとしておきたい。

トンバラ小字は、鈴岡城趾付近の7ヵ所にあるが、その全てが本丸より西側に集中している。

トオミ（遠見）は、高い所に上がって遠方の敵情などをうかがい見張ることをいう。ハラ（原）は、平らで広い土地のこと。トンバラとは、「広い野原で、少し高い所に上がって敵情を探るなどの遠見のできる場所のあるところ」をいう。

鈴岡城の場合、東側は城下で家士等の住居もあり監視の目は多い。しかし、西の方にはそうした目がなかったため、監視体制を西側に集中したのであろう。

遠見原大井洞は、「トンバラの近くにあつて大井が流れる洞」、遠見原大井南は「トンバラ付近の大井より南になる場所」のことをいう。

なお、脱線になるが、桐林区の「荒駒原」→アランバラ、ここの「遠見原」→トンバラとなっていて、少なくとも竜丘では、原地名が長い場合、ハラ（原）の前の語が撥音便化しやすいという法則があるのかもしれない。

国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、トンバラ地名は3件、挙げられている。これに宛てられている字は、「頓原」と「富原」の二種類。

【荒古屋・アラゴヤ】

アラゴヤ。

アラゴ←アラコで、アラコについては桐林区のアランバラ小字のところで触れる。アラコとは、新しく開墾された所をいう。信州の方言でもある。ヤ（屋）は、ヤツ（菴）の一字音化で小さな谷地形をさす（語源辞典）という。

アラゴヤとは、「小さい谷をかかえた新開墾地」を意味する。

この小字名は、鈴岡城が廃城になってから名付けられたもので、先のトンバラ小字とは地名発生が異なる。

国土地理院の全国地図の中・大字には、アラゴヤ地名は、4件、挙げられている。

【清水井・清水下・清水入・シミズ下】

シミズイ・シミズシタ・シミズイリ。

シミズ（清水）とは「清らかなわき水。清らかに澄んだ水」をいう（国語大辞典）。清水井とは、毛賀沢から鈴岡城に引き込んでいた井水であるという。シミズイは「清らかに澄んだ井水」ということになる。この清水井は鈴岡城の堀まで流れ込んでいたという跡を今でも辿ることができるようだ。山城にとっては、飲料水などの用水の確保が大きな課題であったはずで、そのための井水でもあったのであろう。

シミズシタは「清水井が流れている流路の下側」をいい、シミズイリは「清水井が流れている流路の奥の地」を意味するのだろうか。

【境ノ洞】

サカイノホラ。

下殿岡との境界にある洞のこと。

伊那谷南部では、洞にはどんな意味があるのか、大平宿の民宿で聞いたことがあった。その主人の話では、谷→沢→洞→タワの順序で幅が狭くなっているのだという。これは語源辞典などよりも明快であった。ホラ（洞）はサワ（沢）よりも小さいと考えていいのであろう。

全国地図には、サカイノホラ地名は載っていない。

【岩下】

イワシタ。

この小字は、トンバラ小字群の周辺で2ヵ所にある。いずれも新川氾濫原に下る傾斜地の斜面にある。

イワ（岩）は「小石混じりの地」を示し、シタ（下）は単なる下方では、現地と合わないで、シタ←シタム（潛）の語幹で、「水がしたたる状態」をいう（語源辞典）。

イワシタ（岩下）とは、「少量の水の流れの

ある小石混じりの地」を意味するものと思われる。

国土地理院の2.5万分の1地図に記載されている中・大字の中に、イワシタ地名は48件、すべて「岩下」の字を宛てている。

【辻場・外シ場・外シバ】

ハズシバ。地名調査には、1ヵ所、ソトシバ（外シバ）とあるが、ハズシバの間違いであろう。

伊賀良井と新川の間にあるハズシバ小字は、数が多い。

ハズシはハズス（外）の連用形が名詞化したもの。バ（場）は場所のこと。

雨量が多くなって、伊賀良井の水嵩が増した時に、このハズシバ小字の所で、伊賀良井の増水分を新川に落としたり、下流で井の補修をするとき水をここで止めた。ハズシバは井水にはつきもので、あちこちの井水にある。

全国地図の中・大字には、ハズシバ地名は一つも載っていないし、語源辞典にも無い。

【狐洞・狐平・狐ヒラ】

キツネボラ・キツネヒラ。

伊賀良井と新川の間丘陵地にある。北側に、トンバラ小字群があり、その南東側に9ヵ所もある。

キツネはイヌ科の哺乳類のことだと思われるが、もしこの小字の中にお稲荷様が祀ってあれば、稲荷信仰に関わる地名となるが、それはないようだ。

ありふれた地名になってしまうが、キツネボラやキツネヒラは、「狐が多い洞や傾斜地」ということになる。

しかし、キツネヒラ地名は、2.5万分の1地図には、1ヵ所も載っていない。

【一杯清水・一盃清水】

イッパイシミズ。

新井原の街道に沿って、2ヵ所にある。

イッパイシミズとは、「茶碗一杯の清水」としか考えようがない。湧水が溢れ出ている状態ではなく、しばらく茶碗をあてていると満ちる程度か。街道筋にあるので、旅人の渴きを癒したのであろう。

2.5万分の1の全国地図には、イッパイシミズが、1ヵ所載っている。

【境界山・ケイカイ山】

ケイガイザン。

この小字は、伊賀良井と新川の間にある。

ケイガイとはケイガイ（境外）で「さかいの外。特に寺社などの敷地の外」をいう（国語大辞典）。ケイガイザンとは何か。二説を挙げておきたい。①ケイガイザンは鈴岡城址の一部であると、地元ではいわれている。とすれば、ここに鈴岡城の支城があったと思われる。ケイガイザンとは、「鈴岡本城の敷地の外にある山」であろうか。鈴岡城址に残るホンジョウ小字に対応しているのかもしれない。

②ケイガイという語には寺社が関わる人が多いようなので、ケイガイザンとは「寺院の境内の外にある山」か。その寺は以前にあったという寺院かそれとも念通寺か。念通寺が現在に地に移ったのは寛文十年（1670）なので、比較的に新しい。

【松ヶ崎・松ヶ寄】

マツガサキ。

ケイガイザン小字を南北に挟んで、2ヵ所になる。南側のマツガサキは特に広く、テラマエ小字に接している。

マツガサキ（松ヶ崎）は、「松の多い丘」という意味もあるが、それだけではないような気がする。盆会の夜、ここで送り火が焚かれたのではないだろうか。京都の松ヶ崎のように。

【田打洞・田打洞境】

タウチボラ・タウチボラサカイ。

タウチ（田打）とは、春になって水田を打ち起こす作業のことをいう。しかし、地名になっているのだから、もっと深い意味があるはずである。ここでは、小正月の予祝行事で、一月十一日に行う地方が多いというタウチ（田打）と考える。この日に、田に出て焼米などの供物を供え模範的に鎌で田を起こす所作をする（民俗大辞典）、という。

タウチボラ（田打洞）とは、「田打の予祝行事（田打正月と呼んでいる）を行う洞」であろう。

タウチボラサカイ（田打洞境）は、「タウチボラ小字の三日市場境になっている所」をいうものと思われる。タウチボラザカイ小字は、現在はアライバラ小字に囲まれているが、かつては村境に繋がっていたことを意味するのであろうか。

国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、タウチ地名は3件ある。

【日影田・ヒカゲダ・日影山平】

ヒカゲダ・ヒカゲヤマヒラ。

これらのヒカゲ小字群は8カ所ある。いずれも、新川と駒沢川の間にある丘陵の北側の日陰になる地域である。

急傾斜地にあるので、水田が耕作されたとは思えない。だから、ヒカゲダ（日影田）は、「日陰になる土地」を意味するものと考えられる。ダ＝タ（処）で、タは場所を表す接尾語である。

ヒカゲヤマヒラ（日影山平）は、「日陰になる傾斜地」となる。ヒラ（平）は、いつもの古事記のヨモツヒラサカのヒラで、傾斜地のこと。

しかし、とても瑞祥地名とはいえないヒカゲがこれほど使われるということは、耕作地でなかったためかもしれない。それにしても、全国地図には、ヒカゲダ地名は無い。

【山ノ入】

ヤマノイリ。

この小字は、御所山山麓の新川付近に分布している。

イリ（入）とは、「外からある場所の内に移動すること」と、「山と山との間の沢。谷間」の意がある。後者は関東西南部の方言である。

ヤマノイリとは何か。二説を挙げたい。①ヤマノイリとは「山へ入ること」から「山への入口」をいうか。この場合、山とは御所山の事か。

②ヤマノイリとは、「山と山との間を流れる沢」をいう。サワとは新川のことであろうか。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、7カ所が入っている。

【赤畑】

アカハタ。

アカハタ小字は、新川溪谷の左岸の傾斜地にある。

アカ（赤）には、二通りの解釈ができる。①土が赤い色をしているのではないか。②アカ（垢）のことで、じめじめした湿地のことではないか。

ハタ（畑）は畑ではない。傾斜地で今でも耕作されていないからである。地名命名の時代には、畑になっていた可能性はないわけではないが、その場合は、焼畑であっただろう。ハタ（畑）は、ハ（端）・タ（処）で、縁を表す。「街道の脇」か「新川の傍」か。ここでは、一応、前者としておきたい。

アカハタ（赤畑）とは、①「街道の傍で赤っぽい色をした土の所」、②「街道の傍でじめじめした所」、ということになるが、どうであろうか。

国土地理院の2.5万分の1地図には、アカハタ地名は3件が記載され、いずれも「赤畑」の字が宛てられている。

【新井原・荒井原】

アライバラ。

これらの小字は、新川最上流部を中心に6カ所ほどがある。

アライバラとは何か。

バラ（原）＝ハラで、開墾地をいう。アライには、二説がある（語源辞典）。①アラ（荒）・キ（川）で、「暴れ川の周りの開墾地」か。②アラ（粗）・キ（川）で、「崖のある川の周りの開墾地」か。

現地でも、どちらかは判断がつかない。

全国地図には、中・大字として、アライバラ地名は2カ所と、少ない。

【谷津・ヤツ】

ヤツ・アライバラヤツ。ヤツは屋号になっている。

これらの小字は、白井原段丘と新川の間、傾斜地にある。小さな小字が4カ所、広い面積の小字が1カ所ある。広いヤツ小字には、尾根があり、農道が通っている。

ヤツとは、辞典類によれば、本来は「低湿地」を意味するという。確かに、新井原の小さな四つのヤツ小字は、段丘の麓の湧水地にあるので、「湿地」となっているが、大きなヤツ小字は、現地を見れば、湿地よりは「山地」としたい。しかし、辞書類にはヤツ・ヤチを山地とするものは見当たらない。とすれば、「谷地（ヤチ）」としたいが、どうであろうか。

国土地理院の全国地図の中・大字には、ヤツ地名は50カ所にも及ぶ。関東南部が中心といわれている。

【高田】

タカダ。

タカダ小字は、新井原の新川右岸にあり、ヤツ小字群と新川との間にある。タカダも屋号に

なっている。

タカダ（高田）は文字通り、「やや高い所にある耕作地」であろう。タカダ小字が新川を北東に押しやっけて、棚田は新川から離れるにつれて高くなっている。この高い耕作地から名付けられたものであろう。

2.5万分の1地図には、タカダ地名は、109カ所、「高田」地名は166カ所が、中・大字として記載されている。

【御所山】

御所山の山麓を廻るようにして新川が流れている。

ゴシヨヤマとは何を意味するのか。語源辞典によりながら、三説を挙げる。

①ゴシヨヤマ←ゴセヤマと転じたか。すなわち、ゴシヨ（御所）←ゴセ（御所）←コセと転化した、と考えられる。コセは、「一方が山側になった道」をいう。以上から、ゴシヨヤマ（御所山）とは、「一方が山側になった道、つまり麓を通る道で囲まれたようになっている山」を意味する。この御所山付近の尾根道は谷が深いため、麓をたどる道が主な道となったのではないだろうか。この道の付近には、馬頭観音などの石仏が多いという。

②ゴシヨとはゴソの転で、「草むら」を意味するという。ゴシヨヤマとは「草むらの多い山」か。この解釈はやや単純にすぎるか。

③ゴシヨとは「貴人の館にちなむ地名」か。伝説でも残っておれば、考えられる。つまり、ゴシヨヤマとは「貴人の館のあった山」か。立派な古墳はあるが、それだけではゴシヨ地名にはならないだろう。

その他に、ゴシヤヤマ（五社山）もありうるが、その名残がなければ、可能性は薄い。

国土地理院の2.5万分の1地図には、ゴシヨヤ

マ地名は、1カ所にある。

【念地山】

ネンジヤマ。

この小字は、新川右岸の丘陵地帯にあって、東向きの傾斜地の中腹に位置する。

ネンジヤマ（念地山）とは何を意味するのか。国土地理院の2.5万分の1地図には、1件の記載もないことから、難しい地名であろうと想像はできる。しかし、わからないでは済まされないので、仮説を一つ挙げておく。

ネンジヤマ（念地山）←ネジヤマ（捻子山）と撥音便化したもので、「捻子山のように波状に曲がっている地形」とする。

【茶畑・茶ハタ】

チャハタ。

この小字も、南平と新井原の2カ所にある。南平のチャハタ小字は、新川左岸の南西向きの傾斜地にあり、街道をはさんでいる。今でもお茶の木は絶えないでいる。

新井原のチャハタ小字は、これも新川左岸の南西向き傾斜地にある。

チャハタ（茶畑）は、文字通り、お茶を栽培する畑で、南西向きの傾斜地にはお茶は適しているであろう。茶は年平均気温が12.5℃以上でないと栽培出来ないといわれているが、飯田は12.4℃とわずかに低い。南西向きの斜面が必要な理由かもしれない。

2.5万分の1の全国地図の中・大字には、「茶畑」地名は、9カ所ある。

【中芝原】

ナカシバハラ。

この小字は、三日市場との境に接しているが、北西―南東方向では新井原のほぼ中央に位置する、タウチボラに囲まれた、小さな小字である。ナカシバハラ（中芝原）とは何か。

ナカ（中）は新井原の地理的中央を示す。シバハラ（芝原）は二通りの解釈がある（語源辞典）。①副詞シバシバの語幹シバ（屢）で、覆い被さるような地形という。南側の三日市場側は急傾斜地になっているのを指すか。ハラ（原）は開墾地のこと。

②シ（為）・バ（場）で、獅子舞などの芸能が演じられた場所をいう。この場合のハラ（原）は神聖な場所としたい。タウチボラ（田打洞）との関わりがあるかもしれない。

①は無難であるが、②はややうがち過ぎか。

国土地理院の全国地図には、もちろんナカシバハラ地名はないが、シバハラ地名は38件、記載がある。

【前林】

マエバヤシ。

マエバヤシ小字は2カ所にある。一つは新川右岸に、もう1カ所は広い面積をもつ。

マエバヤシ（前林）とは何か。マエは寺社のマエ（前）であることが多いという。しかし、近くには寺社がないので、これは当てはまらないであろう。そこで、これも語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①マエは時間的なマエ（前）と考える。バヤシ←ハヤシで、ハヤシ（林）とは「植林したところ」（水窪）をいう。合わせて、マエバヤシとは「以前に植林してあったところ」であろうか。しかしマエバヤシ地名が発生したころ、植林が行われていたのかどうか、という疑問もある。

②ハヤシを「樹木の生えている所」とすれば、マエバヤシは「以前は樹木が生えていた所」となる。寺社の建設や刈敷の必要性などから、樹木が伐採されたのかもしれない。

③ハヤシには「神の森」の意もある。マエバヤシとは、「以前は神の森でお宮のあったところ」

となるが、可能性は薄い。

なお、2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、マエバヤシ地名は、9ヶ所に挙げられている。

【西荒田】

ニシアラダ。

この小字は、駄科の西隅にあり、伊賀良の中村と境を接している山地である。竜丘財産区の共有林もある。

ニシアラダ（西荒田）小字の境界線が移動していたとすれば、現在の中村の地には水田が多いので、「駄科の西の方の新しく開墾した土地のある所」でいい。しかし小字命名時に、現在の山地だけであったとすると、「駄科の西の方で中央から遠く離れた地」ということになる。アラ（粗）は、「〇〇から離れた地」の意。

【合戦洞】

ガッセンボラ。

伊賀良中村との境界にあり、南南西に傾斜した斜面で、洞の開いている方向も南南西～南西方向となっている。

ガッセンボラ（合戦洞）は、「合戦が行われた谷」ということになりそうだ。はっきりした内容を伴ってはいないが、口碑は残っている。松尾小笠原氏と下条氏の戦いが、この付近で行われたという文献もある。開善寺の裏山に兵を隠したという。

ガッセンボラ（合戦洞）については、別の仮説を挙げておきたい。

ガッセン←カゼ（風）と転訛したと考える。この付近は、ほぼ一年を通して西～南風が強い。ガッセンボラは、この風を受けやすい地形をしている谷間である。

同じ臼井溪谷である近くの伊賀良三日市場には、「風吹峠」地名がある。その風を必要とする、

例えば瓦を焼いた、といった口碑なり遺跡があれば明確になるが、それがここにはない。

2.5万分の1地図には、ガッセンボラ地名は無い。

【大平】

オオビラ。

この小字は、二つのマエバヤシ小字の間にある、広大な小字。

オオビラ（大平）とは、「大きな丘陵地」としておきたい。なお、繰り返しているように、ヒラは傾斜地を意味する。

国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字として、オオビラ地名は21カ所、オオヒラ地名が137カ所、「大平」地名は294カ所にもなる。一般的な地名であるといえる。

【丸山】

マルヤマ。

この小字は、新川右岸にあり、ネンジヤマ小字の南隣になる。

各地のマルヤマ小字と同じように、「お椀を伏せたような円形の小山」で、ここでは民家に近い尾根の先端を丸山とみなしているようだ。

万寿山の前を通って、桐林から新井原に抜ける道路で、丸山を確かめることができる。

【泥抜・泥ノ木】

ドロヌキ。屋号にもある。

この小字は、桐林区との境にあり、オオビラ小字の南側に接している。小字の中心部を沢が流れている。

ドロヌキ（泥抜）とは何か。二説を挙げる。

①太郎井が流れている所にある。この小字のあるところで泥抜きをしたのであろう。ドロヌキとは、字面の通りで、「井水の泥を抜いたところ」であるという。太郎井の下を他の沢を通しており、太郎井の外シ場の役割も果たしていたらし

い。昔は、太郎井の樋があったという。

②念のため、もう一説を加えておきたい。ドロ（泥）は湿地を意味し、ヌキは動詞ヌク（抜）の連用形が名詞化したもので、浸食地形を表す。ドロヌキ（泥抜）とは、「谷川に浸食された湿地」を意味することもあるか。

参考のためにドロノキ説を挙げておきたい。ドロノキはヤナギ科の柔らかい木で、ドロヤナギとも呼ばれ、マッチの軸木になったりパルプの原料とされたこともあるらしい。こちらだと、「ドロノキが生えていた所」の意となる。

【ゲンチャウナギ】

ゲンチョウナギ。

駄科と長野原の境界を挟んで、双方に、この小字がある。新川左岸の溪谷である。

ゲンチョウは玄鳥でツバメのことをいう。この場合は、恐らくイワツバメであろう。野鳥図鑑によると、イワツバメの住処は、高い岩壁に多く、特に水辺の岸壁を好むとある。かつては、この新川の溪谷にも住んでいたのではないだろうか。

ゲンチョウナギとは「イワツバメがいた崩壊崖」のことをいう。

《桐林地区》

【桐林】

キリバヤシ。屋号にもなっている。

キリバヤシは大字。江戸時代には桐林村とあった。

キリバヤシ（桐林）とは何を意味しているのだろうか。二説を挙げておきたい。

①キリは、「断」か「切」で、断崖や谷間をいう。キリバヤシ地区は白井川・駒沢・西沢・新川などの川で断ち切られている。このことを表現しているのではないだろうか。ハヤシは原野のこと。キリバヤシ地名が生まれたときには、開墾はいまほど進んでいなかったはずである。キリバヤシ（桐林）は、「川が侵蝕してできた谷で区切られている原野」を意味するものと思われる。

②キリバヤシとは「切り開いた原野」をいう。すなわち新たな開墾地を意味していることも考えられる。開善寺の古地図にはキリバヤシに「切林」の字が宛てられている。

国土地理院の全国地図には、キリバヤシ地名は1件のみ。2.5万分の1「時又」にしかない。

これから、桐林地区の小字について考えていきたいが、殿垣外・安城垣外など、他地区で既に触れている地名については省いていきたい。

【洞】

ホラ。屋号でもある。

ホラ小字は桐林の安城生活センター東側の西沢の谷にある。

ホラ（洞）といえば、一般的には、崖や岩・樹木の穴をいうが、伊那谷南部では、谷間のことをいう場合が多い。語源辞典によれば、動詞ホル（掘）の語幹であるホに場所を表す接尾語ラがついたものとされている。

このホラ（洞）も西沢の谷のことを意味して

いる。

国土地理院の全国地図には、ホラ地名が26カ所記載されている。「洞」地名は29カ所で多いが、ホラのほかにボラという所もあるからである。

【塚】

ツカ。これも屋号にもなっている。

この小字は安城垣外集会場のところにある。

円墳のあったところで、村誌によれば、宝暦年間に発掘され、80～90年前までは大きな塚形をしていたという。

ツカとは、「円墳のあった場所」をいう。

【坪尻】

ツボジリ。

この小字は、エゲハラ小字とツカ小字に挟まれた細長い地籍で、西沢に合流する小川に沿っている。かつて水量が多い時期があつてこの小川によって侵蝕された谷間である。

桐林のツボジリのツボは「壺」で、えぐれていて物を入れたりさしたりする器状のものから由来したものと思われる。すなわち、ツボは動詞ツボム（窄）の語幹で、つぼんだ地形、深くえぐられた地形を意味する。シリ（尻）はシリ（後）で、後方とか末端ということになる。

ツボノシリとは、「小川に深くえぐられた谷間の末端部」を表している。

なお、全国地図にはツボジリ地名は2カ所の記載がある。

【阿弥陀】

アミダ。屋号にもある。

アミダ小字は、ツボジリ小字の北側の崖にある。

平安時代中期から阿弥陀信仰が盛んになり、浄土宗や真宗などで本尊とされ、安置する阿弥陀堂が各地に建立された。

桐林には専養庵があり、一時、浄土宗の僧が堂守をしたことがあるようだが、専養庵の本尊は聖観音といわれている。ほかにこのアミダ小字につながるような御堂などは付近にはない。

語源辞典によれば、アミ←アビで、アビは浸食地形や崩壊地形を表しているという。ダ（処）は場所を示す接尾語。これが正しいとすれば、アミダは「崩れた崖がある所」という意味にあるが、どうだろうか。

2.5万分の1の全国地図には、アミダ地名は3カ所、いずれも「阿弥陀」になっている。

【塚原】

ツカハラである。

ツカダイラの近くにある小さな小字。前にも触れたように、ツカハラ（塚原）は「古墳のある平坦な所」を意味する。ツカハラ小字のある場所は傾斜地の中の小平坦地である。

2.5万分の1の全国地図をみると、ツカバラ・ツカハラ（いずれも「塚原」）が、52カ所も載っている。「塚平」の1件にくらべると、非常に多い。古墳は平坦地の方が築造しやすいと思われるがどうだろうか。

【原田】

ハラダ。これも屋号にもなっている。

ハラダ小字は、桐林の安城生活センターを含めて、その北側に広がる。

ハラ（原）は、平らで広い土地をいう。特に耕作してない場合が多いという。タ（田）は耕作地のことで、田んぼとは限らない。

ハラダ（原田）とは、「平らで広い耕作地」としておきたい。この地名が生まれた時には未墾の地であった可能性もあるし、すでに田んぼになっていたことも考えられる。

2.5万分の1地図には、ハラダ地名が74件と多い。「原田」地名は87件にもなるが、これは

ハラダにハラダが入っているためである。

【稲葉】

イナバ。屋号にもある。

この小字は、西沢に架かる信夫橋周辺の傾斜地にある。

イナバ（稲葉）とは、刈り取られる前に田に生育している稲のことをいうらしいが、これでは地名に結びつかない。

イナバ（稲場）だと、「収穫した稲穂を干すために共同しようした特定の空き地」（国語大辞典）を意味するので、これだったら地名にもなり得るし、現地にも合っている。

一方、方言大辞典では、飯田地方の方言として、イナバ（稲場）とは、「(古く稲を干す所として使ったところから) 民家に近い芝原」としている。現在は、芝原にはなっていないが。

なお、国土地理院の2.5万分の1地図には、イナバ地名が32カ所、「稲葉」地名は25カ所、記載されている。稲葉と稲場を含むので、イナバが多くなっている。

【久保田・久保田洞】

クボタ・クボタボラ。

クボタは屋号にもなっている。

これらの小字は、竜丘小学校の南側の下の段、児童センターがある、西沢に沿った緩い傾斜地にある。

2.5万分の1地図をみても、クボタ地名が81カ所もあり、全国的にみてもありふれた地名の一つである。

クボ（久保）は、クボ（窪）で、周りより低く窪んだ所をいう。タ（田）は、先にハラダ（原田）小字で触れた。ホラ（洞）は谷間のことだった。

クボタ（久保田）は、「周りより低い所にある耕作地」であり、クボタボラ（久保田洞）は、「クボタ小字とその周辺の谷間」としておきたい。

【蔵ノ下】

クラノシタ。

この小字は、南側のクボタ（久保田）小字の上の段丘にあり、北側はウラキド（浦木戸）・ナカヤ（中屋）小字に接している。

クラ（蔵）は倉庫をいうが、この場合、ウラキド・ナカヤ・クモンジョなど桐林の中心的な施設があることから、桐林の年貢米か、飢饉に備えた備蓄米を保管していたのではないだろうか。

この倉庫のあった場所は、クラノシタ小字よりも上の方にあったはずで、上の方とは、緩い傾斜地になっているので、傾斜地の上の方、つまり北側に当たる。それは、ウラキドかナカヤのどちらかの小字になるが、ナカヤにあったとする方が適っているような気がする。

クラノシタ（蔵ノ下）は、「大事な倉庫のある場所の緩い傾斜地の下側の地」ということになるだろうか。

全国地図には、クラ地名は7カ所にあるが、クラノシタ地名は一つも無い。

【浦木戸】

ウラキド。屋号にもある。

この小字は北隣にクモンジョ小字、東隣にはナカヤ小字がある。桐林の久保田集会所は、このウラキド小字にある。

キド（木戸）は、キ（柵）・ト（門）で、防備のために柵につくった門である。あるいは関所のようなものであったかもしれない。

ウラ（浦）←ウラ（裏）で、ウラキドとは、後ろ側にあった木戸のことだろう。

表側つまり北側にも表木戸があったと思われるが、小字には残っていない。

下川路にも、かつては表木戸と裏木戸があった、裏木戸はこの桐林と同様に南側にあったと

いう記録がある（川路村誌）。

2.5万分の1の全国地図にも、1カ所だけ、ウラキド地名が載っている。

【中屋・中屋畑・中屋前】

ナカヤ・ナカヤバタ・ナカヤマエ。

ナカヤは屋号にもなっている。

これらの小字は、ウラキド小字の東側（正確には南東側）に順に並んでいる。

ナカ（中）には、中心地の意味があり、ヤ（屋）は建築物のこと。

だから、ナカヤ（中屋）とは、「政治的、行政的、経済的中心地の建物」を意味する（語源辞典）。ここは旧桐林村の中心地であった、ということになるがどうであろうか。

ナカヤバタ（中屋畑）はナカヤに所属する畑、ナカヤマエ（中屋前）はナカヤの前の方にある土地である。この付近のマエ（前）とは、南東の方向で緩い傾斜地の下の方ということになる。

2.5万分の1の全国地図には、ナカヤ地名は64カ所もある。「中屋」地名は37カ所。ナカヤには、中屋の他に、仲屋・中谷・中矢・長屋などの漢字が宛てられている。

【庵ノ塚】

アンノツカ。

アンノツカ小字は、竜丘小学校の校地を含む、段丘の南端に位置する広い地域となっている。

アン（庵）は、草葺きの小家とも大寺に所属する小僧坊ともいう（広辞苑）。アンノツカ小字付近の桐林の庵といえば、専養庵（専養寺）ということになるだろうか。専養寺の庵主様のお話では、専養寺は、大昔はもっと東にあった、と聞いたことがあるという。専養寺の東の方とは、アンノツカ小字の地である。

アンノツカ小字には、二基の古墳があったし、近くの坊主新田や中屋畑にも古墳があったとい

う記録がある。

アンノツカ（庵ノ塚）とは、「専養庵付近で古墳のある所」を意味するものと思われる。

2.5万分の1の全国地図には、アンノツカは無い。

【前ノ原】

マエノハラ。

この小字は、竜丘公民館の敷地とそれから北に延びる広い面積の小字になっている。

マエ（前）とは、ナカヤ・ウラキド・クモンジョ等の小字がある旧桐林村の中心地から前の方、すなわち南東方向を示すものと思われる。

マエノハラ（前ノ原）とは、「桐林の中心地から前の方（南東の方向）にある、平らで広い土地」ということになる。その広い平地は開墾地であるのか、あるいは未墾の入会草刈地であるかは、はっきりはしない。

国土地理院の2.5万分の1地図には、マエノハラ地名は1カ所ある。「前之原」という漢字を宛てている。

【坊主新田】

ボウズシンデン。

この小字は、イナバ小字とアンノツカ小字の間にある傾斜地に位置する。

ボウズ（坊主）は僧侶または寺の所有地をいう。シンデン（新田）は開墾地である。この付近で寺といえば、専養寺が近い。

合わせて、ボウズシンデン（坊主新田）とは、「専養寺の所有地である耕作地」ということになる。しかし、先に述べたように、この小字は稲干場にいいような傾斜地で、平らな部分はずかしかない。この地名が生まれた時には、焼畑であればともかく、この斜面で実際に耕作が行われていたのであろうか、という疑問は残る。

2.5万分の1地図には、1カ所のボウズシンデ

ン地名が記載されている。

【長溝谷・長センナギ】

チョウセンナギと地元では呼んでいる。確証はないが、「長溝谷」は知られていないので、双方を合わせてチョウセンナギとよんでいるのかもしれない。

この小字は、桐林段丘とその下の方を流れる新川との間の急傾斜地にある。

難解地名である。

小字名と宛てられた漢字が、これほど離れている例は始めて。『町村地名大鑑』では、チョウコウタニとなっている。

ナギ（難）は「崖。急斜面」のことで問題はない。

さて、チョウセンとは何か。朝鮮ではないだろう。

①チョウセンが「溝」を意味するのは、岡山県の方言。飯田からはかなり離れているので、それというわけにはいかないかもしれない。

②チョウ（長）は「長いこと」（国語大辞典）、センはセ（瀬）の強意形。合わせてチョウセンとは「長い瀧」のこと。チョウではなくて、ナガであれば、これでいいのだが、やはり抵抗感がある。

③チョウセン←チョウザン（凋残）で、「しばみ損なわれたさま」を意味する（国語大辞典）。崩壊地名を表すのであるが、広辞苑には無い言葉であることが気になる。

どれとも決めかねるが、チョウセンナギは「流れの強い瀬がある急傾斜地」としてもいいように思われるが、どうであろうか。

この地名は、むろん、全国地図には一つも載っていない。

【尾畑】

オバタ。

オバタ小字は、マエノハラ（前ノ原）小字の南東側の急傾斜地にある。

オ（尾）は、端末を表し、ハタ（畑）は、ハ（端）・タ（処）で、縁とか外側を意味する。

オバタとは、「桐林段丘の外側（の急傾斜地）」を意味する。オバタには「急傾斜地」の意味を含んではいないが、中心地のある段丘の端末の外側ということになると、急傾斜地にならざるをえない。

2.5万分の1の全国地図には、39件のオバタ地名が記載されているが、宛字は、尾畑・小畑・小幡・御畑・小場田と様々である。

【下新川】

シモシंगाワ。

新川に沿った所に、シモシंगाワ小字がある。桐林の上流にはシंगाワ小字がある。

新川については、既に、時又地区で、シंगाワ＝シモカワとしている。毛賀沢に対して下にあるシモカワである。

【鶴巻】

ツルマキ。

ツルマキ小字は、新川に沿った細長い小字で、間にシモシंगाワ小字を包んでいる。

ツルマキ小字は、時又・上川路・長野原のそれぞれの地区にも存在しており、既述の通り、多様なツルマキがある。

ツルは語源辞典によれば、「水路のある低地」とあり、現地をみれば、それはその通りであると思うが、どうしてツルが低湿地を意味するのか、その理由がはつきりしないのが気にかかる。

この桐林のツルマキ（鶴巻）とは、「新川に沿った低地であって、流路が巻きつくように、大きく曲がっているところ」ということだろうか。ツルマキ小字の新川の近くには水田が多く、残りは桐林の段丘に登る急な傾斜地となっている。

ツルマキ地名は全国的にも多い。「ツルマキ」というのは侍が弓の弦を巻いておくための道具である。合戦絵巻などの鎧武者にも必ず描かれている。弓の弦はいつも張っておくわけにはいかず、ふだんは巻いてしまっておく。消耗品でもあった。このツルマキに似た形の田や地形があれば、弦巻・鶴巻という地名になった。」（服部英雄）。この説明の方がわかりやすい。

【久保尻】

クボジリ。

この小字は、桐林久保尻集会所を中心としたその周辺で、桐林段丘から一部は新川まで、その間の急傾斜地をも含んでいる。

クボ（久保）←クボ（凹。窪）で、辞書類は、「周囲が高く、中央が低くなっている所」という内容の説明になっている。しかし、桐林のクボは、現地を見れば、最も高い桐林の段丘から新川の低地にいたる傾斜地の上の部分は、わずかずつ南東に向かって低くなっている緩い傾斜地である。

桐林段丘は、ほぼ平坦地であるが、水流をみても、やや南東東側が低くなっていることがわかる。クボジリ小字を流れる水流の流路部分がやや窪んでおり、これがクボの由来になっているのかもしれない。シリ（尻）の部分は、すこしずつ低くなっていく、その端末部で、それより下は急な傾斜地になっている。

以上のことから、クボジリ（久保尻）とは、「少しずつ低くなっている平坦地の末端部分」を意味しているものと考えている。

なお、2.5万分の1の全国地図には、クボジリ地名は一つも載っていない。

【久保在家】

クボザイケ。

この小字は、クボジリ小字の北側にある。桐

林の台地の北東の端に位置する。

在家とは、もともと中世に領主の所領内に屋敷を与えられて、領主の土地の耕作などの労働力を提供していた、その農民の住居や土地を含めて、在家と呼んでいた。当初は領主に隷属していたが、次第に耕作権をてこに自立性を強めていったのだという。

今はないが、この付近に、クボ（久保）という屋号が多く、近くにクボジリ小字もある。クボザイケ（久保在家）とは、「桐林段丘の末端で、やや低くなったクボ地籍にあった在家」ということになろうか。

なお、クボザイケの屋号もある。

ちょっとした驚きであるが、このクボザイケは、1ヵ所だけであるが、2.5万分の1の全国地図に記載されている。ただし宛てられた漢字は「窪在家」となっている。

【幸神】

コウジン。あるいはサイノカミと呼んでいた可能性もある。

この小字は、タカミ（高見）小字と同じようにクボジリ（久保尻）とクモンジョ（公文所）小字に挟まれているが、タカミの北側になる。

コウジン（幸神）←コウジン（荒神）と転化している。コウジン（荒神）小字は、別に専養寺周辺にあるので、混乱を避けるように、「幸神」としたのかもしれない。とすれば、「幸神」の発生は「荒神」よりも遅れていることになる。

荒神は荒ぶる神で祟りやすい神だが、信仰の性格は多様であるといわれている。

サイノカミと呼んだとすれば、「オノ神」を意味する。オノ神が祀られている場所は、普通は村境が多い。しかし、この「幸神」小字のある場所は村境ではない。塞神とするのに躊躇する理由である。

コウジン地名は、全国で10ヵ所あり、「幸神」地名も一つが記載されている。

【北村】

キタムラ。

キタムラ小字は、桐林の北端に近く、コウジン（幸神）小字の北側、キタハバ（北羽場）小字の南側になる。

キタムラ（北村）のキタとは、何か。これが、意外と難しい。考えられることは二つ。

一つは方向を表す「北」、もう一つは、「谷に沿った高い台地」（語源辞典）というもの。後者の場合、語源はキザ（刻）、キダ（分）、ケタ（桁）などが挙げられている。

ムラ（村）は、人が群れ住む所であるというが、現在でさえ五軒ほどの家があるだけなので、小字名発生の当時がムラであったとは考えにくい。そこで、山を意味するムレから転化したものではないか、という説（語源辞典）を取り上げたい。桐林段丘は北西が高く、南東が低くなっている。キタムラ小字のあるところは、桐林段丘の北東端になっていて、南や東からみると、少し高くなっている。

後者でも、すんなりと正しいだろうとはいえないかもしれないが、現在のところ他には無いような気がする。

キタムラ（北村）とは、①「桐林の中心地からみて北の方にある、やや高いところ」であり、あるいは②キタとムラが重複して「やや高いところ」となる。

2.5万分の1地図にはキタムラ地名が58件も記載されている。「北村」地名は57件となっている。

【高見】

タカミ。屋号にもなっている小字。

タカミ小字は桐林には2ヵ所ある。一つは、

クボジリ小字とクモンジョ（公文所）小字の間にある。もう一つは、新川右岸の桐林段丘の上である。

タカミ（高見）とは、タカ（形容詞タカイの語幹）・接尾語ミ（場所を表す）で、「高い所」を意味する。

2ヵ所のタカミは、ともに東～南からみて少し高くなっているが、目立つのどの高さではない。

そこで、タカミは単に高い所だけではなくて他に意味があるのではないだろうか。2.5万分の1全国地図にはタカミ地名が20ヵ所も載っている。これだけあると、単に高い所を意味するだけでなく、監視所だったり、祭祀場だったりしたことがあったのではないか、とも考えている。

【田中】

タナカ。屋号にもある。

タナカ小字は、あいばんの第二駐車場を含む広い小字である。

タナカとは文字通りに解せば、「田に囲まれた中」ということであり、2.5万分の1の全国地図には、339ヵ所という膨大な数のタナカ地名が記載されている。

タナカは、一般的な地名でそれほど珍しくはないわけであるが、この桐林のタナカ小字には文字通りの解釈はぴったりしない。そこで、語源辞典を参考にしながら、次のように考えた。

タナカは、タナ（棚）・カ（処）で、桐林のタナカ（田中）は「耕作地が棚状になっているところ」としたい。

【公文所】

クモンジョ。

この小字は、JA桐林支所・あいばんの東側になる。ナカヤ（中屋）・ウラキド（浦木戸）などとともに、かつての桐林の中心地を構成して

いたものと思われる。

公文所（くもんじょ）地名については、すでに山内尚巳さんが『伊那谷の地名1』で触れられている。

公文所はもともとは公文（公文書）を処理する役所であった。平安時代以降、諸国の国衙や撰閤家・院庁・寺社などにも設置されていたという。中世末になってからのことと思われるが、公文所の役人は、地頭より下級の職でありながら、その土地の有力者が任命されると、後にはかなりの勢力をもつようになっていたという。

全国地図の中・大字には、クモンジョ地名は1ヵ所だけと、意外に少ない。小字であれば、かなりの数になると思われるが。

【トヒ田（トト田）】

トイダ（トトダ）。

この小字は、JA桐林の給油所の南側にある。資料によって異なる地名であるが、後に示すように、トヒダを採ることにした。

トトダは、「川音のとどろく田んぼ」ということになるが、130mほど離れた段丘端のかなり下を流れる新川の轟きが気になるほど聞こえてくるだろうか、という疑問がある。

トイダ（トヒ田）は、トイダ（樋田）が転化したもので、「小川に隣接した田んぼ」ということになる。この「小川」は新川から引いている井水としてもいいが、自然の小川である可能性もあり、どちらでも意味は通る。

以上のことから、「トヒ田」が正しいのではないかと結論した。

国土地理院の2.5万分の1地図には、トイダ地名は7件が載っている。

【道下】

ミチシタ。

この小字は、現在、JA桐林の給油所のあると

ころに位置する。

ミチシタ（道下）は、文字通り、「人の往来する通路の下側」を意味する。

その通路は、現在の大きな新川橋につながる国道151号線ではない。この小字が生まれた頃には、この国道はまだ無かったからである。

昭和三十二年に修正された国土地理院の五万分の一地図をみると、ミチシタ小字の南端をほぼ東西方向に通っている小道がある。この小道がミチシタのミチの名残ではないかと思われる。

国土地理院の2.5万分の1の全国地図には、ミチシタ地名は21件が、「道下」地名は26件が記載されている。

【町張】

マチハリ。

この小字は、新川右岸で新川を大きくふくらませている崖地の急斜面にある。

マチハリは難解地名の一つ。

マチ（町）とは、人家が密集していたり、商店が建ち並んでいる場所であるので、この桐林のマチハリにはそぐわない。

マチ（町）←マツ←マツハル（纏）と転化したもので、「巻いたような地形」を意味する、と解するのはどうであろうか。

ハリ（張）は、「張り出したところ」だから、マチハリ（町張）とは、「巻いたように張り出した地形となっているところ」ということになる。

まだ検討の余地はあると思えるが、今のところ、これ以上の解釈は浮かんでこない。

なお、2.5万分の1の全国地図には、マチハリ地名も「町張」地名も、載ってはいない。

【村堂（林堂）】

ソンドウ（リンドウ）。

資料では二通りの小字になっていて、ソンドウかりンドウということになるが、ここでは、

ソンドウ（村堂）にしておきたい。

ソンドウ小字は、国道151号線の新川橋の右岸のたもとに、マチハリ（町張）小字に囲まれるように存在する。かつてあゆみ園のあった所である。

村堂は上川路地区のスドロヲと同じように惣堂の役割をもっていたのではないだろうか。

惣堂は中世にあらわれ、村人が寄り合って建てたもので、村はずれの誰のものでもない川縁などに建てられていたという。

ソンドウは「村堂が建てられていた場所」ということになるか。

なお、2.5万分の1全国地図には1件の記載も無い。

【内山】

ウチャヤマ。屋号にもある。

この小字は、新川右岸の崩壊地を含む、国道151号線の北西側にある。

ウチャヤマ（内山）とは、「他村民の入会（いりあい）を許さず、自村の者ばかりで村中が入会する林野」（広辞苑）であるという。すなわち、ウチャヤマ小字は、桐林の村民だけが、立ち入り柴を刈ることができた地域であった。

2.5万分の1の全国地図には、ウチャヤマ地名が63ヵ所、「内山」地名も62ヵ所と多い。多分、中世から近世にかけて、こうした入会地が村ごとに設けられていたのであろう。

【花軒】

ハナノキ。

この小字は、新川右岸の崩壊地から110mほど、離れた、ウチャヤマ・ミチシタ小字の向こうにある。

ハナノキ（花軒）とは、何を意味するのであろうか。飯田市山本から阿智村に多い「花の木」のことではないようだ。

ハナは、ハナ（花）←ハナ（端）で、「ものの先端部」をいう。ノキ（軒）←ヌキ（抜）で、「崩壊地」を意味する。長野県の伊那郡の方言にヌケルがある。よく災害時に「山が抜ける」という。もともと動詞「抜ける」の連用形ヌケが名詞化し、それがヌキに転化したものである。

以上のことから、ハナノキは、「先端部が崩壊している土地」ということになるか。110mという距離を隔ててはいるが。

2.5万分の1地図にはハナノキ地名は22ヵ所もある。

【溝添】

ミゾゾエ。

この小字には、現在、あいばん等JA桐林支所関係の建物が並んでいる。

ミゾ（溝）とは、人工の水路。ソエ（添）は動詞ソフ（添。沿）の連用形が名詞化したもの。ミゾゾエ小字のタンボ小字やウラキド小字との境を太郎井が流れているが、ミゾゾエ（溝添）とは、この「太郎井に沿った地域」を意味しているものと思われる。

なお、2.5万分の1全国地図には、ミゾゾエ地名も「溝添」地名も、1件の記載もない。どこにあっても不思議ではない地名であるのに、意外である。

【反保】

タンボ。屋号にもある。

タンボ小字は、国道151号線の桐林交差点より北側の国道を挟んだ一帯となっている。

タンボ（反保）とは、「田になっている土地。水田」（語源辞典）のこと。一般には「田圃」と書くが、これは宛字だという。

国土地理院の2.5万分の1地図には、タンボ地名は8ヵ所、「反保」地名は4ヵ所が載っている。田圃は多いはずなので、この数字はどう考えた

らいいのだろうか。

【賀原】

カバラという。屋号にもなっている。

この小字は、タンボ小字の北側にある。

国語大辞典によれば、カバラは「桑原」のことで、埼玉県や山梨県の方言であるという。つまり、カバラとは「桑畑」を意味する。

現在のカバラ小字は水田と住宅地になっているが、カバラ小字発生時には桑畑が広がっていたものと思われる。

2.5万分の1の全国地図には、カバラ地名は2ヵ所、「桑原」「川原」の字を宛てている。

【泥障掛】

アオリカケ。地名大鑑ではアブリカケとなっているが、地元ではアオリカケと呼んでいる。屋号にもなっている小字。

アオリカケ小字は、桐林段丘の北端にあるハバ（羽場）小字のすぐ南側にある。新川右岸の急傾斜地から、ほぼ50m位、南になる。

難解地名の一つ。

アオリカケ（泥障掛）とは何だろうか。アオリガケ（障泥掛）は相撲の技の一つで、四つに組んで寄りながら外掛けをかけるという。桐林のアオリガケには関係がないだろうと思われる。アオリ（障泥・泥障）は、泥よけの馬具で、馬腹の両脇を覆うものだという（広辞苑）。アオリ（煽）には、強い風による動揺とか、穀粒を選別するために風を起こす道具をいう場合もある（国語大辞典）。

カケ（掛）は、崖のことか、あるいは物を掛けて置くところか。国語大辞典のいうように、カケ（家箆）で、竹で編んだ籠なのか。なんともいえない。

相撲の技ではあるまい。桐林にも馬がたくさんいた時代は地名誕生時ではない。だから馬具

でもないだろうと思われる。仮説を二つ挙げておきたい。

①「風当たりの強い崖の上」と考える。新川の峡谷から50mほど離れていて、間に羽場小字があるのが難点である。風は峡谷を吹き上げる北～東風ではなくて、南西～南東風でいわゆる異の風である。穀類を選別するに都合のいい場所であったかもしれない。

②「穀類選別器を掛けて置くところ、つまり製造所」をいうのであろうか。

2.5万分の1地図には記載がない。

【大上】

オオカミ。屋号にもなっている。

オオカミ小字は、おおぎつぱに言えば、万寿山と新川の間にある。キョウデン・シンカワ・アオリカケなどの小字に囲まれている。

オオカミといえば、大神すなわち狼を意味することが多いが、中世といえどもそれは考えられない。また、神社でも近くにあれば、オホカミ（大神）で、神のおわす土地ということにもなるが、神社については聞かない。

では、オオカミとは何か。オホ（接頭語で美称）・カミ（上）で、「上の方。高い所」を意味する。桐林段丘は、多少の凹凸はあるが、一般に、北西が高く南東に下る地形になっている。オオカミ小字は、その桐林段丘の北西隅にある。より北側にはキョウデン小字があって、オオカミより高いが、段丘全体から見れば、オオカミ小字は上の方にあるとみても間違いではない。

なお、2.5万分の1の全国地図には、オオカミ地名が21件と、割合に多い。うち大神の字を宛てているのが2件、大上の字は19件となっている。

【京田】

キョウデン。屋号にもある。

この小字は、万寿山の東側で新川との間にある小字。新川から取る太郎井があつて、今は殆どが水田になっている。

キョウデンとは何を意味するのか。

語源辞典によれば、考えられることは二つ。一つは、キョウデン←キュウデン（給田）で、「中世、領主から荘官などに給与された土地」である。桐林の中心ではないが、ありうるものかだろうか。二つ目は、キョウデン（経田）で、「寺院に寄進された田」のこととする。この場合、寺院は、念通寺のことか専養寺のことかはわからない。

キョウデン地名は、2.5万分の1地図にも14ヵ所ある。

【庄司転】

ショウジコロビ。

この小字は、新川峡谷の右岸急傾斜地にある。

ショウジコロビは何を意味するのか。これも難解地名である。

荘園管理に従事していた庄司さんが転び落ちた所とすれば面白いが、それが地名になることはまずないだろう。

ここでも、二つの仮説を挙げておきたい。いずれも歯がゆい感じはするが。

①ショウジ（庄司）←ショウジ（峭峙）で、崖が切り立っていること。コロビ（転）は、川が曲流していること。合わせて、ショウジコロビは「崖が切り立っていて、川（新川）が曲流しているところ」を意味する。

②ショウジ（庄司）←ショウジ（精進）で、一定期間、言語・行為・飲食を制限し身を清めて不浄を避けること。コロビ（転）は、転がり落ちそうな場所で急斜面をいう。合わせると、ショウジコロビとは、「物忌みや潔斎をする崖地」とする。

全国地図には、むろんショウジコロビ地名は

ない。

【葦ノ口】

アシノグチ。

この小字は、万寿山の北東の山麓にあり、駄科へ通じる道路に沿っている。

アシノグチもはっきりしない地名である。アシが山の麓を意味し（語源辞典）、クチは出入口であるとする、アシノグチとは、「（万寿山の）麓を回る道の入口」をいうのであろうか。

2.5万分の1地図には1ヵ所が載る。

【水割】

ミズワリ。屋号にもなっている。

この小字は、万寿山の山麓、アシノグチとキョウデン小字の間に位置する。

ミズワリといえば、アルコールを思い出すが、小字誕生当時に、そうした言葉は存在していないはずである。

ミズ（水）は水流のこと。ワリ（割）は動詞ワルの連用形が名詞化したもので「分けること」。ミズワリとは、「水流を分けたところ」を意味する。現地へ行くまで様子が分からなかったが、現地の状況を目で見て、近所の岡島清一さんの説明をお聞きしてはっきりした。

新井から引いている太郎井がハラダ小字・アシノグチ小字を経て、このミズワリで二つに分流している。分流口は、二つの用水を利用する農家の軒数で、口幅を決めている。

ここでも、かつては水争いは深刻であったが、西天竜の一貫水路が近くを通るようになって、沈静化したという。

国土地理院の2.5万分の1地図には、1ヵ所のミズワリ地名があるだけ。やはり少ないような気がする。

【塚田】

ツカダ。

ツカダ小字は、新川の右岸に長く延びている。駄科との境界地で、その西端を太郎井が流れている。

村誌によれば、ツカダ（塚田）には、円墳があり、石枕が出土しているらしい。

ツカ（塚）は円墳のこと、タ（田）はト（処）に近い接尾語で「場所」を表すことば。ツカダ（塚田）は「円墳のあったところ」を意味する。ここには、水田もあるが、大部分は新川峡谷の傾斜地。

なお、2.5万分の1全国地図には、ツカダ地名が22ヵ所と比較的多いのも頷ける。ツカダに宛てた漢字はすべて「塚田」となっている。

【瓢田】

フクベダ。

この小字も万寿山の山麓にあつて、オオカミ小字とコセ小字の間にある。

フクベは瓢箪のことだが、瓢箪を作っていた耕作地では、地名にはなりにくい。長い間、瓢箪ばかりつくっているというのは考えにくいからだ。

だとすれば、フクベダ（瓢田）とは「土地の形が瓢箪に似た耕作地」としか考えられないが、どうであろうか。現在、この小字は、水田と畑と住宅地になっている。小字の形は、確かに真ん中がくびれていて瓢箪に似ているが、そっくりとまでは言い切れない。

全国地図にフクベダ地名の記載はない。

【堤洞】

ツツンボラ。小字大鑑にはツツミボラとなっている。屋号になっている小字である。

ツツンボラ小字は万寿山一帯に広がる面積の大きな小字である。

ツツンボラとは何を意味するのか。

ツツミ（堤）は動詞ツツム（包）の連用形の

名詞化したもので、「山などによって周囲を取り囲まれた地」（語源辞典）を表す。

ツツンボラとは、「万寿山やコセハラ小字の山で周囲を取り囲まれた、谷間の行き詰まりになっている洞」と言うことになる。

洞の下の方は、水田になっているが、水源は山の麓の湧水で、もっと上方にある溜め池ではない。ツツンボラのツツミは貯水池や溜め池ではないようだ。

なお、不思議なことであるが、全国地図には、ツツンボラもツツミボラも記載されていない。

【小瀬・小瀬原・小瀬洞】

コセ・コセハラ・コセボラ。

コセボラ小字は屋号にもなっている。

これらの小字は、ツツンボラ小字のある万寿山の南側にまとまっている。

国語大辞典によれば、長野県の一部では、「一方が山側になった道」をコセと呼んでいるという。桐林のコセ関係小字をみると、全くその通りであることがわかる。

コセハラ（小瀬原）は、「一方が山側になった道のある開墾地」。

コセボラ（小瀬洞）は、「一方が山側になった道のある、谷が行き詰まっている洞」ということになる。

国土地理院の2.5万分の1地図には、中・大字であるコセ地名が17ヵ所、載っている。宛てられている漢字は「小瀬」が9、「古瀬」が4、「古船」が2、「巨勢・呼瀬」が1ヵ所ずつとなっている。

【流田】

ナガレダ。

この小字の北側にはコセ小字、南側にはヨコマクラ小字があつて、この二つの小字に挟まれている。

ナガレダとは何か。二説を挙げておきたい。

①現在は果樹園と住宅になっているが、図面には、南側には崩れた痕跡はある。語源辞典によれば、「流れる」には、「畑がくずれる」意味があるという。ナガレダ（流田）とは、「一部がくずれたことのある耕作地」ということになる。

②同じく語源辞典によれば、ナガレは、「なだらかな傾斜の長く続く地形」でもある。ナガレダとは、「なだらかな傾斜地にある耕作地」を意味する。傾斜しているのは小字の縦方向で、決して「長く」はないのだが、考えられる解答ではある。

2.5万分の1地図には、ナガレダ地名が10ヵ所、「流田」地名は11ヵ所、記載されている。

【横枕】

ヨコマクラ。屋号にもある。

この小字は、クボジリ（久保尻）からテンパク（天白）に続く、ほぼ直線状の古いと思われる道の北側にある。

各地に1ヵ所はあると思われる地名で、2.5万分の1の全国地図にも、ヨコマクラ地名が18件、「横枕」地名が17件、挙げられている。

ヨコマクラもはっきりしない地名である。ヨコマクラ（横枕）とは、地割のときに地形のために幹線に併行して区分できなかった部分だといわれている（語源辞典）。しかし、小字図をみても、そうらしいとは思えない。

単に、枕を横にしたような小字の形をいう（国語大辞典）のが正しいのかもしれない。

あるいは、三重県伊賀の方言である、「灌漑水路の上位に田地があつて用水の先取権のある所」（方言大辞典）の方が現場の状況には近いのかもしれない。

よくわからない地名である。

【宮林】

ミヤバヤシ。

桐林八幡神社は、この小字の中にある。風祭で幣束をたてる立木も境内外の、この小字の森の中にある。

ミヤバヤシのハヤシ（林）は、ハヤ（逸。急）・シ（接尾語）で、「急傾斜地」を意味している（語源辞典）。従って、ミヤバヤシ（宮林）とは、「八幡神社の鎮座する急傾斜地」のことを表している。

国土地理院の2.5万分の1全国地図に記載されている中・大字の中に、ミヤバヤシ地名は3件で、そのすべてに「宮林」という漢字が宛てられている。

【天白】

テンパク。

この小字は、桐林八幡神社のあるミヤバヤシ小字の東側の古瀬集会所のある小字である。

この小字か、この近くに、天白様の祠か石碑がありそうだが、近くの人には、「70余年ここに生きているが、聞いたことがない」という。かつては存在したはずであるが、どこかへ遷座したのか、あるいは焼失してしまったのかどうか。地元の人達の記憶から消えている。

天白神については、上川路地区のテンパク小字の説明で触れる。

【池田】

イケダ。

桐林段丘の山際、テンパク小字の下側（東側）に、イケダ小字がある。

イケダ（池田）とは、「わき出る泉の水で灌漑される田」（国語大辞典）であるという。

北の方にあるツツンボラ（堤洞）小字は、今でも山麓からわき出る水で水田を作っている。同じ山塊の南の方にあるイケダ小字で、湧水を使っても不思議ではない。ただ、現在では、近くを竜西一貫水路など豊富な井水が流れてい

るので、湧水を使う必要はないのであろう。

2.5万分の1の全国地図には、中・大字として、イケダ地名が96ヵ所、「池田」地名も92ヵ所も記載されている。瑞穂の国では、当然のことと言えよう。

【仏師】

ブッシ。

この小字は、イケダ（池田）小字の下流側（東側）にある。

意味が明瞭でありすぎるので、難解地名となっている。

素直に考えれば、ブッシ（仏師）は、「仏像を作る工匠が住んでいた所」ということになるが、この地方で仏像に対する需要がそれほど多かったとは思われない。

では、ブッシ（仏師）←ブッシ（仏氏）で、「僧侶が住んでいたところ」とするのはどうか。専養寺の僧侶であった可能性はある。

もう一つ、ブッシ（仏師）←ブッショ（仏餉）で、方言大辞典には「寺に上げる米」とある。そこでブッシ（仏師）とは「寺に上げる米を作る免租田」ではなかったか、ということも考えられる。この場合の寺も専養寺ということになる。

なお、2.5万分の1の全国地図には、1件だけブッシ地名が載っている。宛てられている漢字は「仏子」となっている。

【柳添】

ヤナギゾエ。

この小字は、ほぼ国道151号線の桐林交差点を中心とした、その東側一帯で、国道に添っている。

川路の天竜川端にあるヤナギゾエ小字は植物の柳を植えた場所をいうが、桐林のヤナギゾエは、井水に添って柳を植えたかどうかは、はっきりしない。

もう一つ考えられる解釈がある。ヤナには斜面という意味がある（国語大辞典）。語源辞典によれば、ギは「処」の転化したもので場所を示す接尾語だという。つまり、ヤナギゾエ（柳添）とは、「緩い斜面に添った場所」ということになる。

現在は、ヤナギゾエ小字の東西の境界に添って井水が南側の低い方に向かって流れている。

国土地理院の全国地図には、ヤナギゾエ地名が1ヵ所記載されている。漢字は「柳添」となっている。

【荒神】

コウジン。

コウジン小字は、桐林区民センターと専養庵があるところ。北側にウラキド・ヤナギゾエ小字が、東にはクラノシタ小字がある。

荒神様については、既に時又区のコウジン（荒神）小字や久保尻のコウジン（幸神）小字のところで触れているので省く。

ここ専養庵の境内にある荒神は祠があつて、丁重に祀られている。

村誌に記載されているが、寛保四年（1744）の桐林村神社の中にある荒神はこの専養庵境内にある荒神様に違いない。祭礼日は三月二十八日になっている。

【竹腰】

タケコシ。

この小字は、桐林八幡神社の緩い傾斜地の下の方にある。ミヤシタ小字の北東端に当たる。すぐ南西方向にはヤクシドウ小字もある。

タケコシとは何か。これも難しい地名である。タケは岳で「八幡社のある丘陵」をいうのであろうか。コシはコシ（腰）で、「麓」を意味する。タケコシとは、「お宮のある丘陵の麓」をいうのであろうか。

危うい解釈なので、他の例も挙げたいが、思

いつかない。

【落田】

オチダ。屋号にもなっている。

オチダ小字は、国道151号線の桐林交差点から南西に広がる地域である。北には、ブッシ（仏師）・イケダ（池田）小字があり、西にはミヤシタ（宮下）小字がある。現在は水田と畑と住宅地になっている。

オチ（落）は動詞オツ（落）の連用形で名詞化したもの。オツ（落）には、地形が傾斜して下に向かうという意味を含んでいる。タ（田）は、水田や畑を含む「耕作地」のこと。

オチダ（落田）とは、「ゆるい傾斜地にある耕作地」を表していると思われる。これは、現地の地形にはよく一致している。

なお、国土地理院の2.5万分の1地図には、オチダ地名が2ヵ所、「落田」地名は3ヵ所、載っている。

【宮下】

ミヤシタ。屋号でもある。

この小字は、桐林八幡神社の境内を含む、その南東側の一帯をいう。

ミヤシタ（宮下）は文字通り、「八幡神社の下の方にある土地」を意味する。この付近は、南東方向に緩い傾斜をみせている。現在は、水田を中心にした耕作地と住宅地になっている。

2.5万分の1地図では、当然ではあるが、ミヤシタ地名は84件の記載がある。「宮下」地名となると、102件に及ぶ。ミヤゲ、ミヤクダリ、ゲンデ、ミヤシモ、ミヤノシタなどの中・大字が「宮下」の字を宛てているからである。

【宮ノ前】

ミヤノマエ。

ミヤノマエ小字は、ミヤシタ（宮下）小字の南西側にある。

このミヤノマエ小字も多い。上川路にも、長野原にも駄科にもある。ただし、上川路はミヤマエとなっはいるが。

全国の中・大字でもミヤノマエ地名が94件、「宮の前」地名が104件もある。

ミヤノマエは、これも文字通り「八幡神社の前の方にある土地」を意味する。ここも南東方向にゆったりと傾斜している。

【溝跨】

ミゾワタリという。

この小字は、古瀬集会所の北東側にある。三方をコセ・ヨコマクラ・イケダの小字に囲まれている。

ミゾ（溝）は、細い人工の水路、つまり井水をいう。ワタリ（跨）は、①動詞ワタル（渡）の連用形で、徒渉点を意味する場合と②ワタリ（辺）で近辺の意味もあるらしい（語源辞典）。現地に立てば、井水の徒渉点ではあまりにも大きさに過ぎる。ここでは、つまらんが、「井水の近傍」という、ありふれた解釈にしておきたい。

この地名は全国地図に1件もない。

【堂垣外・垣外】

ドウガイト・カイト。

どちらの小字も屋号になっている。

これらの小字は、ミヤノマエ（宮ノ前）小字の南側にある。

ドウ（堂）とは、語源辞典がいうように、「神仏をまつる建物」である。神仏を祀った建物は、薬師堂がミヤノマエ小字にあった（中島悟氏談）とすれば、薬師堂であったかもしれない。いずれにしても、ドウガイト（堂垣外）とは、「薬師堂があった所」であろう。

カイト（垣外）は、「建物があつた所」で、他のカイト例からも、その建物の種類は問わないようだ。

2.5万分の1地図には、ドウガイト地名は2ヵ所あるが、「道海戸」「堂改戸」の字を宛てている。

カイト地名は、8件あるが、「垣外」の字を宛てているのは、3件のみである。

【薬師堂】

ヤクシドウ。

ヤクシドウ小字は、ワカバヤシ（若林）小字の端を切り込むようにして位置している。ワカバヤシとカイト小字に挟まれている。

この小字には小さな石碑がある。以下は土地所有者の中島悟氏から聞いた話。この石碑には「薬師〇」と刻まれている。

薬師堂は、昔、ミヤノマエ（宮ノ前）小字の中島氏宅の南西にあつたが、後に、現在の専養寺に遷された。薬師三尊が本尊であつた。現在のヤクシドウ小字は、薬師堂に参拝するための参道であつたという。なるほど、参道くらいの幅の小字であることがわかる。

ヤクシドウ（薬師堂）は「薬師道」であつたかもしれない。

2.5万分の1の全国地図に記載されているヤクシドウ地名は、49件と多いのは当然のことだろうと思われる。

【若林】

ワカバヤシ。屋号にもなっている。

この小字は、ミヤノマエ（宮ノ前）小字の下流側にある。

わかりにくい地名で、川路にもあるが、やはりはっきりとしない。

ワカが形容詞のワカイ（若）の語幹なのか、動詞ワカル（分）の語幹なのかで解釈は異なってくる。

仮説を三つ挙げておきたい。

①植林したばかりの新しい林地。②井水が二手に分けている傾斜地。③ワカを単なる瑞祥地名

として、お宮に近い傾斜地。

井水は太郎井であるが、前にミズワリ地名で触れたように、ミズワリ地名が生まれた時には太郎井は既に流れていた。

ワカバヤシ小字が成立したときには、やはり太郎井はあつたと考えていい。とすると、ワカバヤシ小字の最下流端で分流させたことが考えられる。

いまのところ、②にしておきたい。

全国地図の中・大字には、ワカバヤシ地名は36ヵ所にある。そのほとんどである34ヵ所が「若林」の字を宛てている。

【鍵田】

カギダ。屋号でもある。

カギダ小字は、国道151号線の西側にあり、南北をオチダ（落田）小字とナカジマ（中嶋）小字に挟まれている。

カギダ（鍵田）小字は、時又区にも長野原区にもある。いずれも小字の形状が錠前に似ているために名付けられたものだろうと思われる。

しかし、2.5万分の1の全国地図をみると、中・大字には1件の記載もない。それは、錠状の土地が中・大字にはふさわしくない、ということかもしれない。

【中島】

ナカジマ。

この小字は、国道151号線の両側にあり、沖田石材店の敷地を含む地域にある。カギダ・ゴタンダ・カジガイト・クボタなどの小字に囲まれている。

ナカジマ（中嶋）とは何か。段丘の真ん中に、このような地名が存在しているのはどうしてなのだろうか。地名語源辞典で見ていきたい。

ナカ（中）←ナガと清音化した。ナガには二通りの解釈ができる。①動詞ナガル（流）の語

幹で、「傾斜地」とみる。②ナギ（薙）の転化で「崩壊地形、浸食地形」を意味する。

シマ（嶋）は、「水路に囲まれた耕作地」を川の中洲にみたてたものと思われる。

以上のことを勘案して、ナカジマ（中嶋）とは、「緩やかな傾斜地で、西沢の水路が近くを流れる耕作地」か、「西沢などの小河川に浸食されて、島のようにになっている耕作地」としたいが、どうであろうか。

2.5万分の1全国地図には、ナカジマ地名は、なんと262ヵ所に、「中島」地名だと、322ヵ所に及ぶ。これらの大半は河川に関わる地名と思われる。

【宝下】

ホウゲ。屋号にもなっている。

ホウゲ小字も、国道151号線が大きくカーブしているところの両側にあり、ナカジマとサカシタの小字の間にある。

ホウゲ（宝下）はハケが瑞祥名に転じたもの。ハケは、ハバなどととも、崖を意味するが、ここでは国語大辞典に従っておきたい。すなわち、北海道・東北・関東から西の方にかけて、「丘陵山地の片岸」をいう地形名である。

ホウゲ小字は、桐林段丘の一つ下の段丘で、桐林区と時又区にまたがっている、段丘崖にある。

国土地理院の全国地図には、中・大字としてホウゲ地名が1ヵ所あり、「法花」の瑞祥名が宛てられている。

【五反田】

ゴタンダ。屋号でもある。

この小字は、国道151号線の西側にあって、ワカバヤシ・カギダ・ワカミヤ・ツカゴシ・ホウゲ・ナカジマの小字に囲まれている。

ゴタンダ（五反田）は、文字通り、「五反歩の

水田」で問題はないと思う。実面積は五反歩より少し多いが。

国土地理院の2.5万分の1地図には、ゴタンダ地名は65件、「五反田」地名も64件と多い。分割しやすい面積であったのかもしれない。

【若宮】

ワカミヤ。

この小字も、国道151号線より西側にあり、カイト・ゴタンダ・ツカゴシ・ミナミハラの小字に囲まれている。

ワカミヤ（若宮）は、激しく祟る無縁の霊や祖霊をなだめて、その活動をおさえるために、より強力な神の配下に置きたい。そのために神の御子として若宮を祀ることが行われるようになったらしい。特に、この地方では、墓地に、或いは屋敷神として、家の敷地内に祀られることが多い。

あるいは、若宮とは仁徳天皇を指す場合もある。父の応神天皇を祀る八幡社が上の方にあるので、そうしたつながりがあるのかもしれない。

さて、桐林のこの若宮は、ワカミヤ小字があるのだから、どこか近い所に祀られているはずであるが、この小字内にはないようだ。現在のところ、どこに遷座されているのか、不明である。

2.5万分の1全国地図にはワカミヤ地名は85件と多く記載されている。

【塚越】

ツカゴシ。

この小字は、国道151号線に接し、ホウゲ（宝下）小字の西側にあり、大塚を取り巻いている。

ツカゴシ（塚越）とは何を意味しているのか。

ツカ（塚）は前方後円墳である大塚で問題はない。ゴシ（越）は二通りの解釈がある。

①コシ（越）は、動詞コス（越）の連用形の名詞化で、「越す所」を意味する。とすると、ツカ

ゴシ（塚越）は、「塚へと越す所」となる。

②コシ（越）←コシ（腰）で、「山の麓に近い所」の意となる。ツカゴシ（塚越）は、「塚のすそ」を意味する。

今までは、コシは「越シ」に執着してきたが、ここでは、「腰」の方が意味がはっきりするかもしれない。

国土地理院の2.5万分の1地図には、ツカゴシ小字が18件も載っている。

【大塚】

オオツカ。

この小字は、桐林台地上にあり、ツカゴシ小字とホウゲ小字に囲まれている。

この小字は、大塚古墳という前方後円墳そのものである。はっきりした地名の一つで「大きな古墳」を表している。

名称が単純であることから、この地名の中・大字が多いので、国土地理院の2.5万分の1全国地図には、なんと110件のオオツカ地名が記載されている。

【南原】

ミナミハラ。屋号にもなっている。

ミナミハラ小字は、桐林段丘の西端になり、駒沢の谷に接している。周辺には、カイト・ワカミヤ・ケンセイヅカなどの小字がある。

ミナミハラ（南原）の意味することは単純に「南の方の開墾地」である。しかし、どこを基準としての南なのか、というと少し考えてしまう。中心となっているのは、やはり神社仏閣で、このミナミハラの場合は、北の方にある桐林八幡社として問題はないだろう。

なお、国土地理院の全国地図には、ミナミハラ地名は42件記載されているが、「南原」地名となると、61件に増える。ミナミバルやナンバルにこの漢字が宛てられているからである。

【兼清塚】

ケンセイヅカ。

この小字は、ミナミハラとトドメキの小字に挟まれて、ツカゴシ小字と国道に接している。

兼清塚のあるところで、大塚古墳から100mほど南西方向にある。兼清塚もまた、前方後円墳である。

ケンセイとは何を意味しているのか。はっきりはしないが、多分、ケンセイ（賢聖）で「知徳を兼ね備えた人」を葬っている、ということではなかったか。兼清←賢聖と転化したと考えるが、踏み込みすぎかもしれない。

全国地図にケンセイ地名はないが、「兼清」地名は1ヵ所ある。

【トドメキ】

トドメキ小字は、国道とケンセイヅカ小字の間にある。

ありふれた地名で、トドメキは動詞トドメク（轟）の連用形で名詞になったもの。「川音がとどろく所」を意味する。荒れる川であった駒沢の水量が増した時の恐ろしさが地名となっている。

全国地図には、これも1ヵ所だけ。

【細井】

ホソイ。屋号でもある。

ホソイ小字は国道151号線の駒沢橋の下付近になる。

地元では、「細い井水が流れてきていたので、この付近をホソイと叫んだ」という。太郎井の分流で、このホソイ小字で水車を回して、駒沢に合流していた、という。

2.5万分の1全国地図には、ホソイ地名が6ヵ所あり、いずれも「細井」の字が宛てられている。

【休場】

ヤスンバ。屋号にもなっている小字。

この小字は、周囲の三分の二ほどを駒沢に囲

まれた土地で、ミヤボラ・ミヤノマエ・カイト・ドウガイト・ミナミハラ等の小字に囲まれている。

ヤスンバといえ、峠などでの休息所をいうことが多いようであるが、ここでは適用できない。

桐林のヤスンバ（休場）とは何を意味しているのだろうか。

ヤスンバ（休場）←ヤスノバ、と撥音便で転訛したものと考えたらどうであろうか。ヤスはヤチ（菰）の転じたもので、「湿地」を意味する。とすれば、ヤスンバとは「湿地」を表していることになる。

ヤスンバ小字は、南東に傾いてきた斜面が、桐林段丘の西の白井原丘陵に妨げられて、丘陵の近くでは南に傾斜している地域で、湿地帯となっている。現在はほとんどが水田で、北東の高いところに居住地があるだけである。

2.5万分の1全国地図には、ヤスンバ地名が、2件記載されている。また、「休場」地名は7件となっている。

【宮洞】

ミヤホラ。屋号にもなっている。

ミヤホラ小字は、東端が桐林八幡神社の境内になっており、ミヤバヤシ・ミヤシタ・ヤスンバ・ジョウヤマ・ジョウテボラなどの小字に囲まれて、北は駄科境になっている。

ホラ（洞）地名は、伊那谷南部には多い。ホラは行き詰まりになっている谷間のことをいうので、ミヤホラ（宮洞）とは、「桐林八幡神社というお宮のある、行き詰まりになっている谷間」となる。複雑にしないで、「お宮のある洞」の方が、この地域では分かり易いかもしれない。

国土地理院の全国地図には、ミヤホラ地名は無いが、「宮洞」地名は1件記載がある。それは、ミヤボラの宛字になっている。

【河内洞】

カワチボラ。

この小字は、サンヒルズ飯田総合福祉センターの東側にある。

ミヤボラ（宮洞）・ツツミホラ（堤洞）とこのカワチボラ（河内洞）からは、須恵器窯跡が発掘されている。東～南東斜面で、異の強い風を利用したものと思われる。

カワチ（河内）とは、沢の上流部のことを指すことがある。この桐林のカワチは駒沢の一つの支流にすぎず、しかも雨の時に流水があるだけの谷である。広島県の方言で、カワチは傾斜地を表すこともあるというが、この地域で傾斜地ならざるところはどこにもない。あるいは、カワチとは人の住むぎりぎりの山辺という解もある。

山の中のカワチだから、はっきりとはしないが、カワチとは、「山の中で湧水の細い流れがある洞」としておきたい。

カワチボラは全国地図には無い。

【城手洞】

ジョウテボラ。

この小字の範囲は広い。サンヒルズから運動場やドームはもちろんのこと、オムロンまでを含む。ジョウには「山」の意味もあるので、それですべてを締めくくってしまったもいいほどに広い。

しかし、ジョウテボラはジョウヤマ（城山）小字を包むような形をしている。

そこで、ジョウテボラ（城手洞）とは、「手の指のように、城山を守る地形になっている、いくつもの洞があるところ」としたいが、どうであろうか。

「城手」という言葉は、各種に辞書類には見当たらないし、2.5万分の1の全国地図にも、ジ

ョウテ地名も「城手」地名も1件の記載もない。

【上ノ原】

ウエノハラ。

この小字は、桐林段丘の上の段丘で、地元では白井原と呼んでいる段丘の東端にある。ジョウテボラ小字の北西側に当たる。

上川路境に接するところに、ナカハラ（中原）小字があるので、それに対応した「ナカハラ（中原）の上の開墾地」であるかもしれないし、桐林区では最も標高の高いところにあるから、単に「最も上の方の開墾地」ということかもしれない。

全国的にも多く、2.5万分の1の全国地図にはウエノハラ地名が81カ所、「上の原」地名は12カ所が載っている。

【白井】

ウスイ。

白井川の沿岸に数カ所のウスイ（白井）小字がある。

白井と白井川は、どちらが卵でどちらが鶏か、はっきりはしない。しかし、ウスイ（白井）小字が点々とあることから、白井川が鶏ではないかと思われるが、どうであろうか。

ウスイ（白井）は、前にも触れたように、「浅い水流」を意味する。

全国的には、2.5万分の1の地図でみると、ウスイ地名は13カ所で、「白井」地名が9カ所、「薄井」地名が4カ所となっている。

【（白井）桶洞】

ウスイオケボラ。検索のためにオケボラで登録しておきたい。

この小字は白井川左岸から桐林クリーンセンターの近くまで延びている。

ウスイオケボラとは何を表しているのか。ウスイ（白井）は白井川溪谷のこと、オケ（桶）

←オク（奥）と転化したもので、白井川の桐林区の中での上流部を指す。ホラ（洞）は、白井川に口を開く左岸の谷間のこと。

ウスイオケボラ（白井桶洞）とは、「白井川溪谷にある、（桐林では）最も奥の左岸の谷」としたい。

国土地理院の全国地図には、オケボラ地名も、「桶洞」地名も、載ってはいない。

【（白井）松洞】

ウスイマツボラ。これもウスイという枕がついている。これらのウスイ枕の小字については、後でまとめて考えてみたい。

ウスイマツボラ小字は、ジョウテボラ小字を挟んで、ウスイオケボラ小字の南の方にある。白井川には接触していない。

マツ（松）はアカマツのことで、ウスイマツボラ（白井松洞）とは、「白井川溪谷にある、アカマツのある白井川左岸の谷」ということになる。

国土地理院の全国地図には、マツボラ地名も無いが、「松洞」地名は1カ所ある。

【（白井）大ナギ洞】

ウスイオオナギボラ。これにもウスイという枕がついているが、あとで触れる。

この小字は、ウスイマツボラの南東側にある。2カ所に分割されているが、中に入ったのが、ジョウテボラで、ジョウテボラ（城手洞）小字の方が新しいことを示していると思われる。

ウスイオオナギボラは、山間にあって目立つほどではないが、近づいてみると裸の堆積層がはっきりと見えていて、いまでも崩壊を続けている。

ナギ（薙）は既に何回か触れているように、「崩壊地」を意味する。

ウスイオオナギボラとは、「白井川溪谷にある、いまでも崩壊を続けている崖のある谷」ということになる。

2.5万分の1の全国地図には、オオナギボラ地名は無いが、オオナギ地名は3ヵ所にある。

【(臼井) 油田】

ウスイアブラデン。

この小字も臼井川左岸にあり、臼井川に接している。臼井川の屈曲部に水田が開かれていて、その一部がウスイアブラデン小字になっている。

アブラデン（油田）については、上川路地区の小字の中にもあり、中世に寺社の灯明の費用に当てた耕作地であった。上川路では、その耕作地は畑であったが、臼井川溪谷のアブラデンは地名発生当時も水田であった可能性が高く、寺社というのは桐林八幡神社と目される。

ウスイアブラデン（臼井油田）とは、「臼井川溪谷にある、(桐林八幡神社の) 灯明の費用に当てた水田のある所」ということになる。

2.5万分の1全国地図には中・大字として、アブラデン地名は9ヵ所、「油田」地名は13ヵ所が記載されている。

【(臼井) 飼葉平】

ウスイカイバダイラ。

桐林環境産業公園内の会社の敷地の一部がこの小字にかかっている。臼井川沿岸より少し標高の高いところにあって、臼井川には接していない。

カイバ（飼葉）とは、「牛・馬の飼料とする枯草など・まぐさ」(広辞苑)をいう。タイラ（平）とは既に述べているように、山中にある平らな場所のこと。

ウスイカイバダイラ（臼井飼葉平）とは、「臼井川溪谷にあって牛馬の飼料の干し草にするための草を刈り取る柴山で、平らな部分もある山間地」ということになる。

国土地理院の2.5万分の1の全国地図には、なぜかカイバダイラ地名も、「飼葉平」地名も記載

は無い。

【(臼井) 反鼻洞】

ウスイマムシボラとマムシボラがある。

ウスイマムシボラ小字は、臼井川には接していないが、左岸にあり、環境産業公園内の会社の敷地に少しかかっている。

また、マムシボラ小字は、ウスイマムシボラ小字と臼井川の間にある。

なぜ、ウスイという枕のないマムシボラと枕のあるマムシボラが共存しているのか。このことについては後で触れたい。

マムシは、この地方ではよく知られた毒蛇。ウスイマムシボラ（臼井反鼻洞）とは、「臼井川溪谷で、マムシの多い谷」で、マムシボラは「マムシの多い谷」であろう。

2.5万分の1の全国地図には、マムシボラ地名はむろんのこと、マムシ地名も1件の記載も無い。地名にはしたくない、という思いが人々の意識の底流にあるのだろうか。

【(臼井) 祠洞】

ウスイホコラボラとホコラボラがある。

ウスイホコラボラ小字は、臼井川右岸にあり、川に接している。斜面の上（北側）では、ウスイマムシボラ小字とつながる。

ホコラボラ小字は、マムシボラ小字を挟んでウスイホコラボラ小字の下流側に位置する。

ホコラ（祠）には、「神を祀る所」の他に、「ほら穴」や単に「谷」という意味もある。臼井川溪谷は、領家帯で風化した花崗岩が浸食され、奇岩怪石の多いところである。

二つのホコラボラ小字に、現在は祠を確認できないているが、かつて地名が生まれた当時には、祠が存在していたと思われる。

全国地図には、ホコラボラ地名もホコラ地名も無い。ホコラ（祠）が中・大字になるには余り

にも小さいということだろうか。

【臼井七廻り】

ウスイナナマワリ。

この小字は、臼井川に接しており、飯田市環境技術開発センターの敷地内にもかかっている。

「七廻り」とは何を表しているのだろうか。今まで、「ウスイ」を枕にした、7ヵ所の小字について述べてきた。ウスイナナマワリ小字の北の方には、ウスイオケボラ・ウスイマツボラ・ウスイオオナギボラの3ヵ所、南側にウスイアブラデン・ウスイカイバダイラ・ウスイマムシボラ・ウスイホコラボラの4ヵ所。合計で七小字になるが、多分、この「七廻り」の七に関係していると思われる。

一般に、七廻りとか七巡りといえ、七回まわることを意味するようであるが、ここでは、7ヵ所を回ることを「七廻り」とした。ウスイナナマワリ小字は、その出発点であり、到達点ではなかったか。このように考えているが、どうであろうか。

ウスイを枕にした、7ヵ所の小字を順に回ることによって、厄を落としたり、願をかけたりする習わしがあったのではないかと想像している。

2.5万分の1地図には、ナナマワリ地名もナナメグリ地名も無い。

【蒜田】

ビルダ。

ビルダ小字は、ツカバラ小字から臼井川左岸に達する広くて長い小字である。

ヒル（蒜）には、「低湿地」の意味も「傾斜地」の意味もあり、この小字内には、低湿地も傾斜地もあるので、双方の意味を表しているのかもしれない。さらに、ヒル（蒜）には、「広い所」も表すことがある。

ビルダ（蒜田）は、「低湿地も傾斜地もある広い耕作地」としたらどうだろうか。やや、やけどばち気味か。

国土地理院の2.5万分の1地図には、ビルダ地名も「蒜田」地名も無いが、ヒルダ（昼田）地名は2ヵ所、ヒルタ（蛭田、比留田）地名は6ヵ所ある。

【キダ橋】

キダハシ。

この小字は、ビルダ小字と臼井川の間で広い面積を占める。

キダハシ＝キザハシで、階段状の地形をいう。現在、キダハシ小字の一部は竹林になっているが、果樹等の畑もあって、耕作地は棚畑になっている。これをキダハシと名付けたようだ。

なお、全国地図には、なぜかキダハシ地名は載っていない。

【中原】

ナカハラ。

中原団地とその北東側の傾斜地をナカハラと呼んでいる。

ナカハラ（中原）小字は上川路区にもあるし、川路にもある。川路では、ナカッバラと呼んでいる。

ナカハラ（中原）とは、サンヒルズの上の段丘にあるウエノハラ（上ノ原）小字に対応しているとも思われるが、「二つの谷に挟まれた中央の野原」とするのが正解かもしれない。二つの谷というのは、北東側の袋洞沢と南西側を流れる臼井川である。ハラ（原）は「未墾地もある野原」を意味する。

【袋洞】

フクロボラ。

この小字は、上流はサンヒルズへ向かう道と桐林環境産業公園の道の交差する所から下流は

国道151号線を越えて、上川路区にまで達している、細長い小字である。一部はビルダ小字とツカバラ小字に挟まれている。

この小字は、袋洞沢に添う沿岸部にあるが、所々でフクロボラ小字は切られていてアランバラ小字やツカバラ小字が間に入っている。

フクロボラの意味は、文字通りで、「袋のような形に浸食されている谷」である。袋洞沢によって浸食された地形で、小さな沢だが、谷は割合に深い。

ところが、2.5万分の1の全国地図には、フクロボラ地名も「袋洞」地名も無い、ということはどういうことなのか。よくわからない。

【城山】

ジョウヤマ。

この小字は、駒沢と袋洞沢に挟まれた尾根で、ジョウテボラ・ミヤボラ・カジヤマなどの小字に囲まれている。

ジョウヤマ小字は、明治の合併前の村々にはたいがい一つずつはあるといわれている。

中世の特に戦国時代に、この桐林の城山も「村の城」という、村人たちの自前の避難所（伊藤正敏「無縁所の中世」）ではないかと思われる。この城山は 頂上は狭いが、その周辺に柵をつくり、村人たちが、そこへ避難して、合戦を避けることができたのではないだろうか。

上川路のデンペイジョウ小字も桐林のジョウヤマと同じように、「村の城」の一つではなかったかと考えている。

2.5万分の1 全国地図には、ジョウヤマ地名が97ヵ所、「城山」地名は320ヵ所にもなる。シロヤマ地名が加わるからである。

【梶山】

カジヤマ。

この小字も、駒沢と袋洞沢の間の丘陵地でジ

ョウヤマ小字とアランバラ小字に挟まれている。

ヤマ（山）は、「高く突起したところ」でいいが、カジ（梶）は何だろうか。

語源辞典によれば、二つの解釈がある。一つは、「鍛冶職の仕事場や住居のあったところ」。二つ目は、動詞カジル（搔。嚙）の語幹で、「引つかかれたような地形、すなわち崩壊地形」を示すという。

カジヤマ（梶山）とは、

①麓付近に鍛冶屋さんが住んでいた山。カジヤマ小字の南三分の一ほどは異の風を受けやすい緩い傾斜地になっていて、人が住むこともできそうな平地もある。

②崩れた崖のある山。カジヤマ小字の東側には駒沢が迫っていて、現在でも急傾斜地になっている。

全国地図にはカジヤマ地名は13件。

【荒駒原】

アランバラ。町村地名大鑑ではアラコマバラになっているが、下伊那地名調査によった。

この小字は駒沢と袋洞沢の間の、城山丘陵の最南東部端に当たり、ここからは塚原の段丘になる。

アラコというのは、長野県の方言で、「新たに開墾された田畑」を意味する。アランバラ←アラコハラと音便変化したものと思われる。アランバラ（荒駒原）とは、「新しく開墾されたところ」を意味する。いまでも水田はないので、耕作地は全て畑だったと思われる。

アランバラ地名は、やや複雑な名前だからか、全国地図の中・大字として、記載はされていない。

【駒沢】

コマザワ。屋号にもなっている。

この小字は、細長い形で、北はヤスンバ小字に接し、南は上川路区との境まで続いている。

駒沢という暴れ川に沿った地域である。

時又区にも上川路区にもコマザワ小字はある。それぞれで触れているので簡単に述べておきたい。

コマ（駒）が何を意味しているのか、問題になる。まずは馬とすることができるが、馬がこの地方の中心的な存在だったのは、六世紀のことで、地名発生の中世以降にまで馬中心のなにかが残っていたとは考えにくい。牧場関係の地名も川路にはあるので、完全否定はできないが。

コマ（駒）は、コロ（転）・マ（間）で、「土石を流すことが多い沢」とするのが、穏当と思われるがどうであろうか。

【塚原】

ツカバラ。

この小字は、国道151号線のサンヒルズ交差点を中心にして、塚原古墳公園の大部分を含む地域にある。

上川路区にもあるので簡単に触れておきたい。

ツカハラは、駒沢と袋洞沢の間の塚原段丘ともいえる段丘の殆どを占めている。ツカハラ（塚原）は、「多くの古墳がある平坦地」を意味する。

【塚平】

ツカダイラ。

ツカバラ小字にすっぽりと包まれた、わずか4㎡ほどの小字である。二子塚古墳の北西にある。

この桐林のツカダイラ（塚平）とは、傾斜地である上川路のツカダイラと違うので、「古墳のある平坦地」としておきたい。

しかし、どうして、この小さな小字がここに残っているのかは、全くわからない。

【小池】

コイケ。

コイケ小字は、西沢と駒沢に挟まれた段丘上にあり、北側は国道151号線に接している。

コイケ小字の南東隅に溜め池があり、これに由来する地名かとも思う。現在は竜西一貫水路からの水が入るが、かつては、井水を補うために、この小字内にはいくつもの小さな溜め池もあったことは想像に難くない。

コ（小）は、「小さい」という意味の接頭語であったり、意味を持たない接頭語であったり、コ（古）で「従来からの」という意味もあったりする。イケ（池）は、「自然あるいは人工を問わず、水を溜めた所」を意味する。

2.5万分の1の全国地図には、「小池」地名は66ヵ所が載る。

【細井】

ホソイ。屋号でもある。

ホソイ小字は、国道151号線の北西側にあり、コマザワ小字とミナミハラ小字の間にある小さな小字である。

文字通り、細い井水が流れていたところで、太郎井の分流であるが、水車を回していた、という。

国土地理院の全国地図には、ホソイ地名は、6ヵ所で、その全てに「細井」を宛てている。

【坂下】

サカシタ。屋号でもある。

この小字は、国道151号線の南東側にあって、コイケ小字に囲まれている。

サカ（坂）について、広辞苑には、「一方は高く一方は低く、傾斜している道」とある。

サカシタ小字には、確かに国道151号線から下の段丘に降りる道がある。この小字の大部分は、降りた下の段丘面になっている。

そうなると、サカシタ（坂下）とは、「傾斜地の下の方の平坦地」とするのがいいようだ。

普遍的な地名だから、全国にも多く、国土地理院の全国地図に挙げられているサカシタ地名は83件、「坂下」地名になると、90件にも及ん

でいる。サカノシタという地名も含むので、7件増えている。

【梶垣外】

カジガイト。

この小字は、桐林段丘の南端で、西沢川の浸食作用による谷の南東側の尾根の丘陵にある。南よりの風が強く当たる場所である。周囲の小字は、スズハラ・ナカジマ・ホウゲ・イナバ・クボタボラ・クボタである。

カジガイト（梶垣外）は川路にもあり、上川路にはカジヤガイトがある。

桐林のカジガイト（梶垣外）とは、他地区とおなじように、「鍛冶職人の住居だったところ」を意味する。鍛冶のために、風当たりの強い丘陵地帯が選ばれているのではないだろうか。

全国地図には、カジガイト地名は2件と、思ったより少ない。

【丸山】

マルヤマ。

桐林のマルヤマ小字は、その地番から勘案して、カジガイト小字の中にあると思われる。ブルーマップ住宅地図には、該当する番地である3195～3201の数字は見当たらない。

しかし、村誌によれば、丸山には前方後円墳があったが、道路や宅地に削り取られて円墳状に見える、とある。

マルヤマ（丸山）は、語源辞典にあるように、「円錐形の山、特に古墳（円墳）を呼ぶ例も多い」という状態を示している。

マルヤマ小字は長野原区にもあるが、全国的にも中・大字としてマルヤマ地名は352件も挙げられている。

【鈴原】

スズハラ。

この小字は、ナカジマ・クボタ・カジガイト

の三つの小字に囲まれている。

スズハラとは何か。意外と難しい地名である。二説を挙げておきたい。どちらが正しいのか、判断はつかない。

①ササハラ（笹原）のことか。竹の種類は特定できないが、「竹の生えている場所」としておく。

②小字の形を鈴の形に見立てた地名。

2.5万分の1の全国地図には、スズハラ地名が5カ所記載されている。

【小池羽場】

コイケハバ。

ツカバラ小字に囲まれた小さな小字で、現在は宅地になっている。

ここには湧水もなく湿地帯でもない。ハバ（羽場）は崖を意味するが、現地は、むしろ傾斜地といった方が当たっている。

なぜ、コイケハバと名付けたか、理由がはっきりとしない。

ただ、コイケハバに近い、それより一段上のツカバラの東端では、水田もあって、湧水を引いていたというし、低地もあるし、崖も近いので、コイケハバに相応しいのであるが。

【駄科】

ダシナ。

なぜ桐林地区にダシナ小字があるのか。それは、この地が旧駄科村の飛び地であったためである。竜丘には五地区があるが、あちこちに飛び地が入り交じっており、時又の飛び地が鈴岡城の南側にあたりする。

【鳶岩】

トンビイワ。

この小字は新川添いの駄科境にある。

トンビイワとは何か。二説を挙げる。

①トンビイワとは「形を鳶に見立てた岩」のことか。飛んでいるところか、羽根を休めている

ところかわからないが、一般的な解釈であろう。

②もう一つ、可能性は少ないが、トビを動詞トブ（飛）の連用形が名詞化した語と考えると、「崩れ落ちた岩」のことか、あるいは「どこからか飛んできた岩」という口碑でもあれば面白いが、それはないらしい。

全国地図には、トビイワ地名は、中・大字として、1カ所に、トンビイワ地名は4カ所に記載がある。

【流田】

ナガレダ。

桐林のコセ小字とタンボ小字の間にある。

ナガレダとは何をいうのか。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ナガレダとは、字面の通りで、「大雨の時に浸食された田んぼ」であろうか。下流側は土手になっている。

②ナガレは動詞ナガル（流）の連用形が名詞化した語で「なだらかな長い斜面」をいう。ダ（処）は「場所」を示す接尾語。ナガレダとは「長い傾斜地になっている所」か。

【下原】

シモハラ。

時又地区のタイザ小字の南側にある桐林の飛び地である。

シモハラとは①「下の段にある広い平坦地」を意味するか。②可能性は少ないが「霜の降りやすい平坦地」をいうか。

【長洞】

ナガボラ。

駄科の桐林境にある小さな小字で、オオヒラ小字と桐林のミヤボラ小字に挟まれていて、現在は荒地になっている。

ナガボラとは「細長い小さな谷」を意味するのであろう。

全国地図には、ナガボラ地名は中・大字として1ヶ所に挙げられていて、「長洞」の字が宛てられている。

【家下原・エゲ原】

エゲハラ。

これらの小字は、コマザワ小字と時又境の間にある。

エゲハラとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①エゲはエグ（割）と同じく「削り取られたような地形」すなわち「浸食地形」をいう。エゲハラとは「駒沢川にえぐり取られた浸食台地」をいう。

②あるいは、エゲには「禅宗や浄土宗などで師によって教えを受ける所」の意がある。可能性はうすいが、エゲハラとは「禅宗や浄土宗で師から教えを受ける場所があった平地」とも考えられる。

全国地図にはエゲハラ地名は記載が無い。

【桐林の小字で取り上げることのできなかった小字】

唐沢、二反田、西羽場、橋場、新川橋、東垣外、寺下、フジナへ、井間井、中山、本洞峠、田ノ洞、田ノ洞峠。

これらの小字の中には、飛び地が解消されて、他の区に移ったもの、あるいは原因は不明であるが、他区に所属するようになったものなども含まれている。

また、地名も変化していくもので、検地の度に地名が変わっているので、どの地名や地名図が正しいということはいえない。

《上川路地区》

【金山】

カナヤマである。

この小字は、今回の天竜川上流部治水対策事業で盛土した嶋地区の北側にある段丘の南端にある。

カナヤマといえば、鉱山か製鉄場を意味するが、上川路のカナヤマ小字には当てはまらない。

その意味は？と聞かれると、途方にくれるのであるが、あえて仮説を二つ提示しておきたい。

①カナ（金）←カネ（矩）と転訛したもの。ヤマ（山）は、林か耕作地のこと。カナヤマとは、「直線状になっている林地」を意味するのではないだろうか。かつて江戸時代の初期には天竜川の西河筋がカナヤマ小字の南側を流れていたが、その河筋はほぼ直線であることが、現在でもわかる。

②カナ（金）←カネ（鐘）で、「鐘を鑄造した林地」を意味する。鐘とは開善寺の梵鐘をここで鑄造した、という口碑がある。鑄造に必要な炉はどんなものであったかわからないが、強い風を必要としたことは確かで、この地域は、5月～10月にかけて巽（南東）の風が強く吹いている。証拠となる遺物も、そのうちに発見されるかもしれないし、そんな期待もある。

カナヤマは2.5万分の1の全国地図には、78カ所の記載がある。

【ガンド洞】

ガンドボラ。屋号にもなっている。

この小字は、桐林塚原の古墳のある段丘に食い込む小さな侵食谷になっている。

ガンドとは何か。二説を挙げておく。

①ガンド←ガンドウ（巖洞、岩洞）と解するのが、自然に思えるのであるが、ここには岩の洞

穴は存在しない。段丘は砂礫層で基盤が露出しているわけではない。しかし、垂直方向に穿った穴もガンドウと見ることはできる。ガンドウボラとは、「大きく浸食された洞」と解する。

②ガンド←ガントウ（岸頭）と考えるのはどうであろうか。かつて天竜川の西河が、ここを流れていたときには、ガンドボラの出口は天竜川に直接、開いていたと思われるからである。つまり、ガンドボラとは、「天竜川に岸边にある崩れた崖」ということになろうか。この解釈が正しいとすれば、ガンドボラ小字の誕生は正保二年（1645）以前ということになる。

全国地図では、ガンドウ（岩洞）が一カ所、記載されているが、ガンドはない。

【塚平】

ツカダイラ。

この小字は緩い傾斜地にある。桐林区にもあり、このツカバラ小字につながっている。ハラ（原）とタイラ（平）はどう違うのか、同じであったら名称を変える必要がないわけだから、その違いも考えていきたい。

ツカ（塚）は、「土を高く盛って築いた墓」（広辞苑）で、円墳や方墳・前方後円墳のことをいう。

ダイラは夕・ヒラで、夕は接頭語。動詞・形容詞・副詞などの上に付けて語調をととのえる（国語大辞典）もので、ヒラ（平）はこの場合、傾斜地を意味する。だから、ツカダイラとは「古墳のある傾斜地」である。

なお、ツカバラ小字でも触れるが、ハラ（原）は平坦地を意味する。

2.5万分の一の全国地図には、ツカダイラ（塚平）が一カ所あるだけである。傾斜地にある古墳は少ないためであろうか。

【豆腐垣外・トウ腐垣外】

トウフガイト。

ウフガイト小字は、桐林区塚原と境を接する、西向き斜面にある。

トウフガイトは「豆腐を製造していた職人の住居跡」の意である。

豆腐は特に僧侶の精進料理として代表的な食品であるという。開善寺に近い場所にあるので、ここで使われることが多かったのではないだろうか。

国土地理院の2.5万分の1地図にはトウフガイトも豆腐垣外も一カ所もないのはどうしてだろうか。

【臼井】

ウスイ。

ウスイ小字は臼井川に沿って、その左岸に細長く伸びている。臼井川もかつては「うすい沢」であったことは、寛文七年（1667）の下川路の島地区の地図をみればわかる。この地域の小さな川、多くの天竜川の支流には「沢」がついていた。

ウスとは何か。「古語のウス（薄）にはアサ（浅）と類似する意義がある」（語源辞典）という。イ（井）は、ほとんど川の意味である。ウスイとは、「浅い川」ということになる。ウスイはウスイ（雨水）ではないかという見方もあるがどうであろうか。

ウスイ地名は国土地理院の2.5万分の1地図には、13件あり、「臼井」（9）、「薄井」（4）の漢字を宛てている。

【入キメン】

イリキメン。この小字は、臼井川の谷に沿った左岸にある。

これは珍しい地名で、2.5万分の1地図には、イリキメンもキメンもない。

どういう意味なのか戸惑うが、次のように考える。イリ（入）は、「外からある場所の内に移動すること」（国語大辞典）であり、キメンはキ

メ（極）が転訛したもので、「動きがとれないほど窮屈な場所。きわまった所」（語源辞典）を表している。イリキメンとは、「谷川が狭い地域に入るところ」としたい。

現地の地形はその通りであり、他にこれに替わる解釈も見いだせないでいる。

【ヲカミ】

オカミ。

この小字は、桐林区中原団地の西側の水田地帯にある。

オカミ（籠）は「山中や水中にすんでいて、水・雨・雪などをつかさどると信じられている神。竜蛇の神。水神」（国語大辞典）とされている。このオカミ地籍に龍神か水神の石碑であればはっきりするのだが、そうした石造物があったということは聞いていない。

古い話ではあるが、風土記にオカミが登場しているという（谷川健一『列島縦断 地名逍遙』）。風土記の注記には、「水の神。蛇の類をいう。山椒魚（はんざぎ）またはイモリかとする説がある」とある。

ならば、現在は臼井川から井水を引いていて棚田になっているが、かつてはオカミ小字の臼井川べりには池があつて、そこには住んでいたイモリを竜蛇の神として祀っていた可能性は十分にある。

さらに、もう一つの仮説をあげておきたい。

オカ←オガで、オガは動詞オガス（「かき取る」の意）の語幹で、崩壊地形をいう。ミ（辺の転か）は、接尾語で漠然とした場所を示すという（以上は語源辞典による）。このオカミ小字の臼井川に沿う部分は低湿地になっていて、地形からみると、領けないことはない説明である。しかし、引っぱり回しすぎという印象も否めない。全国地図には、11件のオカミがある。

【沢田】

サワダ。

サワダ小字は白井川に沿った、その左岸にある。

サワダというのは、一般に東日本では「谷」の意に用いられ、西日本では、「湿地」を意味するという。ここは山間の水のあるところであることを示している。夕は田んぼであろう。サワダは「山間の小さな谷川の近くにある田んぼ」としても、それほど問題はないと思われる。

2.5万分の1の全国地図には、「沢田」地名は83ヵ所に及ぶ。ありふれた地名であるといえそうだ。

【洞田】

ホラダ。屋号でもある。

ホラダ小字は、オカミ小字の北東側に接している。

ホラ地名はこの地域には多い。そのほとんどが小さな沢筋になっていて、当然のことであるが行き詰まりになっている谷である。そういう小さな谷にも、水を近くから引くことができるので、田んぼは作り易い。

しかし、全国地図には2ヵ所しかないということはどういうことか。面積の大きな大・中字には用いられていないということかもしれない。

【袋洞】

フクロボラ。

この地名も不思議なことに2.5万分の1地図には一ヵ所もない。

フクロボラ小字は、151号線から中原団地へ上る道路の右手の低地にある。

小さな谷が袋状になっている所で、フクロとホラの意味が少し重なっている。

フクロ←ヒク（低）・ド（所）の転で「低湿地」を意味するという考えもあるようだが、か

なり無理があるような気がする。

【中原】

ナカハラ。

上川路区にはわずかの面積のナカハラ小字しかないが、桐林のナカハラ小字は広い。現在の中原団地のある所。フクロダ小字とフクロボラ小字に挟まれていて、なだらかな傾斜地となっている。

文字通り、二つの小さな洞（谷）の間にある「開墾地」あるいは「未墾の入会草刈り地」を意味するものと思われる。

全国の中・大字で、国土地理院の地図に記載されている「中原」は220ヵ所もあり、ナカハラとかナカバルとか呼ばれている。

【大平】

オオヒラである。

上川路のオオヒラ小字は、ウスイ小字の果樹園の北側に当たる、面積の小さな小字である。

この場合のオオ（大）は、オオ（凡）で、「際立っていない」の意で、オオヒラとは、常識的ではないが、「ちょっとした緩やかな傾斜地」を意味するものと思われる。

全国地図には、「大平」地名は294ヵ所もあるが、意味するところは様々か。

【百田】

ヒャクダ。

上川路のヒャクダ小字は、白井川が岸壁の間を通り抜けて出たところの左岸にある。

白井川のすぐ上流から水を引いた棚田が、10数枚ほど並んでいる。まさに「たくさんの棚田のあるところ」となっているが、ヒャクダという地名が付けられた時には、すでにこうして水田が開発されていたのだろうか。

ここで、もう一つ、別の仮説を挙げておきたい。

ヒャク←ビャクで、ビャクは関東各地では山崩れや崖を意味するという。タ＝トは接尾語で場所を示す（以上、語源辞典）。とすれば、ヒャクダは「山崩れを起こしたところ」ということになる。ただ、ビャクがなぜ山崩れを意味するのかは、はっきりしないが、ヒャク←シャクで、シャクは動詞シャクル（決。割）の語幹という解釈も可能と思われる。

国土地理院の全国地図には、ヒャクダが2ヵ所、「百田」が6ヵ所、記載されているが、モモダと呼んでいるところが4ヵ所あるため「百田」の数が多くなっている。モモダでは、百田＝山崩れ説は当たらないことになる。

【瀧ノ入】

タキノイリである。

タキノイリは、白井川左岸のヒャクダ小字に囲まれた小さな小字である。

白井川が兩岸の高い岩壁を抜けて出てきて、やや広い氾濫原が現れている場所にある。その付近の白井川は数段の滝になっており、下流側から遡行していくと、まさに滝のある場所への入口となっていることがわかる。

ただし、ここでいう滝とは、高いところから滝壺に落ち込む滝ではなく、もう少し広い意味の、川の瀬の傾斜の急な所を勢いよく流れる激流のことをいう。

なお、現在白井川秘境と呼ばれている地域は、このタキノイリ小字より上流を指す場合が多い。

国土地理院の2.5万分の1地図によれば、全国の中・大字には、タキノイリ地名が11ヵ所ある。

【アシガ洞】

アシガホラ。

アシガホラ小字は、白井川秘境の右岸の急峻な山間地にある。白井川右岸にあつて、白井川

に向かつて下る一本の尾根と一つの谷が含まれている。湿地帯でもないし、山の麓でもない。

アシ（悪）・ガ（格助詞「ノ」）・ホラ（洞）で、「そこまで行くのが困難な山間地」と考えるのが、無理のない解釈である。

国土地理院の全国地図には、不思議なことに、アシガホラもアシガ洞も一件の記載も無い。アシ（悪）はとても瑞祥地名とは言えないので敬遠されているためであろうか。

【臼井ヒカゲ・ヒカゲ】

ウスイヒカゲ小字は、白井川に沿った右岸の日の当たらない場所となっている。ヒカゲには日の当たる場所を意味する場合もあるようだが、ここは日の当たらない場所である。

ヒカゲ小字は、ウスイヒカゲ小字の白井川とは反対の山側の斜面にあつて尾根にまで達している。ここにも日は当たらない。

2.5万分の1の全国地図には、ヒカゲが78件と少ないような感じがするが、瑞祥地名ではないために命名に躊躇した、ということもあるのかもしれない。

【御判前】

ゴハンマイという。

この小字は、白井川氾濫原の右岸にあつて、その西側の段丘上にあるカミノボウ小字に接している。いずれも、開善寺に関わる地名と思われる。

ゴハンとは、コバン（小番）または小番衆のこと。ゴハン←コバンと転訛したと思われる。ゴハンマイとは、「小番衆が住んでいた所の前面に当たる場所」の意か。

小番とは、中世の寺院において、交代で出仕して交代で勤務に当たる僧のことをいうらしい。開善寺に勤務した小番の住居は、ゴハンマイ小字の西隣にあるカミノボウ（上ノ坊）にあつた

に違いない。上ノ坊の前方である東の方の段丘下に、ゴハンマイ小字がある、という位置関係になる。ゴハンマイには開善寺にかかわる施設があったのであろう。

国土地理院の全国地図には、「御判前」はもちろんのこと、ゴハンマイもゴハンマエも全く記載されていない。

【清水田】

シミズタ。

シミズタ小字は白井川に沿った、その右岸にある。ゴハンマイ小字の下流側になる。

この付近の田んぼは現在はパイプラインで天竜川の水を使っているが、かつては、近くの白井川の水を引くことも難しかったらしくて、段丘の麓の湧水を利用していただけと思われる。

少し南側には、シミズザカ小字がある。サガリ小字を斜めに登って上の段丘に出る坂道のことである。この傾斜地には清水があふれ出していたのであろう。

湧水は冷たくて汚れていないので、飲料水には適しているが、冷たい水が稲作にいい結果をもたらすはずはないので、この清水の湧水を田んぼへ引くには躊躇があったのではないだろうか。

全国の中・大字には、「清水田」が6ヵ所に記載されている。

【サガリ】

サガリ小字は、シミズタ小字の西側の傾斜地がそれである。

サガリは動詞サガル（下）の連用形が名詞化した語で、「傾斜地」をいう。

中心地である開善寺のある段丘面から見て、下っていく斜面を意味する。

国土地理院の2.5万分の1の全国地図には、サガリ地名が8件ある。ノボリ地名の17件に比べ

ると半分しかないのは、サガリがおめでたい地名ではないためであろうか。

【新屋敷】

シンヤシキ。屋号でもある。

現在の飯田市考古資料館から段丘の東端までが、ほぼシンヤシキ小字である。

どこにでもありそうな地名で、現に、全国の中・大字のなかでも、「新屋敷」地名は133ヵ所を数える。

シンヤシキには、国語大辞典をみると、二つの意味がある。一つは、「新たに開墾した屋敷地」で、もう一つは「新築の屋敷」である。

上川路のシンヤシキには、この二つの意味が重なっているように見える。

現在の開善寺境内とは接しているが、シンヤシキが開善寺と関わりがあったのかどうか、はっきりはしない。しかし、かつては開善寺に関わる坊のような建物があって、それがお寺には関係のない建物に変わっていった経緯が、このシンヤシキという語の中に隠されているような気がするが、どうであろうか。

【上ノ坊】

カミノボウである。

この小字は、開善寺のある段丘の一つ上の段丘で、国道151号線を挟んで両側に広がっており、そこには馬背塚古墳もある。

カミ（上）は空間的に高い所で、ノは格助詞、ボウ（坊）は僧侶の住居を意味する。カミノボウとは、「高い所、すなわち段丘の上にある僧侶の住居」ということになる。高い所というのは、むろん、開善寺から見た場合のこと。開善寺で修行を続けているお坊さん達の多くは、一段上の段丘にある坊舎で寝泊まりしていたのだろう。かなり広い小字で、坊はいくつか、建てられていたのだろうと思われる。

全国の中・大字では、2.5万分の1地図に1件のみ、「上之坊」があるだけ。

【宮ノ前】

ミヤノマエ。屋号にもなっている。

上川路の八幡神社前に、ミヤノマエ小字はある。

旧村社級の神社には、この小字があるところが多い。竜丘地区では、時又区を除く桐林・駄科・長野原（ここではミヤマエであるが）の各区にあり、川路にもある。

文字通り、お宮の前にある小字である。

全国的にも多く、国土地理院の2.5万分の1地図には、ミヤノマエ地名は94ヵ所も記載されている。当然のことと思われる。

【判ノ木河原】

ハンノキガワラである。

ハンノキは屋号になっている。

この小字の所在地は、ミヤノマエ小字の南側斜面下にあり、県道時又中村線の南側になる。

ハンノキ（榛の木）は、ハリノキ（榛木）の変化した語。カバノキ科の落葉高木で、山野の湿地にも自生しており、水田の畔に植えて稲掛け用としたり、護岸用に川岸に植えたりする。ミドリシジミの食草でもある。

ガワラはカアラ、ガアラなどと同じで、「水が涸れて砂、小石、礫が露出した所」または単に「小石の多い土地」をいう。現在はハンノキガワラ小字のほとんどが水田になっているが、少し掘ると、河原のような、石の多い地層になっているという。

ハンノキガワラとは、「榛ノ木が自生していて小石や礫の多い土地」を意味する。かつてこの地が、そうした土地であったときに名付けられた名称と思われる。

川路にも、三穂との境の山中に、「南半ノ木」

「北半の木」の小字があるが、ここの榛の木は根粒菌の働きを当てにして、焼き畑のために植えられたものではないか、と考えている。

2.5万分の1の全国地図に記載されたハンノキ地名は、6件ある。

【権現】

ゴンゲン。屋号にもある。

このゴンゲン小字は、県道時又中村線と久米川の間にある。

ゴンゲン（権現）とは、仏や菩薩が人々を救うために種々の姿となって、権（かり）に現れること、またその現れた権（かり）の姿をいう。本地垂迹説では、仏が化身して、わが国の神として現れること、またはその神の身をいう。

ゴンゲン小字内には、現在は塚平家の氏神と権現塚古墳があるだけ。文政五年の記録をみると、権現小字に7寸×5寸の権現拝殿があるが（竜丘村誌）現在はない、八幡社の石碑に変わったか。

全国地図には権現地名は19ヵ所。

【所平】

ショダイラ。屋号にもなっている。

この小字は、ミヤノマエ小字の西隣に広がる。はっきりしない難解地名の一つ。仮説を二つ提示したい。

①ショ（所）←ショウ（荘、庄）ではないか、と語源辞典はいう。とすれば、荘園であったところだが、寺院や神社の私有地となって地域では、「上川路八幡神社の所有地で、山の中腹の平らなところ」という意味になりそうだ。

②これも語源辞典によるが、ショ（所）←シホ（霑）で、シオル（霑る）は「うるおう。ぬれる」意。ショダイラとは「山の中腹の平坦なところで、湿地帯になっている場所」ということになる。現地は段丘の麓にあり、道路工事では水が

出てやりにくかった、と地元では話している。

このどちらかではないかと思うが、他にもあるのだろうか。

なお、国土地理院の全国地図には、ショダイラ地名は一つもない。ただ、「所平」地名は1カ所あって、トコロヒラと呼んでいるようだ。

【乞食アラシ・コジキアラシ】

「乞食アラシ」と「コジキアラシ」の二つの小字は東西につながっていて、八幡神社のある「宮ノ脇」小字の隣にある。

二つの小字を合わせてコジキアラシとする。コジキアラシもまた難解地名である。

地元には、コジキアラシのいわれが口碑として残されている。

ある日、事情ははっきりしないが、乞食を崖の上から突き落として殺害してしまった。そのことを悔やんで石碑を建てたが、その石碑は行方不明になっている。

という内容である。これが正しいとすれば、コジキアラシとは「乞食をアラシ（斜面を落とす）た所」ということになるが、あまりにも内容が禍々しくて、これが果たして地名になりうるだろうか、という疑問が湧く。くわえて、現場に立ってみると、この崖では、転がされても死に至る怪我を受けることはないだろうと思われる。付会の気配が濃いと判断して、紹介するに留めておきたい。

ここでは、二つの考え方を挙げておきたい。

①アラシには「傾斜地」の意味もある。コジキアラシとは、「乞食が短期間、居着いていた傾斜地」を意味する。お宮のそばにあるので、お宮の庇護もあったかもしれない。この小字のどこかに、八幡神社のお祭りの時に短期間滞留できる小屋があったかどうか。地元では、お祭りの時には、よく乞食が集まったものだという。「村

の儀礼と乞食といえ、中世から近世にかけて、村の祭りにさまざまな祭具を調べ、神事の先払いをつとめ、あるいは芸能を奉仕するなどして、村から祝いの米銭や酒を得ていた」（藤木久志『戦国の作法』）という。村々の神事や祭礼は乞食に支えられて成り立っていたらしい。

②コジキアラシ←コシキアラシの転訛があったとも考えることができる。コシキ（甑）アラシと解釈するのである。酒造りが終了したお祝いに、コシキコロバシというお祝いをしている地方もあるし、安産の呪法に甑を屋根から落として安産を祈る風習のあったところもあるという。お宮の近くでもある、甑をあらして、様々なことどもを祈願するということが、上川路はなかったかどうか。なかったと言い切れないように思い、解釈の一つに挙げておきたい。

コジキアラシもコシキアラシも2.5万分の1地図にはない。

【宮ノ脇・宮脇】

「宮ノ脇」と「宮脇」小字はつながっていて意味も同じであると思われるので、ミヤノワキ小字として考える。

ミヤノワキ小字は屋号にもなっている。

この小字は上川路八幡社を含む、かなり広い面積となっている。

ミヤノワキは「お宮、すなわち八幡神社の傍」の意で、問題はない。

2.5万分の1の全国地図にも、ミヤノワキ地名が26カ所、ミヤワキが32カ所に及んでいる。

【野田】

ノダ。この小字は、「宮ノ脇」小字の北側にあり尾根から白井川の間の日陰の傾斜地に広がる。

現地には柵田状の段がある。田ではないとは言いつても、ノダ←ノタ=ヌタで、「山間の湿地」を表すものと思われる。方言辞典にもノ

ダは下伊那郡ではヌタの意とある。猪が体に泥を塗りつける場所でもある。

2.5万分の1の全国地図には、ノダとノタの地名が、165カ所に及ぶ。

【伝平城】

地元では、デンベイジロと呼んでいる。

デンベイジロ小字は広いが地元で伝平城と呼んでいるところは、幅の広い舌状台地になっていて、上川路配水池との間に空堀があって、現在は、それが道路として使われている。中世の城ないし砦は戦いの時には、領民を収容することが多かったという。それだけの広さが、この城跡にはある。

この伝平城跡にはあちこちに墓地が散在しており、馬頭観音も二基、林の中に鎮まっている。

デンベイ←テッペン（天辺）で、頂上を意味するのではないだろうか。デンベイジロは「山の上にある砦」と解したいが、どうであろうか。あるいは、デン（天）・ベイ（平）・ジョウ（城）で、「山の上にある平坦地に設けられた砦」と読むこともできそうだ。

山本の久米にある城山と関連がある砦ではないか、と地元ではいつている。

なお、全国地図には、デンベイジロ地名も「伝平城」地名も無い。

【久保田】

クボタ。

クボタ小字は、北にショダイラ小字、南にゴンゲン小字の間にある。

文字通り、「周辺よりやや窪んだ場所にある田んぼ」であろう。全国の中・大字にも、81カ所もある。全国的にも多い地名と思われる。

【天白】

テンパク。屋号にもなっている。

テンパク小字は、茂都計川の左岸で県道時又

中村線に沿った長い地域になっている。この小字のほぼ中心部の斜面に天白社の祠がある。この祠は、県道からも見える位置に鎮座している。

天白神は信州を中心にして、東北・関東から東海・伊勢志摩にかけて見られという。民俗大辞典によれば、星神・猿田彦・天狗・山の神・十二山の神・金神・祟り神・漂着神・水神・御霊神・雷神・稲荷・地主神・地の神・屋敷神的な性格や災害除け・雨乞い・厄除け・平癒祈願・安産祈願・子育て祈願などの信仰があるらしい。

上川路のテンパクは、柳田国男が指摘するように、風の神ではなかったかと思われる。この小字のある斜面には異の風が吹き付ける地形になっており、近くには、カザコシ小字やカザコシホンボラ小字もあるからである。

全国の中・大字では4カ所に記載がある。

【ツツミ・ツツミ入】

ツツミイリ小字とツツミ小字は境を接している。

現在は畑になっているが、数年前までは田んぼだったという。

かつて、ここにツツミがあったころ、ツツミ入からツツミに蓄えた水は山腹から湧き出る清水だったのだろう。ツツミ入から傾斜地を80mほど登ったところに溜め池があった。現在は草の茂った湿地であるが、かつてはこうして、湧水を大気にさらして温めてから田んぼに導き入れていたものと思われる。

現在は、両小字の下を茂都毛川から引いた井水が勢いよく流れている。

なお、国土地理院の全国地図には、ツツミ地名は62件、ツツミイリ地名は0となっている。中・大字とするには、ツツミ小字の面積は狭いが、その割には、全国的には多いとみていいの

かもしれない。

【芝平】

シバピラ。

地元で話しても首を傾げる人が多い。忘れられている地名の一つ。デンペイジロ小字に取り囲まれていることから、シバピラ小字は、デンペイジロ小字よりも後に生まれた小字と思われる。

山の上の平坦地ともいえるほどに緩い傾斜地で、柴山になっていて、薪をとったり、樹の小枝や葉を肥料にしたりしていた場所と思われる。すなわち、シバピラとは、「緩い傾斜地にある柴山」を意味する。

あるいは、語源辞典にあるように、焼畑であった可能性もある。

全国地図では、シバピラ地名はないが、シバヒラ2ヵ所、芝平3ヵ所となっている。

【油田】

アブラデン。

尾根道の谷側にある小字で、デンペイジロ小字に接する。

アブラタ（油田）については、「中世、社寺で灯明の資として定められた田」（語源辞典）とある。アブラデンも、その畑であげる収益を、麓にある八幡社で使用する灯明の費用に宛てたものと思われる。デンは田を意味するとともに、畑の意味にも用いられることがある。

アブラデン小字は雑木に覆われていて確認が難しいが、すぐ傍らのデンペイジロ小字には棚畑があって、三段のうち一段は耕作放棄されているが、残りの二段では今なお、耕作が続けられている。尾根に近い場所であることから、かつて田んぼであった可能性はほとんどない。

2.5万分の1の全国地図には、アブラデン地名が9ヵ所、油田が13ヵ所、記載されている。

【樋入・樋ケ入】

トヨイリとトヨガイリ。

いずれも同じことを意味しているものと思われる。茂都毛川沿いに細長く張り付いている小字である。

源氏ヶ滝の下流100mほどの左岸に現在も井水の取り入れ口がある。上川路は井水の多い地域で、近世の検地でも上田が多かったのは、この井水によるものと思われる。

トヨ←トイ←トヒ（樋）と変化したもので、トヒは水路のこと、特に人工的なものをいうことが多い。上川路のトヨは井水を意味する。イリ（入）は、入ることだから、トヨイリとは、「井水の取り入れ口」のことをいう。トヨガイリも同じ。

不思議なことは、全国の地図には、トヨイリもトイイリも樋入も記載が全くないこと。トヨイリはこの地域の方言か。

【藤塚】

フジツカ。

フジツカ小字は、この地域には多い。川路には二ヵ所、竜丘にも長野原に一ヵ所ある。

しかし、全国的にみると、2.5万分の1地図には、フジツカ11ヵ所、「藤塚」14ヵ所と意外に少ない。フジツカ小字が占める面積が小さいので、中・大字とはなっていないためだろうか。富士信仰が、この地域にだけ盛んだったとは考えられない。

フジツカ（富士塚）とは、「富士講の人たちが、富士山に模して築いた塚。江戸時代に江戸やその近くに数多くでき、山開きもした」（広辞苑）という塚であるという。

上川路のフジツカ小字は、県道時又中村線と茂都計川に沿って、源氏ヶ滝の上流部分にある。しかし、この小字に、現在はフジツカの痕跡は

見ることができない。おそらくは、現在、八幡社に置かれている富士塔が、かつては、フジツカ小字にあったのではないかと推測している。富士塔には、文政六年（1823）の年号が刻まれている。

左手の山には富士塚が残っているという。

【大畑】

オオハタ。

オオハタ小字は、上川路から伊賀良の中村に抜ける尾根道の西側一帯に広がる。文字通り、「大きな畑」となっている。オオハタの大部分は、今なお耕作が続けられているが、休耕畑ではウリ科の植物が畑全体を覆ってしまったり、桑が喬木化し森を形成したりしている。

全国の中・大字には、当然のことながらオオハタ地名が多い。オオハタ75ヵ所、オオバタ20ヵ所、大畑が145ヵ所となっている。

【風越】

カザコシ。

カザコシ小字は、飯田下伊那には多い。この上川路にカザコシとカザコシホンボラがあり、他に下條村北又、下條村仁王関、飯田市羽場、富草新木田、富草古城と7ヵ所に及ぶ。

しかし、国土地理院の全国地図には、カザコシが6ヵ所、風越が8ヵ所と、飯田下伊那の小字に比べると、かなり少ない。カザコシ小字はあっても、カザコシ地域の面積が少なく、中・大字にまで成長することが、稀だということなのかどうか。

上川路のカザコシ小字は、茂都計川と久米川の間尾根道沿いに張り付いており、伊賀良の中村に出る峠付近にある。また、伊賀良との村境を越えて中村のカザコシ小字につながっている。

文字通り、巽の風（南東風）が峠を越えてい

く様子を見たり感じ取ることができる。

【風越本洞】

カザコシホンボラ。

この小字は、カザコシ小字のある尾根道の東側の斜面にあり、10町歩余の面積をもつ広大な地域である。茂都計川の左岸で、県道時又中村線も通っており、茂都毛川の下流から遡る南～南東の風が強く当たる斜面である。

ホンボラとは、「中心となる谷」を意味しており、カザコシよりも強い風を思い浮かべることができる。

カザコシの峠路を吹き抜ける風が心地いい風であれば、カザコシホンボラを吹き抜ける風は、だし風となって、茂都計川の峡谷を吹き抜け、中村地区に強風をもたらし、稲などの農作物に被害を与えていたのではないだろうか。

【本洞】

ホンホラ。

カザコシ小字の南側に横たわる、やや幅の広い湿地帯。かつては田んぼが並んでいた地形であるが、今はほとんど放置されて、荒地となっている。尾根道につながる古道であったが、今は通る人もほとんどいないので、数年前までは軽トラもやっと通過することができたが、今は無理かもしれない。

ホンホラは、「低湿地となっている幅の広い谷」の意か。

国土地理院の2.5万分の1全国地図にはホンボラ地名が2ヵ所あるだけで、ホンホラ地名は無い。

【ウナギ沢・大岩ウナギ沢】

ウナギサワ。

ジンガヒラ小字の北西側、カザコシホンボラの南側の川筋に沿う。

ウナギサワは何を意味するのか。二つの考え

方がある。

①文字通り「鰻のとれる沢」と考える。この沢で特にウナギが取れるのかどうか、確かめてはいないが。

②ウ（接頭語。オホから転訛）・ナギ（薙）・サワ（沢）で、「大きな薙ぎのある谷川」を意味する（以上、語源辞典）。現在の地図によれば、ウナギサワ小字には、この付近で最も大きな崩壊地がある。地名が名付けられた時期に、果たしてこの薙ぎがあったかどうかはわからないが。転訛過程にやや無理があるようにみえるが、現地をみると、こちらに手を挙げたい。

国土地理院の全国地図には、ウナギサワ地名は2ヵ所に記載されている。

オオイワウナギサワ小字は、ウナギサワの上流部にある。大きな岩があるかどうかは未確認。

【高野・下高野】

コウヤ・シモコウヤ。コウヤは屋号にもなっている。

久米川左岸の山地にコウヤ小字がある。

語源辞典によれば、コウヤ（高野）←コウヤ（荒野）で、①中世末から近世初にかけて開墾した土地のことをいうが、②開墾を進めるために租税を免除された土地、の場合もあるらしい。どちらか明らかになる証がないので、どちらとも言えないが、室町時代末期から江戸時代初期にかけて、新たに開墾された土地であることに変わりはない。

なお、シモコウヤ（下高野）小字も久米川左岸にあるが、コウヤ小字より下流側にあつて、茂都計川との間に挟まれた場所に位置する。両川の氾濫原にあり、今も水田地帯になっている。

開墾されたのはコウヤよりかなり早い時期であつたと思われる。

国土地理院の2.5万分の1地図には、コウヤ地

名が114ヵ所、「高野」地名が152ヵ所と多い。高野山関係の地名が多いためかとも思われる。

【ハナゲ】

ハナゲ小字は、伊賀良中村との境界にあり、標高567.2mと付近では最も高い峰の周辺にある。

峰の中村側にも、ハナゲ小字があつてもいいと思われるのに、中村にはないのは、村境が決まった後に発生した地名なのかもしれない。

ハナゲとは何か。難解地名であるが、全国地図には1ヵ所、ハナゲ（鼻毛）が記載されているだけである。

ハナ（先端）は動物の鼻のように突き出た地形を示し、ゲはケの濁音化したもので場所を示す接尾語、カまたはコ（処）が転化した（以上は語源辞典）とすると、ハナゲは「上空に付き出たところ」と解釈できないだろうか。

【ススミドロヲ】

この小字は、中村境に近い側稜の尾根にあり、カザコシ小字とカザコシホンボラ小字に囲まれている。

ススは動詞ススグ（濯）の語幹で、水で清めることから精進潔斎する場所を意味し、ミはミ（「辺」の転）で漠然とした場所を示す（以上は語源辞典）。ドヲは「堂」のこと。従つて、ススミドロヲとは「近くで精進潔斎をする御堂のあるところ」であろう。古道といわれている尾根道にも近い。

惣堂とも村堂ともいい、公共的な場である寺院や御堂で、村民の手で維持され、村境にあり内外の悪霊を外に祓う役割も担い、旅人らが自由に立ち入り宿泊できる場でもあつたという（日本史辞典ほか）。

全国地図に、ススミドウ地名は記載が無い。

【中尾】

ナカオ。

ナカオ小字は、中村との村境にあつて、上川路山中の細長い丘陵で、両側が低湿地となっている。

ナカオは何を意味するか。解釈は二つ。①ナカ（中）は、二つのものに挟まれた間の地で、オ（尾）は、ヲ（峰、丘）で、ナカオとは、「二つの谷にはさまれた丘」ということになる。②ナカ←ナガ（長）で、長く延びた地形の意。ナカオとは、「長く延びた峰」となる。

双方とも結局、同じ意味になるのだが、語源を考える時にはどちらでもいい、というわけにはいかないかもしれない。

なお、国土地理院の2.5万分の1地図には、ナカオが148ヵ所、中尾が144ヵ所となつていて、当然のことながら、多い。

【大高野】

オオコウヤ。

オオコウヤ小字は、コウヤ小字とナカオ小字に挟まれた小さな細長い小字で、勾配の緩やかな湿地帯になっている。早くに開かれた所といわれている。

先に、コウヤとシモコウヤについては触れている。

オオコウヤのオオ（大）は、面積が小さいので「大きい」という意味ではない。開墾しやすいことから「主要な」という意味にとるのが正しいのではないだろうか。オオコウヤとは、「この付近では主要な開墾地」の意か。コウヤ名の付く小字の開墾の時間的な順位は、まずシモコウヤで始まつて、オオコウヤに移り、最後にコウヤが開墾されたのではないだろうか。

【ムジナ洞】

ムジナボラ。

ムジナ洞小字は上川路の南西隅で、久米川左岸の山地にある。久米川の狭窄部の入口になつ

ている。

ムジナ洞とは何を意味するのか。ムジナは、アナグマの異称であり、またタヌキのことをいう場合もあるらしい。

ムジナ洞とは一般的には、「ムジナが他よりも多い谷筋」ということになる。

しかし、もう一つの解釈もある。すなわち、ムジナ洞のムジナとは、動詞ムジル（向きを変える）の語幹・ナ（接尾語）で川の曲流点を意味する（語源辞典）という解釈もできる。魅力的だが、東北地方の方言なので、少し遠すぎるか。

【大岩】

オオイワ。

オオイワ小字は、久米川左岸にあつて、ムジナボラ小字とコウヤ小字に挟まれている。

オオイワとは「大きな岩」を意味することに間違いはない。

竜丘電気利用組合の久米川発電所の水取り入れ口があつたところで、現在でもその跡が残っている。ここに大きな岩があつて、オオイワと呼んでいた、と地元ではいう。確かに大きな岩が今でもある。

しかし、オオイワ小字が反対側の右岸に球状に押し出しているのので、その岩盤部分をオオイワと称していたのではないかと思われるが、どうであろうか。

国土地理院の全国地図にも、オオイワ地名が、38ヵ所、「大岩」地名が39ヵ所と少なくないのは、当然というべきか。

【シシラ林】

シシラバヤシ。

この小字は、キジボラ小字とコウヤ小字に挟まれており、高野道が大きく屈曲する傾斜地になっている。

シシラとは何か。

近い語にシジラ（緘）があり、徳島県産出の縮みを意味する。地表に凹凸があつて、それを縮みと見たということも考えられないではないが、ここでは採らない。

シシロという語がある。東北地方では、板や柱にする前の角材のことをいうらしいが、北安曇郡小谷地方でもシシロは杣が山取した材木のことを指すという（方言大辞典・改訂総合日本民俗語彙）。

以上のことから、シシラバヤシとは、「建築等の材料となる材木を切り出した林」ということになる。この地域の杣人と小谷地方の杣人との間には直接的ではなくても、少なくとも間接的な交流があつたのではないだろうか。

なお、国土地理院の2.5万分の1全国地図には、当然のことながら、シシラバヤシ地名もシシラ地名も無い。

【ギオン田】

ギオンデン。

ギオンデン小字は、久米川左岸沿いにある。地図で見ると、傾斜地になっているので、田んぼは無理ではないかと思われるほどだが、現地には、立派な棚田が今でも耕作されている。

祇園様は牛頭天王（素戔鳴尊と習合）が中心にあるが、本質は水神・疫神の信仰で、この地域では津島様をお祀りするところがほとんどである。

ギオンデンとは、「祇園祭に必要な諸費用を当てるための田んぼ」のことであることは、はっきりしている。

久米川沿いは流路が変わるということが昔はあつたと思うので、ギオンデンは川路の祇園祭の諸費用を当てていたのかもしれない。

【キジ洞】

キジボラ。

この小字は、ジンガヒラ小字とシシラバヤシ小字の間の、傾斜地の中間付近にある。

キジボラなら、まずは「鳥のキジが多い谷」ということになる。

【陣ヶ平】

ジンガヒラ。

ジンガヒラ小字は、茂都計川右岸にあつて、東側にある左岸のデンペイジロ（傳平城）小字の対岸に当たる。西側には、久米川の対岸に久米の城山を望むことができる。

頂上部分は山中には珍しく、やや広い平坦部となつており、近くを高野道が通っている。頂上部分は今でも耕作されている。

語源辞典によれば、ジンには「①小平地を意味する。語源は不明。②陣地、陣屋などが置かれた地をいうか」とあつてやや曖昧である。

中世、合戦時に近くに住民が逃げ込むことができたといわれる、簡単な砦の跡とすることはできないだろうか。

ヒラ（平）は平坦地だから、ジンガヒラは「非常時に避難することができた平坦地」ということになる。傳平城と重なるが、性格は異なるか。

なお、国土地理院の全国地図には、ジンガヒラ地名も、「陣ヶ平」もジンガダイラも載っていない。

【ビシャ田】

ビシャデン。

この小字は、シモコウヤ小字と久米川の間で、久米川左岸の氾濫原にある。

ビシャデンとは何か。毘沙門天が関わっているのではないか、と思つたこともあるが、それは無い、という結論になつた。ここでも、二通りの解釈ができる。

①ビシャは、千葉県では神酒神饌を供して神社で飲食することを意味する方言で、山梨県にも

会食会飲するという意味の方言になっている（国語大辞典）。ビシャデンとは、こうした神事の費用に宛てられた田んぼということになる。八幡社の神事だったのであろうか。

②ビシャは山形県の方言で泥地を意味する。山梨県ではこれをビシャチという（方言大辞典）。ビシャデンとは、沼田とか湿田を意味することになる。現地をみると、説得力はある。伊那谷南部でも、方言で湿地のことをビショビショといふことがある。ビショ→ビシャの転訛は十分に考えられる。

国土地理院の全国地図にはビシャデンは無いが、ビシャは3カ所にあり、尾車・奉社・毘沙の字が宛てられている。

【ナギノ尻】

ナギノシリ。屋号にもなっている。

この小字は、デンペイジロ（傳平城）跡の舌状台地から始まる急傾斜地が茂都計川でとどまる、その場所にある。

ナギは竜丘の他の地域、時又のナギと同じように、動詞ナグ（薙）の連用形の名詞化したもので、ナギノシリとは、文字通り、「急傾斜地の末端部分」を示す。

国土地理院の2.5万分の1地図には、ナギノシリ地名はないが、ナギは8カ所、載っている。

【神田】

ジンデンという。

ジンデン小字は、茂都計川左岸でゴンゲン小字の南の下流側にある。

ジンデンとは、語源辞典にあるように、「神社に属し、その諸費用に当てるための田」で問題はないと思う。八幡神社の祭祀や造営などの諸費用にあてられたものと思われる。

国土地理院の2.5万分の1全国地図には、ジンデン地名が15カ所、「神田」地名が94カ所に及

ぶ。「神田」が非常に多いのは、ジンダ・コウダ・カミダ・ジンデ・カンダなどの宛字に「神田」を使っているためである。

【井面】

イメン。

イメン小字は、茂都計川と久米川の合流点にあり、茂都計川左岸で久米川左岸に位置する。

イ（井）は井水のこと。メン（免）は年貢を免除された田んぼのこと。つまり、イメンとは、「井水の維持管理の費用に宛てるために年貢を免除されていた田んぼ」ということになる。

「井面」とか「井免」の字を当てるが、長野原にもある。稲作を井水に頼る地域には多い地名ではないだろうか。しかし、不思議なことに、2.5万分の1地図には、イメン地名も「井免」も記載はない。

【鶴巻】

ツルマキ。

どこにでもある小字や地名であるが、上川路のツルマキ小字は、茂都計川と合流した後の久米川左岸にあつて、国道151号線にも接している。この小字内を道路と井水が通っている。

現地に立って、なぜ、ここをツルマキというのか、明瞭な回答を引き出すのは難しい。敢えて結論を出せば次のようなことになるか。

ツルは、全国的に分布する地名であるといわれているが、語源辞典によれば、「水路。水路のある低地」、マキは別の語源辞典によれば、「山で取り巻かれた小平坦地」が実状に近い。この解釈が正しいとすれば、ツルマキの地名が発生した時には、すでにこの井水は通っていたことになる。

すなわち、ツルマキとは、「段丘と久米川に取り巻かれた、水路のある低地」ということになるか。

なお、国土地理院の全国地図には、ツルマキが21ヵ所、「鶴巻」地名が15ヵ所、載っている。

【西】

ニシ。屋号にもなっている小字。

ニシ小字は、県道時又中村線と国道151号線の交差点を含む両道の周辺に広がる。もう一つ、小さなニシ小字が、大きなニシ小字と東のカジヤ垣外を挟んだところに位置する。ニシ小字の間に、後でカジヤ垣外小字が入ってきたものと思われる。

ニシは「西の方」を意味するが、その基点は開善寺で「開善寺から見て西の方」を示している。

全国的のも多く、2.5万分の1地図には、ニシ地名が162ヵ所、「西」という漢字表示地名は161ヵ所にのぼる。

【塚前】

ツカマイと呼んでいる。

この小字は、御猿堂古墳の南側にある。

ツカマイ←ツカマエで、御猿堂の前方後円墳の前（南側）の地を示す。

全国地図の記載は、意外に少なく、わずかに1件ツカマエ（塚前）があるだけである。

【カジヤ垣外・鍛冶屋垣外】

カジヤガイトという。

この小字は、二つともニシ小字と開善寺の間にある。カジヤ垣外小字は鍛冶屋垣外小字の北側にあるが、もともとは一緒に、カジヤガイトと呼ばれていたと思われる。

鉄を打ち鍛えて刀剣・刃物・馬具・農具・釘などを製作したり修理したりする職人が、鍛冶屋である。

カジヤガイトは「鍛冶屋がいたことのある屋敷跡」ということになるが、上川路に鍛冶屋が居住し続けたとすれば、それは開善寺で必要としたためではないだろうか。

全国地図には記載はないが、川路にもカジヤガイトがある。

【町並】

マチナミ。屋号にもある。

この小字の所在地は開善寺の参道を出て突き当たる南側の、東西に延びる街道の周辺に当たる。

マチナミ（町並）は、「町に人家が軒をつらねて建っている様子。またその所」（広辞苑）で、この街道沿いに現在でも家並みが続いていて、かつては開善寺の門前町を形成していたと思われる。

2.5万分の1全国地図にもマチナミ（町並）地名は、ありふれた地名と思われるのに、意外に少なく4件記載されているのみ。

【大門西・大門東】

ダイモンニシとダイモンヒガシ。

両小字は、開善寺の参道の東側と西側にある。

ダイモン（大門）は、新潟県の方言で「寺社の前の道。参道」（国語大辞典）を意味するという。「前の参道」という表現は誤解を招きそうだが、寺社の前を横切る道ではなくて、寺社に向かう道を意味する。

この説明は、上川路の両ダイモン小字の状況に合っているので、「新潟県」にこだわる必要はない。

ダイモンヒガシは、開善寺参道の東側を意味し、ダイモンニシは西側にあることを示している。

国土地理院の全国地図には、ダイモン地名が93ヵ所、「大門」地名は99ヵ所にも及ぶ。これらが、すべて寺社の参道を意味しているわけではないが、それでもかなりの数にのぼるものと思われる。

少なくとも、国語大辞典に「飯田」を付け加えた方がいい。

【開善寺境内】

カイゼンジケイダイ。

一般的には、元々、開善寺周辺一帯はカイゼンジケイダイと呼ばれていたに違いないと思われる。

この小字が現在残っているのは、開善寺本堂の西側の建物周辺と山門西方の畑地の2ヵ所。二つに割って、間に入っているのはケイダイニシ（境内西）小字で、この小字は後から発生した地名と思われる。

【境内西・境内東】

ケイダイニシとケイダイヒガシ。

ケイダイニシ小字は、開善寺参道の西側で開善寺山門の西半分を含む一帯にあり、ケイダイヒガシ小字は、開善寺大門（参道）の東側で、上川路児童遊園と飯田市考古資料館のある地域である。

ダイモンニシとダイモンヒガシと同様に、ケイダイニシとケイダイヒガシも、西と東が参道を中心にきれいに分かれている様子がよくわかる。

【ウチヤシキ】

ウチヤシキ小字は、参道を北へ延長して山の斜面までをも含む一帯で、そこには開善寺の本堂や庫裏などの開善寺の中心的な建物が含まれている。

ウチ（内）は、囲み覆われた内部とか奥まったところ、という意味に該当するだろうか（国語大辞典）。ヤシキ（屋敷）は、わかりきったような言葉だが、国語大辞典には、「家の建っているひと区切りの地、またその中にある田畑や家屋」とある。

ウチヤシキとは、「開善寺の中核となる建物や田畑を含むひと区切りの地」となるだろうか。

国土地理院の2.5万分の1地図にはウチヤシキ

（内屋敷）地名は2件の記載がある。

【セキメ】

セキメ小字は、久米川左岸の氾濫原にある。県道時又中村線が、上川路交差点を越えて久米川に突き当たる付近である。

セキ（堰）は動詞セク（塞）の連用形で、「取水などのために川の流れをせき止めた所である」（語源辞典）という。メ（目）は、「空間的、時間的な切れめ。・・・多くの場合、動詞の連用形と複合して用いられる」（国語大辞典）という。

つまりセキメとは「久米川の流れを堰き止めて井水として取り込む所」を意味するものと思われる。

恒久対策の盛土後も、久米川右岸の川路地籍になるが、セキメ小字から用水路の水をとる施設が造られている。左岸の下流には、スミタ（角田）小字もあるので、以前には水田もあったと思われる。久米川のこの部分は水を取り入れやすいところだったに違いない。

なお、全国地図には、セキメ地名が1ヵ所ある。

【伊豆木渡り】

イズキワタリ。

この小字は久米川左岸の国道151号線の久米川橋と下条（金刺）街道の四丁橋との間にあり、現在も橋が架かっている。

四丁橋ができる前には、このイズキワタリで久米川を越えていたと思われ、出水で流れてしまような簡単な木橋がかかっていたか、あるいは徒渉した地点であったに違いない。

イズキワタリを渡った後、伊豆木に出る道は、山の神様（琴原神社）を通る竹佐街道か、高松峠を越える伊豆木街道のどちらかを利用したものと思われる。もしかしたら、それがずっと昔の古東山道とつながっていたかもしれない、と

考えをめぐらすこともまた楽しい。

【水上】

ミズカミ。

ミズカミ小字は、開善寺のケイダイヒガシ（境内東）小字と南側のマチナミ（町並）小字の間にある小さな小字である。

この付近の家々にはそれぞれに池があり、現在は白井川から引いている井水を利用しているようだ。

ミズカミとは何か。当たり前すぎるためか、広辞苑や国語大辞典にはない。その当たり前の意味は、川の上流とか源流を指すと思われるが、ここではそれは適切な解釈とはいえない。

このミズカミは、語源辞典が示すように、「泉の涌く所。水神様が祀られている」ところであろう。

しかし、この地に井水が引かれる前に、清水が湧き出て湧水による池ができていたのかどうか、はっきりしないし、土地の人も聞いていないという。また、水神様の石碑もまだ確認できていない。ただ、近くの家々は掘り井戸を持っていて今でも利用している。

国土地理院の2.5万分の1地図には、ミズカミ地名が39件、「水上」地名が49件と、国語辞典に記載が無いわりには多い。

【町裏】

マチウラ。

この小字は、マチナミ（町並）小字の北側にあたる裏手にある。マチナミとシンヤシキの間である。

マチウラは、「町の中心からはずれた裏手の地域」（国語大辞典）である。

それほど付けてみたい地名ではないが、全国地図には、マチウラ地名が15カ所、町裏地名が14カ所もある。

【清水坂】

シミズザカ。

シミズザカ（清水坂）の登りに入る前にシミズタ（清水田）小字がある。この付近は湧水が豊富なようだ。

シミズザカはいうまでもなく、「清水の湧き出る坂」である。

正保年間（1646）に堰き止められるまで、天竜川の西流が清水坂の麓を流れていて、嶋への渡し場がこの清水坂にあった、という口碑が残っている。だから、シミズザカ地名が生まれたのは、正保年間より前のこととなる。

ありふれた地名と思われるのに、2.5万分の1地図にはシミズザカ地名は1件もない。「清水坂」地名はわずかに1件あるが、これは、キヨミズザカと呼んでいる。

【前田】

マエダ。

マエダ小字は、久米川左岸にあるが、マチナミ小字の南側で久米川氾濫原より一段高い段丘面に広がる。

マエダとは何か。わかりきっているようで案外、はっきりしない。国語大辞典には、「屋敷の前にもっている田。長野県下伊那郡などでは、家格の象徴とした」とある。これだけでは、明確ではないが、語源辞典に「神社仏閣の前の田」とあるので、これに乗りたい。

要は、何のマエなのかということになる。具体的には、①豪族や豪農の前にある田、なのか。あるいは②仏閣の前の田んぼ、なのか。ということになる。

①の場合、マエダ小字のすぐ北側にはマチナミがあるので、この中に豪農がいても不思議ではないが、北向きになっているので、南側のマエダは「前」ではなく「裏」になってしまう。

②の仏閣は開善寺のことであるが、これだったら、マチナミよりは少し離れているが、マエダ小字開善寺の「前」になる。この方が納得しやすいと思うがどうであろうか。

【角田】

スミタ。

スミタ小字は、久米川左岸の氾濫原にあり川に沿って細長く伸びている。

スミタとは、「中央ではなくて、上川路の端にある田んぼ」ということになろうか。

どこにでもありそうな地名であるが、全国地図には、スミタ地名はゼロ、スミダ地名が5カ所、「角田」地名が11カ所あるだけ。

【三味所】

サミシヨとある。

サミシヨ小字は久米川左岸の氾濫原にある。

旧川路村のサンマシヨ（三枚所）小字は、この上川路のサミシヨと続いているので。かつては、同じ呼び名であったはずで、それが主に上川路の呼び名で転訛が激しかったと思われる。

ここでは、サミシヨ←三枚所←三味所と変わっていったと思われる。漢字が転化していった、地名にしては珍しい例ではないだろうか。

方言大辞典によれば、下伊那郡ではサンマシヨというところが多いようだ。サンマシヨとは、①火葬場 ②墓。墓場。墓地 ③家畜の死体を捨てる所 となっているが、ここでは火葬場の意味が強いように思われる。一段上のマエダ小字は開善寺境内遺跡で江戸時代以前の墓地であるが、氾濫原に墓地があったのかどうかは、はっきりしない。

なお、全国地図には1カ所もない。

【参考にした文献等】

- ①市村威人編『下伊那地名調査』1957～1958 下伊那教育会蔵
- ②滝澤主税編著 1987 『明治初期長野縣町村字地名大鑑』長野県地名研究所
- ③新村出編『広辞苑 第四版』1993 岩波書店
- ④日本大辞典刊行会 1981 小学館 『日本国語大辞典』初版 縮刷版
- ⑤柳田國男監修 民俗學研究所 『改訂綜合日本民俗語彙』1956 平凡社
- ⑥徳川宗賢監修『日本方言大辞典』1989 小学館
- ⑦楠原佑介・溝手理太郎 共著 『地名用語語源辞典』1983 東京堂出版
- ⑧福田アジオ他編 『日本民俗大辞典』2000 吉川弘文館
- ⑨石上堅著 『日本民俗語大辞典』1983 桜楓社
- ⑩馬瀬良雄 『長野県方言辞典』2010 信濃毎日新聞社
- ⑪竜丘村誌編纂委員会 『竜丘村誌』1968 竜丘村誌刊行委員会
- ⑫下平隆司ほか 『丘のみちしるべ』2001 竜丘公民館

旧竜丘村小字索引

あ

青木・青木垣外 95
泥障掛 129
赤畑 116
アシガ洞 149
葦ノ口 130
庵ノ塚 123
安宅・上阿高・上アダカ 105
穴田 112
油田 154
阿弥陀 121
新井原・荒井原 117
荒間垣外・アラカイト 108
荒古屋・アラゴヤ 114
新屋敷 150
荒駒原 142
安城垣外 55

い

家ノ下・家ノ上 91
家南 69
池田 86
池田 89
池田 132
井桁 107
井下 70
石仏 102
伊豆木渡り 161
井添・井ゾへ 96
市場屋敷 83
一貫目・一メ目 98
一丁田 110
一杯清水・一盃清水 115
稲葉 122
いなり・いなり際・稲荷前・稲荷腰 77
犬戻シ 80
井間 93
井免 91
井面 159
入キメン 147
岩下 114
岩畑 79
岩本 59
インデン・西院田 84

う

上ノ原 139
右近田 55
白井 139
白井 147
白井・白井坂・白井坂下・碓井坂下・白井原坂下・白井原・白井洞・小白井・小白井洞・小碓井洞 112
(白井) 桶洞 139
(白井) 松洞 139
(白井) 大ナギ洞 139
(白井) 油田 140
(白井) 飼葉平 140
(白井) 反鼻洞 140
(白井) 祠洞 140
白井七廻り 141
白井ヒカゲ・ヒカゲ 149
内沼 92
ウチヤシキ 161
内山 128
鵜戸 57
麴陶 56
麴陶洞 56
ウナギ沢・大岩ウナギ沢 155
乳母ケ懐 80
ウラ 71
浦木戸 122
漆畑 78

え

家下原・エゲ原 145

お

扇平 63
大井添・大井西・大井田・井添・井端 69
大井端 68
大岩 157
大上 129
大高野 157
大島・大島 100
大平 119
大平 148
大丁洞 90
大塚 137
大畑 155
沖・オキ井・沖ノ田・沖ノ原 76
沖ノ原 97
尾池 74

落田 134

尾畑 124

表発起 101

か

開善寺境内 161
街道端 102
カジヤ垣外・鍛冶屋垣外 160
鍵田 74
カギ田 96
鍵田 135
カキノキ畑 85
風越 155
風越本洞 155
梶垣外 144
梶山 142
カシ畑 85
合戦洞 119
金山 74
釜 80
釜ノ山 79
上新川・下新川 54
上ノ橋場 78
上羽場 65
カミヤ 62
金山 146
賀原 129
釜 56
神送塚・カミ送塚 102
神田 95
上ノ坊 150
厂俣・厂マタ・厂又 109
河内洞 138
川端 60
川端・カハバタ 94
川向 107
河原田・川原田・カハラダ・石原田 109
観音下・観音平 62
ガンド洞 146

き

キジ洞 158
北 88
キダ橋 141
北垣外 86
北村 126
狐洞・狐平・狐ヒラ 115

京田 129

京田・経田 109

桐林 120

ギロン田 158

く

草木林 81
久保 80
久保在家 125
久保尻 125
久保田 96
久保田 153
久保田・久保田洞 122
隈ノ川・熊ノ川 95
公文所 126
蔵ノ下 122
蔵ノ平 75
黒瀬ケ淵 81

け

境界山・ケイカイ山 115
境内西・境内東 161
毛賀澤ビラ 84
兼清塚 137
ゲンチャウナギ 120

こ

小池 143
小池羽場 144
荒神 59
幸神 125
荒神 133
高野・下高野 156
高野平 61
高林山 113
小作 75
乞食アラシ・コジキアラシ 152
御所山 117
小瀬・小瀬原・小瀬洞 131
五反田 95
五反田 136
御殿塚 67
御飯米 110
御判前 149
駒沢 142
五万土 63
五万堂・五万洞 73

五輪田 96
権現 151
権現堂 67
権現堂・ゴンゲンドウ・権現堂塚 103

さ

オノ神 88
境ノ洞 114
坂頭 78
坂下 79
坂下 143
サガリ 150
三味所 163
猿楽 73
沢田 148
三角田 77
三反田 111
サンバタ 107

し

地慶子 58
シケンヤ 106
シシラ林 157
下平 78
十社 63
十社脇 63
芝平 154
渋神 58
清水 97
清水井・清水下・清水入・シミズ下 114
清水坂 162
清水田 150
シモ 96
下井田 97
下井端・下井面 73
下新川 124
下平田尻 79
下羽場 82
下原 145
十王堂・十王堂平 85
装束 111
城山・城山南 113
庄司転 130
城手洞 138
城山 142
城陸・コッチ城陸・向城陸 101
所平 151

陣ヶ平 158
新川 54
新川平 103
新田 94
神田 159
新屋敷・新屋敷井 72

す

鈴原 144
ススミドロ 156
スナハラ 96
角田 163
角田・スミダ 105
スミ田 98

せ

清房 60
セキメ 161
膳棚 57

そ

村堂(林堂) 127

た

大座 55
大座・駄座・タイザ 110
大東 60
大道端 68
大道端 84
大扶垣外 61
大門西・大門東 160
田打洞・田打洞境 116
高田 117
高見・タカミ 93
高見 126
瀧ノ入 149
竹腰 133
タケノコシ 106
駄科 83
駄科 144
田瀬 75
田中 126
田中前田 66
タナ田 87
棚田 108
反在家 85
反保 128

ち

チウタ 103
茶ツカ 104
茶畑・茶ハタ 118
長溝谷・長センナギ 124

つ

塚 67
塚 121
ツカ北 87
ツカゴシ・ツカコシ 91
塚越 136
塚田 67
ツカダ 87
塚田 130
塚平 143
塚平 146
塚原 121
塚原 143
塚前 160
ツツミ・ツツミ入 153
堤洞 131
坪尻 121
坪ノ尻・ツボノシリ 90
ツルマキ・鶴牧 71
鶴巻 124
鶴巻 159

て

出丸・出丸毛賀沢端 113
寺下 67
寺下・寺前・寺前北・寺ノ浦 111
天白 132
天白 153
伝平城 153

と

堂垣外・垣外 134
ドウド・ドホド 113
豆腐垣外・トウ腐垣外 146
時又 53
土佐屋敷 89
トドメキ 137
殿垣外 54
トヒ田(トト田) 127
トヤ田・トヤタ 106
樋入・樋ケ入 154

樋ノ口・トヨノクチ 108
樋ノ口・樋ノ口掛り・樋ノ口井・トヨノ口井掛り 77
泥抜・泥ノ木 119
遠見原・遠ミ原・遠見原大井洞・遠見原大井南 113
鳶岩 144

な

長池 101
中井田・中井田西 68
中尾 156
長田 77
中芝原 118
中島 135
中平 60
中ノ坪 110
長野原 82
中ノ村 92
中原 141
中原 148
長洞 145
中道・中道西付・中道東・中道東付 82
中屋・中屋畑・中屋前 123
流田 131
流田 145
なぎ 56
ナギノ尻 159
並下 98
苗代 71
ナワ手 88

に

西 160
西荒田 119
西井 70
西田 110
西羽場・下羽場 69
西原 71

ぬ

ヌマ・ソトノヌマ 106

ね

祢宜屋・ネギヤ・祢宜屋井・ネギヤ井 72
念地山 118

の

野田 152

は
墓東 70
橋場・ハシバ 94
辻場・外シ場・外シバ 115
畑中 60
八王子 59
八王子 109
八王子脇 59
ハナゲ 156
ハナ田 100
花軒 128
ハバ・ハバ山・ハン場山・羽場 83
林ノ腰 77
林ヘリ 97
原 64
原 81
原 101
払免・ハライメン 104
原田 121
ハリ原・ハリハラ・張原 100
番匠塚 99
飯納田・ハンナウ田・ハンナン田 111
判ノ木河原 151

ひ
火打坂 61
ヒエ田・ヒヘ田・清水下冷田 95
滲田 97
日影田・ヒカゲダ・日影山平 116
東 62
引廻シ・引廻 112
ビシャ田 158
一ツ田 56
ヒトツ田 99
百田 148
ビヤド 94
平 64
平塚 91
平平田 112
蒜田 141

ふ
福宮 76
袋洞 141
袋洞 148
藤樹井 75
藤塚 64

フジ塚 80
藤塚 154
ニツ塚・ニツ塚井 72
札場・札場井 75
仏師 133
舟渡 61
瓢田 131
古屋敷 86

ほ
宝下 136
法寿坊 62
坊主新田 123
坊主田 74
細井 137
細井 143
細田 101
細畑・ホソハタ 104
ボタシタ 100
甫田下 104
発起 57
洞 120
洞田 148
堀 113
本城・本城西平 113
本洞 155

ま
前畑・マイハタ 92
前田・東ノ田・中ノ田 76
前田 162
前田・マヘダ 89
前田柵 105
前田ヲチ・マイダヲチ 105
(前田) 藪腰 93
前ノ原 53
前ノ原 123
前畑 69
前林 118
枅角 86
増口 57
町裏 162
町並 160
町張 105
町張 127
松ヶ崎・松ヶ寄 115
松本屋敷 62

的場 113
丸畝町 98
丸釣根 58
丸山 119
丸山 144
マンバ・万場・万場坂・下マンバ 65
万場・マンバ・万場平・下マンバ 94

み
明神山原 63
水落 70
水上 162
水口 70
水口 77
水割 130
溝ヶ洞・溝ヶ洞坂下 90
溝添 128
溝土井・溝土井河原 109
溝跨 134
みたらし 59
道下 98
道下 127
道ノ間 102
三バ田 87
南羽場・マエダハバ・毛賀沢ハバ 93
南原 137
宮下 134
ミヤノシタ・宮ノ前・宮城・宮林 108
宮ノ前 134
宮ノ前 151
宮ノ脇・宮脇 152
宮洞 138
宮前 73
宮林 132

む
向城陸 66
向新傳 63
ムジナ洞 157
無常堂・ムシヨウドウ 94

も
茂田井 93
持田 60
元寺下 66
森田 68

や
ヤクシ・ヤクシ前・ヤクシマヘ・薬師堂・ヤクシ堂・ヤクシ堂前 83屋敷田 87
薬師堂 135
ヤシキ前 98
休場 137
ヤソ田 100
谷津・ヤツ 117
柳添 133
柳ノ内 89
藪腰 70
藪腰 99
藪下 79
山添 72
山ノ入 116
山神・山神下 102
山伏塚 88

ゆ
湯之瀬 81

よ
横前 55
横枕 91
横枕 132
四ツ通 107

ろ
六月免 57

わ
若林 135
若宮 136

を
ヲカミ 147
ヲチ 92

竜丘史学会会員名簿

平成24年4月現在、順不同

上川路

宮崎 和幸	塚平 清俊	笹岡 富男	長谷部豊志
橋本 玄樹	井口 正三	井口 かの	

桐林

中田 美穂	宮島 逸雄	宮島 聡子	中島 俊明
吉川 隆	林 正巳	岡村 美文	佐々木正臣
吉沢 明佑	吉沢亜喜子	原 佳明	下平 勝熙
吉川 廣			

時又

今村 理則	安東 欣二	原 広雄	山田 安美
今村東一郎	松下 重雄	伊原 聡	今村 明人
伊原 真吾	岩堀 周一	河合 篤子	伊原 隆司
茂手木三男	茂手木はる子	関谷 瑞穂	関谷 睦子
河合 正則			

長野原

木下 陸奥	唐沢 慶治	佐藤 克郎	林 浩子
小林 泉	小林 良子		

駄科

牧島 秋雄	沢柳 昇	下平 康二	木下 武彦
小木曾弘司	松枝 範行	北沢 敬子	黒須 利子
林 三郎	塩沢 義男	沢柳 ミチ	牧島 修正
木下 幹夫	木下維志子	中平金次郎	下平 隆司
伊東 隆直			

竜丘村の小字 —伊那谷南部の小字1—

平成25年●月●日印刷

平成25年●月●日発行

発行 竜丘史学会 編集事務局
TEL 0265-26-9655 (今村理則宅)

印刷 南信州新聞社出版局
〒395-0152 飯田市育良町2-2-5
TEL 0265-22-3734

© Tatsuoka Sigakukai 2013 Printed in Japan